簡単になびくと思わないで下さい

素子９

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
簡単になびくと思わないで下さい

【Ｎコード】
Ｎ９０３６Ｕ

【作者名】
素子９

【あらすじ】
王妃として召喚した相手が好みでないから消えうせろとのたまう俺様国王と、暴言の後で手のひら返しをされても結婚する気にならずに逃げ出した主人公。主人公が手を取ったのは……

01　いきなり死罪で牢？

光が満ち、それが消えた時に召喚の陣の真ん中に人が立っていた。
伝説の通りに黒い髪、見慣れぬ服装。

「成功――か？」

眩しさにくらんだ目を細めて国王と神官は、伝説の人物を見極めようとする。
黒一色の飾り気のない服を着ている。スカートはこの国の常識からはあるまじき長さで、膝から下がさらされて黒く透ける薄物を履いている。
国王は近づいてその顔を確かめ――吐き捨てた。

「なんだこれは」

黒髪は伝説の通りだ。しかし目蓋は腫れて目は細く、その周囲を中心に皮膚は赤くまだらになっている。
瞳の色さえ分からない。要約すると、この女は国王の好みではなかった。
国王は傍らの神官を振り返る。

「おい。伝説の娘とやらは何故こんなに不細工なのだ。余にこれを娶れと？」
「陛下！　お言葉が過ぎましょう。この方はまごうことなき陛下のお相手として、神に選ばれしお方なのです」
「やめよ、何が悲しくてこんな目蓋の腫れた、愚鈍そうな女を王妃に据えねばならぬのだ。すぐに召喚をやりなおせ」

目の前で不遜な言い方をする男と、それに返事をしながら焦っている男を見ながら、娘はぼんやりとしていた。ひどく不確かなありように思考がついていかない。

何故自分がここにいるのか、そもそもここがどこで目の前の男達は誰なのか。

確か、葬儀を終えて親戚も引き上げた家のソファに座り込んでいたはずなのに。

しかも聞いているとどうやら目の前の男は人の容姿をあげつらっている。

あげつらうだけに、確かに容姿はいい。美形といっていいだろう顔立ちをしている。

金褐色の髪の毛と青い瞳で背は高く、がっしりとしている。

着ているものもあちこちに刺繍がしてあったり、無駄に豪華な感じだ。

ただ。腰に剣を下げているのが異様で、娘の世界にはそぐわない。

もう一人は男だろうに長髪で、こちらは体の線をかくすような長い衣装を着ている。

要するにどちらも非現実的な格好なわけだ。

今いるところも普通じゃない。石の床と何本もの円柱が支える天井の高い空間は、どこかの神殿のようだ。

まだ不毛な言い争いを続けている男達の耳に、別の声が割って入った。

「お話中失礼ですが、ここはどこであなた方はどなたですか？」

虚をつかれて声の方向を見やれば、召喚した娘がこちらを向いている。

落ち着いた声だが、中にわずかに怯えを含んでいる。

話しかけようとした神官を制して国王が返事をする。

「ここはお前の世界とは異なる世界だ。余の王妃となる娘を召喚したがお前は全く余の好みではない。歴代の王妃は皆美人ぞろいなのに、なぜ余だけがこんな不細工を迎えねばならぬ。召喚をやり直すので、お前は余の視界から消えうせろ」

勝手に訳の分からない世界に呼び出しておいて、好みではないから消えうせろとな。

初対面から礼儀もわきまえずに、よくここまで悪し様に言ってくれるものだ。

怒れば怒るほど、すうっと冷えていくタイプの娘は戦闘態勢に入った。

「私もあなたは好みではありません、気があいますね。視界から消えるので私を元のところに戻してください。ああ良かった。あなたのような人が夫だなんて、冗談でも受け入れられるものではありませんから」

「女、今なんと申した」

「消えるので元のところに戻せ、私もあなたは好みではないと」

「不細工な上に無礼か。近衛よ、これの首を刎ねよ」

遠巻きにいた武装した男達が、陛下と呼ばれた男の命令で幾分困惑気味に近寄ってくる。

口答えしたら死罪か。随分とこの陛下に権力が集中しているらしい。

娘は幾分青ざめながらも逃げることなく、その場に立っていた。

近衛兵に腕を取られたところで、陛下の横の男から焦った声が上

がる。

「お待ちください。神の選びし娘を死罪になどすればなにが起こるかわかりません。第一、陛下の御心にかなう娘が召喚できるかも不明です。ここは、次の娘が召喚できるまででも命をとらずにおいておかれた方がよろしいのでは」

長衣をまとった男の提案に陛下とやらは考えこんだ。

「お前の言うことも一理ある。ではこの娘は地下牢に放り込んでおけ。新たな娘が召喚できればその時に処分を決める」

連れて行け、と近衛兵が促されて両脇から娘の腕をつかんで移動しようとした。

その際に、長衣の男が近寄って娘の耳に赤い耳飾をつけた。

「お待ちください。今は召喚陣の上にいらっしゃるので言葉が通じますが、ここを出ればおそらく通じなくなります。この耳飾はそれを補うための道具です。身につけておいてください。それから――」

囁くように、主の無礼をお許しくださいと続いた。

「あなたが悪いのではありません。迷惑はしていますが」

若い娘に似合わない台詞をのこして、娘は衛兵に連れられて召喚の間をあとにした。

後姿を眺め、陛下と呼ばれた男はふんっ、と鼻をならす。

「なんだあの可愛げのなさは。首を刎ねると聞かされても泣きもしないとは」
「――陛下」
「うるさい、聞かぬ。お前は召喚をやりなおせ」

国王の命令にため息を押し殺して、神官は召喚の呪を唱え始めた。
先程の娘の様子に集中力を乱されているのを自覚しながら。

02　牢の中の意地っ張り

「牢に入れた娘が食事を取らないだと？」

執務の手を止めて、国王は不機嫌を隠さずに近衛の報告を受ける。

直立不動で国王の前に立つ近衛は、部下から上がってきた報告書に目を通す。

「はい、牢に入れし娘は一切の飲食を拒否しています。あれでは何日も持つまいと思われます」

国王は手の中のペンを握り締める。

結局あの後の召喚は散々だった。召喚陣の光が消えるたびにろくでもないものばかりが現れる。

黒猫、炭、真っ黒で手足のない何の生物を模したのかも分からないぬいぐるみ、表紙に黒歴史ノートと書かれた冊子。最後のものは、へたくそな絵であろうことか男同士の愛だの何だのが描かれていて、壁に投げつけた後に踏みにじった。

その時点で神官の気力が底をついて、日を改めて召喚をやり直す羽目になったのだ。

次の召喚日までまだ間がある。

そんな中で召喚した娘が死ねば、次にまともな娘が召喚できるかも不明瞭な現状では不都合極まりない。

どこまで自分の手を煩わすのだろう。

不細工な上に無礼で面倒などと。かけらも好意を持つ要素を見つめられないままに、国王は席を立った。

「おい」

呼びかけても壁を向いたまま、娘は振り向きもしない。それが一層国王の苛立ちを募らせる。

ちらりと床に目を落とせば、粗末な盆に手付かずの食事が残されている。

「水分も取っていないのか?」

牢番に確認すると、神妙な顔で頷かれる。

食事はともかく水分も取っていないとなると、冗談ではなく限界は間近にある。

「女、こちらを向け」

再度呼びかけても振り向かない。無視されることなどには全く慣れていない国王は、頭に血が上るのを感じた。

――今からでも遅くない。これを死罪にすればふざけた黒い物などではなく、伝説の娘が召喚できるのではないか。

黒い思いが心に浮かぶ。

「向かないなら、管理監督不行き届きで牢番を罰することになるが」

瞬間娘の肩が揺れる。牢番は一気に青ざめる。無論、本心ではない。これは言うことを聞かせるための切り札だ。

ゆっくりと娘が振り返る。

その顔は。

「お前、は誰だ」

「あなたが勝手に召喚した者でしょう」

確かに声も髪も服もあの時の娘のものだ。だが。

あの時目蓋が腫れて赤くまだらだったその顔は、別人だった。瞳の色は黒、切れ長の目が印象的だ。色が白くいまは少しそれが白すぎる。

食事をしていないせいだろう。

振り向き恐れ気もなく、というより投げやりな視線をよこすその娘に、国王は見入っていた。

「顔が違う」

娘は少し首をかしげ、思い出そうとしているかのようだった。

「ああ、あの時は泣いていたから、目が腫れていたんでしょう」

腫れがおさまった娘は美しかった。伝説の歴代の娘のように。

これなら、別に他から呼ぶ必要もない。

側に立たせても遜色はないだろう。

「女、牢を出ろ」

「嫌です」

鉄格子の向こうから娘は拒む。

「視界から消えろと言ったのはあなたでしょう。牢から出してどうするんですか」

「うるさい。今のお前なら容認できる。さっさと出て湯浴みしろ」
「だから、嫌です。私はあなたと結婚する気などないです。放っておいてください」

とんでもなく強情な娘だ。奥歯をかみ締めて勝手にしろと叫びたいのを抑えた。
今の娘なら王妃にしてやってもいいと言っているのに、国王たる自分をここまで拒否するとは。

「今のままなら死ぬぞ」

娘は、疲れたような表情を浮かべた。
目線が石の床に落ちる。

「それでも構いません。こちらの死が本当の死か分からないし。ここで死んだら向こうに戻れるかもしれないし、戻れなくても親のところに行くだけだもの」
「お前が死ねば本当に牢番が罰せられるぞ。それでもいいのか」

もう一度娘が国王を目線を合わせる。その眼差しを向けられることに、国王は不覚にもときめいた。

「随分勝手な言い分ですね。自国民をそんな下らない理由で罰するんですか」
「お前が強情を張らなければ済む話だろう」
「結婚なんて、おことわり……」

そこまで言って、娘はくたりとくずおれた。
慌てて牢番に鍵を開けさせて牢に入る。ひんやりとかび臭い床に

意識をなくして娘が横たわっている。
食事をしていないせいで、倒れたのだろう。

「意地っ張りが」

抱き上げると軽かった。

きびすをかえして牢を出て地下からの階段を上る。

「陛下、私がお連れしましょうか」

近衛から声がかかるが、他人には預けたくなかった。

「よい。余が運ぶ。客室の準備を。医師を呼べ。目が覚めたら湯浴みをさせて何か食べさせろ。嫌がれば世話をする者の首が飛ぶと脅してやれば、言うことを聞くだろう」

近衛とともに付き従う侍従に命令し、先に行かせながらゆっくりと廊下を歩く。
長い睫毛が青ざめた顔に陰影を落としている。

これだけ自分を不快にさせた娘を、やすやすと死なせてなどやるものか。
国王はそう思いながらも腕の中の存在の軽さに、平静ではいられなかった。

03　牢から出て

ぼんやりと目をさますとそこには覚えのない光景があった。
高い天井を見上げて、横をみれば広い部屋の大きなベッドに寝かされている。
天国に来ちゃったかな。
そう思いながら、娘はふうっと大きな息を吐いた。

「お目覚めですか？」

柔らかな優しい女の人の声が聞こえて、その方向に頭をめぐらせる。
制服のような足首まで隠れるワンピースとエプロンをした女の人が、微笑みながら立っていた。

「……ここは？」
「王城の客室です。陛下がお連れになったのですよ」

陛下？　あの失礼な人か。牢にいたはずなのにどうして客室なんかに連れてくるんだろう。
女の人は背中を支えながら起こしてくれた。娘の背中に枕があてがわれる。

「お医者様のお話では食事をしていないことでお倒れになったとのことでした。まずはお水をどうぞ」
「いりません」
「あら、困りましたわ。私が陛下から処分されてしまいます」
「まだ、そんなことを」

「ええ、困ったものですわ。ですから、私を助けると思ってこれをお飲みください」

にこりと笑いながらもグラスに入れた液体を勧めてくるこの女の人は、やり方が上手いなと感心した。

こうやってもっていかれれば、抵抗しにくい。

こちらのものが体に合わないかもしれない、と思っていた。食べる気にもなれなかった。

牢の中では飲食を拒否してきたが、言い方は柔らかいが女の人には有無を言わさない雰囲気がある。

ためらいながらもグラスに口をつける。久しぶりに口にものを入れた。

水にはほんのりと甘みをつけてある。ゆっくりゆっくりとそれを飲んでいった。

「胃は痛みませんか？　ではこちらもどうぞ」

スープです、と出された小ぶりの容器をながめ、しばらくしてから匙を口に運ぶ。

「しばらくは消化のよいものにしましょうね。起きられるようになりましたら、湯浴みをいたしましょう」

どんどん女の人のペースに乗せられてしまう。

背中の枕もはずされて、また横になるように促された。

横になって今寝かされているのは広い部屋だ。客室って言われたっけ。

なぜ、消えうせろと言った自分を牢から出したんだろう。

召喚をやりなおすって言っていたのに。

久しぶりに胃になにか入れたせいか、そこからじんわりと温かくなってきた気がする。
そう言えば、両親が亡くなってからばたばたしていて、ろくに食べていなかった。夜だってよく眠れなかった。
ここに勝手に呼ばれてからも、とても眠る心境じゃなかった。
体が悲鳴を上げていたんだろう。
また眠気にさそわれて、ゆっくりと目を閉じた。

次に目覚めたのは夕方で、さっきの女の人が側についていてくれた。

「よくお休みでしたね。先程陛下も様子を見に来られたんですよ」

国王に寝顔を見られたかと思うと、腹立たしさが生じる。眉をひそめたのを女の人はあらあらと受け流す。にこりと笑って、手を出された。

「湯浴みの用意がしてあります。こちらにどうぞ」

起き上がってもふらつかないのを確かめてから、女の人は浴室に案内してくれた。

「今日は心配ですので、中までご一緒させていただきます」

有無を言わさずに服を脱がされ、子供のように体を、髪を洗われる。

「なんて見事な黒なんでしょう。濡れると一層綺麗ですね」

髪を拭いて梳かしながら女の人から感心したように言われるけれ

ど、別に珍しいものではないと醒めた思いになる。
黒髪、黒い瞳。この条件なら誰でもよいはずなのに、何故かあの失礼な国王に無理やり呼ばれたんだ。
お金持ちそうだし、顔も悪くなさそうなのになぜあんなに失礼な言い方なんだろう。あれがなければ目が眩んで王妃におさまる女の人には事欠かない気がするのに。

考え事をしているうちに着せ替えも終わって、夕食らしい。
テーブルには消化のよいものということで作られたらしい料理が並ぶ。

「どうぞ」

言われて少しずつ食べる。どれも味付けがやさしくて美味しく感じる。不意に母親の作ってくれた料理のことを思い出した。
両親と囲んだ食卓はにぎやかで、楽しくて。料理は美味しくて。
胸がいっぱいになって手が止まってしまったのを、女の人が気遣う。

「お口にあいませんでしたか？」

ふるふると首を横に振る。そしてどうにか食事を終えた。
食後のお茶をのんでゆっくりしていると、先触れの後で国王が入ってきた。あの時の神官も一緒だ。
神官も顔を見て驚いている。
女の人が隅に控えて、三人と宰相といわれる人の計四人で話し合いが始まった。

「この国は代々王妃を召喚している。国内外での王妃争いを避ける

のが最初だったようだが、今では慣例になっている」

随分と、本当に随分と身勝手な国だ。それだけ代々の娘さんを泣かせてきたということか。

でも黒髪、黒い瞳の娘を召喚し続けたのなら、国王の髪や目の色はおかしい。

黒は強く次代に出てくる色だと思うのに、それが全く見受けられない。

それが顔に出たのか、神官が説明してくれる。

「なぜか、王妃様の色は子供には受け継がれないのです」

不思議な話だが、そもそも異世界とやらから人間を召喚するのだから、なんでもありなのかもしれない。

国王は不機嫌そうに見つめてくる。

そんなに嫌なら別の人を召喚すればいいのに。

「娘が嫌がって帰った例や、他の人を呼んだ例はないのですか？」

神官は分厚い本を持ってきていた。歴代の神官長の覚書だそうだ。ちらりと国王を見やって穏やかな声で娘の問いに答える神官は、長髪や衣装といい浮世離れした雰囲気を持っている。

「そういったことは記録にありません。歴代の方はそのまま国王陛下と婚儀を挙げています。ですので再召喚が可能かどうかが不明です。……それに、あの後何度か召喚を行ったのですが、人間は召喚できませんでした」

「何度やっても召喚できなかったのだから仕方がない。お前も諦めろ」

「嫌です」

人をののしり、消えうせろとまで言い切った人と結婚なんて考えられるわけがない。

第一印象が最悪なのに加えて、ここまでに挽回できる要素がない。国王だからかものすごく偉そうだし、言い方は高圧的だし、すぐに人を脅すし。

……すごい、どんどん印象が悪くなっていく。いっそどこまで突き抜けるか見てみたい衝動に駆られそうだ。

好悪で言えば迷うことなく悪、はっきり言って大嫌いだ。

「婚儀を挙げないとお前はただの異分子だ」

「だったら消せばいいでしょう。それで利害が一致するはずです」

そう言うと悔しげにか顔をゆがめた国王と、気遣わしげな神官は押し黙った。

しばらく考えた国王は、提案をしてきた。

「日をおいて再度召喚をする予定だ。それまで猶予をやろう。好きなことをして過ごせ。次の相手が召喚できればお前の希望を入れよう。その間に気が変わればよし、もし召喚できなければ諦めろ」

絶対に気は変わらないと思う。

もし再召喚が可能なら、次の召喚相手は気の毒だけど自分はこんな国王と結婚する気はないし、次の娘さんはすんなり結婚を承諾するタイプかもしれない。

なら再召喚を待ちながら、最悪の状況を考えて知識を蓄えるのがいいかもしれない。

とりあえず国王の顔は見ていたくないので、絶対に顔を合わせないところに行きたい。

「どこならあなたの顔を見なくてすみますか？」

国王に言うとこめかみに青筋が立った。握り締めた手が震えている。

冷静に考えたら世界をこえて拉致されたようなものだ。よく歴代の娘さんがすんなり結婚したものだと、そっちに驚く。

しかも初対面での暴言つきだ。これで結婚するならどうかしている。

「修道院……」

「絶対に駄目だ。城からは出さん」

「牢に……」

「そんなことをしたら、今度こそ牢番を処分する」

国王ってこんなに俺様なのか、と呆れてしまう。

０４　罵詈雑言は胸の内？

娘はあてがわれた部屋のベッドに座って、さっきの話と今後のことを考える。

再召喚は数ヶ月先のことらしい。

神官が元の世界に戻す陣を作り上げられなければ、それまでここにいざるをえない。

逃げたり、自分で自分を痛めつけるようなことをすれば世話をしている者を処分する、とあの国王は脅してきた。

「あの人、最悪だ」

誘拐犯で脅迫者で、傲慢で身勝手で俺様で……。

国王に対しての罵詈雑言はいくらでも出てくるが、引きずられると考えがまとまらないので、ひとまずそれについては置いておく。

とりあえずはあの国王と顔を合わさずにやり過ごす手段を考えなくては。

娘は頭の中で、色々な可能性について考える。

再召喚で無事に国王と結婚してもいいという、奇特な娘さんが現れた場合は何も言うことはない。全力で祝福しよう。

ただ、すんなり戻してもらえるかが心配だ。帰還とでも言えばいいのか、それが可能ならよし。不可能ならどうなるか。

世界に黒髪、黒い瞳の娘が二人いては不都合だろう。

髪を染めて事情を口外しないことを条件に、見逃してもらえるというのが最も穏便な処置だ。

召喚の事情が漏れないように幽閉されたり、最悪殺されたりするかもしれない。

ここでの死が元の世界でどんな状態に当たるかは分からないが、バッドエンドとしてはそんなところか。

再召喚できなかった場合はもっと厄介だ。その時でも、俺様国王と結婚する気になるとは思えない。

嫌がり続けて、それが通るだろうか。

万が一無理やりなんてことになったら、殴るか蹴るか抵抗して逃げ出そう。

正当防衛の名の下にはどんな暴挙も許されるだろう。と言うより自分が許す。

結局どちらに転んでも、城を逃げ出して髪は染めるなりしてどこぞでひっそり生きていくことになりそうだ。

そのためには何が必要か？　――情報とお金だ。

この世界や国のこと、生活様式、貨幣価値。それらの知識を身に付けて、城を逃げ出してどこかに落ち着くまでの資金を稼ぐ必要がある。

言葉は耳につけた飾りで不自由していないけれど、逃げ出した場合この耳飾りを目印に手配されないとも限らない。

日常会話くらいなんとか覚えないといけないか。習得できるかな？　すごく難しそうだけど。

再召喚まで城から出してもらえないのなら、城の中で働きながら色々覚えるしかないと結論付けた。

「見ていなさい、絶対に逃げ切ってやる」

娘は決意して明日からの計画を練りつつ、ベッドに入った。

翌朝、例の女の人――聞けば娘付きの侍女らしい――に起こされて、顔を洗ったり着替えたりした後で朝食を取った。

侍女は顔色が随分よくなったと喜んでいた。

数ヵ月後をめどにここから逃げ出すのだから、時間を無駄にはできない。

朝食の後で、侍女に切り出す。

「あ、の、陛下って言うんですか、国王から好きなことをして過ごせと言われています。まず、こちらのことを勉強したいんです。地理とか、この国のこととかが分かる本はありますか？」

この侍女は昨日の様子からは盲目的に国王に従っているようには見えない。むしろ国王のことをしょうがないとでも言いたげだった。

この人は味方に付けておいたほうがいい。この人から色々なことを吸収しよう。

娘の目論見を知ってか知らずか、侍女は娘が少し前向きになったことを喜んだ。

「ええ、図書室には沢山本があります。部屋からは出すなと言われておりますので、直接図書室にはお連れできませんが本を借りてきましょう。時間を決めて教師を呼んでもいいですわね」

そうしてもらえたら、好都合だ。

娘は教師に教えてもらいたいと頼み、ついでに国王とは顔を合わせたくないと正直に話した。

昨日の会話を聞いていた侍女は察してくれた。

「大丈夫です。陛下はあんなにきっぱり拒絶されたことなどございませんから、当分はこちらに足も向けないと思います」

当分といわずずっと足を向けないで欲しい。
娘は切実に願った。

侍女が手配してくれたのだろう。教師がきてくれて部屋での勉強が始まった。
この大陸、国、国王のことや政治経済、語学など全く知識のない娘に根気よく、丁寧に教えてくれる。
早く知識をつけて、次にはこの世界でどんな仕事ならやることができて、それでどれだけ稼げるか確認しないとと、娘は限られた時間内でやることの多さに少し焦り気味だった。
試しに耳飾りを外した途端に、侍女も教師も言っていることが全然分からない。
まずいと思い、耳飾りをつけたり外したりしながら簡単な挨拶から教えてもらった。
この年からの語学習得なんて、勘弁してほしい。それもこれもみんな国王のせいだ。

「そうだ、国王のせいだ。国王の勝手野郎。俺様、自信過剰、ナルシスト！」

耳飾りを外して日本語で国王の悪口を言うのが、軟禁状態のストレス解消になっていた。
侍女の読みどおりに国王が顔を見せないのが救いだった。
昼間は気を張っていても、夜はふっと弱気が顔を覗かせる。
深夜になるとどうしても泣いてしまうことがあった。

異世界に一人でいることが怖かった。孤独に押しつぶされそうな気分だった。

残してきたものが多すぎて、元の世界への思慕で胸が苦しくなる。

「帰りたい、帰りたい、帰りたい」

枕に顔を押し付けて泣き声が漏れないようにして、娘は泣いた。

そして国王を恨んだ。

05　不器用では納得できない

教師について教えてもらう一環として、神官の訪問を受けた。
基本的に人間の召喚は王妃以外にはやっていないこと、元の世界に戻した例はないが、うまくいけば召喚のエネルギーが利用できるかもしれないので、現在その研究を進めていることなどを教えてくれた。
今度召喚陣を記した本も持ってきてくれることになった。
神官が頭を下げる。長髪がその動きにあわせてさらりとすべる。

「個人的には、あなたの生活や基盤を無理に奪ってしまうことになって、申し訳なく思っています。ただ、召喚にはある程度の条件付けがしてあって、それに合致する方が召喚されてやってきます」
「その条件は何ですか？」

娘の問いに神官は穏やかに答える。

「多少なりとも元の世界に絶望した方、健康で若くてこちらの世界の子供が産める方、一応国王との相性がよい方というのも含まれています」

最初の言葉は納得できなくはない。親が一度にいなくなって、混乱と絶望があったのは間違いない。
ただ最後のはいただけない。あの国王と相性がよいなんて、何の冗談だろうかと知らず眉があがったのを神官は正しく理解した。

「重ね重ね申し訳ありません。まさか陛下があんな暴言を吐かれるとは思ってもみませんでした。陛下はこの儀式には否定的です。望んで召喚を執り行ったわけではなかったのに加え、あの時のあ

なたの状態が、その、ああだったのでつい、口に出てしまったのだと思います」

教師に教えてもらったのは、国王が象徴などではなくて国を治めていること。あの国王は有能なこと。そして信じられないが、臣下や民からは慕われていることだった。公平で裏表がなく厳しいが芯は優しいと言われた時は、別の国王のことを言っているのかと聞き返してしまった。

「視界から消えうせろとか、首を刎ねよと言った人と相性がいい？何の相性ですか。ああ、皮肉とか暴言とかですか？」

国王に青筋を浮かすようなことを言った娘は、悪趣味な冗談に笑いそうになる。

怒るとストレートに感情をぶちまけるよりも、冷たく対応してしまうタイプと自覚しているので、いくらでも辛辣な言葉は出てくる。やりすぎると死罪の危険もあるから注意は必要だとは思うが。お互いのために、顔を合わせない現状は幸いだろう。

「いえ、そう言った類ではなく価値観であるとか、抽象的なのですが魂の相性とでも言いますか……」

「わ、私は人に消えろとか死ねとか言う価値観は持ち合わせていません」

「勿論です。ですからあれは陛下の失言です。陛下も本心ではひどいことをおっしゃったと思っているでしょう。あの方は、動揺するとつい高圧的な口調になってしまわれるので……」

神官がフォローしようとも、娘にとっての国王は『最悪』で、存在を否定され吐き捨てられた言葉は決して忘れられない。

一度は首を刎ねろとまで言ったのに牢から拾い上げて婚儀を迫っ

たのは謎だが、俺様の隣になど誰が立つと思うのか。

「それでも言葉は過ぎるでしょう。あれでは敵も多いのではないですか？」

どうやら痛いところをついたようだ。神官も、控えている侍女も少し目が泳いだ気がした。

「ご本人も自覚はされていて、近年は随分抑えることが上手になられていたんですが……」

「私に言わせれば、陛下のあれは虚勢の現れですわ。召喚して結婚なんて一生の大事ですから、頭に血が上って何を言っているのか分からなかったのではありませんか？」

この侍女は笑顔で相当なことを言う。それこそ聞かれれば不敬罪に問われそうだ。

ぎょっとすると、侍女の兄が国王の学友とかで小さい頃は一緒に遊んだ、そのためについ気安く辛口に見てしまうんですと弁解された。

しかし虚勢で斬首の指示をだすのか？　あの時は呆然として反応しなかったけど、普通の娘さんなら泣くかわめくか気絶してしまいそうだ。

これを口にすると侍女はにっこり笑った。

「そのどれもなさらなかったのでしょう？　陛下にとっては新鮮だったにちがいありません。ですから気に入られたのでは？」

「それこそ、何の冗談ですか？　……すいません、鳥肌がたっちゃ

いました」

何をどう解釈したら国王が気に入るという結論になるんだ。

「まあ、大変。でも気になさっているのは事実です。この部屋に最初にお連れになった時、お医者様が診察する間ずっと側についていらっしゃったのですよ。

以後もご自分は顔を出されないですが、毎日ご様子を報告させていらっしゃいます」

ああ、鳥肌がおさまらない。

そんな事実知らなければ良かった。罵詈雑言に変態とストーカーを追加しようか。

侍女とのやり取りを聞いていた神官からも陛下の擁護がされた。

「陛下のご即位に際して騒動がありましたので、やや血なまぐさいというか殺伐としたものが染みこんでいらっしゃいます。それまでは、明るくお優しい方だったのですが……。

陛下はことご自分にかけては不器用な方です。国王というお立場ゆえ、ご自分から歩み寄るということも著しく苦手です。

国王の謝罪は国家の大事になるので容易に謝罪もできません。どうかその点をお含みおきください」

神官が立ち去って、侍女の淹れてくれたお茶をのんでようやく鳥肌も消えた。

あの暴言が不器用で片付けられるかー！

どんな好意的な解釈しても、含みおくことなどできない。

この会話での収穫は、あの国王は根は優しいらしいということだ。
侍女にも尋ねて事実と確認をとった。
それなら逃げても侍女が罰せられることはないだろう。
娘は決意をさらに固めた。なんとしてでもここから逃げ出す。
そうと決まればまずは何とかこの部屋から出なければ。国王から軟禁されているおかげで、城の中のことがさっぱり分からない。
国の地理は教えてもらえても、王城の内部構造は下手に知りたがると不審に思われるので質問できない。
王城の構造や城下に繋がる門や道などを知っておかないと、逃げ出せない。

逃亡計画第一段階、知識を得る。これは進行中。
第二段階、働きながら王城の構造を把握する。活動開始だ。

06　騎士団長は苦労性

娘は王城で働きたいと侍女に相談した。

「まあ、働く必要などありませんのに」

「その方が、早くなじむと思いますから」

大人しく部屋にこもって勉強をしていたせいか、侍女がかけあってくれたせいか軟禁状態は解かれることになった。

働きたい言い訳を信じてくれたかどうかは分からないが、侍女は色々と候補をあげてくれた。

できるだけ国王と会わない、国王が足を運ばない仕事をしたいと侍女に頼む。

「それでしたら下働きのようなものになりますよ」

それでいいと決める。王城を歩き回れるのならなんでもいい。

目は仕方ないが髪の毛はそのままでは素性がばればれだ。茶色に染めた。

仮の名前で呼んでもらうことになり、使用人用の部屋に連れて行かれた。

さすがに国王の花嫁候補を相部屋にはできずに、小さいながらも個室を与えられた。

広くない部屋、簡素な家具にむしろほっとする。客室のような高級ホテルを連想させる部屋では落ち着かない。

備え付けの箪笥に、着てきた服やポケットに入れていた携帯をしまう。

ぎしりと音のする寝台に腰かけて、自分の着ている侍女服より簡素な服を眺める。

侍女の兄が騎士団に所属している関係で、そこの食堂の下働きをすることになっている。

家事労働しかできないだろうと思っていたので、食堂で働けるなら願ったりだ。こちらの食材や料理も覚えられるかもしれない。

王城の構造を覚えて、出入口も確かめないと。あちこち動き回れるだろうか。

朝は早い。寝間着に着替え娘は床についた。

翌朝、侍女に王城に隣接する騎士団の宿舎で連れて行かれた。広い演習場や馬場を持つそこは、男性が多くてにぎやかだった。

ここの食堂を切り盛りしているのは、子供を何人も育て上げたような豪快なお母さんのような女性だ。

「下ごしらえと皿洗いをやってもらおうか。あまり騎士の目に触れないほうがいいね。

ただでさえ女が少ないのに、あんたみたいな若い子が顔を見せたら、あの子達が浮き足立つだろうからね」

「よろしくお願いします」

娘は頭を下げ、新しい暮らしが始まった。

野菜を洗って切る下ごしらえと、皿洗いが主な仕事だった。食堂に隣接する厨房の裏手の日陰で、椅子に座って洗った根菜の皮を剥く。

さすがに王城の騎士団だけあって人数も多く、食欲は見ているほうが胸焼けしそうなくらいに豪快だ。

交代で食事をしているが、その風景は戦争のようだ。

山のように盛り付けて、短時間でそれがなくなっていくのは目を丸くするしかない。

時間をかけずに食べ、席を立っていく。使用済みの皿も見る見るうちにたまっていって、娘はそれを一心に洗う。
部屋に軟禁されているよりもずっと早く時間が過ぎていく。
片付けが終わって一息つくと、午後も結構な時間になっていたりする。

監督と密かに命名したお母さんがお茶を淹れてくれて、食堂の端の席で遅い昼食を取る。
そこに大きな影がさした。

「新入りか？　騎士団の団長だ。よろしく頼む」

慌てて立ち上がって頭を下げる。それに鷹揚に頷いた団長は自身も盆に食事を載せて手近の席についた。
お茶を淹れに来た監督と取りとめのない話をしている団長を、娘はそっと窺った。
ここでは団長が上司で娘は新入りだが、使用人の部屋に移る前に客室にやってきた団長は娘に最敬礼をしていた。

「騎士団団長です。御身は私が預かることになります。くれぐれも無茶をなさらず、常に周囲に気を配ってください」

団長こそが侍女の兄で国王の学友だったという人物だ。
騎士団の食堂なら、部外者が近づきにくくおまけに交代制で食事を取るので、常に騎士や従騎士がいることになる。
護衛としても申し分ないだろうと、騎士団勤務に決まったのだ。
そして娘は知らないが、団長は常に娘の側近くに人も忍ばせていた。
行動を見守るのと護衛目的だ。娘の行動は毎日国王に報告することにもなっている。

食事だけに注意を向けているふりをしながら、団長の方も娘に注意を払っている。

よりによって下働きをしたいなどという型破りな『伝説の娘』は、登場の時からそれまでの召喚の儀で現れた娘とは違っていた。

記録には取り乱すのが常とされた歴代の娘と違い、立ったまま国王と対峙していた。

『首を刎ねよ』との残酷すぎる命令に、部下にその腕を取らせた時にも涙を流しもしなかった。

団長として、普段は国王の側に詰めることも多い。牢の娘も国王に付いて地下におりた時に目の当たりにした。

驚いた。召喚された時とは別人かと思ったのは国王だけではない、団長もだった。

妹からそれとなく様子を聞くと、国王のことを嫌悪、忌避しているとのことで無理もない話と思われた。傷のない肌や手などからは、争いの少ない世界から来たのが推察される。それがいきなり斬首では……。

しかし牢に入れた張本人で意識を失った娘を抱き上げて牢から出た国王は、娘に心を奪われたようだった。

娘はそんな国王の気持ちを知らず、嫌いぬいているようだ。

それが何故騎士団の食堂の下働きに繋がるのかは謎だが。

娘の仕事は騎士団の食事のための皮むきだとか野菜きり、皿洗いだ。

伝説の娘にそんなことをさせるとはとんでもないことだ。事実が発覚すれば、ひどい騒ぎになるだろう。

先程確認したら、楽しそうに皮むきをしていた。

髪の毛は染めて、長めの前髪で黒い瞳を隠し気味にしている。それでも通った鼻筋や形のいい唇、色の白さなどは見て取れ、さぞかし騎士団のむさくるしい部下達の視線を集めることだろう。

あまり人前に出さないようにしないと、別の意味で騒ぎが起こるかもしれない。

大人しく部屋にいて、王妃の教育を受けてくれればこんなに気をもむこともないのに。

茶を飲みながら、漏れそうなため息を押し殺す。

娘は目を伏せがちにしながら食事をしている。さりげなく周囲を見渡し、食堂内外で異状のないことを目配せから確認する。

食べ終わった盆を返却口に戻す。食堂を出る際に娘に視線を走らせると、目礼をされた。

団長は側付きの騎士と王城の執務棟に足を運ぶ。

国王に根菜の皮むきと、皿洗いをしていたことを報告しなければならない。今まで色々な報告をしたが、今回が一番間抜けな内容かもしれない。

妹とよく似た濃い茶色の髪をがしがしとかきむしる。普段は冷静沈着な茶色の瞳が、今は困惑に揺れている。

「虫除けがいるだろうが、どうしたものかな」

「団長が睨みを利かせればよいのでは？」

切り返されて大きな体躯の肩が落ちる。

通常業務に加えて厄介ごとを引き受けてしまった、団長の不運は始まったばかりのようだ。

腕まくりをして、皿洗いを開始した娘はそんなやり取りなど知る

由もなかった。

07　接触

お使いを頼まれて庭を横切っていると、国王が向こうからお付を従えて歩いてきた。嫌な確率で遭遇してしまった。

娘は一瞬引き返そうと振り返るが、建物からは少し離れていて隠れられそうな場所がない。仕方がないので、端によって頭を下げ国王が通りすぎるのを待つことにした。

目の前を国王一行が通り過ぎる……何故か足が止まっている。

礼をして下げた視界に靴が見える。その爪先がこちらを向いた、と思ったらできれば聞きたくなかった声がかかる。

「お前は何を始めたんだ？」

面を上げるように命令されて、不承不承顔を上げる。視線を合わせると黒いのがばれてしまうから伏し目がちにするようにと侍女から注意されていて、今もそれを守って国王の胸元あたりを見つめている。

「働いています」

娘は傍から見るといかにも丁寧に、その実慇懃無礼に国王に受け答えしている。伏し目がちなのでいかにもしとやかそうに見えるが、国王は目を合わせてこないことに苛立ちを感じている。

働く必要などないと言いかけたところで、娘が仕事が残っておりますので失礼いたしますと完璧な礼をして立ち去った。

侍従や近衛などごく身近にいる者は、娘の素性を知っている。

召喚の間でのやり取りを知らない者は、娘が国王との結婚を嫌がり働くことを酔狂だと思っていた。

歴代の伝説の娘はいきなり連れてこられたことを悲しみはしても、

これ以上ないほどに丁重に扱われていくうちにほだされて、あるいは諦めて国王と結婚していった。

今回の娘のように頑なに結婚を拒み、使用人として働くなど考えたこともなかった。

国王とて娘を働かせようなどみじんも思わなかった。客室から王妃用の部屋に移動させ、教育を施しながら時期を見て婚儀を挙げるつもりだったのに。

それもこれも自分が最初に娘を拒絶したせいか。内心は頭を抱えているが、国王の立場上それを表すのは許されない。

どうすれば娘は態度を変えるのだろうか。

生まれてこの方即位の騒動以外ではかしずかれるばかりで、反抗する者など思いもよらなかった国王にとって、娘は初めて現れた意のままにならない存在だった。

娘が仕事を終えて部屋に戻ると、国王が呼んでいると伝言が残されていた。一日目は伝言が風に飛ばされたことにした。二日目は部屋の前で、侍女が困り顔で待っていた。逃げられなかった。

場所が分からないだろうからと国王の私室まで連れていかれた。扉の両脇の近衛は連絡がいっていたのだろうか、すんなり開けてくれて中に入ることができた。

案内された部屋で国王は遅い夕食を取っていた。

とりあえず礼をして、扉の横に立っていると不機嫌な声がかけられる。

「座れ」

「嫌です」

「いいから座れ」

押し問答の末、娘は控えている侍従から目で促されて、しぶしぶテーブルを挟んで国王の向かいの椅子に座る。

「食事は？」

「もう済ませました」

牢で倒れて以来、食事は取っていると報告を受けていた国王はちらりと娘の様子を確認する。お仕着せの服を着て、茶色の髪の毛をしている娘は別人のようで、不思議な感じだ。

全くなびこうとしない、頑なな意地っ張り。

「茶くらい付き合え」

拒否は許さぬと告げると、娘はため息をついた。

侍従が茶器に香り高いお茶を淹れてまた壁際に控えた。

色も香りも素晴らしい。口に含むと砂糖も入れていないのにほのかに甘い。

さすがに国王はいいお茶を飲んでいると娘は感心する。使用人の飲むお茶とは雲泥の差だ。

「お前は何故婚儀を嫌がる」

「私のところでは結婚は双方の合意が必要です。それを無理やり呼び出した挙句、不細工呼ばわりで消えうせろ、首を刎ねよ、牢に放り込め。

そんな相手と結婚する気になれるでしょうか？　いいえ、なりません」

きっぱりと最後の台詞を言われ、思わず飲みかけの茶をむせそう

になって、国王は慌てた。まだ根に持っているのかと言いかけて止める。この娘に言えばおそらく火に油を注ぐに違いない。

「召喚の方はどうなっているのですか？」

「祭典の日に再召喚を行う、それに向けて集中力を高めている状況だ」

「お好みの人が来ればいいですね」

お茶を飲みながら、娘は他人事のように言い放つ。

国王を前に敬意のかけらもない。

そんな娘をどうにか自分の方を向かせたくなる。白々しく伏せた目を向けさせたいと。

「もし再召喚で伝説の娘が現れたら、お前はどうするのだ？」

娘は茶器を置いてテーブルの上で両手を組んだ。

「元の所に帰してほしいです。かなわないなら、ここを出てどこかで生きていくので、そのための環境を整えてください」

「一生髪を染めてか？」

「そうならないように、できれば帰してください」

「――もし、伝説の娘が現れなかったら？」

国王の問いに娘は初めて顔を上げた。黒い瞳の視線は静かなのに強い。

見据えられると、なんとなく落ち着かない。

「気は変わりませんので、何度でも召喚をしてください」

不敬の極みの発言に、侍従や部屋の中にいた団長は一瞬硬直した。また娘が『処分』されてしまうのではないかと気を揉む周囲の中、当の国王は一瞬だけ怒りを覚えたが、それとともにずきりと胸が痛んだ気がした。

この娘は恐ろしく強情だ。それが気が変わらないと言い切ったからには、相当の長期戦を覚悟しなければならない。

既に召喚の準備はさせているが、国王はこの娘で構わないと思っている。

その本人からの嫌われように、自業自得と自覚はしているが苛立たしい。

国王の母親も召喚されてきた者だった。父親との間に子供をもうけても、故郷を、家族を懐かしんでよく泣いていた。笑顔よりも憂い顔の方が印象に残っている。結局心が弱かったのか、この世界を厭うたのか早くに亡くなってしまった。

個人的には召喚の儀を馬鹿馬鹿しい伝統だと思っている。伴侶を――それもただの伴侶ではない、王妃を異世界から召喚するなど博打もいいところだ。

歴代の娘達は美人という実績があったので、なんとか召喚を受け入れたのに、あの日の娘の様子はひどかった。

あれほど目が腫れるとは、どれだけ泣いたのだろう。――何故泣いていたのだろう。

国王はそのことにようやく思い至った。

08　敬意だと？

「お前、あの日は何故泣いていたのだ？」
「――親が亡くなって葬儀を終えたところだったんです」
娘は静かに答えた。ふいに娘の灰色の服が、国王には喪に服しているように見えた。

娘は述懐する。
突然のことで呆然として涙も出ないのに、喪主だ葬儀だとめまぐるしく対処してやっと自宅に戻った後だった。親戚も引き上げて家が静かなことに、静かすぎることに気付いた途端、涙が止まらなくなった。
いつも温かい雰囲気の家がひどく寒々しくそれがたまらなかった。ソファに座り込んで泣きつかれてうとうとして、そして無理やり召喚された。
持ってきたのは着ていた衣類とポケットに入っていた携帯だけ。やるべきことが山積みだったのに、勝手に連れて来られて。娘は唇を噛み締める。

「他に家族は？」
「いません。後処理も沢山あるんです。帰れるあてはあるんでしょうか？」
「――記録にはないな。神官が今、陣の構成式を必死に組み上げようとしている」

再召喚とともに、娘にとっては帰還、国王にとっては返還の調査も平行して行わせてはいる。
全く乗り気はしないが、一応調査させるのも無駄ではないと思っ

ている。

「そうですか。――お茶、ご馳走様でした。もう戻ります」

席を立った娘は服をつまんでお辞儀をする。

次にはもう、目は伏せられてよそいきの顔になっている。

そのまま行かせたくなくて、国王は無意識に部屋を出ようとした娘の手首をつかんだ。

「どうせ働くなら、余の侍女にならないか」

国王に私室には侍女の部屋も、それ以外の余った部屋もある。側に置いて顔を合わせれば、状況が打開できるかもしれない。

娘の目は幾分か細められた。国王の顔を見たくないと下働きを選択したのだ。国王付きの侍女など冗談じゃない。

どんな拷問なんだ。

娘はつかまれた手首を無表情に引き剥がすと、国王をまっすぐに見つめた。

「お断りします。食堂の仕事はやり始めたばかりで、すぐに投げ出したら無責任です。

それに、どうすればあなたの顔を見なくて済むかと以前申したはずです。あと、今後はこのようなお誘いは恐れ多くて困ります」

今後は呼び出すなとあからさまに匂わせて、では失礼しますと娘は自ら扉を開けて部屋を出て行った。

国王は呆然としていたが、我に返って団長に娘の部屋までついていく様に命令した。

団長がすばやく部屋を出ると、椅子に座り冷めたお茶を口に運ぶ。

お代わりをと近づいた侍従は、国王の雰囲気が微妙に変わったのに

気付いた。

「あれは侮れんな」

相手を見下して服従させようとしていたのから、少なくともその存在を認識して一定の敬意を抱き、その上で関わろうとするそんな姿勢だった。

団長は廊下を足早に歩いていく娘の後姿を認めて、追いかける。背後の物音に娘の足が止まり振り向いたところで手をあげた。

娘は団長が近づくのをその場で待っていた。何か？　と言いたげに小首をかしげて団長を見上げている。

「部屋まで送ろう。まだ王城内では迷うだろう」

娘は素直にそれを受け入れて、先を歩く団長の少し後ろを付いてくる。最初は大股で歩いていた団長は、ふとペースが速すぎるのに気付いて娘が追いつくのを待ってそれからは少しゆっくりと歩いた。

国王の私室のある棟からかなり歩いて使用人の棟に入り、階段を上がって娘の部屋に到着した。この部屋も警備がしやすいようにと団長が差配した部屋だ。警備の控え室などあるはずがないので、向かいや近くの部屋を開けて交代で詰めるようにしている。

「ありがとうございました」

「話がある」

部屋の前で礼を言う娘をさえぎり、団長は話しかけた。娘が扉を開けようとしたのを制して、団長が扉を開け中の様子を確認する。

箪笥もあけて誰もいないことを確認してから、背中にかばうようにしていた娘を椅子に座らせた。男女が密室という状況を避けるため扉をあけて、外には漏れないような音量で娘に話をする。人目がない時、団長は娘に対して敬語になる。

「はっきり申し上げて、あなたの言動は不敬にあたります。陛下は断罪するおつもりはないようですが、陛下の側近以外の者に知られるとあなたが処罰されかねません。
お気持ちは分かりますが自重していただきたい」

娘は膝の上で手を組んでいる。顔を上げて団長を視線を合わせた。黒い瞳が、おそらくは怒りのためにきらめいているように思える。
不謹慎ながらそれに見とれつつ、団長は娘の言葉を待った。

「気持ち？　私の気持ち？　分かるはずがないです。勝手なことを言わないで下さい。不敬ですか。あなた方には不敬かもしれませんが、私はそもそも敬うような立場も心境も持ち合わせていません。第一、殺そうをした人を敬えますか？
私はこの世界の人間じゃないんです。私からはこの国は、国王は人を無理やり攫う犯罪者に等しいんです」

痛いところをつかれて、そして娘の迫力に気おされて団長は押し黙る。
自分と比べては小柄で華奢な体に、なんという強い精神を持っているのだろう。
あの国王に尊敬できるような言動があったか？　娘の目は挑戦的に団長にそう問いかけている。
組んだ手には力が入っていて、娘が感情を抑えているのは理解した。

「お気持ち云々は軽率だった。申し訳ない。ただ、あなたが陛下の庇護の下にあるのも事実です。人前での陛下への態度にだけは気をつけてもらえればよいかと。

それがあなたを守ることにつながりますから」

「はい、嫌ですが努力します」

「ではいつまでも居座ってはいられないのでこれで失礼いたします。明日もよろしくお願いします」

「こちらこそよろしくお願いします。お疲れ様でした。――お休みなさい」

扉を閉めるために廊下に出ていた団長は、お休みと返した声が上ずっていないか気がかりだった。

静かに扉を閉めて廊下の両脇に目を走らせ、少し開いた扉から娘の部屋を窺う部下達に頷く。

簡素なつくりの棟は廊下も薄暗い。

一人国王の下に戻りながら、この薄闇で部下に気付かれぬうちに、また国王の私室までの距離で頬の熱が醒めるようにと願った。

09　すべては明日の糧になる

娘の朝は早い。朝食の下ごしらえ、食器の準備、次々に食堂に来て食事を済ませたあとの皿洗い。

皿を拭いたら休憩がはいり、昼食の準備になる。昼食後の休憩のあと夕食の準備までして、仕事を終える。

団長は部下からの報告を受けていた。

「休憩のたびに色々な場所に行っています。探検のようです」

「近くの部屋の侍女や下働きとも仲良くなったようで、一緒に夕食を取ったり部屋を行き来しています」

団長は報告を受け流す。特に注意を引かれる点はない。

少しずつ馴染んできているようだ、と団長はその時には思っていた。

休憩時間に娘は監督のくれた菓子を手に、騎士団の馬場に来ていた。

ここには騎士団だけでなく、王族専用の馬の厩舎があり、多くの馬が飼われている。

娘は馬が運動のために馬場を軽やかに疾走するのが眺められるところに腰を下ろしていた。

明るい日差しの中でしなやかな姿態で走り回る馬は、ほれぼれするほど美しく娘はそれをじっと見つめていた。

「やっぱり生き物はいいな」

「馬が好きか？」

背後から声をかけられて、娘はそちらを振り向いた。

騎士服をきっちり着こなした背の高い男が、馬場の柵にもたれていた。
娘は男から馬に再び目を移す。
「とても綺麗だと思います。私が知っているのよりも、がっしりして力強いですね」
サラブレットよりも骨格がしっかりしているように見える。ここの馬は競走用や鑑賞用ではなく、移動や戦に使われる実用なのだ。
側に来た男は厩舎の責任者だと名乗った。
「馬には乗れるか？」
「いいえ」
乗馬ができるのなんてごく限られた人でしかない。普通に生きてきた娘には馬は牧場や、ＣＭで見るような遠い存在だった。
「乗ってみるか？」
誘われて娘は驚く。ここの馬は遊びで飼われているわけでないのにいいのだろうか？
疑問が顔に出ていたのか騎士は笑って、厩舎の側にある小さな馬場に案内した。
「大人しい馬になら乗れるだろう」
そう言って、やや年のいった馬に鞍をつけた。
側までひかれてきたのを見ると、その大きさに圧倒される。

「隙を見せるな。卑屈になるな。馬は下とみなすと言うことを聞かなくなる」

言いながら、娘に馬に触ってもいい場所と触り方を教えてくれた。娘はつやつやなのに硬い毛並みをなでて、知らずうきうきした気分になった。

本当ならまたいで乗るんだが、としながら騎士は娘の脇に両手を入れて抱き上げた。

横乗りの形で鞍に乗せられその高さに固まる娘を、下から見ながら騎士は鞍を握らせて自身は手綱をとった。

ゆっくりと狭い馬場を周回する。

「馬と動きを合わせて、腰から背中を柔らかく使って背筋は伸ばす。目線は少し先を見ていろ」

なんだか分からないうちに馬上の人になった娘は、鞍にしがみついて丸くなっていた背筋をおそるおそる伸ばして前を見た。

いつもより高い目線の風景に目を奪われる。風も気持ちよく吹いて、王城の端のせいか緑も多く鬱々とした日を送っていた娘にとって、久しぶりに心から楽しめる穏やかな時間だった。

最初の時と同じく騎士に抱きとめられるように地面に降りた時には、この時間が終わってしまうのが残念なほどだった。

「ありがとうございました」

礼を言う娘に騎士はこの時間なら馬に乗せてやる、と嬉しい提案をしてくれた。

勿論娘はそれに応じ、明日の約束をして食堂へと戻っていった。

それを見送る騎士に、馬を厩舎に戻した騎士見習いが気付いた。

「副団長、帰城してからこちらに直行ですか？　団長が報告書を待っていらっしゃるのではないですか？」
「俺の可愛い馬達の様子を確認するのが最優先だろう。報告書は昼食の後にでももっていく」

金褐色の髪とうすい青の瞳を持つ副団長は、馬に愛しげな眼差しを注ぐ。従騎士は団長よりも馬が先と言い切る副団長に、はあ、と言うしかなかった。

「ところで今の娘は誰だ？」
「知らないで乗せていたんですか？　今、騎士団の食堂で働いている子です。大人しいけど目を引くって今騎士団の中でちょっと評判なんです」

誰よりも愛する馬に見ず知らずの娘を乗せるなんて、副団長を知る者からはありえない。
見習い騎士は晴天の霹靂、を身を持って知ることになった。

戦争のような昼食を乗り越え、夕食の下ごしらえをした後で娘は一日の仕事を終えて使用人棟へと向かっていた。
小道をたどる娘の前に、下級官吏の服装をした男が姿を現した。もごもごと口の中で呟いているのを聞き取ると、どうやらおつきあいを申し込まれているようだ。
娘は目を伏せてそれを断る。それで諦めてくれれば良かったのに、その官吏は下働きに断られたのに自尊心を傷つけられたようだ。
顔を赤くして乱暴に娘の手首をとって、夕暮れの暗がりに連れ込もうとした。抗う娘ともみ合いになったのも束の間、鋭い誰何の声とともに二人の騎士が現れて官吏を拘束した。

「王城内で婦女子に乱暴とはいい度胸をしている。騎士団本部に来てもらおうか」

一人が官吏を連れていった。

「どこかお怪我はありませんか？」

娘が首を横に振ると部屋まで送りましょうと、恐縮する娘に構わずに使用人棟への道をたどり始めた。

結局部屋の前まで送り届けられてしまった娘が礼を言うと、騎士は微笑んで頷いた。

扉を閉めた娘はそのまま耳をつけた。きびすをかえして階段を下りる音がするはずなのに、足音は娘の部屋を行き過ぎてしばらくしてから戻ってきた。階段を下りる音が聞こえたところで娘は扉から耳を離した。

「監視されているってことか」

あまりにもタイミングの良すぎる騎士達の登場と、怪我がないか聞かれたときに敬語を使われたこと、すぐに戻らずどこかに寄っている形跡があったことで出た結論。

「まあ、再召喚までの保険でも今のところは『伝説の娘』だもんね」

監視の存在は邪魔だ。

娘の計画を阻害する。

「スパイ大作戦なんて素人には難しいんだけど」

一人ごちながら、娘は菓子を包んだ紙を手に持った。

夜、娘の姿は使用人棟の裏手にあった。小高く開けた場所に座って空を見ている。
棟の向こうから人の来る気配がした。そちらに娘が目をやると団長が近づいてくるところだった。

「どうした」
「目がさえてしまって、星を見ていました。動かずに方角の指標になる星はあるんでしょうか？」
「あれがそうだ。北を示す」
「奇遇です。私のところでも北極星があります」

最後の言葉は団長にしか聞こえないほどに小さかった。
今は夜だから隠してある目も晒している。その目が団長の教えた星を見上げていた。

「仕事には慣れたか？」
「はい、食堂の人にも、騎士団の人にもよくしてもらっています」

団長をまっすぐ見て娘は言い切った。本心からの言葉に団長は疑いを持たなかった。
程なく娘は部屋に戻った。
ごそ、と肩掛けの下から携帯を取り出して、携帯のストップウォッチ機能を確認する。

「部屋を出てから団長が来るまでの時間……」

おそらく複数で監視し、団長に報告がいって団長が様子を見に来た。監視体制としてはこんなものだろう。

武人を出し抜くなんてできるんだろうか。

「乗馬ができれば逃げやすくなる。星が出ていれば方角も分かるか。他にも知らなくちゃいけないことが多いな」

少しずつ、焦らず確実に。娘は呟いて携帯の電源を切った。

１０　指摘と焦り

昼を少し過ぎた頃に、団長は国王の執務室にいた。広く、重厚な内装に相応しい大きな机の上には書類がのっている。

未処理と処理済を二つの山に分けているが、未処理のものはもう随分と減っている。

団長は国王の執務に区切りがつくまで、直立不動でいた。

ふう、と一つ息をついて、国王がペンを机に置く。絶妙のタイミングで書記官が書類の束を持ち去った。

侍従が軽食の用意をしているところに、国王は団長をいざなった。

普段は折り目正しく主従の一線を越えない団長も、人目がなければ幼馴染の学友だ。雰囲気が少し砕けたものになる。

「それで、あれはどうしている？」

「よく動きますね。門の衛士のところに昼食を届けてくれるようになりました」

「それは下働きの仕事なのか？」

お茶を飲みながら国王が尋ねる。王太子時代には騎士団に放り込まれて汗を流したこともあるので、ある程度の内情は知っている。

あの頃よりも色の白くなった国王に、団長は目を合わせる。こちらはうっすら日に焼けて、精悍な印象をかもし出している。

「ええ、ですが従騎士だけでは手が回らないので、昼食の少し前に作らせたものを運んでくれています。何ですか『配達』とか『宅配』のようなものだとおっしゃっていました」

他にも午前に馬に乗る練習をしていると聞かされ、国王は面白くない。

着々と自分の目の届かないところで世界を広げている娘に、自分だけが関われていない。
そのことが非常に歯がゆかった。

控えめに扉がたたかれ、侍従が顔を出した。客人の来訪を告げるつもりだったようだが、それより早く当の本人が顔を出した。

「兄上、ただいま戻りました」

立とうとする団長を手で制し、国王を兄上と呼んだ男性が入ってくる。
国王よりはわずかに小柄で細身だが、非力というより優美な印象を与える。髪の色は国王とよく似た金色、目の色は茶色だった。

「殿下、お久しぶりです」
「うん、久しぶり。相変わらず訓練三昧か？　よい体しているね」

王弟の華やかな雰囲気で、座が明るくなったようだ。
侍従に追加の皿とお茶を運ばせて、王弟は遠慮なく軽食に手を伸ばす。

「これが今回の概要です。詳細な報告書は後ほど改めて。やはり東はきなくさいですね。あまり人相のよくない人間の往来が増えたようです」
「……傭兵か」

国王の呟きに団長も表情を引き締め、王弟は頷く。
南に海が面している関係で東、北、西に国境を接するこの国は、

国王の即位に関する騒動から落ち着いてからまだそう間がない。
国内外にくすぶる火種を必死に消して回っているのが現状だ。
幸い側近には恵まれ、王弟も治世の助けをしてくれている。
だが火種はなかなかしぶとく、消えたと思ったその下でなお息を潜めて永らえている。

「叔父上か。大人しくしていたと思っていたのだが」

東に広大な所領を持つ父の弟。自分と腹違いの弟との王位争いの黒幕なのは分かっていたのに、どうしても尻尾がつかめなかった。
今は公爵として東の屋敷にこもりがちで、時折王都にやってくる叔父の顔を思い浮かべた。

「ご本人に表立っての動きはありませんが。訪問したら下にも置かないもてなしをしてくれました。結婚はまだかと、せっつかれたのには参りました」

ぺろりと食べあげてお茶を飲んだ王弟は、にこりと笑った。
この笑顔が曲者で男女問わずついつい警戒心を解いてしまうが、猫のかぶり具合が半端ではない。
東の件は監視を強め万が一の対応を強化することで、意見の一致を見た。

「そう言えば兄上、召喚の儀を執り行ったんですよね。義姉上にご挨拶したいんですがどちらにおいでですか？」

王弟の言葉に国王はカップに手を伸ばしたまま固まり、団長は飲みかけの茶にむせそうになった。
ややあって国王が呻くように答える。

「……食堂だ」
「食事の間ですか？　昼食をとられているんですか。では午後のお茶の時間にでも」
「違う、騎士団の食堂だ」
「は？　なんでそんな所に。騎士団の閲兵でもされているんですか？」
「いいえ、今の時間ですと皿洗いをされているかと」

団長の言葉が飲み込めずに、王弟はしばらく国王と団長の顔を交互に眺めた。
苦虫を噛み潰したような国王の代わりに、団長がかいつまんで事情を説明する。

「つまり、召喚したら気に入らずに暴言を吐いて、反論されたので首を刎ねようとした。次の召喚まで置いておくことにして牢に入れた。
改めて見ると美人だったから、兄上は側に置こうとして思いっきり拒絶されたと」

弟の反芻に国王の機嫌は悪くなる一方だった。

「しかし、兄上。何故そんなひどいことを」
「直前に伯爵から娘を後宮にとしつこくされていた。伯爵の娘の性格の悪さは知っているだろう？　ただでさえお飾りになりやすい王妃が不細工では貴族達がなんと言うか。これ幸いと娘達をごり押し

するに決まっている。
国が安定していないのに、後宮が荒れてみろ。夜も眠れん、気が休まらない」

ああ、と王弟が頷く。

「つまり八つ当たりなんですね。それにきっちり反論されて頭に血が上ったと。兄上、悪癖がよりによってその場で出たんですか」
「お前、一生側において子供をなさないといけない相手が、目がどこにあるかも分からないほど腫れあがった顔をしてみろ。萎える」

そんな兄を見て、王弟はにやにやしている。
王弟の本質からは、よほどこちらの笑みの方が似合っている。
団長は一方的に遊ばれている国王の様子を窺っていた。

「しかし、面白そうな娘ですね。名前はなんと言うんですか？　年は？」

王弟にしてみれば何の気なしの質問だった。
国王は一言で切って捨てた。

「知らん、本人が言わない」

王弟は唖然として、団長を見る。団長はいささか複雑な顔をしながらも国王の言う通りだと頷いた。

「待ってください、兄上。そこまで、そこまで嫌われているんですか？　どうするんですか。伝説の娘を伴侶に出来なかった国王なんていないんですよ」

「言われなくても承知している。現在は再召喚の準備をさせているところだ」

再召喚、と呟いて王弟は難しい顔になった。

歴史に例がないことは知っている。それをしようとする国王の真意を図った。

ややあって自分なりの結論に達したのだろう。

王弟は対外用の笑みを浮かべた。

「兄上、相当に気に入られたのですね。再召喚だなんて、自由にしてやろうとするくらいに」

「違う！　どうやったらその解釈になるんだ。あんな強情な娘はこちらから願い下げだから再召喚をするのだ」

「はいはい、そういうことにしておきましょう。団長、今から騎士団の食堂に行きたいけれど大丈夫かな？」

「勿論です。殿下がお顔を見せれば団員が喜ぶでしょう」

国王をよそに話をまとめて、王弟は席を立った。

団長も顔を出すべく辞去の礼を取る。

弟にからかわれた国王は、勝手に行けと言いかけて言葉を飲み込んだ。

「余も行く」

午後の執務開始を少し遅らせる手はずを整えて執務室を後にした。

道すがらにも娘のことを聞いていた王弟は、兄上に意地っ張りな

ところは似ていると揶揄した。
ただし怒ると兄は熱するのに、娘は冷えるのが異なるとも。
ある意味団長が最高の護衛だが、それでも後ろに近衛を連れて騎士団の食堂に現れた国王達に、それまでがやがやとうるさかった食堂は一瞬で静まり返った。その分厨房での声や物音がよく聞こえる。

「あの、困ります」

確かに娘の声での言葉に国王は知らず厨房へと足が向いた。
今まで厨房になど王城のものであっても足を踏み入れたことはなかったのに、いまだ忙しく料理を作っている料理人をよそに、目は洗い場に立っている娘に吸い寄せられた。下働きの服をつけ、エプロンをして腕まくりをしたまま娘は困ったように、横に立つ男を見ていた。
どうやら娘の手から布巾を奪って皿を拭いているのは、身なりからすれば従騎士のようだ。

「それは私の仕事です。お構いなく」
「あ～いいのいいの。二人でやったほうが早く終わるだろ？　時間が余ったら話をしようよ」

従騎士は軽く言いながら、皿を拭いては重ねていっていた。

「随分と暇そうだな。他人の仕事を手伝う余裕があるか」

何かを言いかけた国王より早く、低い声が背後から聞こえた。
戦場や刺客を前にした時にしか聞かれない、声音。滅多にないが機嫌を損ねている時の音量。

硬直した従騎士は恐る恐る振り返る。その時には娘も振り返っていて、国王と団長の出現に驚いていた。

「え、あの、団長。何故ここに……」

「時間が余るのならちょうどいい。訓練をしていくか」

ざわっと食堂内が波立つ。団長が訓練と言い出す時は、しかも機嫌がよろしくなさそうな時は間違いなく過酷な、とか地獄のとかの枕詞がつく訓練になる。明日が非番の者はいい、そうでなければまず明日の勤務は疲れ痛んだ体に鞭打つものになる。

顔面が蒼白になっている見習いの手からそっと布巾を取り返して、娘は目を伏せた。

「各自持ち場に戻る、手のすいている者はこの後演習場に来い」

手を打ち鳴らして団長が場を治めた。

国王は再び皿を洗い始めた娘の後姿を見つめる。腕まくりをして、カチャカチャと音をさせながら皿を洗って重ねていく。

ある程度の枚数になるとすすいで、布巾で水気をとっている。

娘は見事なまでに国王を無視していた。だが人目があるので、うかつに声はかけられない。

それにしても。いまだかつて皿洗いをする王妃も伝説の娘もいなかった。ある意味衝撃の光景に国王は見入っていた。

「兄上、あの方ですか？」

小声でうかがう弟に上の空で頷く。

興味を持った王弟だが、この場で話しかけるには身分の隔たりが

大きすぎることに気付いた。
国王に囁く。
「夕食をご一緒させてください。団長から話を通せば逃げないでしょう」
「夕食？　ああ、そうか、そうだな。団長にも同席させよう」
よい考えだと思った。呼び出すなと釘は刺されたが、そうも言っていられない。
娘と会わなければ。何故そう思うのか自覚のないまま、国王は団長に話を持ちかけた。

11　思惑

何故ここに国王がいるのだろう。

一度だけ礼をして、国王達に背中を向け皿洗いをしながら娘は少し混乱していた。

国王と顔を合わせないように下働きを選んだのに、騎士団ではまずかったか。

でもこんなに歩き回れる仕事場はそうはないだろう。休憩時間に馬に乗せてもらえるし、食事を届けに行くと衛士達は門の外、城下の様子を教えてくれる。そうやって逃げる準備が少しずつ出来ているのに、国王の出現は不安要素でしかない。

顔を合わせたくないのに、わざわざやって来るなんてストーカーか？

顔はいいくせに、性格が悪くてストーカーなんて残念な人だ。

しかし、厨房に国王は似合わない。ものすごい違和感を生じている。はっきり言って邪魔者だ。

昼食のピークを過ぎていたからよかったけれど、忙しいさなかだったら監督が怒鳴りつけていたかもしれない。見ていると団長にも平気で苦言を呈しているので、国王にも遠慮はしないかも。

団長の側に立っているやたらきらきらしい人も、この場にはそぐわない。顔がなんとなく国王に似ていたようにも思えるが、振り返ってまで確認する気はなかった。

彼らの方を見ないように、娘は目の前の仕事に集中した。

王弟は国王と娘を観察する。

娘の方は面白い。国王を見て嫌そうな雰囲気を出した時など、笑ってしまいそうになり慌てて表情を引き締めたほどだ。

笑いなどしたら、兄の機嫌がどんなことになるか。

普段は抑えられているのにごく近しい人間の前では、実に感情豊かな兄を嫌いではなかった。

自身がけして腹のうち明かさない性質と自覚しているので、兄の個人的に見せる率直さは羨ましくもある。

だが、言うに事欠いて女性の首を刎ねろはないだろう。第一召喚されてくる娘は美人なはずなので、兄も冷静になって待てばよかったのだ。

その上牢に入れたとあっては、これで結婚する気になるほうがおかしい。

兄の外見や地位、財力になびけば結婚するかもしれないが、この娘はそうではないようだ。

皿洗いなど。しかもそれを自分の仕事と言い切るあたりは、労働を恥と考える淑女然とした貴族の娘達にはない気概と思われた。

怒ると冷えると聞かされていたが、それだけではなさそうだ。

いや、実に面白い。しかしこの娘には手出しができないのも承知しているので、王弟は特等席での見物人に徹することを決めた。

国王は皿洗いをする娘の後姿を眺めていた。

娘に向けた視線は、騎士団員達からはまるで親の敵を見るようだったとの感想が漏れるほど、熱心かつ執拗で鋭いものだったらしい。

弟からはこの娘を自由にするために別の娘を再召喚するのか、など言われたが冗談ではない。

婚儀を嫌がり、ここまで反抗的で人を無視するような意地っ張りな気の強い娘など、王妃にした日には気が休まらないだろう。舌禍などおこされてはたまったものではない。

だから、披露目をする前に次の娘を召喚するだけだ。

母のように素直に国王に寄り添う娘を召喚できればそれでいい。

この娘はここに置いておくと面倒だから送り返すまでだ。
断じて自由にさせるために送り返すわけではない。
むきになって自分に言い訳しながら、弟に促されるまで国王はその場に立っていた。
元
来た道をたどりながら、王弟は機嫌がよかった。まるで新しい玩具を見つけて手に入れた時のようだった。

「いやあ、実に楽しそうな娘さんですね。夕食が楽しみだ」
「楽しいことなどあるか。あれの舌には皮肉しか乗っていないのだぞ」
「それは兄上のせいでしょう？　今からではもう遅いかもしれませんが、きちんと謝って赦してもらったらいかがですか？」
「余に頭を下げろと？」
「時機を見誤ると、取り返しがつきませんよ」

珍しく本気の忠告をしてくる弟に、国王は足を止めた。同腹で年も近しいこの弟は、即位争いの際には反国王派に担がれないよう立ち回りながら反勢力を切り崩してくれた。頼もしい味方だ。

「内心では悪かったとお思いなのでしょう？　母上のように泣き暮らしはしないでしょうが、赦してもらえないことには話は始まりません」

護衛に聞かれないように、ごく小さな声で会話する二人の脳裏には、母親のことが浮かんでいる。黒い髪と瞳は幼心にも神秘的に映り、はかなげな風情もあって母親のことは相当に美化されていた。
だからあの時の娘を受け入れがたかったのだろうか。
それでも国王の発言で娘を傷つけたのは事実だ。夕食の席で謝罪しようと決めた。

「……親を亡くしたばかりらしいし、たった一人でここに放り出されている状態か」

あの娘の様子は自分を嫌っているのは勿論だが、必死に気を張ってのことでもあるのだろうか。

それならまだ可愛いところがあると思うのだが。

「それにしてもなんだ、あそこは男ばかりではないか」

「騎士団ですから当然でしょう」

「腕まくりなどして、あれでは誘っているのか」

「……皿を洗うんですから腕まくりしないと濡れるでしょうに」

「そんなことは分かっている」

兄上……と幾分呆れながら王弟は執務棟へと戻っていった。何を言っているか自覚のない兄だからこそ側で支えようと思ったのだが、一連のできごとは想像以上に国王を混乱させているようだ。

この広大な国、美しい王城の主なはずの兄が、実は独占欲の塊なのだと新たな一面を知った瞬間でもあった。

そこまで気に入っているのなら、再召喚などしなければよいのに。

王弟の呟きは胸のうちに収められた。

団長は宣言通りに団員に、練習用の剣を使って稽古をつけながら汗をかいていた。

陛下と殿下の目前で、あろうことか部下が預かっている御方に言い寄るなど、監督不行き届きなことこの上ない。

根が生真面目な団長は、陛下に申し訳なく幾分か自身に対する懲罰の意味合いもこめて、いつも以上に声を出し体を動かした。

訓練としては少し熱が入りすぎたきらいはあるが、よい機会なので存分に動く。
この訓練が終われば、娘を夕食に誘わなければならない。
それも気が重くて、逃げるように踏み込む力を強くした。

「夕食、ですか」
「ここの下ごしらえは今日はしなくていい。妹も同席させるので出席してもらいたい」
「決定事項で、命令なんですか？」
「――そうだ」

食堂の机を拭いていた娘をつかまえて用件を伝えると、案の定難色を示された。
陛下を犯罪者に等しいとした娘だ。同席など考えたくもないだろう。

「私も出席する。私と妹はいわば陛下の幼馴染で、あとは陛下の弟君が出席されるだけのごく内輪の食事だ。気を張ることはない」

娘の嫌がっている点を分かっていながら話をそらして、なんとか説得を試みる。
持って回った言い方は苦手な団長は、訓練の後で拭いたのに額にうっすらと汗をかいていた。
その様子を気の毒に感じたのか、命令なら仕方ないと割り切ったのか娘は承諾した。
下働きの服ではないものに着替えさせるようにとも命令されている。夕食までの時間を逆算すると、急いで戻らなければならない。
団長は護衛を兼ねて娘と食堂を後にした。

「何故陛下は私に関わろうとするのでしょうか。新しい人を再召喚するのだから、私などは放っておけばいいのに」

虚をつかれた団長は、慌てて頭の中で答えを探した。

「陛下の心中は私には分かりかねる。夕食の席で直接伺ってみればいい」

うすうすは察しているその理由は、団長の口からは語られなかった。

それを口にするのは僭越であり、また口にするのは抵抗があった。

各々の思惑をよそに、地面の影は長さを増してきていた。

12　甘くない

娘は使用人棟に戻るとにこやかに微笑む侍女に、有無を言わさずに別の部屋に連れ込まれてしまった。汗を流した後でドレスに着替えさせられて、髪を結いあげられ化粧をされる。

「髪の色が黒でないのは残念ですが」

侍女は手際よく娘を作りこみながら、楽しげだ。娘の方は国王の気まぐれにも、仮装としか思えないドレスにもうんざりしているが、今日の件を含め聞きたいこともあるのでしょうがないと、されるままになっている。

娘の仕上がりを満足そうに眺めて、侍女は自分も着替えるのでここで待っていてくれと出て行き、娘はしばらく一人にされた。

鏡で着替えさせられた自分を見てみる。

下働きの灰色の飾り気のない服とは違う。丈も長くて裾を踏んでしまわないようにと、室内で歩く練習をして待っているうちに侍女が戻ってきた。

とても綺麗だ。茶色の目と髪の色にあわせて着ているドレスと化粧はよく似合っていて、楚々とした雰囲気に華やかなものも加わり見とれるほどだった。

侍女とは言っても兄が国王の幼い頃から側にいられるほどの身分はあり、彼女は貴族のお嬢様なのだ。

王城では人の世話をする立場でも、実家ではされる立場なのは間違いない。

仕草や食事については彼女を真似しようと思いながら、娘は連れ立って食事の間に向かった。

広い食事の間では細長いテーブルの正面に国王、その両脇の近い

ところから娘、向かいに王弟、娘の横に侍女、王弟の横に団長と席がしつらえてあった。

本来なら娘は国王の向かいに座るべきらしいが、今回は座が親密になるように、また娘が気詰まりにならないように配置されたようだ。

実際侍女と食べ方や食材についておしゃべりに花が咲き、食事は思ったよりも楽しかった。

斜め横の国王の存在さえなければ。

国王は王弟や団長と政治的な話もしつつ、機械的に食事をしていた。

弟からは娘に謝罪をするように促されているが、どう切り出せばよいかと思うとなかなか難しい。

機会を窺っているうちに、デザートまで出されてしまっていた。

その皿も下げられ食後の飲み物が供され、そこで座が沈黙した。

皆、国王の出方を窺っているようだ。

国王も覚悟を決めて娘を見つめた。

「話がある」

食事の間ではそぐわないとの理由から、小さめの部屋に移動する。

テーブルには二人分のお茶が用意されて、国王と娘以外は隣室で待機する。

扉を少し開けて待っているからと侍女に微笑まれ、娘は国王と向かい合うことになった。

「お話とはなんでしょうか」

娘が国王に聞いた。いつもは目を隠している前髪も侍女の手によ

って手が加えられていて、黒い瞳を晒している。それがまっすぐに国王を見た。

「いつまで遊んでいるつもりだ」

「次の人が召喚されるまでです。好きなことをして過ごせとおっしゃったのは陛下です。客室に押し込められているより、今の生活は楽しくて有意義です。この国にも良い人がいるのだと分かりましたし」

痛烈な皮肉に国王は奥歯を噛み締める。

「随分無礼なことを言う」

「この国に良い人がいると申しただけです。ほめているのに」

「もういい。お前は本当に帰るつもりなのか。召喚はできてもその逆は今回が初になる。成果も危険性も未知数だが」

娘は国王を見つめて、にっこりと笑った。

笑顔を向けられたのは初めてで、国王はそれに目を奪われた。

「あなたの顔なんて見たくないからどこかに消えて。死んでくれたらせいせいするから」

娘の言葉に国王は息を飲んだ。頭ががんがんしてきて、知らず剣に手がかかっていた。剣が椅子に当たった音で我にかえる。

そこで気付いた。娘の口元は笑っていても目が笑っていないことに。

「あなたが初対面の私に言ったのは、こういうことです。今感じていらっしゃる怒りを私も感じました。どんな人間にだって自尊心はある。

あなたが国王だからって、それを踏みつけにしていいはずがないんです」

国王は懸命に怒りを静めた。自分が暴言を吐き、死罪にしようとし、牢に入れたのは紛れもない事実だったからだ。

いざ自分に向けられると、ここまで心を抉られるようなものであったのかと今更思い知らされた。

――それを親を亡くしたばかりの娘に投げつけてしまったのか。

「――余が悪かった。赦せ」

こぶしを固く握りしめて、低い声で国王は謝罪した。

娘も国王が謝罪するなどとは思ってもいなかったので、聞き間違いかと思った。

謝り慣れていないのだろう、表情は苦々しげでそっぽを向いている。

言い方も態度も本当に悪いと思っているのだろうか。ただ神官から国王の謝罪は国の威信を揺るがしかねないので、余程のことだと言われたことを思い出す。

人に頭を下げる必要のない国王にしてみればこれで精一杯なのだろう。

「謝罪の意思は分かりました。私が許すかは別問題ですが」

「余が謝罪したのだぞ」

「謝ったからといって即、水に流せるほど心は広くありません。赦せなんて加害者が言っても説得力がないんです」

国王は娘への甘やかな感情などどこかに消えてしまうかと思った。

『国王の謝罪』の意味を知っていて、なお別問題とする娘の冷静さをねじ伏せたい気になる。

「余が再召喚しないと言えば、お前はこのままなのだぞ」
「国王なら発言に責任を持ちましょう。持ってくれないと困ります。そうやってすぐに権力を振りかざす」

娘は内心は少しだけ慌てている。
再召喚してもらわなければ、元のところに帰れない。ずっとここにいるのなら、王妃にという話が現実になってしまう。
それだけななんとしても避けなければ。

「黒髪で黒い瞳であれば誰でもいいのでしょう？　陛下に反抗する私ではなくて素直な人を召喚して、陛下のお心に添うように遇してあげればいいんじゃないですか。それか」

手をたたいて、いい考えが浮かんだとばかりに娘はにんまりする。

「黒い髪と瞳の等身大の人形でも作って、衣装を着せてそれを抱いてバルコニーから手を振ればいいんです。絶対陛下に反抗しない、陛下がどんな風に扱おうとも文句も言わない。この世界の女性と子供を作れば召喚されて泣く人も出ない。いいこと尽くめじゃないですか」

何が悲しくて、この年で抱き人形を作らなくてはならないのか。
娘の提案を呆けたように聞いていた国王は我に返った。その光景を想像するとぞっとして、鳥肌が立ちそうになる。

「余に人形遊びの趣味はない」
「ならお面でも作らせて黒髪を付けて、お好きな女性にかぶらせれば。私は喜んで髪の毛を提供しますから」

ショートカットでも丸坊主でも、どんな悲惨な髪型になろうとも帰れるのなら構わない。

綺麗に結い上げた髪の毛に手をやる娘に国王は慌てた。

短い髪の女性などこの世界では非常識だ。放っておけば、娘は本当に髪の毛を切りかねない勢いだ。

「その案も却下だ。分かった、再召喚はする。ただそれまでの間、余と話はしろ。

お前の世界のことを聞かせるのだ」

「何故ですか？　何故私と関わろうとするんですか？」

昼間団長にした質問を、娘は本人にぶつけた。

娘からすれば、自分を嫌っている相手にわざわざ関わろうという気にはならない。精神衛生上いいことなど何もないからだ。

だから何故国王が執拗に接触を持とうとするのか、理解に苦しんだ。

娘は押せば引きたくなる、引けば追いかけたくなる国王の性格を知らなかった。

むしろここまで意のままにならない存在など初めてで、それゆえに余計に振り向かせたいとする思考回路も理解していなかった。

「異世界の情報はなんであれ欲しい。それに余を前に嫌がるお前を見ているのも面白そうだ。余を相手にどこまで無礼を貫けるかやってみるがいい。

お前に、余の顔を見ない自由など与えない。毎日、ここでは誰の庇護の下にあるかを思い知れ」

傲岸不遜に言い放つ国王に、今度は娘の方が唇を噛み締めることになった。

――この国王は、とんでもない俺様だ。

さっきまで謝罪していた人間とは思えない変わりよう。

喧嘩を売られたか。ならば応酬するしかないだろう。拒否権など与えられない娘は対決の意を強くした。

隣室では二人の様子を三人がはらはらしながら見守っていた。

声は全部聞こえるわけではないが、剣呑な雰囲気だけは伝わっている。

「どう見ても口説いているようではないな」

「そうですね。むしろ怒らせているような……空気が冷たい気がします」

「もう陛下ったら。子供みたい、どうしようもありませんわね」

口々に言い合いながらも目は二人から離れない。

国王と相性が良いらしい娘と、なぜああもこじれられるのだろう。

強情なところは似ているのかもしれないと、ため息まじりにその点だけはお似合いだと三人は思った。

13　不穏

国王との夕食から部屋に戻って、娘はベッドで膝を抱えた。
ここに戻る道すがらもつい暗い表情になって、着替えを手伝ってくれた侍女や送ってくれた団長も心配させてしまった。
頭の中にはぐるぐると、先ほどの国王とのやり取りが渦巻いている。

国王は俺様だった。上から目線で謝罪の言葉を述べて、それで解決した気になっていた。すぐには許せるものではないと返すと、縛り付けるような命令をしてきた。
理不尽だと思う。あの国王は徹頭徹尾理不尽だ。
人を外見でしか判断しない。自分にも心や大事にするもの、譲れないものがあることを理解しようとしない。尊大な人で、内心呆れを覚えるほどだった。
それでも、あれは言いすぎだったと思う。

『あなたの顔なんて見たくないからどこかに消えて。死んでくれたらせいせいするから』

相手のレベルに落ちては駄目だったのに。国王は周囲の者は皆目下だと思っている。勿論自分のこともだ。それに、あんな言い方をしては逆上させるだけだ。
他人に消えろとか、死んでくれたらなんて投げつけたことはなかった。
口に出すと自分が汚れたような、嫌な気分だった。人を不快にさせるだけの言葉は、後悔しか生じない。
今後は、あんなことはもう言わないでおこう。言われた国王も不愉快だっただろうが、言った本人も気分が悪い。

それにしても、相手を傷つけるためだけのために紡がれたような言葉は、遠くから投げる石のつぶてのようだ。深くて渡ることのできない、谷や川を挟んでの応酬にも感じられた。

そしてふと思う。

自分の魂を汚すような言葉をためらいもなく口にする国王とは、一体どんな人間なのだろう。

何があの、理解しがたい国王を作り上げたのだろう。

――根は優しい。

――虚勢を張っている。

神官や侍女は国王をこう形容した。自分には冗談としか思えない。ただ自分は国王のことはほとんど何も知らないに等しい。

国王を知る人達がそう評しているのなら、それが彼の持つ一面ないし本質なのか？

接触したことで生まれた国王への疑問――興味は、深く追求しようとすれば危険極まりないやっかいな代物だ。

娘はこの疑問を無視するか、国王にぶつけるかを悩んでなかなか眠れなかった。

翌朝、食堂で娘はいつもより力をこめて皿を洗っていた。ゆうべのもやもやが残っていて、余計に力が入る。

皿洗いのスピードも上がっていて、結局は早めの休憩に入ることになった。

厨房からもらった角砂糖を手に、こんな時には自然と動物に浸るに限ると馬場へと向かった。

厩舎で馬丁や従騎士から許可をもらい、いつも乗せてもらっている馬をブラッシングして、角砂糖を与える。馬も甘いものが好きと見えて食べている。その首に頭をよせて、娘は小声で愚痴をこぼした。

「面倒くさいことになってるなあ。大人しく牢に入っておけばよかった」

下手に国王の興味を引いたのはまずかった。牢の中で国王と接触せずにいれば、振り回されることはなかったはずだ。

ただ牢の中では、食べる気にも眠る気にもなれなかったのだから仕方ない。

もやもやは召喚時のことを思い出すと、だんだんとむかむかに変わる。

目蓋の腫れが引いたら出てこいだなんて、本当に国王は条件の合う人形としてしか召喚相手を捉えていないのだなと思う。

顔の造作なんて、皮を一枚めくれば同じようなものだ。

あの時の自分は駄目で、今ならいいと言われても嬉しくない。本当に人形を作って、国王のベッドにでも入れてやろうか。ちょっとだけ過激な考えが浮かぶ。

国王から言質をとった再召喚と返還については、神頼みよろしく神官次第で自分の手の及ぶところではない。

自分にできることは万一に備えて逃げる準備を整えることだけかと、娘は馬の首を撫でながら暗い気分になる。そのためにも……と馬を見上げ、その優しく濡れた瞳に微笑みかける。

「一人で乗れるようになるまでよろしくね」

馬はタイミングを合わせて小さくいなないた。娘はタイミングの

よさに少し笑った後で、団長の執務室に届ける弁当を作るために食堂へと戻っていった。

「お疲れ様です。昼食を届けにきました」

事務処理に追われていた団長と副団長は、下を向いていた顔を上げた。籠に昼食を入れた娘が扉を叩いた後に入ってくる。

「監督から、お二人が昼食を食べにはこれないだろうからと」

食堂の責任者はもう随分長く、あそこに勤めている。騎士団の仕事の流れも承知していて、一見豪快なのに細かな気配りをしてくれる。

今は事務仕事が佳境な時期と知っていて、配達してくれたのだろう。

正直、食べに出る時間さえ惜しかったので配達はありがたかった。来客用のテーブルの上の書類を整理してスペースを作り、そこに娘が籠から昼食を出していく。

「これは？」

油紙に包まれたものを見て、団長は首をかしげた。容器が見当たらない。

娘は同じものを二つ、手を拭くための濡らした布と一緒にテーブルに置き、部屋の隅にある茶器でお茶を淹れた。

「片手で食べられるようなものです。本当なら薄いパンに挟むんで

すが、こちらのは硬いので薄焼きの生地に挟んでいます」

味付けをした肉や野菜を薄焼きのものに挟んで、手で持てるようにくるんである。手も汚れずに口に運べる。

これなら仕事の合間に簡単に食べられると感心しながら、二人は次々に胃におさめていった。

「食器も使っていないので食堂に返す手間もいりません」

団長と副団長が食べるのを見守って、娘は頃合を見て部屋を出ようとした。

「ありがとう、美味しかった。……これはあなたのところの料理なのか？」

「はい。お口にあったのなら何よりです」

料理をほめられて嬉しかったのか、娘は笑ってお辞儀をして戻っていった。

早々に机について書類との格闘を始めた団長に、副団長が話しかける。

「栗毛の方の手作りとは貴重なものだな」

「栗毛？」

「今の髪色だ。馬の体色だと栗毛にあたる。本来は青毛なんだよな。見てみたいものだ」

馬を愛する副団長は表現も馬基準になる。娘の茶色に染めた髪の毛の色を栗毛とし、本来の黒を青毛と表現するその感性に慣れたとはいえ団長は苦笑してしまう。確かに黒に戻して一つにまとめたら、

黒色の馬である青毛の尻尾にそっくりだろう。

「ああ、綺麗だったぞ。つやつやしていて真っ直ぐで……」

牢から国王が抱え出た娘の髪の毛を思い出す。牢の頼りない明かりを反射して、つやめいていた。

国王が歩くたびにさらさらと揺れていた……。

我にかえって書類に目を通した団長に、副団長は団員の外出願いを引っ張り出して見せた。

「今度の休みの日に、彼女から城下への外出申請がされている。警護体制の最終確認を頼む」

団長は書類に目を走らせた。

「私も出るが、三人……四人つけるか。朝食は使用人棟の食堂で済ませた後で外出、昼食は城下で夕刻には戻る予定、か」

「人選は任せてくれ。では早いうちに事務仕事には片をつけなければならないな」

書類は今日中には仕上げられそうな量とはいえ、書記官でもないのに椅子に座りっぱなしでいるのは地味に辛い。

団長は少しでも時間を作って体を動かそうと、ペンを握り締めて署名を始めた。

夜、しっかりと国王からの呼び出しがあり、娘は嫌々ながら国王の部屋に出向いた。

さすがに下働きがこうも頻繁に国王の部屋に顔をだしては怪しま

れるので、途中で昨日もつかった部屋に寄って着替えてからという手はずが整えられていた。

昨日よりも簡素な服に着替えて、顔は見えないようにとベールのようなものまでかぶらせる念の入れようだ。

国王の居間のテーブルには、娘にはお茶が、国王には酒の用意がしてあった。

向かいに座って娘はお茶を一口飲む。いい茶葉の香りと味を、素直に楽しもうと思った。

「お前の住んでいたのはどんなところなのだ？」

グラスを口に運びながら国王が尋ねる。どんなところ――答えるのが難しい抽象的な質問なので、こちらから聞こうかと思った娘はあることに気付いた。国王と話をするとなぜか不快感がわいてくる。人間的に好ましくないのはそうだが、それだけではない何か。何だろう。

じっとカップを見つめて考え、一つの単語に思い至って国王に目を合わせた。

「一つ、よろしいでしょうか。お前、と呼ぶのをやめていただけませんか」

「理由は？」

「見下されているのが不愉快だからです。私があなたをお前、って呼んだら嫌でしょう？　自分がやられたり、言われて嫌なことはするべきではないと思います」

小さなことからこつこつと。まずは呼称から。

「ずっと聞き流していましたが、随分失礼な言い方ですよね」

「名も教えないのに、呼びかけまで変えろとはわがままだな」

「わがままではありません。人としての常識や誠意の話です」
「――それは余に常識がないと言っているのか？」
すうっと座の空気が冷えていくような感覚がして、娘は国王の様子を観察する。
ひるみそうになるのを、頑張れと励まして国王に立ち向かおうとする。
「私は異世界からの客人です。少なくともお前呼ばわりされる筋合いはありません。あなたは私の世界や私を下に見ているのでしょう？せめて思いやりをもって、呼びかけだけでも丁寧にしてください」
「思いやりだと。それが何になるのだ？」
「人間関係を円滑にします」
娘が言うと、国王は冷笑して酒のグラスを口にあて、一気に喉に流し込んだ。
「くだらん」
「思いやりが下らないなんて。あなたは――」
かわいそうと言いかけ、それは国王には石のつぶてになるかもしれないと飲み込んだ娘だったが、国王は察したようだ。
次の瞬間グラスがテーブルに音を立てて置かれ、国王がゆらりと立ち上がった。

14　傷

国王がゆっくりと近づくのに、娘は動けなかった。
娘から視線を外さずに、娘の側でテーブルに浅く腰を下ろした国王は、抑揚のない声で娘に問いただす。

「『お前』のところに身分の上下はあるのか？」
「基本的にはありません。人は平等とされています」

何がそんなにおかしいのか、国王は小さく笑った。
いまだにお前呼ばわりされて、娘が気に入らないのも意に介していない。

「それで初めから無礼なわけだ。先程のは余を哀れんだのか？　違うな、お前とてお前の価値観で図って余を蔑んでいる」
「それは……」
「余は国王だ。国王の思いやりは『慈悲』になる。軽く与えられるものではない。『謝罪』もしかり。
余が頭を下げることは、国がその相手に膝を付くのど同じになる。そこに付けこまれ、どんな無理難題を押し付けられるか分かったものではない。
身分の何たるかが分からないのなら、余の言葉も態度も理解できなくて当然か」

つい、と顔を娘に近づけるとその分後ろへと引き気味になるが、椅子の背に阻まれ娘はそれ以上は後ろには下がれない。
少し怯えを宿した目は、それでも国王からそれない。
それが国王には快くもあり、不快でもあった。

「首を刎ねても牢に入れても、眉をひそめる者はいても国王が命令すれば、皆従わざるをえない。――お前のところに戦はあるか？」

唐突に話題が変えられ、娘はとまどいながらも随分昔にはあったが今はないと答える。

「人が殺しあうことは？」

「皆無ではないですが、少なくとも私のまわりではありまでんでした」

「随分と平和な生ぬるいところなのだな。これが何か分かるか？」

あざけるような国王の言い方にむっときて、口を開きかけた娘は首元を緩めた国王が示したものに目を吸い寄せられた。

ぐいっと喉元をさらした国王の首に走る、真っ直ぐな線のようなもの。

「きず？」

「剣で受けたものだ。異腹の弟からな」

その傷は頚動脈ちかくにあり、もし位置や深さがずれでもしていれば致命的なように思えた。

娘は間近で見る暴力の痕跡にもだが、国王の『異腹の弟』の言葉に思考が止まる。

それは、実の弟から剣を受けたということだろうか。

まじまじと国王を見つめると、国王は口の端だけをゆがめている。

「父が亡くなった後のことだ。即位の準備に追われてばたばたしているところに、弟が訪ねてきた。

『自分を王位争いに担ぐ貴族がいるが、そのつもりはない。臣下に下り兄上にお仕えしたい』と。そう言って弟を推す貴族の一覧を出してきた。
余は弟の心根が嬉しかった。自ら争いごとから身を引き、余を立てようとしてくれたその姿勢がな」

国王は身をよじって、テーブルの上のグラスに酒を注いで、ぐいっと飲み干した。
喉を湿らせ、また話を続ける。
その先は楽しい話ではないだろうに、国王の笑みは張り付いたように消えない。

「爵位や領地についても悪いようにはしないと色々と今後の話をして、『兄弟として過ごす最後の夜だから』と言われて、何の疑いもなく酒を酌み交わした。
一応用心のために酒もグラスもこちらで用意していたのだが、弟はそれを運ぶ侍従を買収していたのだ。
飲んで、体が動かなくなった、痺れ薬だな。弟は、余を見て卑しい笑いを浮かべて、剣を抜いて切りかかってきた」

国王は娘が青ざめるのをどこか小気味よく感じながら、話続ける。
今でもあの情景はありありと思い出せる。痺れ薬の効果以上に弟からの殺意で、身動きのできなくなった体。
異腹とは言え血のつながりのある弟から、寄せられた憎悪と殺意。
奇妙に美しく光を反射した、剣。
まるで昨日のことのようだ。実際は何年も前のことなのに。

「余が助かったのは薬に耐性があったからと、剣先をかわすことができたからにすぎぬ。その頃近衛になったばかりの団長が駆け込ん

だ時には、余が弟を返り討ちにしていた。
『慈悲』は与えてやったぞ。生き恥を晒さず、拷問にもかけず一思いに、苦しませずに死なせてやったのだからな」

今度こそ娘は口を手で覆った。目だけが見開かれて国王を凝視する。
もう一杯酒を飲んで、国王は今度は静かにグラスをテーブルに置いた。

「弟の日記には余に対する呪詛のような怨嗟が書き連ねてあった。年も近く、母親の身分は国内では高貴な貴族の娘なのに、年長で王妃の子だからと王太子になった余が赦せなかったようだ。
余が弟を同腹の弟と隔てなく扱うのも、どうせ召喚の儀で王妃を迎えるからと余に想いを寄せる娘をすげなくあしらったのも悪かったらしい。その娘が弟の想い人だったからなど、下らぬ動機だ」

娘は国王が淡々と、時々は皮肉げに紡ぐ話をただ聞いているしかなかった。
喉になにかが張り付いたように、からからに乾いてくるのを止められない。

「分かるか、この剣は飾りではない。不敬も無礼も看過すれば舐められる。余は弱みは見せられない。
横に立つ王妃の外見でそしられるわけにもいかなかったから、あの時のお前は駄目だと思った。ただ、あれはゆきすぎであったとは思う。故に謝罪した。
『人としての思いやり』の前に、余は国を支えねばならない立場だ。非道にも非情にもなる。そのために権力も使う。
お前は次の者が召喚されるまでは、余の王妃候補だから、これでも思いやっているのだ。余はこのやり方しか知らない。それでここま

できたのだ」

すっと国王が手を伸ばして、娘の頬を覆うように触れる。
親指の腹で娘の目尻に触れながら国王は低く、呻くように。

「余が死んでも目蓋が腫れるほど泣いてくれる者などおらぬ」

「……弟さんや側近の方は、あなたを慕っているように見えます。そんなことはないのでは？」
「そうかもしれないが、そうではないかもしれない」

自嘲気味に呟く国王の手を頬から外しながら、娘は国王の首の傷に手を伸ばした。
なぜだか笑っているのに、国王が泣きそうに感じたせいだろうか。いい大人が泣くはずもない、それに俺様な国王ならなおさらだ。
そう思ったのに、娘の指先は心拍に合わせて動く頸動脈の側の傷に触れた。
瞬間国王が身じろぐが、そろりと這う娘の指をそのままに、目線を首に落とした。
首の傷はそこだけ少し色が変わって、つるりとした感触になっている。

「痛かったですか？」
「血はかなり出たな」

言いながら国王は首に触れていた娘の手をとった。
国王に手を握られた娘が焦って、手を抜こうと力を入れてもそれは外れなかった。
気付けば。かつてない近さで国王に手を取られている。娘はそれ

を意識した途端に、顔が赤くなるのを感じた。
娘は気付かなかった。国王の目配せで侍従がそろりと部屋を出て、扉をきちんと閉めたのに。夜の国王の私室に二人きりになっていることに。
国王は娘の手を眺めている。水仕事でいくらか荒れたかもしれないが、白く傷のない手だった。

「この手は血に汚れたことなどないのだろう？　平和なところでぬくぬく育ったお前のきれいごとは、余には響かぬ。それとも王妃として苦言を呈するか？　なら聞き入れる余地もあるが」

息をのんだ娘を見やり、握った娘の手を口元に持っていった国王は、わざと見せ付けるように指先に口をつけた。
頭が真っ白になった娘は短い悲鳴とともに立ち上がり、手を引いた。
椅子が派手な音をたてて、倒れる。
娘が身を引くのを赦さずに国王はぐい、と娘の手を引き寄せた。
バランスを崩してつんのめった娘は、国王に抱きとめられる形になった。

「い、やっ離してください！」

腕の中でじたばたする娘の耳に、国王は耳をよせた。

「ここに留まるならともかく、お前はここから去るのだろう。そんな者がずかずかと踏み込んでくるな」
「踏み込むつもりはありません。ただ、あなたは強がっているだけなんじゃ――」
「――まだ言うか」

国王は口では踏み込むなと言いつつ、娘を腕の中に拘束して手を握る。

この矛盾をどうしたものか。

15　無理です

「……おい、足をどけろ。踏みにじられると地味に痛い」
「だったら、その手を離してください。さっきから鳥肌がたって仕方がありません」

娘は国王の顎を押しやりながら、少しでも距離をとろうとしている。

助けを求めて扉横に立っているはずの侍従を探し、誰もいなくて扉も閉じられているのにようやく気付いた。

そんな状況は国王が指示したからに違いなく、のこのこと罠にはまりにいった愚かさを娘は悔やんだ。

「色気がないな。こんな時は黙って目を閉じて顔を上げるものだろうに」
「なくて結構。というかどさくさにまぎれて何をするんですか」

上半身は国王に抱きこまれていて、手も握られている。動かせる足先でさっきから国王の足を踏んで、ついでににじにじとしてはいる。

ヒールのある靴を履いておくべきだった。それを使えば足の甲へは結構なダメージなはずなのに。

娘は、他にどんな手段で国王にダメージを与えられるか必死で考えていた。

国王の方は娘を腕に捕らえたものの、この先をどうしようかと迷っていた。

確認するまでもなく娘は自分を嫌っている。

鳥肌が立つと言われて地味に傷ついている。

ここで自分のものにしてしまえば、別の娘を再召喚する必要は失

せるが、きっと娘からは恨まれるだろう。
娘に分からないようにため息を一つつくと、国王は腕の力を緩めた。

後ずさる娘にわざと一歩近づくと、国王に背中を見せない動きで娘は扉まで達した。

「不用意に関わろうとするからこうなるのだ」
「――ほんのちょとでも、あなたに同情したのが間違いでした。失礼します」
「明日も来い」
「っ誰が」
「来い、いいな」

娘に笑いかけると、さっきの名残かまだ顔の赤かった娘は、乱暴に扉を開けてそれを閉じた。
一人残された国王は、服の乱れを整えている最中に傷に触れた。
普段は意識することもないそれをなぞってから、国王は寝室へと消えた。

娘は足早に廊下を歩く。少しでも早く遠ざかりたかった。
今のはいったい何だったのだろう。着替えのための部屋に飛び込んで、国王の触れた服を乱暴に脱ぐ。下働きの服に変えてから、ごしごしと手を洗った。洗っている最中にもさっきの感触がよみがえってきて、慌てて頭を振る。
ぞわぞわとした感覚は消えてはくれず、腕には鳥肌が残っている。

「無理だ」

断定口調で独り言をいいながら、娘はしばらく手を洗った。

翌日も朝は早い。決められた仕事を済ませた娘は、厨房の裏手で外においてある椅子に座り込んで、ぼんやりと緑を見ていた。
ここは緑が多く、目に優しいのがいい。鳥が飛んできて鳴いたりするのも聞ける。
人間は面倒くさいのに、自然はいいなあとらちもないことを考えながら、娘は手にしたカップを口に運んだ。
それを洗い場で洗い、拭きあげていると監督から声をかけられた。

「団長のところにお客さんが来たって。お茶を持っていってくれるかい？」

手もすいていたので承諾し、お茶とお茶菓子を盆に載せて本部の団長室へと向かった。扉の脇には見習いの従騎士がいて、娘を認めると扉を叩いた後に開けてくれた。

「失礼いたします。お茶をお持ちしました」
「お待ちしておりました」

声に顔を上げると、王弟がそこにいた。
娘も座るように促され、とりあえず王弟と団長、そして自分用のお茶を淹れる。

「昨夜、兄上と二人きりになられたとか」

ひとしきりお茶を楽しんだ王弟が、さりげなく切り出した。
娘のカップを持つ手にきゅっと力が入ったのを見てとり、次いでその表情には恋する乙女のものなど全くないのも確認した。

「不本意ながら」

娘の返事も取り付く島がない。どうやら甘いやりとりはなかったようだ。

それどころか、態度が硬化しているように見える。

団長も何も言わないが、何かは察しているらしい。こちらは黙って王弟と娘の様子を窺っている。

「差し支えなければ、どんなやり取りをされたのか教えていただきたいのですが」

国王が侍従すら締め出したことは、非常に珍しいといえる。

王妃にと召喚した娘といたのであれば、なんらかの進展を期待した次第だが、どうもはかばかしくない。

兄である国王は一緒にとった朝食の席では、足が痛いとしか言わなかった。

それなら、と娘の方から事態を把握すべくこうして出向いたのだが、兄と二人が不本意と言い切られるあたり穏当ではない時間だったのか。

娘はカップをテーブルに置いて、王弟と団長を見た。

「話としては大したことは。名前の呼び方から、私が身分を知らないのでそれを含めて価値観が違うという話になりました。そして、首の傷のことを教えてくれました」

首の傷、で王弟と団長はぴくりと反応した。あれは国王にとっては体だけではなく、心にも傷を作った出来事だ。

それを明かすことを極端に避けている国王が、娘に話したのは二

人にとっても意外だった。
だが、いわば弱みを見せられたはずの娘がどうしてこうも表情が硬いのだろう。
話の内容と娘の態度が繋がらない。腑に落ちない王弟がもの問いたげに見つめる中、娘は何か吹っ切れたような顔を見せた。

「陛下のおっしゃるとおりです。私と陛下は価値観が違う。そして陛下はそれを擦り合わせるおつもりはない。
王妃になるつもりもないのに、陛下の態度に言及するのは僭越でした。
私は陛下に同情する権利も、態度を考えたらと忠告する権利も自ら放棄しているわけですから、おこがましかったんです。今後は踏み込んだことはしません」

すがすがしく、もう国王には関わらないと宣言されて、王弟は目を丸くした。

「そうです、あれくらい自分の価値観だけを押し付けるような人でないと、未練なくすっきり帰れませんよね」
「え、いや、あの……」
「裏切られたのはお気の毒とは思いますが、だからと言って暴言吐いてもいいんだと赦されるわけはないし、あのやり方で来たのなら今後も踏襲してください。傍から見ていると、いじけた子供が大きくなって性質の悪いことに権力を握ったように思えます。
すみません、私には無理です。王妃になることも、あの陛下の性格をなんとかしようとするのも。もう次の人にお任せします。
私には関係ありません。陛下があのまま突き進んで、どれだけ敵を作ろうが自業自得です」

兄を見捨てる発言をされて、王弟は内心呻く思いだった。兄上は

何をされたのか。
ここまで嫌われては、もうこの娘を王妃に迎えるのは無理だろう。
足が痛いなんて、のんきなことを言っている場合ではないのでは。
王弟の葛藤をよそに、娘は団長に向き直った。

「すみませんが、接近戦で使えるような護身術ってありますか？
なるべくダメージの大きそうなものがいいんですが」

団長も面食らっている。

「あ、いや、体術のみか武器を使うかで変わってくるが……」
「ええと、体術でしょうか。武器は慣れていないので、いざという時使えそうにありませんので」

何故この状況で護身術。兄上、あなたは本当に何を……。王弟の気力は萎えていく。
団長は沈黙を守ることでその場をやり過ごす。
娘はにこりと笑って駄目押しをした。

「あんな勝手な人は知りません」

王弟がいくぶんか生気の抜けた状態で、城内に戻ると娘はぽつりと呟いた。

「まるでヤマアラシのようです」

聞きとがめた団長に、ちょっと考えてから娘が補足した。

「ヤマアラシのジレンマという言葉があるんです。寒いので温めあおうとするヤマアラシ同士が、そのお互いの針が刺さってしまうので近づけないという内容なんですが。
私は陛下と温めあおうとする気は毛頭ありませんが、近づくとどうしても傷つけあうようです。だから、距離を保って踏み込まないのがお互いのためだと痛感しました」

それは裏返せば昨日、傷つけあうほど近くになったということになる。

締め切った部屋で一体何があったのか。

娘を怒らせる、感情を揺さぶる何があったのか。

それこそ知る立場にも、知る権利もない団長だったが、娘との接触の機会は逃すつもりはなかった。

「では体術の訓練をいたしましょう。午前の休憩時間に、乗馬と交代で行うということでいかがでしょうか」
「ありがとうございます。助かります」
「接近戦とは、具体的にどんな状況を想定していらっしゃいますか？」

言いよどむ娘に近づいて、手をとって立たせる。

「こんな状況ですか？」

団長は後ろから娘を抱きすくめた。ぎゅっと力を込めて、すぐに緩める。しかし娘が振りほどけない程度の力を入れていた。

「うわぁっ、そ、そうです。こんな感じです」
「ふむ。ただ男の力を振りほどくのは大変ですから、小さくても何

か武器を仕込んでおいたほうが良いかもしれませんね」
「そ、そうなんですか。じゃあ、それも。あの、団長様……」
「ああ、失礼」

何でもないようにゆるりと拘束を解かれて、娘がほっとした様子を見せた。
隙だらけのその姿は武人として、男としてはいくらでも付け入ることができる。
危なかしくて仕方がない。これは護身術をきちんと教える必要がある。

「では私と、女性の従騎士がいますので、その者とでお教えするということでいかがですか？」
「はい、お願いします。……そろそろ戻ります、昼食の準備の時間ですので」

そそくさと盆を持って部屋を出る娘の耳は赤い。
それを見た団長にふと笑みが浮かんだが、すぐにそれを消して真面目な顔になる。
国王と娘が結ばれなかったら。事態は流動的になる。政治的にも重要な局面になるだろう。

「殿下と対応を詰めていた方がよいだろうな」

団長の懸念を聞く者はいなかった。

16　謝罪と陰謀

夕方部屋に戻ると、侍女が顔を出した。団長経由で早めに会いたいと希望していたので、わざわざ来てくれたようだ。
侍女は娘よりも良い部屋を一人で使っているので、そこで夕食をとりながらおしゃべりに興じる。

「殿下にすごいことをおっしゃったんですって？　どう陛下に申し上げようかと頭を抱えていらっしゃいましたよ」
「さっきのもそうですけど、今からも何を言っても不敬になってしまいますが。
聞いてもらえますか？」

娘に侍女は柔らかく頷く。
姉のような侍女に、娘は素直な心境を伝える。

「何故陛下はあんな言い方しかできないのか不思議だったんです。虚勢を張っているとのことでしたけど、高圧的で話を聞かなくてそのくせ構いたがる、構われたがる。弟さんのことで殻にこもってしまったんでしょうか。
辛かったとは思います。でもそれは陛下だけじゃなくて、他にも辛い思いをしてもちゃんと前を向いている人は沢山いるはずなんです」

綺麗な仕草で料理を切り分けながら、侍女が相槌をうって話し始める。
厨房で監督から料理も教わっているので、皿の盛り付けや料理の内容に目を奪われながらも、娘は侍女の話に耳を傾ける。

「……そうね、陛下は大きな子供のようなところがあります。弟君

の時はしばらく病床にあったのに、起きられるようになるなり弟君派の貴族達を次々に処罰なさったの。
人が変わったようだった。それまで争うのが嫌いな方だったのに」

侍女がその頃のことを思い出しているのか、少し遠くを見る目つきになった。
団長に似た茶色の髪の毛は団長よりも細めで、明かりに柔らかく輝いている。優しい茶色の瞳は今はすこし翳り気味だ。

「以来、誰に対しても一線を画して振舞うようになられたんです」

本当にヤマアラシだったのか。毛を逆立てた子猫、にしては性質が悪いが。先制攻撃とばかりに強い言動を繰り返したんだろうか。

「陛下は価値観が違うと。確かにそうだけど、陛下はそれを理解しあおうとしません。
どうしても譲れないところは尊重したり、譲歩するのが大事だと思うんですが、身分制度と言われると取っ掛かりすらありません」

娘は国王には同情した。身内をなくす思いは辛い、しかも裏切られたなら尚更だろう。
それでも一方的に国王側の価値観を説かれ、更に自分には理解できるはずもないと切り捨てられた時に醒めてしまった。
会話はできるのに、意味が通じないような状態に『駄目だ』と思った。
国王の性格が年単位で形成されたのなら、それを解いていくのも長い時間がかかる。しかも大人な分、難しさが増す。
そんなに長い時間側にいてもいいとは思えなかった。

国王に対して、そこまで労力を割く情がなかった。

孤独で意地っ張りというところで、国王とは共通点があったのだと思う。それを癒しあえるのなら、相性も良かったのかもしれない。

でもそう思う前に見限ってしまった。国王の人生を背負うのを諦めてしまった。

国王の価値観を認めようとしない点では、五十歩百歩だと思う。それでも伴侶にするつもりの人間に死んでも構わないとの態度を取り、内面に踏み込ませない相手に寄り添う気にはなれない。

国王の伴侶として召喚されたのに、その義務を果たさないことを再認識してしまった。

「ごめんなさい。陛下の庇護の下にあるのは間違いないのに」

帰還することを決め、それでも優しく接してくれた侍女に頭を下げる。

侍女は少し疲れたような表情で、そっと娘の下げた頭を元に戻す。

「いいのよ。元々召喚していきなり結婚しろっていう方が乱暴な話なんですから。全く厄介な儀式ですよね。あなたは悪くないのよ。あなたは……初めから帰るって決めていたのだし。何より辛い状況のあなたを無理に召喚したのはこちらなのだから。そして、ごめんなさい。

陛下がああなる前に、私達がきちんと諭しているべきだったのに」

頭をなでられ娘はいつの間にかうつむいていた。

耳飾りがなければ言葉も通じない異世界に、もろもろやらなければならないことを残したまま召喚されてしまった。

優しい人が多く、居心地は国王のことを考えなければとてもいい。

それでも帰りたい思いで胸が締め付けられる。

それはどれだけこちらで優しくされても揺るがない思いだった。

侍女か王弟が何か話したのか。『必ず来い』と命令していたにも関わらず、国王からの呼び出しはなかった。

翌日は乗馬のために娘は馬場に来ていた。副団長の教え方がいいのか、娘の角砂糖の差し入れがいいのか、馬との相性は悪くなく娘は順調に上達している。今日は広い方の馬場で常歩と速歩を交互に繰り返していた。

手綱を持ち、速歩でいた時に副団長も馬場に馬を乗り入れ、横で一緒に走ってくれた。

「もう少し速度を上げてもいいぞ」

副団長の言葉に手綱を持つ手に力を入れた途端、ぶつりと音がして手綱が切れた。

瞬間固まる娘がバランスを崩しかけた時、副団長がさらうように娘を引き寄せた。娘の馬が駆け出し、それに巻き込まれないように副団長が馬首をめぐらせて馬を停止させる。

娘は副団長にしがみつき、かろうじて馬上に留まっていた。

「怪我はないか」

「だい、じょうぶです」

落馬の危機に青ざめながらも、娘は返事をした。副団長は娘をおろして柵の外に座らせ、自身は馬に乗って駆け去ろうとした娘の馬をつかまえにいった。程なく娘の乗っていた馬の、切れた手綱を持ちながら戻ってくる。

馬丁に自身の馬を預け、娘を自分をはさんで馬とは反対側になる

ように歩かせて、副団長は厩舎に戻った。馬の手綱を外し、切れたところを検分する。

「……手綱が古くなって、切れたのだろう」

副団長の言葉を疑わずに、娘は時間になったからと食堂に戻る。副団長も切れた手綱を持って、娘を送った。

食堂で娘と別れた後で、副団長は本部内の団長室を訪れた。机で書類と格闘していた団長に、無言で手綱を放り投げる。

「これは……」

「革が古くなって切れたように見せてはいるが、わざと切れ味の悪い刃物で切れ目を入れてある。しかも染料をすり込んで偽装も施してある」

副団長は妙に座った眼差しで手綱の分析をする。馬が好きな副団長にとって、馬を利用した謀など赦せるものではなかった。

団長もその工作の意味するところに、眉間に皺を寄せている。

「他の手綱は？」

「これだけだ。あの馬にはこの手綱をするのは、周知のことだからな」

最近ではあの馬には娘しか乗っていない。であれば、これは娘を狙ったということになる。

「あの方は無事か？」

「ああ、たまたま横を走っていたからとっさに抱きとめたが。そうでなければ落馬、最悪馬の下敷きだ」

「性質が悪いな」

「悪いどころではない。馬を利用するなど万死に値する」

手綱をぎりぎりと引っ張る副団長に、団長はため息をつく。

これが乗馬鞭であれば、間違いなく鞭は真っ二つに折れているはずだ。

馬のことに関して副団長を怒らせた者には明日はないのは、騎士団員なら皆知っている。

「落ち着け。誰が何の目的であの方を害そうとしたのか、調査せねばならん」

「手綱に関しては誰でも可能としか言えん。馬丁は年寄りが一人。食事や用足しで厩舎を離れた時に持ち去って細工を施し、戻すのは簡単だ」

娘が特定の馬に乗るのは、馬場を監視すればすぐに分かること。

容疑者は絞れないか。

「誰、は難しいとしても何故、はどうだ」

「あの方の正体を知っているか知らないかで、動機も容疑者も変わってくるぞ」

副団長の指摘に、団長は紙に箇条書きで要点を記す。

知っている場合。伝説の娘が邪魔、容疑者は王位継承権を持つ者か後見たりえる有力貴族になる。

知らない場合。娘が国王の『寵愛』を受けていると誤解する者。貴族の娘やそれに連なる使用人など。

「騎士団員が護衛を始めてからも結構な時間が経過している。あの方が特別扱いされているのは、目端の利かぬものでも悟っても仕方がない」

団長の言葉に副団長は肩をすくめる。洒脱な印象の副団長には、そんな仕草が様になる。

「いっそ当初の思惑通り、素直に王妃になってくだされば隠れて護衛する必要もなく、堂々と近衛が側にいられるのにな」

「それを望まれず、陛下も自由にさせていらっしゃるのだ。言っても仕方のないことだろう」

「まあそうなんだが。この件はどこまで報告する？」

内容と報告する人物はどうするのだ、と副団長は問いかける。

団長は少しの間考えた。

茶色の目は剣呑な光をたたえ、眉間の皺が一層顔に迫力を増している。

ややあって、副団長に答える。

「陛下だけにしよう。警護の団員には詳細は伝えずに、より一層の注意を払う旨を徹底させろ」

「了解」

手綱を団長に預けて副団長は厩舎へと向かった。細工が手綱だけとは限らない。

徹底的に馬具と、馬に薬が盛られていないかも調査するつもりだった。

「馬に蹴られるのは、人の恋路を邪魔する奴だけでいいのに。栗毛の方を狙うとは……」

茶色の髪の毛に黒い瞳。栗毛の馬の配色そのままの娘を思い出し、副団長は足早に厩舎を目指した。

団長の方も机の上で手綱を睨み、肘をおいて手を組んだ上に顎を乗せている。

誰が一体、こんなことを。

犯人を見つけたら容赦はしないだろう。その眼差しは物語る。

「あと何日かすれば、城下に外出されるというのに。外出自体を取りやめていただくか、警護体制を強化しなければ」

声に苦いものを滲ませ、苦労人の団長は陛下に奏上すべく王城に戻っていった。

17　外出にむけて

国王は娘からという書類を食い入るように見つめていた。
王弟はその前で神妙な顔をしている。直接顔を見てでは余計なことまで言いかねないし、文字の方が冷静に捉えてもらえそうだからと、娘から託された書類だ。

国王としては娘を呼び出そうと思っていたのに、弟に諫められこの数日は弟を仲介としてやりとりをしている。
馬場の『事故』の報告を受け、顔を見て無事を確認したいのはやまやまなれど、団長から釘を刺されていた。
目的も首謀者も不明な現状で、もし背景が王位継承に関わるものであれば弟ですら容疑者に入る。今の時点で国王と娘の接触は減らした方が賢明だとの判断から、娘を呼び出さずにいる。
もっとも娘の方からも会いたくないと言われているらしいので、国王が呼び出さないのは娘にとってはありがたいばかりらしい。
それを聞かされて内心落胆しているところに、もたらされた娘からの書類。

「つまり、余のやったことが全て『暴力』にあたると」
「暴言、他人を人質に脅す行為、自由を奪う発言、あと威圧したり相手を見下すのもそれに当たるとのことで。
身分の有無を差し引いても、なかなかに『個人の自由を守ること』に厳しいところのようですね」

そもそも個人の自由などの権利意識を認識するのは難しいだろう、と娘は事前に王弟に話していた。

『それでも、私の次に召喚される人のためにも肝に銘じていてほし

いんです』

ご丁寧にも書類の一番上は『再召喚の心得』と書かれていて、混乱しているだろう『娘さん』に対して優しく接するだの、人さらいの自覚を持って丁寧に接するだの、なにより嫌がりそうなことは絶対にしないことと強調されている。

読めば読むほど、自分の対応が娘の逆鱗に触れ続けたことを痛感させられる。

最後まで読んで、国王は低く呻いて内心頭を抱えた。

「父上や歴代の国王は召喚をどうやって乗り切ったんだ？　尋ねたときにも言葉を濁して教えてもらってない。神官の記録はあるはずなんだが、禁じられているとのことで余にも見せてくれない」

「きっと大なり小なり騒動になったということでしょう」

兄上ほどではないにしろ、と王弟は胸の中だけでつぶやいた。

それにしても、と王弟は思う。すがすがしく娘は兄を見捨てたが、再召喚される娘さんは気の毒であるし、一宿一飯の恩義はあるからと兄に対して今後の注意点を書き連ねてくれた。

『これを見て怒るのなら、どうしようもありません。でも何とかしようとする姿勢があるのなら、協力します』

兄が変わってくれるのなら、芯から慕われる国王になってくれるのならと王弟も祈るような気になっている。

そして惜しい。あの娘が兄と結ばれてくれたなら、きっと兄もこの国も良いほうに変われるだろうに。

「では兄上、まずはどこから始めましょうか？」

再召喚までの日数はあまりないが、少しでも兄が変わり娘に評価してもらえれば。
兄と弟の短期決戦が始まろうとしていた。

娘の方は夜、国王の呼び出しがなくなって平和な日々を取り戻していた。
使用人棟の食堂で友人と夕食を食べ、互いの部屋を行き来してたわいないおしゃべりに興じる。王城内外の噂話を教えてもらって、感心したり笑ったりと楽しい時間を過ごしていた。
寝る時間になり、暗い廊下から自室に戻ってベッドにもぐりこむ。
そして朝から仕事をする。
それは束の間の平穏だったのかもしれない。

乗馬の訓練は副団長がなぜか横乗りから、ズボンを穿いての乗り方の指導をしてくれるようになった。

「万一の時に落馬の危険が減るから」

その理由で、熱心に教えてくれる。脚と踵の使い方で馬に動きを命令する。体をひねって乗る横乗りよりも確かにこちらの方が有意義とばかりに、娘も副団長から教えてもらうのを楽しんだ。
前よりも速度を上げて馬を走らせることもできるようになった。
また、馬具の装着の仕方や手入れも教えてくれて、あの時のように手綱が切れるようなこともなくなっている。

団長からは女性の従騎士とともに、護身術を教わっていた。前から、後ろから、手が自由になっている場合とそうではない場合など

色々な場面を想定して、体の使い方を教えてもらっている。

「大事なのはまずは逃げることだ。逃げながら武器になるものを手に取ること。いきがって立ち向かおうとしてはいけない」

団長の真剣な表情と言葉に、娘も神妙に頷く。従騎士と団長が見本を示してくれて、その後で体の動かし方を教わりながら実践していく。

従騎士が暴漢役になって何度か練習し、団長が仕上げの指導をしてくれる。

「躊躇しない。体の固いところで相手の柔らかいところを攻撃する。拘束を緩めるのが目的だから、ためらわずに」

手加減はしていると思うのに、手首を掴まれると痛いほどだ。わざと懐に飛び込んで頭突きをしたり、肘打ちをしたり。手首のかえしで拘束を解いたりと娘は必死に団長にくらいつく。

国王との接触はないので護身術の必要性は下がってはいるのだが、団長からは知っていた方がいいと時間を割いてもらっている。

団長の教え方は厳しい。最初のうちは筋肉痛になったり、掴まれた手首が痣になったりもした。

それでも甘やかさずに指導してくれるのは、きちんと対応してもらえていることなので嬉しい。素直に頑張ろうと思えて、娘は声を出しながら団長の腕を振りほどこうと力を入れる。

「よし、これまで」

団長がそう言って訓練が終わる瞬間は、いつも見物だ。それまで堂々と顔色一つ変えずに、厳しい表情で指導してくれた団長が一気に距離をとって娘から離れていく。汗が噴出して慌てたようにそれ

を拭うのを、娘は練習中は汗のコントロールも出来るのかと尊敬している。

後で団長室にお茶やお湯を持っていくと、平身低頭でさっきは痛くなかったかだの、変な抱きつき方をして申し訳ないだの質問されたり謝罪されたりする。

「きちんと教えてもらっているので感謝しています。そんなに謝らないで下さい」

娘は訓練前後の団長のギャップを、年上なのに可愛いとさえ思っていた。

いくぶんほっとした表情を見せた後で、団長は娘に尋ねた。

「城下への外出の件ですが、見送るわけにはいきませんか？」

「どうしてですか？」

「城下は何かと物騒ですし、一人で歩き回るのは危険です」

娘はお盆を抱えて、困った様子だったのから表情を変えた。

「大丈夫です。友人――洗濯場の下働きをしている人と一緒に行く約束をしているんです。彼女はすごくお店や道に詳しいって自分で言っていましたから、迷ったりすることはないと思います。人の多いところを見て回るつもりなんですが、それでも危ないんでしょうか？」

娘の目は行きたいと懇願している。駄目ですか？　と幻聴が聞こえた気がして、団長はうっとつまってしまった。

「いや、あの……」

「帰る前にこちらの様子を見てみたかったんです」

ぽつりと寂しそうに言われて、団長は白旗をあげた。くれぐれも細い路地には入らないこと、誰かから話しかけられても相手をしないことなどしつこい程に念を押されて、娘は団長の署名をした外出許可証を出してもらえた。

大事そうにそれを持って、娘は団長に礼を言う。

「ありがとうございます！　明るいうちに戻ってきますから」

きらきらした目で見つめられて、団長は心の中では両手もあげた。精鋭の騎士達を目立たないように配置しなければ。

段取りを考えながら、娘の帰る前にという言葉が妙に重く感じられた。

数ヶ月先と思っていた再召喚も、確実に近づいているのだ。

しばらくすれば、娘はいなくなる。その事実を再認識して、団長は気分が重くなった。

もうしばらく守りきれば、団長と騎士団は変則的な役目を終える。娘は元の世界に帰り、新たに召喚されてくる王妃候補の通常の護衛任務が始まる。

ただそれだけのことだ。通常業務に加えて課せられた、気を使う任務が終わるのだ。

重荷を下ろして安堵するはずなのに。団長には娘の残り時間がひどく惜しく感じられた。

それでも外出日の前日、団長室で娘に革の袋を手渡そうとした団長の顔は穏やかだった。

「食堂の給料を渡そうと思っていたのだが、……陛下からです」

娘は袋を受け取りかけて、その手を止めて団長の顔を見た。

「あなたの外出の件をお聞きになって、これを使うようにと私に託されました。あと王家の紋の入った指輪とカードが一緒です」

カードには、このカードを持参した者に最大限の便宜を図って欲しいと書かれていて、国王の署名がしてあった。

「陛下からのご伝言です。城下を楽しんで欲しい、よい思い出を作って欲しいとのことでした」

国王の『思いやり』を娘は団長から手渡された。

しばらく品物をじっと見て、娘は団長にお辞儀をした。

「ありがとうございます。陛下の、お心遣いに感謝します」

「陛下にお伝えいたします」

頷きながら団長は品物を自分に託した国王を思い出す。

前から準備していたのだろう。机の引き出しにまとめていたのを、団長に渡したのだ。

「指輪とカードは実際に使うとは思えないが、お守り代わりには良いだろう。護衛についてはしっかり頼む。

城下の様子を見て、少しでもこの国に良い印象を持ってくれればいいのだが」

そこには今までとは違う国王がいた。

娘の及ぼした影響が、国王を変えつつある。それは臣下としては

とても良いことに思えた。

「明日を、楽しんでください」

娘に言いながら、団長も明日に思いを馳せた。

18　思わぬ同行者と自己嫌悪

翌日、娘は友人と連れ立って城門を通過する。いたのは顔見知りの衛士で、団長の外出許可証もありすんなり通してくれた。

王城の周囲は貴族の区画になっている。それを抜けると、いわゆる王都の城下ということのようだ。

いきなり王城に召喚されてしまって外を知らない娘は、きょろきょろと周囲を観察する。王城の門から真っ直ぐに伸びる広い道路を中心に、交差する道路が作られている。割と計画的に作られたようだとの印象を持つ。

石畳の道路を馬車や馬も行きかうが、圧倒的に徒歩が多い。移動するなら、一人で馬に乗ってでは目立って仕方ないだろう。

友人に聞くとまずは歩き、遠出をする時には身分や経済力のある人なら自前の馬車、多少の小金を持っている人や徒歩が辛い人は、乗り合い馬車で各地の大きな都市へ移動すると教えてくれた。

乗合馬車。その言葉を刻み込む。

二人でてくてく歩いて、広場のようなところに出た。ここには人が多く集まり道の両脇には店が軒を連ね、屋台や市場のようなものも見える。広場のシンボルのような彫像の周囲は階段が設けてあって、人が座って何か食べたり話をしたり待ち合わせもしているようだ。

こんな感じは元のところと変わらないな、と思いながら娘も腰を下ろす。

と、友人が申し訳なさそうな口ぶりで話しかけてきた。

「ごめんなさい、私、人と会う約束をしているの。この周りなら時間が潰せるし危なくないから、一人でも大丈夫だと思うの。本当にごめん、帰ったら埋め合わせをするから」

え？　と首をかしげているうちに、待ち合わせの相手だろう男性が現れて友人は行ってしまった。しばし呆然。土地勘のない場所で放り出されてしまった。

「あらら。まあ、一人の方が動きやすいからいいけど」

広場を中心に方角を確認する。少し首をめぐらせれば小高い場所にある王城も見える。迷子にはならないだろう。

あっさりと娘は立ち上がり、ぶらぶらと市場の方に移動を始めた。市場は賑やかで、色々な物が売られている。呼び込みの元気の良い声、子供がはしゃぐ様子など喧騒の中を売られている品々を興味深く眺めながら娘は歩く。

途中喉が渇いてきて、果物を売っているところで足を止める。売り子が明るそうな女性だったからかもしれない。

「簡単に食べられる果物はどれですか？」

「そうだねえ、これなんかどうだい。手で皮がむけて汚れないよ」

二個買おうとして、革袋から金貨を出した。国王からもらった金貨は結構な枚数で重かったので、十枚だけ取り出して残りは部屋に置いてきた。どうせ、騎士が見張っているのだから安全だろうと思っている。

それを渡すと売り子は困った顔になった。

「これは金額が大きすぎて、おつりが渡せないよ。あそこに両替商があるから、細かいのに替えてきておくれ」

教えてもらった店舗に向かい扉を開ける。扉につけてある鈴の音に反応して、店の者らしい男性が顔を上げた。

「両替をお願いします」

そう言って金貨を五枚出した娘を胡散臭げに両替商は見やる。金貨一枚は庶民であれば家族で半月は楽に暮らせる。貴族の令嬢ならともかく、供もいないような娘が無造作に取り出すようなものではない。

「娘さん、これはどうやって手に入れたんだい？　あんたみたいな若い娘が持っているにしてはおかしな金額だな。後ろ暗いことがあるなら巡回の騎士様を呼ばなくちゃならない。それとも、それも承知ってことなら両替の手数料を上乗せしてもらおうか」

金貨を手にしたのも、更に言えばお金を手にしたのも初めてでこちらの貨幣価値がよく分かっていない娘は、両替商の言っている意味を考えて表情をかたくした。

足元を見られている。まっとうに手にいれた金ではないだろうから、手数料の名目で必要以上によこせと脅されているのだ。

舐められた悔しさと、これが世間一般の見方なのかとの理解が娘のうちにある。

「別のところで両替してもらいます」

金貨を袋に戻してきびすをかえそうとした娘を、両替商は境になっていたカウンターのようなところから出てきて足止めしようとした。

「逃げるのかい？　ますます怪しいな。騎士様を呼ばれたら困るのはあんたじゃないのか？　黙っててやるから金貨は一枚よこしな」

「触らないで下さい」

団長に指導された護身術を使いそうになりながら、娘はどうすれば穏便にすむか考えていた。騒ぎを起こすのは不本意だ。ぶちのめすのはやりすぎになるから、なんとかして逃げないと。

そうしているうちに、背後で人が入ってきたのだろう。扉の鈴が音をたて、かぶさるように低い声が聞こえた。

「どうした？　まだかかっているのか？」

聞き覚えのある声に振り返ると、そこにいたのは団長だった。いつもの団長服は着ていない。落ち着いた上質な服はお忍びの貴族といった風情だが、服の上からも分かる鍛え上げた体と、腰に下げてある装飾の少ない剣で妙な迫力をかもし出している。

団長の目は掴まれた手首をひねりながら外した娘の手元から、いやにゆっくりと両替商に移る。

穴の開くほどに見つめられた両替商は半歩後ずさった。

「私の金貨の両替を頼んだのだが、なにか不都合でも？」

「いえ、別に。不都合などございません」

娘には高圧的だった両替商がたちまち萎縮して、カウンターの向こうに逃げていく。

つ、と娘の側に寄ってきた団長は娘の視線に頷きを一つ返した。

「では、両替をしてもらおうか」

団長に促されて娘は金貨を取り出した。両替商はいささか震えている手でそれをカウンターの上に置き、手箱の中から銀貨と銅貨をとりだした。団長は適当に銀貨と銅貨の枚数を口にして、金額を確かめるとたちまち枚数の増えた貨幣を娘の袋に入れさせた。

「邪魔したな。……そう言えば両替の手数料以上の金を取る悪質な両替商の噂を聞いていたのだが、ここはそうではないようだ。気に入ったから、また立ち寄らせてもらおうか」
「っあ、ありがとう、ございます。今後も、……どうぞよしなに……」

冷や汗をかく両替商を一瞥して、団長は娘とともに店を後にした。
少し歩いて人波が途切れたところで、小声の会話になった。

「出すぎた真似をして申し訳ない」
「いえ、助かりました。あの、私に付いていらしたんですか？」

『団長』と言いかけて娘はのみこんだ。誰が聞いているか分かったものではないので、うかつに身分を明かす単語は出さないほうがいいと判断した。
団長も承知していて、二人なのに敬語は使わない。

「本来なら気付かれないように様子を見守るつもりだったのだが、一人になっているし外から窺うと揉めていた様なので……」

尾行はついていると思っていたが団長自らとまでは思っていなかった娘は、困り顔の団長を見上げ口の端に笑みを浮かべた。

「このあたりなら危険はないと友人は言っていたんですが、不案内な場所で心細かったのでお嫌でなければご一緒していただけませんか？」
「そうしてもらえると、こちらも助かる。どうも隠密でというのは性に合わない」

侍女の外出着というコンセプトで選んでもらった服を着ているので、団長と連れ立ったら貴族の若様か旦那様とその侍女に見えるだろう。

奇異な取り合わせには見られないだろうから、一緒の方が護衛もしてもらいやすい。

こうして二人は一緒に城下の散策を始めることになった。

さっきの果物の屋台に戻り、今度は無事に果物を買えた。それを広場の彫像のところで二人で食べる。

なんだかおかしくて、娘は笑いそうになる。真面目な団長が私服で階段に座っているそのギャップがおかしい。

「どこを回ろうか」

「服と雑貨と、あとお菓子屋に行きたいです」

字面だけならいかにも女の子が喜びそうな場所ばかりだ。自分だけでは申し訳ないので、団長にも行きたい場所を尋ねてみる。

「馴染みの武器屋で修理したものを回収したいのだが」

女性を連れて行くのには相応しくないと思っているらしく、頭をかいている団長はいつもと違って見える。武器屋なら行ってみたい。

「私でも使えそうなものはあるでしょうか？」

「……そうか。何か見繕うとしよう」

武器屋は近くにあるとのことで、まずそちらを目指した。

表通りから中に入ると道も狭まり歩いている人も違ってくる。なるほど、路地には入らないようにと注意されるわけだ。

今歩いている場所は武器や、その類を扱う店が固まっているらし

くいかにも武人だといわんばかりの男性が目につく。
娘にちらりと視線をよこす者もいたが、側を歩く団長を見るとふいとそれを外す。
団長は周囲に気を配りながら、娘とともに馴染みの武器屋の扉をくぐった。

「いらっしゃい、おや、お久しぶりですね」
「息災か？　例のものを取りに来た」
「はいはい、いい具合に仕上がっていますよ。少しお待ちください」

顔なじみらしい店主は店の奥へと消えた。ぐるりと見回すと色んな形状の武器が飾ってある。銃刀法違反だと思いながら娘が眺める横で、団長は武器を適当に触って吟味している。
娘の日常だった世界とは違うのだと、改めて思う。そして胸の奥底に沈めてある黒い思いが湧きあがる。思考の闇に沈みかけていた娘は、店主が戻ってきたことで我にかえった。

「どうですか？　バランスも良くして一層切れ味も鋭くしましたよ」

見るからに重そうな剣を持って、バランスを確かめた団長は鞘から剣を引き抜いた。鋼の輝きがひどく冷たく、生々しく感じられる。
ひゅっと空気を切り裂いて感触を味わった団長が、静かに剣を戻した。

「いいだろう、相変わらずの腕前だな」
「そうでなければ騎士団御用達とは言えません」
「これに関しては文句はない。あと、この人に扱えるような物はあるだろうか？」

店主からじろりと眺められて、娘はいささかばつの悪い思いをす

る。

身を守るためとはいえ武器など持ったこともない、国王に言わせれば平和で生ぬるい世界に育った娘は、果たして武器を手にして扱えるか疑問だった。

――自分を守るために結果的に他人を傷つける。

「そうですね。小さい、これなどいかがでしょうか」

ペーパーナイフのようなサイズのものを提示されるが、刃の鋭さはおもちゃではないことを知らしめる。

「これなら……ポケットに入ると思います。あと、可能なら装身具になるようなもので何かないでしょうか。普段から服につけていられるような、身につけても違和感のないものです」

団長と店主が首をかしげたので、紙に図を描く。

「こんな感じで針を太くしたようなものを、服に刺して一旦下をくぐらせてからまた服の表に出して、先端にキャップをつけるんです」

キャップが難しいならコルクのような柔らかい木で代用してもいい。

反対側に何か装飾をつければ、針先を武器にするものと怪しまれないような気がする。

「面白そうだ。店主、どうだ？」

「これは細工師に作らせてもいいかもしれませんね。装飾はどんな風にしましょうか」

いきなり聞かれて思いつかない娘だったが、団長はいい案が浮か

んだようだ。

「騎士団で働いているんだ。騎士団の紋章ではどうだろうか」

「なるほど、お嬢さんも騎士団の一員ということですか。少しお時間をいただくことになりますが、構いませんか？」

出来上がったら騎士団に連絡を入れることで話はまとまり、団長は剣を小脇に抱え、娘はポケットに短刀を忍ばせて店を出た。

「ちょうどいい時間だ。どこかで昼食を取ろう」

団長に案内されて賑わっている食堂に入る。目立たない隅の席で、適当に注文してとりあえず飲み物を飲んだ。護衛任務中なので酒は飲めない。

団長は、向かいに座る娘に元気がないことに気付く。

「疲れたか？」

「いいえ。さっきの店で私は卑怯者なんだなと思って、それを引きずってしまっているだけです」

卑怯者？　穏やかでない単語に団長は首をかしげた。

19　これって

娘は目の前の飲み物の容器をじっと見ながら話しだす。

「私は結婚するつもりがないので誰かを代わりに呼んでほしいと要求して、それを受け入れてもらいました」

聞かれても構わないように言い回しを変えている。団長はその続きを無言で促した。

「でもそれって、代わりの人には迷惑な話なんですよね。そして、その人にとっては私も加害者になってしまうんです。『私には無理だからあなたよろしくね』って押し付けて、自分だけ帰るってその人にとってはふざけるな、自分だけ逃げるのかってことになります。一連のことでは被害者の私が、その混乱とか悲しみとか知っているのにそれを押し付けるんです。我ながらひどい話だと思います。さっきの店での品は、自分を守るために相手を傷つける物ですよね。私はまさしく我が身かわいさに、次の人を傷つけるようなことを何のためらいもなく口にして、実行しようとしているんです」

それで『卑怯者』か。

団長は娘の言っていることを咀嚼する。いきなり召喚されてしまった混乱や苦痛などを痛感している娘が、元の世界に帰るために同様の苦痛を次に召喚される人に与えてしまうと考え、『卑怯者』と位置付けているということか。

娘は視線を飲み物に固定したまま、話を続ける。口に出すことで考えをまとめようとしているようだと、団長はなおもじっと聞き役に徹する姿勢をとる。

「次の人のために良い方に変わってほしいと紙に書いて渡したのも、少しでも改善してくれないと次の人が気の毒で寝覚めが悪いだけなのかもしれない。
今回は最初の言動があまりにもひどかったから私が帰るのは仕方ないって空気ですけど、そうでなかったら私の拒否は単なるわがままで、ここによこした存在――と言っていいかわかりませんが、それにとっても不敬ですよね。
そんな事情とか、優しくしてくれている人達の思惑とか知っていてもそれでも帰りたい。
結論付ければ、次の人のこともこの世界のことも知ったことではないということになってしまう。私は卑怯者で偽善者で自己保身の塊なんです」

娘は容器をぎゅっと両手で握った。召喚されてしまった者の本音を聞かされて、団長はその重さを感じる。
召喚などされなければ生じることのない感情、決してきれいではないそれを身内に住まわせたことを娘は自覚して自嘲している。
団長はつくづく召喚とは罪作りなものだ、と誰かに聞かれれば、特に神殿関係者に聞かれれば神を冒涜するのかと非難されるだろう感想を抱いた。そしてもし自分が異世界とやらに召喚されて、何らかの役割があるとされた場合を考えてみる。
割にあっさりと言葉がでた。

「そんなに自分を責める必要などないだろう。拒否も郷愁も当然のことだし、その手段があると分かれば実現しようとするのも自然だ。次の人も多少なりと元のところに絶望していて、なおかつあの方と相性がいいはずだ。案外すんなり残ってくれるかもしれないし、どうしても嫌だとなればやり直せばいい。
なに、実行する者には負担かもしれないが、確実に歴史に名を残す

だろう。その名誉のために頑張ってくれるのではないだろうか。なによりあの方は変わろうとされている。外見や権力は言うまでもない、性格まで良くなれば一目ぼれをして喜んで残ってくれる人も出てくるだろう」

あっさり言われて娘は、伸ばした前髪の間から団長をまじまじと見つめる。

しごく真面目な顔で言っている団長は、しかし目だけが笑っている。

娘の脳裏には好いてくれる娘さんが召喚されるまで、神官にお金を出させて機械の前に座り込んでガチャガチャをやり続ける国王の姿が浮かんだ。

つい、吹き出してしまう。

「それにだ。もし私が同じ目にあったりしたら、怒り狂ってそこら中を破壊しまくるかもしれない。それを思うとあなたはずいぶん自制している。

もっとわがままを言ってくれてもいいくらいだ」

「わがままを、ですか」

「あなたのわがままなら喜んで聞く」

さらりと言われ娘はどぎまぎする。

団長がこんな人だとは思わなかった。ユーモアもあって殺し文句のようなことも言う。

真面目なだけの人ではなかったのか。

団長から返されて重かった気分が、黒かった思いが幾分か軽く明るくなっていくような気がする。

本当に、国王以外の人はいい人なんだと思う娘の前に料理の皿が置かれる。

「さあ、食べよう。ここのは美味しいと評判なのだ。気に入ってくれれば私も嬉しい」
「はい、いただきます」

さっきのままなら食欲もわかなかったのが、団長の心遣いのおかげで料理が美味しそうに見える。
娘は料理を取り分けると団長と一緒に食べ始めた。
団長の食事の様子は騎士団の食堂で見たことがあったが、向かいに座って食べている姿勢はいいし食べ方も洗練されている。それなのにしっかりと、沢山食べていく様子は見ていて気持ちがいい。
娘はくつろいだ気分で食事を終えた。

人気の食堂らしく席が空くのを待っている人がいたので、二人は長居することもなく店をでた。
団長は左右に目を走らせ、少し苦笑したが娘は気づかなかった。
昼時の食堂街とあって人で混雑している。人が間に入り、距離のできそうになった娘は団長に腕をひかれた。

「はぐれるな」

子供のように扱われて、娘は大丈夫と言いかけた。団長は大柄で目立つので見失うことなどないと思った。

「いいから」

腕から下へと移動した団長の手で、手を包み込まれるように握られて娘は戸惑う。
団長は前を見て大股に歩きだした。普段は娘の歩調に合わせてくれるのに、その時は早足で娘はつないだ手を引かれるように後をついていった。顔が火照るのを感じる。団長は斜め前を歩く形で顔は

見えない。
そういえば二人きりで城下を歩いたり、食事をしたりしている。これは護衛というより……。
娘は浮かんだ言葉を慌てて打ち消す。いやいや、友人がいなくなっちゃったから団長は仕方なく、こうして一緒に居てくれているだけであって、あれもこれも任務の一環なのだから意識する方がおかしいのだ。
そうは思っても繋がれた団長の手は大きくて温かくて、皮膚は硬くて男性の手なのだと意識してしまう。顔が赤いままでは団長が変に思うだろう、娘は落ち着こうとするのに勝手に体温が上がってくる。
結局手は繋がれたまま、次の店まで来てしまった。
外から中を確認した後で団長が扉を開けてくれ、娘を通してくれた。
そこはいかにもな店で、雑貨や可愛らしいのから少し大人っぽい装飾品などが売られている。

「私は外にいるので」

団長はなんだか居たたまれない顔で、そそくさと外で待機すべく出て行ってしまった。
娘は髪染めや石鹸、旅に要りそうな小物を買って、装飾品のところに足を向ける。
赤以外の耳飾りを数個、細く長い鎖の首飾りを購入してその後真剣に棚の品物を品定めする。
数個手に取るも、一旦それらを置いて扉の外で通りを見つめる団長を呼んだ。

「すみません、中に入ってもらっていいですか？」

男性の客など他にはおらず、団長は嫌な汗が背中を伝うのを感じた。娘に連れて行かれたのは装飾品の棚で、しかも娘はなぜか首飾りを手にしている。

「本当にすみません、あの、妹さんにと思うんですけど、目と髪の色と合うか確かめさせてもらっていいですか？」

女性ものの首飾りを首元に当てさせてほしいと言われ、団長はうろたえるがついさっき『わがままは何でも聞く』と言ってしまった手前嫌とも言えずに、実験台になる羽目になってしまった。

途中で妹の好みの色だの宝石だのを尋ねられるが、性別の違う兄妹でそんなことは分からない。

「すまない、その手のことには疎くて……」

「いえ、じゃあちょっとだけ屈んでもらっていいですか？」

真面目な顔で首元に首飾りを当てて、顔を見つめられるのはもはや拷問に近いかもしれない。

手に取った二つで最後まで迷って、そのたびに娘の手の甲や指先が顎下に当てられて、団長は中腰で膝上に置いた手に力を入れる。

……逃げたい。切実に逃げ出したい。文字通り腰が引けそうになったところで、娘がようやく決めてくれてそれを清算にいった。

心底ほっとした団長は背筋をすっと伸ばすと同時に、店の外の気配を探り口を引き結ぶ。戻ってきた娘を伴って外に出た。

「ありがとうございました。気に入ってもらえるといいんですが」

綺麗な青い石がついた繊細なつくりの首飾りを付けた妹を思い浮かべると、悪くない気はして娘にそう伝えると、娘はほっとしたようだった。

その後は並ぶようにそぞろ歩いて、最初の広場近くまで戻ってきた。友人に教えてもらったという近くの菓子屋に入る。

侍女の間で人気という店はこれまた女性客で賑わっている。娘は店の人間と相談しながら、菓子を詰めたものを結構な数購入した。

一つだけ包装してもらい、あとは二つの紙袋に分けて入れている。

「これで用事が終わりました。ありがとうございました」

「いや。朝一緒に来たあの娘と待ち合わせしているのか？」

「『門限は知っているよね』って言われたから別々だと思います」

「そうか、では王城まで同行しよう」

その前にといささか慣れない店に付き合わされて喉の渇きを覚えていた団長の誘いで、お茶を飲むことになった。

団長にお茶の給仕をして知ってはいるが、この団長は実は甘いものは嫌いではないようで、お茶にも砂糖を入れている。娘の方は無糖だ。娘は小さなテーブルの向こうの団長に、今日一日でずいぶんと距離が近くなったと感じる。

「妹さんとああいう店には行ったりしないのですか？」

「私は騎士団に割に早くから放り込まれたからあまり接点がなくて、妹が王城勤めを始めてからの方がむしろよく顔を合わせている。強引に付き合わされたことはあるが、あの手の店では私はそぐわなくて……」

武器屋では堂々としていたのに、雑貨屋では固まる大型犬のようだった団長を思い出すと、自然とくすくす笑いがこみあげてくる。

笑顔で見つめられて固まる団長にさらに追い打ちがかけられた。

「申し訳ありません。なんだかすごく可愛かったなあと思ってしまって」

「かわっ可愛い？　俺が？」
「俺？」

一気に赤くなった団長を見ながら娘はやっぱり可愛いと思ってしまった。
団長は動揺のあまり普段は『私』と自称するのが素の『俺』に戻ってしまい、聞きとがめて小首をかしげる娘の仕草に更に内心恐慌をきたしている。

「女性の多いようなところが苦手なんですね。他に苦手なものなんてあるんですか？」
「俺、いや私はあとは、そうだな。儀礼的な式典などは得意ではない」

正装してきちんとしていないと駄目なのがどうも、訓練をしているほうが気楽でいいとぼやく団長に逆に苦手なものは何かと質問された。

「雷は、夜の雷雨は嫌いです」

短く言い切った娘は、次には冗談めかす。

「あと強引に呼び出されたりするのも嫌いですね」

同時に国王を思い浮かべて団長にも微笑が浮かぶ。
お茶も飲み終え、王城へと戻る。緩やかな登り坂になっているそれを歩きながら、娘はつぶやく。

「良い所ですね。人も沢山集まっていて、活気があって」
「ご即位の際に内乱に拡大しそうだったのを抑えられたせいもある。

戦火があればすぐに国が荒れてしまうからな」
「そうですね」

振り返った娘は街並みに目を細める。
王城の門は団長が一緒なせいで何のチェックもなく通過できた。
騎士団本部の前で、娘は団長に菓子の紙袋の一つを渡す。

「これ、召し上がってください。今日、城下についてきてくれた人の分も入っています。
何人かはわからなかったので適当な数ですが。あと、この包装してあるものを機会があったら陛下にお渡しください。
とても楽しかったです。これも陛下と団長様が外出を許可してくださってお金まで渡してくださったからです。今日は本当にありがとうございました。」

娘はもう一つの菓子袋と今日買ったものを詰めた袋を持って、使用人棟に戻っていった。
後姿を眺め、王城内で娘の護衛をしている者に一つ頷いて、団長もきびすを返した。

20　変化と抑制

その夜、国王の執務室には昼間の報告をする団長の姿があった。

「王城を出てすぐにお一人になられたので、以後は側に付く形になりましたが特に問題なく城下を楽しまれたようです。ただ、護衛に付けた騎士団とは別に二組の尾行が認められました」

尾行、の単語に国王の眉根が寄せられる。

眼差しだけで問いかけられ団長はす、と姿勢を正す。

「一組は問題ありません。騎士団の非番の者でした。おそらく城下でお見かけして、つい後をつけたのでしょう。

もう一組、これはかなりの手練れと思われます。護衛の騎士達に確認しても気配を感じなかったとのことですから。私にしても、偶然がなかったら気付いたかどうか……」

雑貨屋で首飾りを品定めにつき合わされた際、鏡に偶然こちらを窺う様子が映りこまねば気付かなかったほどに、見事な気配の消し方をする者達。

それも一瞬で正確な人相は捉えられなかった。そして王城への帰路では消えたのか、気配は感じ取れなかった。

「外出の予定をあらかじめ知っていたかどうかで変わりますが、先だっての手綱の件といい……」

「情報を入手でき、それを外部に漏らす輩がいるということか」

国王と団長はいずれも難しい顔で黙り込んだ。

確実でないにせよ身の危険を及ぼす細工と、相当に腕の立つ尾行

者。
これが同一人物の指示か否か。

「そなたはどう思う？」

国王は臣下に対しお前呼ばわりをしなくなった。最終的な判断は勿論国王が下すが、以前より臣下の意見を聞く態度を見せるようになった。
臣下の意見や提案も無下には切り捨てず、相手を貶める言葉も減っていった。
これを国王の甘さと取る向きもあったが、侮る相手は柔らかになったかに思われる視線に一挙手一投足を観察されて、逆に丸裸にされていく。

「卑近なものですと陛下の後宮入りをもくろむ貴族とその娘、息のかかった使用人。陛下が部屋に呼んでいたことを知った貴族が正体を知らずに邪魔者と考えたか、知っていて婚儀の前に亡き者にしようとしたか。
あの方を取り込んで政治的に優位に立とうと目論む者か、あの方ごと陛下を害そうとする者か」

今も団長の情報と意見を容れて、そこに自分の思考を加えていく。

「弟の可能性は否定はできないが、城下での尾行とは繋がらぬ。むしろ王城の外で不審な動きをするのなら、叔父上の方が考えやすいか。
東の動きがきな臭いことといい無視はできないだろう。東の監視を強めてくれ。
他に見落としているような可能性はないだろうか？」

団長は考えを巡らせるが、出てきた可能性は我ながらどうかと思うようなことだった。
そのために漠然とあったもう一つの可能性を明確にすることができなかった。

「あの方を見初めた貴族かもしれません。けがでもさせて王城から出して保護する目的の可能性、あの方の背景を調べさせるために密偵を放った可能性は否定できません」
「その心配までしないといけないのか？　下働きの恰好をしているのだからそれはないのでは？」
「騎士団の中には貴族の子弟が一定数おります」
「……騎士団員であれば厩舎の細工はたやすくできるか。情報を流すのもできないことではない」

身内を疑いたくはない団長だが、可能性がある以上除外はできない。

「できるだけ情報は秘匿するように徹底しましょう」
「頼む。ところで、楽しかったか？」

国王の前で直立不動だった団長は、一言一言を区切るようによこした国王にどう返してよいものか、反応が遅れた。
楽しかったかとは？　結果的に二人で行動したことに対してだろうか？
ぐるぐると状況だけが思い返されて、団長はうっすら汗が浮かぶのを感じた。
国王は傍らの書類を取り上げる。

「城下を楽しんだとの報告なのだから、傍らのそなたも楽しかったのだろうかと思っただけだ。そなたの配下からの報告書には、『武器屋の後で食事をして、普段の団長なら絶対に入らないような店に入って、王城へと戻った』とあるのだが」

雑貨屋と菓子屋のことをそう表現されると、別に疾しいことはないのに後ろめたい気になってくる。

しかし、国王が部下からも報告書を上げさせているとは。多方面から情報を集めるのは政治の基本とはいえ、まさか自分までその対象になるとは思っていなかった団長だが、こと伝説の娘に関しては慎重になってなりすぎることはないと納得もする。

問題は報告書にどこまで記されているかだ。国王の質問はカマをかけているのか、そうでないのか。

往来で尾行していた者達を挑発するために手を繋いだのはともかく、雑貨屋で品定めにつき合わされたり菓子屋で可愛いなどと言われて調子を狂わせたのは、できれば知られたくない。

娘を好ましく思っている国王に対してはなおさらだ。

「側で護衛ができて楽でした。まあ、私にとっても楽しかったですよ」

当たり障りのない返答だとの自覚はあるが、嘘ではない。

それ以上は追求せず国王はひらりと書類を机の上に落とすと、酒に付き合うようにと団長に告げる。

人払いはしているので、団長が書棚の一角に置いてある酒とグラスを取り出し、長椅子へと移動した国王の目の前のテーブルに置く。

酒を注ぎ、国王の飲む前に毒見も兼ねてグラスを口に運ぶ。

喉を過ぎて何事もないことを確認した後に、国王に頷くと国王は

ゆっくりとグラスを口に運んだ。

「こればかりはそなたを盾にするようで、よい気分ではないな」

「毒見のことですか？　立場を鑑みれば当然でしょう」

「そうは言っても……」

「戦になれば、私は文字通りあなたの盾になるのですから、お気になさらず」

何でもないことのように、実際団長にとっては当然すぎてためらったりすることなどありえない。この国にとって、誰が最も重要かなど自明だ。その存在を守るために騎士団も存在し、自分もいる。

万が一、酒に毒が入っていて命を落とそうとも国王が守られればそれでよい。

団長がそう言うと、国王は嫌そうに顔をしかめた。

「余にその価値があるとは、思えぬからな」

「自虐が過ぎます。あなたを主と定めて仕えている者の忠誠心を踏みにじるおつもりか？」

「違う。その忠誠心に甘えて胡坐をかいていたのに気付いただけだ。気付いてもこうしてそなたの忠誠心がなければ、余は酒を飲むこともできぬ。今までいかに甘えた傲慢な子供だったかということだ」

じわじわと体が熱くなっていくのを団長は感じる。酒のせいとするには量が足りない。

自分の行動を国王が認めてくれている。それが示されただけで嬉しいのだ。

他の臣下と比べて信頼されている自覚はある。それでも改めてねぎらわれると格別だ。

「勿体ないお言葉」

「そこまでいくと嫌味になるから、もうよせ。ただ、感謝している。今までのことにも……」

国王も酔うほど飲んでもいないのに、顔が赤い。照れると目の縁が赤くなりそっぽを向く癖は変わらないらしい。

即位してからその癖を見なくなって久しい。鎧をまとったかのように、優しい心情を出さなくなっていたのにこの変わりようはやはり娘のせいだろう。

国王に対する娘の影響力の大きさに感心しながらも、少しばかり胸が焦げるような思いもしている団長は、それを抑えるかのように酒を飲みほした。酔って警戒を怠る訳にはいかないので、これ以上は飲むつもりはない。

後はグラスを手にしながら国王の話の聞き役になった。

「余は少しは変われたのだろうか？　弟からは幾分かましにはなったとは言われているが、もとがあれだけに評価が難しい」

「僭越ながら、随分お変わりになられたと思います。人の話を、親しくない者の話でも聞こうとされていますし、その上で的確な判断を下されているように感じます。それに気遣いを示してくださっている。臣下はその意気に感じ入っております」

身近な存在以外は垣根を巡らしてほとんど駒のようにしか対応していなかった国王が、冷静さや有能さはそのままにより柔軟に、温和になったようにすら感じられる。

この短期間によく、と素直に驚いている。その変化の原動力ともいえる存在を本当に手放せるのか、疑問を持っている。

「陛下、本当にあの方をお帰しになるのですか？」

「帰したくないが、こう思う資格もない。第一嫌い抜かれているの

だから仕方がない」
「諦めるのですか、あなたらしくない」
「一方的な想いでは関係は成立しないのだろう?」

やれやれと思いつつ団長は娘から預かっていた包みを渡す。

「あの方からです。外出許可をだしたことと金子を渡したことへの礼だそうで、『ありがとうございました』とおっしゃっていました」

かわいらしく包装されたものを国王はしばらく見つめ、こわごわと手を出して包装をはがしていき、現れた菓子を手に取る。

「それも毒見しましょうか? 購入する際立ち会いましたが、不審な点は見受けられませんでしたが」
「いや、いい」

国王は菓子を口に入れ、何度か咀嚼してのみこんだ。

「これを、余にか」
「はい、念入りに選んでおられました」
「……食べるのが勿体ないと思うことなど初めてだ」

本当に思春期のような初々しさだ。主の遅い『春』にほほえましさを覚え、団長は兄のような心境で見守る。
そして改めて自分に確認する。
あの娘は主の想い人だ。それを踏まえなければならない。
胸にある揺らぎを、胸を焦がすような想いを持つことすら許されない。

「嬉しかったのを伝えたいのだが、会えないしな、どうしたものか」

「手紙を書かれては？　直筆であれば陛下のお心も伝わるでしょう」

苦さを抑え込んで助言すると、国王は机に戻って少し迷った後にペンを動かし始める。

団長は完成したそれを預かる心づもりをしながら、来る再召喚の日まで私心なく国王と娘に仕える決意を新たにした。難しいことは承知の上だった。

それがどんなに容易く覆されてしまうのか、知る由もなく。

翌日騎士団本部の団長室で封蝋を施した書簡を手渡され、娘は若干の困惑とともにそれを開封した。

文面を読み進める娘の表情から困惑が消えて和やかなものになるのを、団長は執務机越しに観察する。

「――陛下はとてもお喜びでした」

「そうみたいです。素直すぎて怖いくらいです。でも、本当に変わろうとされているのですね」

良かった。口には出さない娘の安堵の言葉が聞こえてきそうだった。

ほんの少しだけ変化したような国王と娘の関係は、静かにしかし確実に王城の中枢を巻き込んでいく。

当の娘の醒めた思惑は気づかれなかった。

――国王が嫌なだけの存在でなくなってきた。良い方に変わっていくのは嬉しいはずなのに、拒否してきた点が解消されると帰還しにくい状況になってしまいそうだ。

それに周りが良い人すぎるのも困る。この人達を見捨てて帰還す

るか、欺いて逃亡する自分はこの上なくわがままで身勝手だ。
これ以上ここの人を嫌いでなくなったり、人間的に好きになったりしてしまうことは――危険だ。

団長の穏やかな眼差しが娘に一層の罪悪感を煽る。
深入りしてはいけない。
図らずも同じような思いを抱いて、団長と娘は淡々と自分の業務をこなしていく。

21　転機

娘が侍女に渡した首飾りを彼女は喜んでくれた。
すぐに身につけてくれ、よく似合っているので娘も嬉しかった。
目の色は同じだからと団長を品定めに付き合わせたのは、気の毒だったかと今更ながらに思う。
侍女にその話をすると、目を丸くしてしばらく何も言わなかった。
やはり失礼なことをしてしまったのだろう、明日顔をあわせたら団長に謝ろうと決めた娘の前で侍女が俯いて、肩を震わせる。
怒るほど失礼だったのか。反省する娘の前で侍女は片手を反対の腕に当てて、ぎゅうっと握り締めた。そのうち両手が組み合わされて、それにも力を入れて握られているのが分かる。

「……兄が、兄が首飾りを試すために、あなたに付き合われたと……」
「しかもかがんでもらってです。申し訳ありません。失礼なことをしてしまって……」
「ふ、ふふ、いえ、失礼などでは……。あの兄がどんな顔をして付き合ったのかと、想像するとおかしくて。ごめんなさい、涙も出てきてしまって」

見れば侍女は小刻みに震えながら笑っている。
娘は団長が居たたまれない様子だったのを思い出す。女性の沢山いるところは苦手と言っていたし、侍女の反応からも女性に付き合っての買い物とか外出の経験も少ないようだ。妹である侍女が涙を流して笑うほどにおかしなことを強いてしまったかと思うと、やっぱり申し訳ない。
ひとしきり笑って、目尻の涙を拭った侍女はようやく落ち着いた。

「子供の頃って、ままごととか着せ替え遊びに夢中になるじゃないですか？　でも兄は『そんな軟弱なこと』って付き合ってくれたことがあまりなかったんです。だから、今頃になってあの体格であなたに付き合ったかと思うともう、ね」

口元が笑み崩れて、また笑いの発作に襲われそうに見える。それをなんとかとどめた侍女は、今度は自分と一緒に城下に出ようと誘ってくれた。

「もっと、ここを好きになってもらえれば嬉しいですわ」

団長のような眼差しに、また胸が痛んだ。

翌日、団長室にお茶を持っていった際に謝罪をすると、団長は思い出したのかうっすら顔を赤らめた。

「いや、別にそう大したことでは……」

その語尾が尻すぼみになっているのに気付き、娘はやっぱり苦手だったのだと、そして赤くなる様子は可愛いと感じた。

ほのぼのとした気分は、国王からの書簡で見事に消えてしまったが。

王城でのやり取りをよそに、ある厳重に人払いをした部屋の中で密談がなされる。豪華な椅子に座る二人、部屋の明かりは極力抑えてあり、四隅には薄闇がわだかまっている。

「今度の娘は毛色が違っている。元の世界に帰るつもりだとか。それが可能とは驚くばかりです」

「ここに来たのは神の意思。帰るのはその娘の意思、ですか」
「面白い。国王の手に余ったのか、元の世界によほどの未練があるのか」
「いずれにしても」

一瞬会話が途切れて、各々の思いが部屋の空気を重くする。

「そう、いずれにしても」
「動かざるを得ませんか」
「小手先の細工では通用しそうにはありませんな」
「ああ、例の団長ですか」
「左様。あれの父親からして、愚直なまでに王家への忠誠を誓っていましたから」

苦笑めいた響きの後で、立場と役割を承知している二人は無言で頷きあう。
編み上げてきた計画、それを実現させるための準備、その中に飛び込んできた伝説の娘。
娘は切り札ではある、だがそれを支配するのは自分達と言わんばかりに、頷きの後で忍び笑いが漏れた。

しばらくは何事もなく日々は過ぎた。
娘は下働きをしながら、厨房で料理を習ったり食材を納入する業者とも顔見知りになっていた。
団長は城下で娘を監視していた人物について調査をしたが、特定には至らなかった。
娘の身辺警護は続けられたが、直接的に危害を加えられる出来事はない。
しかし。

「団長に色目を使うなと釘を刺されていました」
「夕食の際に、団長や副団長のことをかなりしつこく聞かれています」

など団長を含めた騎士団員からみで、色々言われているらしい様子が報告される。

国王に呼ばれることもなくなったせいか、娘が他に男性を寄せ付けていないせいか、最近騎士団員とで取りざたされているらしい。

その報告を部下から受けた団長は、なんとも情けない顔になる。

「虫よけは必要だとは思ったが、何故俺の名があがるんだ」
「お前は貴族の子弟だろう。しかも独身で地位も名誉もある。国王の覚えもめでたい有望株だ。下級から上級の貴族の娘達から狙われていて当然だろう」
「……勘弁してくれ」

呻くように呟くと、副団長は諦めろとばかりに肩をたたく。

「お前だって俺と同じようなものではないか。何故そんな涼しい顔なのだ、不公平だろう」
「俺は馬好きの変人だって有名だからな。人間の雌は遠慮しているんだろう。
それにお前とあの方の城下でのあれこれが広まっているのを知らないのか？
だからお前の名前が取りざたされているんだ」
「何だ、それは」

今初めて知ったという顔で、団長は副団長に詰め寄る。
騎士として周囲の気配を探るのは一流のくせして、こと自分に関

しての噂には無頓着な団長を、副団長は憐みをこめた目で見る。

「何だもなにも。あれだけ派手にやらかしといて噂にならない訳がないだろう。

武器屋はまあともかくとしてだ、一緒に食事をした後で手を繋いで往来を歩いておいて、見とがめられないと思う方がどうかしている。現に非番の団員がふらふらと後をつけたのを、さらに護衛の騎士達が尾行する羽目になったんだぞ。

しかもだ、いちゃいちゃしながら品物を選んだり、菓子屋でお茶を飲んだり、極めつけは二人で王城まで戻っただろう。門番の衛士からも話が広がっている。

それでなくても目端がきいて噂好きの女性達だ。

一気に話が広がって当然だろう。お前に問いただす勇気はないようだから、矛先があの方に向いているんだろう」

他人から聞かされる恥ずかしい内容に、団長は穴があったら入りたい心境に陥る。

往来のあれも雑貨屋のこれも理由はあるのに、傍から見れば……誤解を受けてしまうのか。

恐ろしいのはその噂とやらがどこまで広まっているかだ。

そしてどこまで、娘が迷惑を被っているかだ。

「あれは、他意などない。不審者のあぶり出しをするためだし、店での件は妹への品を選ぶ実験台になっただけだ」

「今まで硬派できて、女性との噂が全くなかったお前に初めて降ってわいた色めいた話なんだ。しばらくは仕方ないだろう」

ぽんぽんと肩をたたかれるが、団長が収まるはずもない。

副団長相手に弁解がましい口調になってしまう。一応は上官だが実際には親友のそんな姿は、副団長にはおかしくて仕方がないが、

ここで笑うと後が怖いので若干口元は引きつりながらも、言い分は分かるとばかりに大げさに頷いて見せる。

「しかしあの方にとっては迷惑以外のなにものでもない。それに陛下のお耳にこんな下らぬ噂話が入ってみろ、どんなことになるか」

「まあまあ、ここ最近はお前とあの方の接触が少ないから噂も下火になっている。このままやり過ごせるだろう。あまり気を揉むな」

「お前……面白がっていないか？」

「心外だな。俺は心底お前を心配しているんだ」

あまり実感のこもっていない副団長の様子に、低く呻きながら団長は執務に戻る。

その際視線を外に投げかけると、雲がたちこめ午後の時間なのに薄暗くなっていた。

副団長もつられて外を眺める。

「一雨きそうだな。今日は外の訓練はなかったな」

「ああ、そのはずだが。急に暗くなったな。嫌な天気だ」

言っているそばから窓にぽつりと水滴が付き、みるみるその数を増していった。

久しぶりの本格的な雨は激しく降り、雨音が室内に響いてくるほどだった。

こんな時には仕事をするに限ると、普段なら滞りがちな事務仕事を二人とも黙々とこなす。

大方仕上がってふと顔を上げると、雨足は弱くなるどころか一層強くなっている。それに遠くから何かの音も聞こえる。

「あれは、何の音だ」

「雷だろう」

流した副団長の言葉に団長の動きが止まった。異変を感じ、副団長が声をかけようとした矢先に低くかすれた声が聞こえた。

「――は、どこだ?」
「何だって?」
「あの方はどこにいる?」

外の雨を睨み付け、団長が低い、抑えた口調で尋ねる迫力は尋常ではない。
戦場でもないのに副団長は圧倒される。
そして団長の質問を反芻する。今の時間なら……。

「おそらく使用人棟に帰る時間だが、この雨だから足止めされているのではないか?」
「少し、部屋を空ける」

そこまで聞くと団長は、副団長が何かを言う前に団長室を出て行った。
どうしたのだと副団長が気を揉んでいると、程なくしてこちらに大股に近づいてくる足音が聞こえる。
強めに扉が叩かれ、副団長はその叩き方の癖から団長と判断して、扉を開けた。
目に映る光景に副団長は息をのんだ。

血の気を失い、固く目を閉じた娘を抱きあげた団長が入ってきた。
反射的に脇にどき、団長と娘を通してからすぐさま扉を閉める。

「しばらく隣の部屋を使う。雨足が弱まるか、雷がおさまったら呼んでくれ。それまでは扉を開けるな」

副団長の顔も見ずに言い置くと、娘を抱いたまま隣の小部屋へと歩をすすめ、境の扉を閉めた。
女性と二人きりで密室に閉じこもる。
間違いがないようにとの配慮から、扉を少し開けておくのが礼儀とされているのに。
礼儀作法を知らぬはずのない団長のあえての行為に、副団長はどうすることもできずにいた。
さすがに今は馬のことなどは頭の中から吹き飛んで、団長と娘のことで一杯だ。
何故こんな状況に？　どれほどの人間に目撃された？

「噂に、自分で火に油を注いでどうするんだ」

副団長の呟きを聞いた者はいない。
そして副団長は、窓から外の天気を観察する羽目になった。
雷鳴を伴う豪雨は続いている。

22　トラウマ

こんな予感は外れて欲しかった。何かに突き動かされるように団長室を出て階下の食堂に行きながら、団長は菓子屋でのことを思い出す。

いやにはっきりと嫌いだと言い切った口調は、普段の物静かな佇まいとは違っていた。

とはいえ、雷を嫌いな女性は多い。あれを好きで眺めていられると、それはそれで違和感があるのだが。雷が落ちるとそれ以上に響く女性の悲鳴の方がよほど煩い、間近で聞かされると耳がどうかしそうなくらいに思える。

だから雷が嫌いとはその程度だろうかとも考えた。

だが嫌いと言って視線をそらした顔には、苦悩ともいうべき表情が刻まれていたように思う。

食堂が見えたその時、中から団員が出てきてこちらを認めた。護衛に付けてある騎士だ。それがほっとした顔をして近寄ってきたのに、ひしひしと嫌な予感ばかりが増してくる。

「団長、今、お呼びしようと思っていたところです」

「どうした」

「あれを、ご覧下さい」

食堂に入って見たものは、窓とは反対側の隅で耳を両手で塞いでうずくまる娘の姿だった。

――予感が、当たった。

目は吸い付けられたままに傍らの騎士に尋ねる。

「いつからあのように？　雷が鳴ってからか？」

「最初雨がひどくなった時は、表情が曇ったのですがまだ。雷鳴が聞こえた途端に真っ青になって後ずさり、あのような状況に……」

できるだけ身を小さくして、存在自体を消してしまいたいように見える。

目を閉じ、耳を塞いで感覚を遮断しようとしているようだ。

「ご苦労だった。この場は私が当たる。陛下への伝言を頼まれてくれるか？

窓のない、音が聞こえにくい寝室を用意して欲しいと」

風雨の中を使いに出し、うずくまっているところに近寄る。

その前に腰を下ろした。

かすかに震えているのを怯えさせないように、耳に持っていっている手を覆う。

娘が泣く寸前のような顔で見上げてくる。ひどく頼りなく弱々しい表情に、団長は不覚にも動悸を覚えた。

今だけは恐れられることの多い大きな体躯で、窓の景色がさえぎられているだろうことに感謝しながら話しかける。

「気分が優れぬか」

雨に濡れた野良猫を保護する気分だ、などと埒もない想像をする。

答えようと口を開きかけた途端、稲光とすぐに続いた雷鳴が鼓膜を震わせた。

娘がびくりとすくんで、唇を震わせる。それを見た瞬間にはもう、考えるより先に抱き上げていた。

「窓のない部屋に移動する。ここよりはましだろう」

普段の娘ならすぐに下りようとするだろうが、抵抗はされなかった。

大股に食堂を出て、階段を上る。

途中行き会った団員達がぎょっとした顔をしているが、今は一刻も早く安心できる場所に連れて行くほうが先だとばかりに歩く。

何より団長の迫力におされて、皆、その姿を見送った。

「重く、ないですか？　自分で歩けると思いますので……」

口をきく気力もないと思っていたのに、意外にしっかりした声だ。

こんな時にそんなことが気になるか。女心とはそうしたものだろうかとおかしみを誘われる。

「いや。あなたなら片腕でも大丈夫だろう。それをすれば、私の首に腕を回してもらわないとならないが」

軽口に反応した娘の雰囲気がふっと緩む。しかし見澄ましたように雷鳴が響いて、腕の中で再び硬直してしまった。

「目はつぶっていろ。気休めにはなるだろう」

さほどかからずに団長室に戻り、副団長が扉を開けてくれた。迷わず、続き部屋になっている隣に向かう。

いよいよ顔色が悪くなっている。早く、扉を閉めてしまわねば。

団長にとっては勝手知ったる部屋だから、暗くでも支障はない。とりあえず長椅子に下ろした後で明かりをつける。

「ここは作戦会議や内輪の会談などで使われるために、窓もなく壁も厚くなっています。ここなら他の場所よりも怖くないでしょう」

他人の目がなくなると途端に敬語になっていまう団長には、主従の序列が染み付いている。

長椅子の上で動く様子のないのは気がかりだが、一応の目的は果たしたので部屋を出ることにする。

副団長には雷雨がおさまるまで扉を開けるなと言ったが、男女が密室など、しかも相手が相手だけにとんでもない話だ。

だから部屋を出ようとしたのに。

すがるような眼差しを向けられて、団長は出そびれてしまった。

それでもけじめをつけるかのように、離れた場所に椅子を持っていって座る。

「そんなに雷が苦手とは思いませんでした」

団長の感想に、疲れたような答えが返る。

「親が、ひどい雷雨の夜に事故にあったんです。車――人を運ぶ乗り物に乗っていたんですが、反対側を走る車が雨ですべって突っ込んできて衝突したんです。

病院から呼ばれて集中治療室に向かう時も、雨がひどくて雷も近くで落ちて。

結局、親はそのまま……。こちらに来て雷雨があった時にふいに思い出されて、あれから駄目ですね」

指先が震えている。ごく最近の辛い思い出と連動しているのなら、こんな反応でもおかしくないだろう。

「では以前の雷雨の時にはどうされたのですか？」

「ベッドの中で寝具を頭からかぶって、耳を押さえてやりすごしました」

さっきのように身を縮めていたのかと思うと、痛ましい。
この部屋は視覚は遮断されるが、さすがに扉越しの音までは完全に防ぎきれない。
くぐもるような雷鳴は、部屋の中にまで忍び込んでくる。

「情けないですね。音だけでも駄目なんて」

耳を手で押さえるその仕草は、ここにいるのは伝説の娘でもなく、気丈な娘でもなく、ただの傷ついた娘なのだと思わせた。
無理をするな。口に出そうになった言葉を飲み込んで、娘の前へと移動する。
手を差し出せばいぶかしげながらも手をのせる。長椅子から立たせて。
片耳は手で覆い、もう片耳は胸の、心臓の上に来るように引き寄せて頭を抱え込んだ。
さすがに娘は慌てている。

「こうすれば、他の音はまぎれるでしょう」

心臓の音と胸から響く声で、少しでも雷鳴が聞こえなくなれば。
しっかり抱え込むことで、少しでも震えがおさまれば。

目的を表現するとすればこんな感じだっただろうが、理屈抜きで震える猫をなだめたかったのかもしれない。
目を落とせば、染めた髪の毛とつむじが見えるはずだが、こころもち顎を挙げて視線を宙にさまよわせる。
耳には雷鳴が届く。
――まだ、手をどけるわけにはいかない。

身を強張らせていた娘からふっと力が抜けたかと思うと、だらりと垂れていた両腕がそろりと持ち上げられて脇を回り、背中できゅっと服を握られるのを感じた。

さすがにぎょっとすると、顔は見えないが声が聞こえた。

「ごめんなさい。この方が心臓の音がよく聞こえるんです、もう少しだけ……」

猫が少し懐いただけだと思おうとするのに、馬鹿正直に鼓動が早まって上手くいかない。

顎をさっきよりもあげて、決して視界に入れないようにするのが精一杯だ。

耳を覆っている手のひらが固い感触を伝えてくる。伝説の娘に渡される耳飾りだ。

どんな仕組みかは分からないが、これを身につけるだけで言葉の壁が解消できる、神殿の奇跡の品。

これを外せば、言葉は通じない。

覆っている手をずらして耳飾りを外す。

決して顔を見ないように、頭を一層おしつけるように引き寄せた。

今なら、今だけなら。

「――」

娘からの反応はなかった。

どれくらい時間が経過したのか。扉が強めに叩かれて、慌てて拘束を解く。

「雷は遠くにいった。雨もだいぶ弱くなった」

怒ったような副団長の声が、少し開いた扉から聞こえる。
耳飾りを手渡してそれを装着した娘から見つめられる。努めて平常心を保つ。

「さっき、なんておっしゃったんですか？」
「雷の音が違って聞こえませんかと」

部屋を出ると、窓越しには雨が小降りになったのが見て取れる。
副団長に小声で指示する。

「送っていってやってくれ。それから、明日以降の護身術の指導を頼んでいいか？」
「――承知した。お前はこれからどうするんだ？」
「陛下のところに」

副団長はそれ以上は何も言わずに、娘を伴って団長室から消えた。
一人きりになった部屋で、浅ましい己の手を見つめる。

国王のもとに伺候した団長は、仔細を報告する。
その間、国王は何の表情も浮かべずにただ団長の報告を聞いている。
最後まで黙って聞いて、青い瞳をじっと向けた。

「状況は理解した。そなたの妹を使用人棟に向かわせているので、今夜は用意した部屋で休んでもらおう」
「承知いたしました。そして、今後私はあの方との接触を減らそうと思います。
誤解されればお気の毒ですから」

「誤解。――誤解としてよいのだな？」

ほんの少し、沈黙が支配する。

それを団長のきっぱりとした返事が破った。早くなく遅くない、絶妙のタイミングだった。

「勿論です。雷がお嫌いと伺っていたので、ご負担を減らすべく行動したまでです」

国王は探るような視線をよこす。ここ最近の洞察力には驚かされているが、表情を出さない術は自分とて鍛えられている。

視線を泳がさず、むきにならず、ただ静かに国王が探るに任せる。

「そうか。ご苦労だった」

国王に一礼して部屋を出る団長は、背中に国王の視線を感じた。まさか自分が向けられるとは思わなかった感情がそこにある。

表面上は受け流し、扉を出る際に再度礼をする。

重厚な扉が閉じ、廊下を静かに歩く団長の表情から、感情を窺い知ることはできなかった。

娘は侍女に連れてこられた部屋に落ち着いていた。

客室か側妃のための部屋の、予備室ないしは侍女の部屋と思われる。落ち着いた内装と家具が置いてある。あまり広くなく、窓がないのを補うためにともされた明かりが柔らかな陰影を与え、居心地が良い。

侍女にあれこれと世話を焼かれ、夕食と入浴を手早くすませて、いつもよりずっと早い時間にベッドに追いやられている。

使用人棟のベッドとは違う、侍女用としても肌触りの良い、柔ら

かな寝具に眠気を誘われる。
うとうとしながら、無意識に耳飾りに触れる。

「……嘘吐き」

精神的な疲労には勝てずに眠りに落ちる寸前、出てきた言葉は誰にも聞きとがめられなかった。

23　嫌い

窓のない部屋でも、体内時計はおおよそ朝の時間を示すらしい。
目が覚めて、そろりと扉を開けると厚いカーテン越しにほのかな光が入ってきていた。
侍女が用意してくれていたのだろう服に着替え、身支度をしているとノックの後で本人が顔を出した。

「お早うございます。眠れました？」
「はい、すぐに眠ってしまいました」
「良かった。外はいい天気ですよ。――朝食を一緒にどうかと陛下がおっしゃっているんですが」

和やかに侍女を会話をしていたのに、『陛下』と聞いて戸惑うのを感じる。
どれくらい顔を合わせていないだろう。夕食を取った時以来か。
書類や書簡ではやりとりをして、多分団長から報告がいっているとは思う。
それでも直に会うことになると、緊張してしまう自分がいる。
でも、城下に外出した際に色々してくれたことや、昨夜もこの部屋を用意してくれたことにはお礼を言わなければ。

「分かりました。でも仕事に行かないといけないので、挨拶だけになると思います」
「それなら兄から、今日はお休みにしてゆっくりなさって下さいと伝言を預かっています」
「そう、ですか」

娘はぴんと背筋を伸ばし、侍女に案内を頼んだ。

私室へと連れて行かれて、久しぶりに国王と対面する。国王は難しい顔で書類を眺めながらお茶を飲んでいた。娘の入ってきた気配に、書類をテーブルに置いて立ち上がる。

「大丈夫か。気分はどうだ」

国王からいたわられるとは思っていなかったので、少し驚く。ヤマアラシのように針を尖らせて国王と顔を合わせたのに、拍子抜けしてしまった。

「お早うございます。大丈夫です」

「顔色も悪くないな。昨日は随分怖い思いをしたようだな」

団長か？　団長だろう。どこまで国王に話したのだろうと考える。国王の方は礼をして顔を上げた娘をじっと見ている。ややあって、椅子をすすめられて腰を下ろした。

「醜態をさらしました」

「余は見てみたかったぞ。怖いものなど何もなさそうなそなたが、声も出せずにいたと聞いた。――辛かったか？」

皮肉交じりなのに確かに気遣う気配を漂わせている国王は、夕食会の時とは別人のような気がする。

この短期間に、どうして変わったのだろうか。

ヤマアラシの棘を逆立てていたはずなのに、それがぺたりと撫で付けられてしまっているかのようだ。

「まだ日も浅いので。徐々に落ち着くとは思うんですが」

「どうやってやりすごしたのだ？」

「窓のない部屋に連れて行ってもらって、耳を塞ぎました」

付随したことは省いて事実だけを伝える。ふと目を上げると、じっと見つめる国王がにやりと笑った。

「次は兜をかぶるか？　結構音は遮断されるぞ。後は目を閉じておけばよかろう」

城に飾ってあるような鎧兜から、雷雨のたびに兜を奪って装着するのか？　随分と間抜けな格好だ。

「お断りします。音を遮断したら戦の時に大変じゃないですか。手で塞いでいるほうが簡単で効果的でしょう」

「もう立ち直っているのか。まあいい、食事にしよう」

次々に皿が運ばれてきた。国王はさすがに食事姿が優雅だ。きっとどんな粗末な食事が出されても、上等な料理のように食べるのだろう。

「そう言えば、お礼を申し上げていませんでした。今回のこと、外出の時に融通してくださったこともありがとうございます」

「別に大したことではない。余もそなたから菓子をもらったからな。あれが城下で人気なのか？」

「そう聞きました。自分でも食べましたが美味しいと思います」

驚くほど穏やかに時間が過ぎた。国王に問われるままに、元の世界のことも話す。

さすがに為政者だけあって、政治の仕組みについては鋭い質問をされる。一つ答えるとまた更に深い内容を聞かれるといった具合だ。

福祉や教育については、まだ認識がなされていないようなところもある。孤児院のようなものはある。貴族や裕福な商人には個人的

に教育が施されてはいる。ただそれを国家的にやる環境にはない。だから子供が一定の年齢になると、学校に行き長い時間をかけて教育を受けることに驚かれた。

「聞けば聞くほど面白いな。そなた、余の妃になってここに残って知っていることを教える気はないか？」

皿が下げられてテーブルにはお茶のポットとカップが置かれている。

朝の光の中、香り高いお茶の湯気が揺らめく。国王の目は真剣だ、おそらく自分もそうだろう。

「王妃になる気も、残る気もありません」

「なびく気も絆されることもないか。本当にそなたは強情だ」

「なんと言われても、これだけは譲れません」

張り詰めた空気だ、と国王は思った。

少し軟化したかに見えた娘は、しかし恐ろしく頑固で意思を変えない。答えを予想しつつかけた問いだったが、にべにもないとはこのことか。

ただ以前の、脊髄反射のように生じた怒りはわかない。

権力を振りかざすだけの振る舞いが、無益どころか不利益を生じるのを痛感したからかもしれない。

威圧したり脅迫しても、目の前の娘は手に入らないと悟ったからかもしれない。

何より娘の心底呆れたといった風情の軽蔑の眼差しは、受け手の心を簡単に　折ってしまう。

自分を律し、独りよがりでなく他人に向き合うのは難しい。機械的に執務をするほうがよほど楽だ。だが下した命令を実行するのは機械ではない。その考えを基にすると、橋梁工事でも貴族の汚職の

摘発でも面白いように執務がはかどる。
今頃気付くとは。異母弟に反旗を翻されても仕方なかった。

「では、せめて知っていることを教えてはくれないか」
「命令ですか？」
「いや、依頼、お願い、懇願、どれでもいいがそんなところだ」

再召喚まではもうあまり日がない。せめてその間だけでも。
娘はしばらく考えていたが、ふうと小さくため息をついた。断りだろうか。
ここで断られたら、いっそ滑稽だ。とことん伝説の娘に拒まれた間抜けな国王として、歴史に名を残すのは間違いない。

「分かりました。夕方までは仕事がありますから、その後でなら」

聞き間違いかと耳を疑って、しばし呆ける国王を娘は見つめる。
随分と素直になったと思う。それだけに厄介だ。
ヤマアラシの針は今は威嚇のために広がってはいないが、距離感は気をつける必要がある。
再召喚までは波風を立てなくてもいい。知識を得たいというなら協力しよう。

「ありがたい。感謝する。夕食を取りながらではどうだろうか。その後は流動的なので」
「食事の時にお酒は勘弁してください」

感情的になってしまった夕食会が思い出され、双方に気まずい沈黙が落ちる。

「承知した。早速だが今夜の夕食からでよいか？」

「はい、では後ほど」

休戦協定のようなものかと娘は認識した。

最後の好機と国王は認識した。

部屋を出ようとした娘に国王が尋ねた。

「そなたは今でも余が嫌いか？」

振り返った娘は、笑った。

「嫌いです」

笑顔で言い切られて落ち込んだ国王だったが、続いた言葉に顔を上げる。

「大嫌いが嫌いになりました」

娘の最後の言葉は、憎まれた当初からはいまだ低い水準ながらも、若干は嫌悪が薄れたということだろうか。こんなことで喜ぶとはいじましい。だが、ごくごくかすかではあるが希望の光を感じて国王は表情を緩める。

「消えろ、死ねからは改善しているから。とはいえ依然マイナス」

娘の辛口の採点を知らなくて幸いだったかもしれない。

娘は昨日泊まった部屋で待機してくれていた侍女を通じ、神官への面会の許可をとった。

ふってわいた休日だから、有効に使おうと再召喚の研究がどこまで進んでいるか確認をとるつもりだった。しばらく侍女とおしゃべりをしながら待っていると、神殿からの返事が届き午後の時間に面会できる旨が記されている。

「神殿に行くのでしたら身を清めませんと」

侍女に教えられ、昼食時間を早めてその後入浴する。朝とは別の服に着替えて侍女と、二人護衛の騎士がついてきて神殿に向かった。

白を基調とした神殿は、清冽で静かな印象を与える。

神殿の応接室のようなところに通されて、神官を待っていると召喚を行った神官と初老の男性が現れた。その男性を見た途端に、侍女と騎士が跪く。

娘もそれにならおうとしたが、当の男性から止められた。

「神に選ばれし方が私に膝をつかないで下さい。召喚の際は立ち会えなくて今回が初めてですね。この神殿の神官長です」

顔にうっすら刻まれた皺にも関わらず、驚くほど若く見える。その目は慈愛に満ちているようだ。この人の周りだけ春のような気配がすると、娘は微笑む神官長を見つめた。

侍女や騎士にも立つように促し、騎士は扉の両横で待機、その他は椅子に腰をおろした。

「私のわがままでご迷惑をかけます」

そう言って娘が頭を下げると、神官長と神官はそれを否定した。

「全ては神の御心です。それに今まで考えもしなかった再召喚、帰還式の構築に神殿の研究班は活気づいていましてね。あなた様には

感謝しています」

隣の侍女がほっとした様子を見せた。神官長の言葉は随分と重く受け止められるらしい。神官長はその後に多くの予定が入っているからと席を立ち、当初の目的通りに神官に現状の確認をする。

「あと少しで陣の構築式ができあがります。まずは品物で確かめようと思っています」

なかなか順調な様子に安堵する。初めての試みで人間に対してはぶっつけ本番の儀式になる。いくらでも確認して、少しでも安全性を高めて欲しいと祈るばかりだ。

再召喚の話の後で、神官が神殿を案内してくれた。一般の人が入れる区画、王城関係者が入れる区画、王族や有力貴族だけが入れる区画と厳密に分けられているらしい。

「でも伝説の娘は特別です。さすがに召喚の間は封鎖していますのでご覧いただけませんが、その他なら制約はありません。神殿内を自由に動いてくださって結構です」

この神殿は国内の神殿を束ねているだけあって、大きい組織と教えてくれた。

神官長を筆頭に神官や、神官補などが神殿内で生活して、宗教行事を司っているということだ。

神殿関係者は比較的長髪が多い。丈の長い服とあいまって魔法使いに見える。

ただこの世界には魔法はないので、そう言っても通用はしない。

それでも娘は祈る。こちらの神への信仰は、持つには至らないので神官に。身勝手なのは十二分に承知しているけれど、無事に帰還できますようにと。

24　奔流

雷雨から日は過ぎた。

団長の側に近寄るなが最近の団員の合言葉になっている。知ってか知らずか、当の団長は執務と訓練と地方の騎士団との連絡など精力的に働いている。とにかくじっとしていられない何かのように、常にやるべきことを無理やりにでも見つけて取り組んでいる。

「おかげで仕事がはかどって俺は楽で嬉しいが、訓練は少し手加減してやれ」

少々呆れ気味に忠告する副団長をちらりと見て、団長は書類に目を落とす。

「考えておく」

このところ執務室か訓練場かのどちらかにしかいないようにして、時間を過ごしている団長の分かりやすい行動に副団長はため息をつく。

決して馬場や食堂、護身術の訓練をしている部屋には近寄ろうとしない。おかげで団員は団長からの本気の訓練を受けて、泣きが入るほどに鍛えられ訓練の終了時刻にはぼろ雑巾かと思うほどに疲弊している。一番動いているはずの団長だけが立っていたりするのだから、恐れ入る。

そして、来客がこようとも決してお茶を頼まずに自ら淹れる。そのためにお茶のまずいこと。副団長は地味に被害を被っていた。副団長が淹れようかと申し出るのに、何故か自分で淹れてそれを飲んで眉をしかめるのだから世話はない。

「お前、変な意地を張るのはよせ。あまりに徹底しているからかえって不審がられているぞ」
「意地など張っていない。今は陛下にとって大事な時間だ。それを応援しているだけだ」

国王と団長は学友という名の幼馴染であったせいか、変なところでもよく似ている。
違うのは権力の使い方だろう。国王は命令で、団長は主に武による技量で相手を従えて来た経過が異なるくらいだ。
話題にするとまた機嫌が悪くなるのは承知の上で、それでも必要なので口にする。

「今日は護身術をやった。油断を誘えればかなり効果的な攻撃ができるだろう。他人に暴力を振るうのは慣れていない様だが、甘いことは言っていられないのも承知されているようだ」
「……そうか」

副団長の言葉を聞き漏らすいまいと集中しているくせに、返事はいたってそっけない。忠義に凝り固まって動こうとしない親友に、内心度し難いと感じてしまう。
雷雨の際のことは今では騎士団では知らぬ者がいない。それは娘を狙う騎士団員には、痛烈すぎるほどの牽制になった。あの行動だけで団長は見事に虫除けの役目を果たしたといえる。
その後で、徹底的に娘を避けて八つ当たりのように訓練に没頭したので、今は違う噂がささやかれている。団長ですらと今度は諦めから、娘に近づこうとする者がいなくなったのも皮肉な話だ。
当の娘は淡々と食堂の仕事をこなし、休憩時間に乗馬をしたり護身術を練習したりしている。表面上は前と変化はない。

ただ馬の微妙な機嫌すら当てる副団長は、上手く隠しているが娘が少し変わったのに気付いている。

それは護身術の指導が変わったと聞かされた時であったり、従騎士がお茶やお湯を取りに厨房に顔を出したのにいきあった時であったり。何も言わずに食事の下ごしらえと、皿洗いをしているが、団長同様に力が入っていて異様に早く終わっている。夕刻、騎士団本部から使用人棟に足を向ける際には、少しだけうつむいたかと思うと顔をあげて足早に去っていく。

その足取りが使用人棟に近づくにつれ、重く鈍くなるのは報告を受けていた。

団長の妹に探りを入れると、陛下との夕食の前後で気分が塞ぎがちに見えるらしい。陛下と娘の確執は多少なりとも承知しているので、毎日陛下と顔を合わせる憂鬱が日常にも及んでいるとするのは自然だ。それだけでないように思えるのは、親友贔屓にすぎるだろうか。

だからといって進展があるはずもないのも承知している。

全く厄介な。

控えめに団長室の扉が叩かれ、入室の許可を得た従騎士が伝言を書いた紙を団長に渡す。

それを見た団長が立ち上がって外出の用意を始めた。

「城下に出る。馬で行くからすぐに戻る」

「どこに行く気だ？」

「注文していた品を受け取りにいく」

手短に言って外出する団長を見送り、仕上がった書類を確認しながら気を揉む。

「あの様子じゃ、とことん酒に付き合う必要があるか。あいつの好

みの酒を樽で仕入れさせておくか」

副団長は馴染みの酒場を思い浮かべながら、一樽、いや二樽で足りるかと新たな悩みも抱えた。

神官は娘が覚書を読むのを見つめていた。夕方、仕事を終えた娘がわざわざ神殿まで足を運んで、門外不出で神官しか読むことを許されなかった歴代の召喚についての覚書に目を通している。最近のものから遡って読んだ娘が、顔を上げた。

「どの召喚も大変だったのですね」

「はい。状況を受け入れるまで、国王陛下を受け入れるまで、この世界に馴染まれるまでそれぞれに」

「でも、帰還を試みた例はないのですね」

覚書には、伝説の娘と称された娘さん達の召喚の騒動が記載されている。

「それが分からない。何としても帰ろうと思わなかったのでしょうか。絶望がよほど大きかったからですか？」

「戦、疫病、迫害など王妃になった方々の証言からは、背景は様々ですね。お辛い思いを抱えていたのは間違いないですが」

娘さん達の名前や年齢、元の世界の名称や背景、相手となる国王達との関係などが記された覚書はなかなかに突っ込みどころが多い。

かなり強引に迎え入れた例や、反対に気持ちがほぐれるのを年単位で待った例など国王の性格によって対応が異なっている。どれを読んでも今回のようにいきなり牢に入れたり、記載していないだけ

かもしれないが暴言を吐いた例はないようだ。召喚されたのは国王のせいだと、国王を害したり逃亡した例もない。
それでも無理やりに召喚されてしまった娘達の混乱や絶望、悲哀や怒りはかなり率直に書かれている。

「ここだけの話、再召喚と帰還の成功率はどれほどと思われますか？」

神官は理知的な顔立ちから温和な表情を消す。

「元の世界への本人の執着、元の世界でご本人を真剣に探し求める人達の感情が成否を左右すると思われます」

元の世界で自分に愛着を持ってくれている人達。最も強く持ってくれるだろう家族はいないが、友人や親類の人達ならあるいは。自分の執着なら間違いなくある。
読めなくて厄介なのがこちらの世界の人の感情だ。召喚の要素のように、一瞬でもここが嫌いでここに絶望していれば離れやすいだろう。こちらの人間が自分に執着していたら、帰還の障害になるかもしれない。
いうなれば綱引き。どちらの引く力が強いかで変わってきそうな気がする。
そして、迷惑極まりないが最も執着を見せている人物を思い浮かべてため息をついた。

「食事が口に合わないか？」
「とても美味しいです、むしろ口を合わせたいくらいです」
「では何故そのように難しい顔をしている」

「元からです」

飢餓に苦しんでいた娘さんは、出された食事に泣いたそうだ。殺されかけていた娘さんは、守られる安心感に国王の手を取った。帰りたいと泣いた娘さんは、子供ができて諦めた。その子供が目の前にいる国王か。

野菜とともに蒸し焼きにされて、ソースのかけられた魚を口に運んで機械的に飲み込みながら娘は憂鬱だった。

歴代の娘さんのたどった王妃への道に抗うことに迷いはない。

国王との精神的な攻防は静かに激しさを増している。国王は娘の動揺を誘い、その隙をついて距離を詰めようとする。前は傲慢さから気持ちを読もうともしなかったのが、今は承知の上であえて読もうとせずに主導権を握ろうとしている。

せめてもの救いは二人きりではなく、弟王子と侍女が同席していくれていることか。

その王子が場を取り繕うように、質問をする。

「政治を国王がやっていないということですね」

「国民から選ばれた政治家が、地方や国の政治を行っています。定期的に選挙をしてある程度の民意を反映させます」

「民が選ぶか。身分がないからできることとはいえ……」

「陛下が国の長、領地を治める貴族が地方の政治家と思っていただければ。ここでは世襲ですが、それを選挙で選んで据える形です。後継者が無能な場合の混乱を防いでくれますが、選挙の前後で言動が変わっても任期中は交代させられない不利益はあります」

随分とお堅い話題を夕食のたびにしている。詳しい知識があるわけでなく、表面的なことしか答えられないのに彼らの食いつきがよいのは為政者だからか。王子はゆくゆくは宰相を目指しているらしく、放っておけば延々政治談議になってしまう。それに国王が合い

の手を入れたり更に質問したりして、会話に加わってくる。
最後には必ずこのまま残らないか、嫌ですの応酬になる。答えは決まっているのだから聞かないで欲しい。その様子を王子と侍女が気遣わしげに見守る。
毎夜、精神的に緊張する時間を過ごして疲労は蓄積されていく。

ある朝、下働きの姿で騎士団本部に向かう娘は使用人棟を出ようとした途端に、突き飛ばされてよろめいた。今までいた場所に上から落ちてきた何かが大きな音をたてて砕けた。上を見ても人の気配はなかった。突き飛ばしてくれたのは騎士で、護衛についてくれている人だろう。
険しい表情で上を見上げていた騎士は、もう一人に指示して使用人棟に入っていかせた。
騎士が腰をおろして砕けた物を確認する。何かの置物のように見えた。

「お怪我はありませんか？　このまま騎士団本部に行っていただくのが安全かと思われますので、今日は同行させてください」

大きな破片を拾い集めて布に包んで、騎士は娘に申し出た。それに頷いて、一緒に騎士団本部への道をたどる。今日は下ごしらえも人の目のあるところでやるようにと提案し、騎士は包みをもったまま消えた。おそらく上に報告に行くのだろう。
偶然でなく、自分が狙われたのか。
誰が、何のために。慣れた手つきで野菜の皮をむきながら考える。

報告を受けた団長と副団長は厳しい顔つきになった。破片から組み立ててできたのは陶製の置物で、誤って窓から落ちる類とは思えない。ほどなく、使用人棟を探らせた従騎士も戻ってきて誰がどこ

から落としたかは判明しなかった旨を報告する。
　両者を下がらせて襲撃者について話し合う。

「やり方が稚拙な気がするが、あえてあからさまにしている可能性はある」

「一番効果的な毒殺が難しいからか。今は朝と昼はここの厨房で作ったものだし、いわば騎士団員が毒見をしている状態だ。夜は陛下と共にだから、食材や料理はなおさら厳重に管理されている」

　使用人棟と本部の間には護衛がついている。国王に呼ばれれば侍女が一緒で、やはり護衛が従っている。一人になる時間はほぼ皆無に近く、それゆえ隙がない。普通に考えれば手は出してこないと思われた。
　だが、その日を境に公然と娘を狙う動きが表面化した。
　翌日は騎士団本部に匿名で花束が届いた。美しい薔薇だったが、棘が抜かれていない。不審に思った一人が調べると、果たして棘に毒物が塗ってあった。
　別の日、ついに夕方の帰路で覆面姿の襲撃者が現れた。護衛の騎士と応戦し、負傷者は出したものの撃退はできた。襲撃者の一人を捕えたが、尋問の前に自害し素性も黒幕も不明であった。

「明日からは下働きの仕事には行くな」

　夜、国王から命令され、さすがに娘は黙り込む。目の前で騎士が負傷した生々しさは脳裏に焼き付いている。動き回れば周りに迷惑がかかる。ここまでくれば国王の言うことがもっともだと受け入れざるを得ない。

「余の近くの部屋に移るか？」

しかし国王の提案は計画に支障をきたす。そのままなし崩しになるのも怖くて、娘は拒否した。

この期に及んでも頼ろうとも守られようともしない娘に、国王は苛立つ。未だに信用されておらず、警戒されていることの現れだからだ。

「余はそなたを守りたいだけだ。余の側の方が警備が厳重だ」

それでも嫌がるそぶりを見せた娘が部屋を出ようとしたのを、国王は行かせまいとその手首を捉える。止めようとした王子と侍女に、外で待機するように命令し出て行かせた。二人が出ていくのを見つめて、横を向いていた娘の正面に移動して視線を合わせる。

「何故受け入れぬ。その方が安全なのは理解しているだろう?」

「あなたに囲われる気がないからです」

「どこまで強情なのだ。死んでもいいのか?」

怯みながらも視線を逸らせた娘を、国王は抱きしめた。腕にすっぽり収まる細い体とその柔らかさにそんな場合ではないのに、しばし陶然となる。

手を使って胸を押しやろうとした娘が顔をあげ、視線が合う。強い視線を伴う黒い瞳と対照的な赤い唇が目に入る。

「陛下、放してください」

「嫌だ」

低く、掠れた呟きを発した国王の唇は娘の唇を塞いだ。

25　代償

頭の中に団長の声が聞こえる。
『正面で手が自由にならなければ』
まず、重ねられた唇を思い切り噛んだ。顔がのけぞったところで頭突きをする。国王の歯が当たって娘も痛いが、国王の唇にはダメージがあったようだ。口を手で覆って上体に隙間ができたところで下を向いて足を踏みつける。肘を広げて拘束から抜け出し真っ直ぐに扉に向かう。
『とにかく一瞬でも戦意を喪失させて、あとは逃げること。道すがらで武器になりそうなものを手にすること』
その教えに従い、肉を切り分けるナイフを手にとった。

「待て。待ってくれ」

背後で聞こえる国王の声にも足を止める気はまるでなく、開けた扉の向こうには王子と侍女が心配そうに待っていた。

「どうされたのですか？　顔が赤いですよ」
「部屋に戻ります。もうここには来ません」

侍女から言われても、確認する余裕すらない。
小走りに廊下につながる扉に手をかけて出ようとした時、国王の命令が響いた。

「部屋から出すな。……頼む、話を聞いてくれ」

扉の両脇にいた近衛が、王命には逆らえずに持っていた槍を扉の前で交差させた。

足止めされた娘は、近づいた国王が肩に手をかけたタイミングで振り返って平手を見舞った。あえて受けたのだろう。よけもせず大きな音を響かせ、手形を張り付かせた国王は静かに立っている。ただ目だけが、感情をたたえている。

「陛下が」

娘は後ずさる。すぐに扉に背中が付き、そこで体を支える。

「次の人のために、少しでも変わればと思ったのは間違いでした。結局、自分のしたいようにしか行動しない。私の気持ちももうすぐ帰る事情も分かっていて、どうしてこんな真似を」

「どうして。そなたこそ、自分のしたいように行動しているだろう。残れ、守られろと言っているのに頷こうとしない」

「私はここには残らない。守られるにしても、あなたの腕に囲われてなんて真っ平です。大人しく部屋にこもるつもりではいます」

一歩国王が踏み出した。

「あなたは私の外見しか判断しなかった。その後も自分勝手に気持ちを押し付ける。それでも、少しは良くなったかと思ったのに」

瞬間国王の顔が歪む。それでもまた一歩近寄ってきた。

「そうだ、外見でしか判断しなかった愚か者だ。その後も傷ついたそなたを思いやろうともしなかった。だが折れないそなたの強さに、余を嫌っていても筋は通そうとするそなたの生真面目さに惹かれた。好きな女が危ない目に合っている。自分の側で、自分で守りたいと思って何が悪い。

これも気持ちの押し付けだろうが偽らざる本音だ」

娘は王子と侍女に目をやった。二人とも口を挟めずに固唾を呑んでいる。扉横の近衛も同様だ。国王が近づいてきたため槍を戻している、国王に視線を戻した娘は、後ろ手に扉の取っ手を探った。

国王は慎重に歩を進めた。周囲の人間はとっくに視界から消え娘しか目に入らない。

「私は嫌いと」
「承知している」
「今は大嫌い」
「構わない」

きっと睨みつけてくる娘の視線は、感情は自分だけに向けられている。それすら嬉しいと思うようになったのが不思議だ。今までなら不敬な、不遜なと切って捨てていたのに。

「私は帰るんです。あなたのお相手じゃありません」

――帰さない、とは言えなかった。それを権力を使って実行すれば唾棄すべき卑怯者になる。だが帰したくない。本当はそれも無理なのも分かっている。それでも気持ちは伝えようと。

「余はそなたが好きだ、愛している。伴侶になってほしい」

告白を受けた娘が見る間に真っ赤になった。その顔が泣きそうになったが少しだけ目をつぶって気持ちを落ち着かせ、それと同時に取っ手を回す小さな音がした。目を開けた娘ははっきりと告げた。

「私はここからいなくなるんです、それは次の人に言ってください」

ナイフを傍らの近衛に押し付けて扉を開け、滑り込むように廊下に出て行き、そのまま駆け去ってしまった。

室内には気まずい沈黙だけが落ちた。主たる国王は頬に手形のあとをつけ、唇は腫れて端は切れている。王子は近衛に他言無用を誓わせた上で、侍医を呼ぶように手配した。奥の部屋に移動して侍女は濡らした布で唇を拭う。傷に当たったのか国王が顔をしかめた。

「誰か、付いているのか？」

国王の問いに王子が答える。

「はい、襲撃のあとから護衛の数を増やしています」

「そうか、ならいい」

「よくありません、兄上。一体何をなさったんですか」

侍女が頬を冷やす氷を取りにいくために氷室に向かうのを待ってから、王子は国王に問いただす。国王は頬を濡れた布で押さえながら、笑いを抑えられずにいた。笑うと唇が痛み引きつる。

「抱きしめて、口付けて、反撃された。護身術は結構身についているようだ」

「笑い事では」

「さすがにそなたの耳にも襲撃の件は入っているだろう？　まず、そなたではないとしてよいか」

青い瞳を真っ直ぐ向けられ、王子の目がすがめられる。

緊張が二人の間に生まれ、唐突に消える。消したのは王子だ。

「私がやるのなら、まず兄上ですね。そして兄上の差し金でもない

のですね」
「当然だ。なぜあちらが狙われるのか理解に苦しむ」
「同一人物とすると、あの方が帰還に傾くのを促しているとしか思えないのですが」
「再召喚と帰還を知る者はごく少数だ。知っていれば行う意味はないし、知らないのであっても意図が分からぬ」

二人してしばし考え込む。
程なく侍女が氷水を持ってきたのでそれで頬を冷やしながら、可能性を探る。

「叔父上はどうだ」
「王城内に内通者がいれば情報は得られるでしょう。ただ、最初の疑問に戻ります」

娘を執拗に排斥しようとする動きが東の不穏な動静と繋がるのか。東が武器や傭兵を抱え込んでいるのは間違いない。探ったところではすぐに内乱を起こせる規模ではない。むしろ、こちらを挑発する姿勢すら見受けられる。
王都や国王を多方面から揺さぶるのに、娘を使うのも妙な話だ。娘の帰還が決まっている以上、駒にはなりえないし娘を操るのは骨が折れる。

「叔父上の側に潜ませている者からの報告は？」
「相変わらず、領地での足元固めに力を注いでいると。信仰心も深く、領民にも慕われているよい領主ぶりだそうで」
「ふん、父の弟がそんな殊勝なはずがない」

義弟を唆したであろう叔父は尻尾をつかませず、領地で着々と力を蓄えている。

東の騎士団への人員はさりげなく増員し、事が起こればすぐに王城に伝達するように複数の連絡路も確保している。それでもなお燻る不穏な空気は、儀式への緊張も加わって国王をこのところ苛んでいる。それに加えての娘への襲撃だ。

とりあえず手の届くところで守っていたいだけだったのだが。

「儀式まであとどれくらいだ？」

「秋の祭典に合わせますからね。祈る人が多いほど召喚の精度が上がるらしいので、あと一月です」

「それまであの娘が大人しくしているのだろうか」

「さて、それは。兄上がまた揺さぶりましたから」

顔を横に向けた国王は、悪戯を思いついたような表情で弟王子に提案する。

「ここに来ないのなら、こちらから出向くか？」

「……兄上」

「分かっている。冗談だ」

こんな時に冗談は止めてほしい。弟王子は切実に思った。

侍女は国王をたしなめてから使用人棟に足を運んだ。娘の部屋の前で、護衛に軽く頷いて扉を叩く。

娘に声をかけて、部屋に入れてもらった。狭い部屋のベッドに娘は腰掛けていた。そこにさっきまでの元気はなかった。

「陛下の具合はいかがですか？」

「頬は冷やしています。唇と口の中は知りません。しばらくは食べ物がしみるとよいんです」

「足は？　思いっきり踏んだんです」
「あら、足もでしたの？　陛下は何もおっしゃいませんでしたから気付きませんでした」
さらりと侍女は言い捨てて娘に笑いかけた。
侍女の茶色の髪の毛と優しい瞳が、娘にはしばらく見ていない面影と重なる。さっき頭によみがえった声も久しく聞いていない。
「食堂へはもう行けません。再召喚までここにいます」
「こんな狭い部屋にこもられるのですか？　それこそ本宮にいらしては」
「陛下の近くは、嫌です」
きゅっと自分の腕を交差するように抱えた娘は、呟く。国王の告白は目の前で聞かされ、その前の行為もおぼろげながら悟っている侍女は娘の状態を困惑、混乱と見てとった。先程の名残か頬がうっすらと赤らみ、同性からも魅力的に映る。
だからといって娘の厚意につけこんだ国王のやり口が赦されるはずもない。
「驚かれた？」
娘は少し迷うようだったが、頷いた。
「私が襲われた件で、動き回れば隙を作って襲撃されるのは納得しました。でも陛下の側には……」
「そうね。この部屋では誰も隠れられないし、壁伝いにも上がって来れそうにないからこちらでもいいかもしれないわ」
食事にだけ気を配れば危険は少ないはずと侍女は考える。名目を

療養あたりにすればあと少しの間なら、部屋にこもっていても不自然ではないはずだ。部屋周囲の警備は兄が上手くやるだろう。そこまで考え兄の様子に肩をすくめる。

全く陛下といい、兄といい好みが似通うとは思っていたのに、ここまでとは。一人きりで異世界に放り出され、初っ端から辛い思いをしたこの娘に兄が惹かれるのは分かる。なよやかに見えて芯が強いとなればなおさらだ。

でも陛下。あんな熱烈なことを言うのなら何故最初に優しくしてあげなかったのかと、自分が召喚に立ち会っていたらなんとしても陛下の口を塞いだのにと悔やんでしまう。伝説の娘を抜きにしてもこの子はいい子だ。知己を得られて本当によかったと思っている。

そっと忍ばせてある首飾りを服の上から触りながら、妹のように思ってしまう娘をいじらしくていとおしいとしみじみ感じる。

こうなったら、陛下や兄は知ったことではない。娘が幸福であればいいとさえ思っている。

「退屈しのぎに沢山本をお持ちしますね。ほかに何か要りますか？」
「裁縫道具や布などいいですか？　手芸でもしようかと」
「お安いご用ですわ」

娘と女らしい細々としたことを決めて、部屋を出る。向かいと隣の扉は少し開かれていて常駐の護衛の気配を感じる。

祭典まであと一月。何事もないようにと祈りながら、国王の顔を思い出しておかしくなる。女性から拒まれるのもおそらく攻撃されるのも初めてだろう。しかもその後で平手を食らっていた。

やったことは情けないけれど、娘の怒りをきちんと受け止めたのは傍から見れば最低限の誠意に見えた。本当に誠意があればそもそも無体はしないというのは承知の上だけれど。

「少しは思い知ったかしら。自己中心で傲慢では人はついてこない

ことに」

人に聞かれれば不敬罪。だからそっと呟く。外見だけは立派に国王なのに、中身が歪んでしまったかつての『お兄さん』。綺麗に笑う太陽と空のような色彩は子供心に憧れた。平凡な茶色の自分と比べると羨ましいほどだ。そこに寄り添う夜のような色彩を想像する。お似合いの二人だ。内面も似ているように思える。それがこじれるとは上手くいかない。

国王の言動は女性の敵としていいから、擁護するつもりはない。ただあの情熱的な告白だけは、ほんのちょっと素敵だと思ってしまっただけだ。

気を取り直して本宮に戻る。もう一回陛下には『きちんと』お話しなければと物騒な笑顔を浮かべながら歩いていた。

娘はベッドの上に座り込んで壁を背に夜空を見上げる。唇はさっきの感触を拭い去ってはくれない。

思い出すと体温まで上がってしまうので、枕に顔を埋めて耐える。

「どうして誰もかれも。こっちの世界への引力なんて要らない。私への執着なんて要らないのに」

国王のあの様子では再召喚をしないのではなかろうかと、眠れぬ不安な夜を過ごした。

26　祭りの前

王城も城下の祭典へのにぎわいを受けて、どことなく浮足立っているように思える。

時間だけはたっぷりあるので、娘は下働きや侍女の友人達からの手芸を請け負って、飾り物などを作っていた。祭典の外出着の丈を変えたり、裾にフリルを足したり、共布でリボンを作ったりだのだ。彼女達の仕事が終わって寝るまでの間に、彼女達の部屋に行っては請け負った品物を渡したり、細部への指示を受けたりしている。

時間も潰せて気もまぎれるので娘はこの手仕事を楽しんだ。

食事を持ってきてくれる侍女によれば、秋の収穫に合わせてやるこの祭典は春のものと並んで最も規模の大きなものらしい。

「国の内外から人が集まるんですよ」

それが三日間続き、再召喚はその中日に行うと教えてもらった。いよいよだ。

娘は二つに分けた品物を眺める。こちらに着てきた服と携帯、もう一つは小物と髪染めに加えて最低限の着替え、皮袋に入った貨幣と小さな短剣。

「こっちはできれば使いたくないな」

逃亡用の荷物を、こもっている間に作った布製の鞄に入れながらひとりごちる。そして携帯の電源を入れて保存してある画像に目を通す。日常に撮影した写真や動画、もらったメール。たわいないそれらが胸に迫ってくる。

「帰ってちゃんとけじめをつけないと。法要も納骨も……」

ここに来てからの月日を考えるとたまらなくなる。きっと親類がよいようにしてくれているとは思うけれど、自分も行方不明として捜索願が出されているかもしれない。帰れたら、そちらの対応も待ったなしなはずだ。

ようやくここまできた。国王からあんな告白をされて、再召喚をしてもらえないのではと心配していた。侍女からそれはないときっぱり否定され国王からも再召喚についての書簡が届いたことで、それは杞憂に終わった。国王はどうやら侍女から相当つるし上げを食らったらしい。

娘にとっての国王は最初から最後まで謎だ。人を人と思わない傲慢さは、国王という身分からは不思議ではないのかもしれない。

死ねと言った後で拾い上げる真似をして、揚句好きだと言われても訳がわからない。国王から好かれる振る舞いなどしていない。むしろ嫌われるようなことばかりだったと思うのに。

心は頑ななまでに帰還に向いている。国王と人生をともにする気にはなれない。

それを承知の上と国王は告白してきた。どうなるものではないのを知っていながらの告白は、自分勝手にうつる。ただ気持ちを伝えたいだけとすれば、その欲求は分からないでもない。応えられないけれど。

「再召喚か……」

ベッドにごろんと寝転んで、誰も聞く人がいないので最近増えた独り言がでる。

枕を抱えて横向きになり、荷物を見つめる。帰れなかったら、ここから消えられても元の世界ではない世界に飛ばされたら。口にしたら現実になりそうでそれらは考えるだけだ。そもそも召喚の原理自体よく分からないのに、今回は同時並行での帰還だ。

神官からは儀式の前にこちらに召喚できた品物で事前に試してみると言われている。どうやって元の世界に戻ったのを確認するんだろう。素朴な疑問には、軌跡を追ってみると返事があったがどんなものなのか想像がつかない。

自分にも応用されるのなら、元の世界の座標とか自分の位置が把握されてしまうんだろうか。ＧＰＳのようなものかと勝手に解釈しているが、実際は分からない。神殿の研究班は今回のことを千載一遇のチャンスとして、血眼で研究に勤しんでいると聞いている。

召喚や再召喚が普通に行えるのなら、異世界からの発明品とか武器が召喚できるのかと危惧しているが、そこは伝説の娘関連の制約がどうとかあいまいなようだ。

失敗した場合のことはできるだけ考えない。そちらに引きずられてしまう恐れがある。今は心を強くして、元の世界へのベクトルを大きくしなければ。誰も見ていないのにぶん、と力強く頷いて荷物を仕舞った。

団長は執務をしながら、時々机に視線を落とす。正確には机の引き出しのあるところに。

最後の書類を仕上げてペンを片付け、肩をほぐして伸びをする。昼食を取った後は祭典の警備の最終確認と、中日の再召喚の儀式への立会い確認をしなくてはならない。気付けば祭典ももう間近だ。

そこに従騎士に籠を持たせた副団長が入ってきた。娘がいなくなっても食堂に足を運ぼうとしない団長のために、こうして昼食を持ってくるのだ。籠から出されたものを目にして、団長は少しだけ眉をしかめた。

「す、すみません。お気に召しませんでしたか？」

睨まれたと思ったらしい従騎士が見当違いの謝罪をするのを、慌てて打ち消す。

「いや、簡単に食べられて美味いと気に入っている」

団長の言葉にほっとした表情を見せて、従騎士は支度を再開した。お茶は団長が淹れて従騎士は部屋を出て、副団長と二人きりになった。副団長は今日の昼食を手に取り、団長を見やる。

「お前、まだこだわっているのか？　昼食の内容に不機嫌になるなんてな」

「そうではない」

それは娘が以前に作って持ってきた軽食だった。今はそれが改良されて、騎士団の昼食メニューになっている。手軽に沢山の食材を一度に食べられると好評で、厨房のまかないから騎士団の正式メニューに採用されたものだった。

「美味い。これがあの方の置き土産になるかもな」

「……そうだな」

もそもそと口に入れる団長は機械的に返事をする。今のこいつに尻尾があったら、下向きでうなだれているだろうと副団長は想像してもあまり可愛らしくない光景に、顔をしかめた。どうせ考えるなら馬のことだけにしたいものだ。

「で、いつ渡すんだ？　机の引き出しをちらちら見てはため息をつかれると、こちらが滅入る」

「俺はそんなことはしていないぞ」

「自覚なしか？　ますますお手上げだな。ほら、午後は本宮に行くんだろう。さっさと渡して来い」

副団長から背中をおされて昼食を終えた団長は机に戻る。かけていた上着を羽織り、帯剣する。そして一番上の引き出しをあけた。いささか無骨に包装されているそれをしばらく眺めてから手に取り、上着のポケットに収めた。

「行ってくる」
「ああ。なあ、言ってくるでもいいんだぞ」
「抜かせ」

軽く睨まれても副団長は真面目に見返す。冗談にでも紛らわせないと、澱のように溜め込んでしまうのは承知しているからだ。

「祭典前に飲もう。一晩中でも付き合うぞ」
「男に付き合ってもらって何か楽しいか？」
「うん？　女に付き合ってもらいたいのなら誰かに声を」
「止めろ、俺が悪かった」

団長室の窓から本宮へと向かう後姿を眺めながら、団長の淹れたまずいお茶を飲む。

祭典が始まると騎士団は問答無用に忙しくなる。要人の護衛から祭典への配置、王城内外の酔っ払いや騒動の対処など内容は多岐に渡るが、その三日間は春の祭典と同様に最も忙しい日々になる。

今回はそれに加えて神殿での儀式がある。団長はそちらに取られてしまうので、副団長がその他の指揮を執らなければならない。

「今回の祭典は荒れそうだ」

色々な意味で、と呟いて副団長は我慢できずに自分でお茶を淹れなおした。
こんな渋いのを飲んでいたら口が曲がる、と秀麗な顔に似合わない悪態をつきながら。

宰相や国王、弟王子と祭典関連の確認事項に承認を受けながら、団長は国王の様子を観察する。
金色の髪の毛も青い瞳もきらめいているはずなのに、表情が冴えないせいかくすんで見える。このところ祭典のための前倒しとしても根をつめて執務をしていると聞いている、そのせいか。ふと目の下のくまに気付く、眠れていらっしゃらないのか。
国王も話したいことがあったのだろう、ひと段落した後で二人きりになった。

「陛下、お疲れのご様子ですが」
「そうか？　夜あまり眠れないからその間も執務をしているせいかもな」

御身お大事にと言いかけて青に見つめられる。
側についている時間は長いのに、最近急に意外な表情を見せるようになった。今もそうだ。

「陛下？」
「何かしていないと、どうにかなりそうだからな」

大人びた表情で国王が呟いたのに、胸を突かれる。そう思ったのに国王の言葉は逆だった。

「いつまでも子供で、いい加減嫌になる。どうすれば一人前になれ

るのだろうか」
「陛下が子供、ですか？」
「子供だろう。どれだけあれを傷つけて振り回しているか。自己満足で気持ちも押し付けて、大人のすることとは思えない」
だが、と続けた国王は楽しそうでもある。さっきの憂いを帯びた表情から、変わっていくのに目が離せない気がする。こんな顔もなさるのか。
「目標は定まっているから。あとは相応しくあるために努力しないといけないが、これがまた難しい。空回りして後退している」
「そうおっしゃる割に楽しそうですね」
「命令では手に入らないのだ。努力が、しかも報われそうにない努力が必要とはな」
落ち込んでいたかと思えば、妙にすっきりした顔にもなる。団長はもしかしたら今の自分も副団長からは同じようなものなのだろうかと漠然と思った。もし副団長がいれば、お前は落ち込んでいるだけだろうと突っ込んだだろう。
「そういえばあれに護身術を教えたのはそなただったな。いや、あれは効果的だった」
「へ、いか」
「先日ようやく唇の腫れが引いた」
国王と娘の一件は王子と妹から聞かされてはいたが、当の本人が怒りもせずにいるのが信じられない。
いかに伝説の娘とはいえ、国王を害してはならないはず。それをとがめないのは国王の想い故か。

「もうすぐ祭典だな。これが罰なのだ。傲慢な自分への罰なのだ」

自分に言い聞かせるように、国王が一言ずつ区切って言葉を口にのせる。あんな最初でなければ、あるいは今頃はと思っているのだろう。

「いや、最初に暴言を吐かなくてもあのままの余なら、遅かれ早かれあれには見限られていたはずだ。それなら余の欠点を自他ともに認めた上で帰すのが、もっとも皆のためになるのだろうな」

そのために神が選んでよこして、また連れ去ろうとするのか。

国王は成長するだろうが、同時に痛みも抱える。半分は自業自得としても半分は残酷な仕打ちに思える。

団長は黙って国王に相伴する。そして上着の上から包みをそっとなでた。

さっきまでは自分で渡すつもりだったが。

夜、娘の部屋を訪れたのは侍女だった。

「これを兄からことづかりましたの」

そう言って渡された小さな包みを侍女もいる前で開けると、中から騎士団の紋章をかたどった装飾のハットピンのようなものが出てきた。

これは、あの武器屋で頼んだ品だ。騎士団の紋章は精巧に作られていて、中に黒い石がはめ込まれている。侍女も横から見てできばえに感嘆の声を上げた。

「これはどう使うんですか?」

侍女の前で服の胸の布をつまんで、針を刺す。布をくぐらせて表に出てきた針先に外したキャップをはめる。

「まあ、素敵です」

ただ下働きが騎士団の紋章のピンをつけているのは違和感がある。娘は雑貨屋で買っておいた鎖をとり、装飾の透かし彫りを施した部分に鎖を通して首からかけた。服の下にいれこめばいつでも身につけておける。

「いい記念品になります」

服の下から取り出して、娘はそれを眺める。召喚されてからの月日、自分がここにいた証が手の中にある。これは再召喚でも身につけて元の世界に持って帰ろうと考えた。

そしてこれを侍女が持ってきたのが残念だった。団長には、副団長や騎士団の人達、食堂の監督や一緒に働いた人達にもきちんと挨拶をしたかったのにそれはかなわないことがはっきりしたからだ。

再召喚がどう転ぶか分からない。ただ自分なりのけじめとして挨拶はしておきたかった。

侍女が出て行った。鎖がしゃらりと音をたてて首周りをすべる。

全ては祭典で。運命の日はもう間もなく。

27　ここから

いつもよりずっと早く目覚めて娘は窓から外を見る。
祭典の中日、いよいよ儀式の日だ。秋の澄んだ空とひんやりした空気はいつもと違って感じられる。眼下の城下も昨夜遅くまでの喧騒から、街全体もつかれて眠っているように見える。
娘は一つ、深呼吸をした。
儀式は夜に近い時間帯に行う。それまでの時間をどう過ごそうか。何をしても手につかないし、異常に動悸もしている。緊張からかいつもより喉が渇く。まるで試験の朝のよう、そんな自分に苦笑してしまう。潔斎食とでもいうのだろうか、動物をつかっていない食事が差し入れられてそれを食べる。
結局落ち着かないままに時間が過ぎて、午後の遅い時間に侍女が呼びにきた。

「神殿に移っていただきます。そこで湯浴みと夕食をとっていただきます」

荷物を持って部屋を出る。その瞬間首を巡らして部屋を見回す。

「まあ、兄上」

侍女の言葉にはっと前を見ると、騎士団団長の正装をした団長が立っていた。

「神殿までの護衛をおおせつかった」

短く言うと周囲に視線を走らせて、侍女と娘を促した。
本宮から神殿への長い道のりを、言葉を交わすこともなく歩いて

三人は神殿に到着した。王族の儀式用の控室だという部屋に案内されると、侍女は湯殿の様子を見に出て行く。

部屋に沈黙が落ちた。

「あの」

小さい声が沈黙を破った。扉の横に立っていた団長は、それまで逸らしていた視線を娘に向けた。

「これ、ありがとうございました。受け取りました」

そう言って服の下から引っ張り出したのは、鎖を通したあの品。武器屋で発注し、団長が取りにいった武器兼装飾品だ。武器屋で団長も現物を確認していた。騎士団の紋章に黒い石をはめ込んだものは精巧で、店主が自慢げだったのを思い出す。

それを服の下から引っ張り出したのにどぎまぎするが、動揺は顔に出さず小さく頷くにとどめた。

「向こうに、持って帰ろうと思います」

「そうか」

そして沈黙がまた落ちる。別れの言葉をと思う団長の出鼻をくじくように、侍女が浴室の用意ができたことを知らせに来た。娘は侍女に連れられて浴室に消える。団長はため息をついて、無人の部屋の警護にあたった。

入念に体を洗われ、湯から上がって髪の毛を乾かして服を着替える。元の世界の喪服や黒のストッキングは、ここで着ると随分奇妙ないでたちに思える。髪の毛は茶色のままだが、それ以外はこちらの名残はどこにも見当たらない。

着替えてからさっきまでの部屋に案内される。そこには食事の用

意がしてあった。野菜だけのそれを少しだけ食べて、その時を待つ。震えそうになる指先を、ぎゅっと手を握ることで押しとどめる。

部屋の中は娘の緊張が充満して、今にも爆発しそうになっていた。

「お時間です」

神官らしい男性が呼びにきた。ことさらゆっくりと立ち上がる娘の手を侍女がそっと取った。

「私はここまでです。儀式の間には入れませんの。どうぞお元気で」

「色々ありがとうございました」

侍女は少し涙ぐみ、娘は深く礼をした。そして促されるままに部屋を後にした。

儀式の間まで、少し前方を歩く神官の後をついていく。さすがにストッキング姿でというわけにもいかず、移動の間は靴を履いている。

ひときわ重厚な扉の前まで来ると、神官が振り返って頭を垂れた。どうやらこの神官は扉の前までの案内係のようだ。

団長が扉を開けてくれて、娘を中へと促した。

通り抜けようとした娘が少しの間立ち止まった。前髪をかきあげて黒い瞳をまっすぐに向ける。

「色々お世話になりました。本部の方々にもお礼を伝えていただけますか？」

「承知した。……元気で」

「はい、ありがとうございます」

娘は前を向いて儀式の間の中央に向かう。扉近くの壁の前に立って、団長はその後姿を見つめた。

見慣れない服。緊張した表情。
目に焼き付けておこうと眺める視線の先には、同じように娘を見つめる国王の姿があった。
娘の視線は神官と神官長に向いている。前日、品物で試した結果の説明を受けているようだ。黒い塊のようなものを手に取り、そこから飛び出している白い切れ端のような物を穴が空くほど見つめている。塊から挙げた顔には希望が見えた。
実験は成功したのだ。そしていよいよ本番に臨むことになる。

「今回は立ち会うことができました。国内を東に西に、と動き回る日々でしてね」

神官長は穏やかに微笑んで立っている。その横で神官から差し出されたのは黒いぬいぐるみ。タグには子供の手書きで名前が書き加えられている。

「帰還陣に置いた、これと同じでもっと古かった物にも同じ文字が書かれていました」
「では、元の持ち主の所からこれがやってきたということですね」
「はい。あなた様の場合は同じ場所からではなく、あくまで陛下と相性の良い方がいらっしゃると思います」

神官に頷いて、国王に視線を移す。国王がゆっくりと近づくのを娘はその場で迎えた。
儀式用の礼装だろうか、いつもよりも重厚な衣装をまとっている。端整な容姿とよく似合っていて気品すら感じる。黙っていれば完璧に王様だ。

「陛下」

「そなたには、すまないことをした。赦してほしい」

そう言ってあろうことか国王が深々と頭を下げた。『国王の謝罪』に、娘のみならずその場にいた者が凍りつく。即位前ならともかく、即位してから国王が謝罪したことなどほとんど無い。こんな風に全面的に非を認める振る舞いはおそらく初めてだ。

娘は混乱した。人前で頭を下げられた経験は少ない。真摯な謝罪ならなおさらだ。

いや違う、一人だけ、いた。事故の相手だ。

本人は警察にいて顔を会わせていないが、身内と名乗る女性が葬儀の席で土下座せんばかりに頭を下げて謝罪したのを思い出した。

『赦してください』その言葉が、姿が国王と重なる。

「頭を上げてください。国王の謝罪は国家の威信に関わるのではなかったのですか？」

「本心から悪かったと思ったから、それを表すのがこれだった。国家の威信より、傷つけ振り回した侘びがしたい」

「お気持ちは分かりましたから、もうよしてください」

娘は『赦す』とは言わない。簡単に赦せるものでもないと思っている。国王も赦されるとは思っていない。それだけのことをしてしまった自覚がある。ただけじめをつけたい、きちんと形で表したい。その思いだった。

「あと、時期を省みない告白をしたのも」

それに娘が落ち着きをなくした。つとめて忘れようとした告白を蒸し返されて、この期に及んでまで振り回すのかと恨めしい。文句を言おうとして国王の表情が妙に明るいのに、どう反応しようかと戸惑う。

「そなたが気に病む必要はない。余の自己満足にすぎない。帰ったら両親と向き合うのだろう？　余もここで民に向き合うつもりだ。その大事さを気付かせてくれたことに感謝する。ありがとう。達者でな」

「……陛下もご自愛ください。ここで保護してくださったのには感謝します。ありがとうございました」

国王が神官に目配せをして、後ろに下がった。入れ替わるように神官が踏み出す。

「帰還陣の中心に立ってください。召喚の呪を唱えますので、同時に帰還陣も発動するはずです」

「分かりました。ここでいいですか？」

床には召喚陣に接して、同じ大きさの円陣が描かれている。その文様は異なっていた。

中心に娘が立つと神官は距離をとって、自身と娘と召喚陣の中心を結んだ線が正三角形になる位置に佇んだ。

目を閉じて幾度か大きく呼吸をし、ゆるやかに目を開けて宣言する。

「始めます」

娘は目を閉じ、両手で携帯を握った。この携帯が、元の世界の思い出を詰め込んだこの小さな物が、命綱のように感じられる。元の世界への執着の象徴。帰りたいとの願い。それをぎゅっと手の中におさめて、神官の唱える不思議な抑揚の呪を聞いた。

それは召喚の呪を唱えた後に、逆から詠唱していく召喚とは背中合わせの呪だった。

集中している神官の額からは汗がふき出て、顎を伝っている。呪が進むにつれて、召喚と帰還の陣が淡く光り始めた。閉じた目蓋の向こうが明るくなり、娘は目を開ける。陣の文様を下から照らすように光が湧き上がっている。

見る間に光は強さを増し、昼間のような明るさになった。中心にいる娘は目を開けていられず、腕でかばうようにして目を塞いだ。

刹那、何かの圧力が体にまといついた気がした。それは周囲を渦巻くように包みそして足元がふいに不安定になる。浮き上がるような、落ちるような相反する感覚が足元から生じる。

――お父さん、お母さん。娘は心の中で両親に呼びかけていた。

神官以外の人間も眩しさから目を守っていた。どうにか娘の姿を確認しようとするが、光の渦にさえぎられたように存在があいまいになっている。

――消えてしまう。いなくなってしまう。その瞬間に念じたのは果たして。

光が満ち、それが消えた時に陣の中心には人が立っていた。見慣れぬ服装。

眩しさにくらんだ目が段々と落ち着き、国王は、団長は、神官はその人物を見極めようとした。

28　祭りのあと

「……あ」

自分のものでないような掠れた声が口をつく。

目を覆っていた腕を外し、視界が戻って見えたのは。あんなに帰りたいと願っていた自宅のリビングではなく。今は、床に書かれた単なる文様と遠巻きにそれを見つめる人達。

そこから、のろのろと視線を横に向ける。

召喚陣の中心に——人は誰もいなかった。

光が消えた召喚の間で、召喚陣にはだれもおらず、帰還陣には凍りついたように立っている娘がいた。

誰も何も言わず、身じろぎもしない。

時間すら止まったように思える。

それを破ったのは、さっきと同じ娘の呟きだった。

「ど、うし、て」

すうっと爪先が冷たくなっていく。奪われる熱を補うようにか足元から震えが生じる。それは全身を侵食していく。力が抜けた手から携帯が落ち、乾いた音を響かせた。

その音に固まっていた人間が我に帰る。

「これは、どうしたことだ」

案外としっかりとした口調で、国王が神官に問う。当の神官は汗も止まり、視線は召喚陣と帰還陣を交互にさまよっている。娘も国王の声が耳に入ったのだろう。ぴくり、と身じろいでやはり神官を見つめている。

「わ、かりません」

神官は頭の中で恐ろしい勢いで先ほどの光景を分析していた。召喚の呪に間違いはなかった。あれは何度も唱えていて間違う余地はない。その呪を逆から唱えた帰還の呪も間違えた覚えはない。その証拠に召喚陣と同様に帰還陣からも光を生じ、確かに力が発動していた。

にも関わらず結果は誰も召喚できず、娘は帰還しなかった。

意味することは。

「帰還の呪も式も間違ってはいませんでした」

「では、何故誰も来ぬ？　そして……」

「神の思し召しでしょう」

国王の言葉は穏やかに低く深みを帯びた声にさえぎられた。

声の主はその場で唯一動揺を見せていないようだ。神官長は、微笑をほんの少し深めた。娘に視線をあてて頷き、すっと手の平を上にむけて広げる。その先には神の像があった。

「伝説の娘としてここに召喚された方。神が国王陛下の伴侶と定めた方。その理が崩されてはいない、ゆえにこの結果なのではないでしょうか」

「つまり……」

声が熱を帯びる。神官長の言葉が忍び入り、国王に不可思議な熱を生じさせる。

引き寄せられるように見つめるのは、落とした物を拾うでもなくかすかに震えながら立っている娘。

「余の伴侶としては、そなたしかおらぬ、ということか」

聞きたくなかった。娘は耳を覆いたかったのに手が動かない。見たくなかった。国王の目は熱に浮かされたようにきらめいている。狂おしいとはこんな感じなのだろうかと、ぼんやりと考える。確かにここから浮上した感覚があった。召喚された時に感じたのと同じようなものだった。それが途中で下降するものに取って代わられた。

帰りたいと思う気持ちが、元の世界で自分を待ってくれているかも知れない人達の気持ちが、そのベクトルが負けた。何に負けた？何がこちらに引きとめた？

答えは国王の形を取っていた。ゆっくりと近づいてくる。来ないで。これが現実だと知らしめないで。そう思うのに、何も言えず震えて立っていることしかできなかった。

国王は娘へと歩を進める。目の前にいる、渇望した存在は今は顔色をなくして小刻みに震えている。

最初の召喚の時のようなふてぶてしいほどに落ち着いた雰囲気はない。怯えている。娘に触れようとしてびくりとすくまれ、手を止める。

娘からよこされた『心得』では、召喚した者には優しくしなければならなかったか。

身をかがめて足元に落ちた小さな四角い物を拾い上げる。見慣れないそれは、娘の世界の物だろう。神官が呪を唱えている間ぎゅっと握り締めていたことからも大事な物だろうと思われた。それをそっと娘の手を開かせて乗せると、のろのろと視線を落としゆっくりと包み込むように握った。

「余は」

視線をそらしたままの娘を怯えさせないように、少し距離をとったままで国王が囁く。伏せた娘の睫毛がぴくりと揺れた。

「そなたがいなくなっても受け入れるつもりでいたが。この状況はそなたには不本意だろうが、再召喚を再び行うにしても次は半年後だ。
ここでゆっくり考えて欲しい」

この場で娘が残ったのが嬉しいと口にするつもりはない。
今は混乱しているだろう。ゆっくりさせてやりたい。
国王は振り返って、控えている団長に命令する。

「とりあえず、控え室に。今にも倒れそうな顔色だ」

本来なら自分が抱いて連れて行きたいくらいだが、怯えているのに触れるのも気の毒だ。
それに過度に接触するのは娘の機嫌を損ねるのも承知している。次回を考えるにしても半年とどめおくことができる。その間にと卑怯な計算が働いた。
団長が娘に近寄り、手を差し出した。促されて娘が陣の中心から、外へ出て行く。爪先まで薄物に包まれた足が陣をまたいだ時に国王は安堵を感じた。
――これで、娘はここにいる。
――もう、どこにもやらない。
黒い感情だが、偽らざる本音。半年で娘に振り向いてもらえるようにする。新たな目標を得た国王は、神官と神官長とともに今回の件についての議論を始めた。

王族の控え室に戻って、娘は糸の切れた人形のように長椅子に座

り込んだ。

団長は痛ましい思いで見つめるが、反面ここに娘が残ったことに喜びも感じていた。同時に苦い現実も。娘が帰還できず新たな伝説の娘が召喚できなかったことは、娘と陛下が定められた伴侶であることの証明に他ならない。

陛下のためには喜ばしい。この娘が側にいれば陛下は立派な国王になるだろう。何より陛下が娘を想っているのは事情を知る者の目からは明らかだ。陛下を嫌がった娘だが、この現実とこれからの対応次第では王妃になるより他はないとの結論に至るだろう。

妹はいなかった。おそらく、召喚されるはずの伝説の娘のための部屋を整え、そこで迎えるために待機しているのだろう。

座り込んだまま、一点を見つめて動かない娘に声をかける。

「なにか飲まれますか？」

ふる、と首は横に振られた。ひどい顔色だ。

「侍医を呼びましょうか。倒れてしまいそうな顔色です」

「だいじょうぶ、です。少し、休めば」

平坦に娘が答えるとそれ以上は声もかけられずに、立って見守る。娘は何かを握り締めたままじっとしていた。顔色は相変わらず悪い。ふと思い立って団長は部屋の隅に用意してあった、茶器にお茶を淹れる。そして娘の鼻先に突き出した。視界に入ったそれを眺め、娘が見上げた。

「飲んでください。何かいれると落ち着きますから」

城下でお茶を飲んだ経験から娘は砂糖を入れないのは知っていたが、今回はあえて入れたものを出した。カップを手に取り、娘はゆ

っくりと持ち上げて口をつけた。

「甘い。……渋い」

「それは、申し訳ありません。どうも私はお茶を淹れるのが下手で」

副団長に散々に文句を言われているので、重々自覚している。娘がそれを聞いてうっすらと笑った。再召喚の後で初めて表情らしきものを浮かべたことに、内心安堵する。

「でも、ありがとうございます。体があたたまります」

精神的なものからきていただろう震えも少しおさまったようだ。カップを取り落とすこともなく、娘は甘くて渋いお茶を飲み干した。

「妹を呼んできましょうか」

「いいえ、着替えて部屋に戻ります」

ゆっくりと立ち上がってそう言われると、部屋を出て行かなければならない。ただし倒れそうな顔色なのは変わらないので、部屋の外でほんの少し扉を開けて待機する。もし倒れたりすれば物音がするだろうから注意して耳を澄ます。

幸い娘は机の角に頭をぶつけることもなく、見慣れた下働きの衣装に着替えていた。部屋の外に立つ部下に、使用人棟に戻る旨を陛下に伝えさせて護衛をかねて後に控える。

少し頼りなげだが倒れることもなく、歩き出した娘の後ろ姿を追いつつ団長はこれからのことに思いを馳せた。今日は使用人棟でいいとしても、近いうちに本宮へと部屋を移す必要があるだろう。騎士団の食堂での勤務は今後は難しい。

第一陛下の様子ではもう働かせたりはしないように思われる。

そうして側によせてゆっくりと気持ちをほぐしていけば、いずれ

は本宮の客室から後宮の主たる王妃の部屋に居を移すことになるだろう。
下働きの服を着ることもなく、大勢からかしずかれて暮らすことになる。
使用人棟への長い道のりで、団長はそう結論付けた。
「本当に妹をよこさなくて大丈夫か？」
部屋の前で小声で尋ねる。今は上司と部下の立場から敬語はなしだ。
「はい。落ち着いたら友人の部屋にでもいきます。さすがに食欲とかはないので、明日は顔をだすまでそっとしておいてください」
「承知した。何かあれば警護の者に声をかけて」
頷いた娘が扉を閉じようとしたのを、とっさに足を入れて妨げる。
見上げた娘に、自分にも言い聞かせるように告げる。
「陛下は本気だ。あなたも陛下のことを本気で考えてほしい」
「……それは臣下としての意見ですか？」
「そうだ、臣下としてあの方の側近くにいる者として、恐れ多いが友人の一人としての意見だ」
娘の目に不思議な色が混じった気がした。元が黒なのだから他に色が混じろうが変わるはずもないのに。じっと、いやに長く見つめられいい加減居たたまれなくなった時に、娘は口の端をほんの少しゆがめた。
「あなたは臣下の鑑のような方ですね。でも」

続きがありそうな言い方だったのに、お休みなさいとの言葉で扉が閉められた。何が言いたかったのだろうか。いつまでも部屋の前に立っているわけにもいかずに、きびすをかえして階段を下りる。神殿へと戻りながら、あの目の中に生じたのは何かを考え続けた。

娘はベッドに腰掛けてしばらく呆けた。ぎゅっと手にもったままだった服を握り締める。

帰還に失敗した。誰も召喚されなかった。

想定した中で最悪のシナリオだ。半年ここに足止めされる。

「罰があたったのかな」

次の人を犠牲にして帰ろうとしたから。自分だけ逃げようとしたから。

国王を思い浮かべて娘は思わず、腕をかき抱いた。あの目に宿っていたのは告白をしてきた時にみせたものだ。ずっと前、国王とは絶対にその気にはならないので、何度でも召喚してくれと頼んだことがあった。国王もそれを了承して、今回再召喚を行ってくれた。

「でも結果がこれで、陛下があれなら次はないかもしれない」

加えて団長の言葉に胸がえぐられた。あれが臣下の本音なら、包囲網が縮まる。国王に絡め取られてしまう。召喚の覚書のように、諦めてほだされて国王と結婚する羽目になるかもしれない。

「でも、どうしてあんなことを言うの。なら何故あの時」

とうとう涙がこぼれた。

「嘘吐き」

しばらく涙を流れるに任せて、それから娘は顔を上げた。まとめた荷物に目をやり、小さな声で呟く。

「行かなくちゃ」

護衛の騎士は娘が手に服をかけて部屋を出たのを確認した。同じ階のやはり下働きをしている娘の部屋の扉をたたいて、中に入っていく。それは見慣れた光景でもあった。食堂に行かなくなってから部屋で裁縫をして、あんな風に他の部屋を訪れている。

娘の部屋に招き入れるのは警備の都合上避けていたので、必然的に娘が部屋を訪問する形になる。

今日もそんな風に友人の部屋に消えた娘がしばらくして戻ってきた。服をかかえて、うつむきぎみに部屋へと戻る。中から鍵をかけたのまで確認して通常警備の体制に戻った。

祭典の最中でも仕事はなくならない。洗濯室の下働きをしている娘がシーツを抱えて部屋を出て階段を下りていった。その後姿を日常の風景として流し、警備は続いた。

団長とのやりとりで、今朝は朝食の差し入れは行っていない。そうして時間は過ぎてそろそろ昼食という頃になった。朝食は不要だったが昼食に関しての指示はない。さすがに二食を抜けば空腹だろうと昼食を盆に載せたものを手に騎士が扉を叩いたが、反応はなかった。

寝ているとしても時間が時間だ。それにいつもなら、扉を叩けば中から確認をした後に比較的速やかに顔を覗かせるはずの娘が無反応とは。不審に思いなおも強く扉を叩くと、中から鍵を開ける音がした。

おかしい。誰何の声がしなかった。
頭の中に警報が聞こえた気がした騎士が見たのは、緊張した面持ちの髪の色こそ娘と同じだが顔は似ても似つかぬ、洗濯室の下働き。
娘が昨夜訪れた部屋の主だ。

「どういうことだ。何故お前がここにいる」

きつい口調で問いただされ、下働きの娘は顔色をなくす。

「わ、わたしはあの娘に借りがあって、昨日部屋にきたあの娘から明日の昼までこの部屋で過ごしたら銀貨と服をくれるって話があって。
今日は休みだし、午後から城下で人と待ち合わせることになっていたから彼女の言うとおりにしたんです。
あと、騎士様がきたらこれを渡してくれって」

そう言って差し出した紙をひったくるように受け取り、急いで開いて目を通す。低く呻いた騎士に下働きが怯えるのなど眼中になく、背後と隣の部屋に待機している警護の者に伝達する。

「この場は撤収。速やかに団長、副団長に報告。あの方がここを出て行ったと。急げ」

自らも騎士団本部に急ぎながら絶望的な心持ちになる。洗濯室の下働き、と思った娘が出て行ったのが明け方ちかく。今までの時間を考えれば、門さえ通過できれば城下からどこへなりと姿をくらませることが可能だ。充分すぎるほどの猶予を与えてしまったのだ。
おそらくこの一連の流れは周到に計画され、実行されたものに違いない。

「大変です」

息を切らして扉を叩くのも忘れて、団長室へと飛び込んだ。

頼みの綱だった門はあっさりと娘の通過を許していた。なんでも焦った風で門に顔をだし、食堂への出入りの業者の馬車がもう帰ってしまったのかと尋ねたそうだ。少し前に通過したと返事をすると、小さな皮袋を取り出した。

「財布を落とされたみたいなの。祭典は今日までなのにお金がないと大変でしょう？」

その言葉に同意して、衛士は門を通らせた。何か持っていなかったかとの問いには布製の鞄を持っていたと。

「やられた」

一言だけで団長は立ち上がり、大股に部屋を出ようとする。顔色をなくした副団長は、陛下への報告と悟る。団長は厳しい顔つきで指示をする。

「祭典の混乱に乗じて身を隠すつもりだろう。なんとしても探し出せ。茶色の髪、王城の下働きの服装の娘だ。急げ」

ただ、捜索は難しいだろうことは容易に予想された。祭典にあわせ大量の人が流れ込んでいる。各地への乗合馬車もこの期間は臨時に便をだして活発に人を運ぶ。服だとていつまでもそのままとは思わない。

報告を受けた国王も表情は団長と大差ない。

「失態だな。あれの手紙にはなんと書かれていたのだ」

団長が差し出した紙は誰かが握り締めたのか皺がよっている。内容は、下働きの娘は何も知らないこと、自分一人の計画なこと、誰も罰してくれるなと書かれていた。

「草の根を分けても、騎士団の威信にかけても探し出して連れて来い。失敗は許さぬ」

「御意」

世間知らずの娘が、命を狙われていた娘が一人で王城を出て国王や騎士達の庇護下から抜け出た。

それがどんなに危険か。その身の重要性がどれほどなのか。

「必ず、無事に連れ戻せ」

だが、娘の行方は杳としてしれなかった。

幕間　副団長の好きなもの

副団長が手にした何かを見て、かすかに口元を綻ばせている。こいつがこんな顔をするのは十中八九、いや絶対にあれがらみだ。

付き合いも長く、それゆえに理解しがたいその性癖も熟知している自分は、それを横目で眺めながら決済の必要な書類に目を落とす。

一人でやると味気なくてすぐに飽きてしまうから、と団長室に机を持ち込んで一緒に執務をしているこいつも、書類にペンを走らせてはいるものの時折さっき見ていたものに視線を走らせてはふ、とゆるんだ空気をかもし出す。

「……俺に聞いて欲しいのか？」

「ん？　ああ、いや、単に感慨にふけっているだけだから構わなくてもいいぞ」

「なら、そのにやけ面を止めろ。気色悪い」

自覚がなかったのか、己の頬をつるりと撫でる奴を見ながら内心ため息をつく。

随分長い付き合いだが貴公子然としたこいつの根幹は、変態だ。いや上品に言うなら馬への偏愛に満ち溢れている。

その外見や毛並みの良さ、馬術は勿論のこと剣の腕も良く、女性から絶大な人気がありながらその愛情に満ちた眼差しが注がれるのが馬。体調や機嫌を気にかけるのも馬。その一挙手一投足に心を配るのも馬。

不可解なのはそんなこいつの性癖を知ってなお、その一途さが素敵と一層女性が熱を上げることだろう。

妹に言わせれば『夢中なのが馬なら嫉妬のしようもないからでしょう』なのだが、女性の考えることは分からない。

ともかくそんな奴がうっとりとした視線を寄せているのだが、男

の自分がそんな様子を見ても胸をときめかせることなどは決してなく、ああまたかと思うと同時にむしろ見てはならないものに遭遇してしまったかのような、そんな感覚を覚える。

「まあいい、お前には見せてやろう」

もったいぶった口調でこちらに寄越されたのは、何か記号のようなものが大きく書かれた厚い紙だった。

「これは？」

「栗毛の方に書いていただいた。あの方のところの『馬』という文字らしい」

栗毛の方。こいつがそう言い表す女性。その単語にどくんと胸がはねるが、こいつは気にする様子もない。

「そうか」

「なんでもたてがみをなびかせて疾走する馬の様子を表しているらしい。素晴らしい発想と思わないか。ここがたてがみで、ここが胴体で、この点のようなものが疾走している脚を表しているんだろう。これ一つであの美しい姿態を表現するとは」

ずっと続きそうな物言いに肩が落ちる。こうなると延々といかに馬が美しく、賢く、素晴らしいかの話に付き合わされる羽目になる。

「お前のこの情熱が何故女性に向かないのか不思議でならん」

「何故比べる？　馬に失礼だろう」

言い切られて魂が抜け出ていくような錯覚にとらわれる。頼むから女性の前でも、女性に恵まれない男性の前でもそのひどすぎる本

音は晒さないでくれ。男性的で整っていて騎士団の連中がやっかむ前に人間のできが違うのだと諦めるような顔で、そう言うのだから破壊力は半端ではない。

こいつは自分が馬に生まれなかったことを悔いてやしないだろうかと、尋ねたい衝動に駆られることがあるのを知らないのだろうか。

「それに俺はきちんと女性と付き合いができるぞ」

「寄ってくるのから、得になりそうな女性を選んでの付き合いだろうが」

国内でも有数の馬場の持ち主の令嬢であるとか、評判の馬具職人の娘であるとか、とにかく馬関連の女性だ。

女性が途切れる様子がないのも、忌々しいというか苦々しい。

騎士団に入ったのも家の事情もあるのだが、王城に名馬が集められているからという理由を聞かされて、神聖な騎士団になんという罰当たりと憤慨したのも今となっては微笑ましすぎるような思い出だ。

あれからこいつはどんどんと変態の度合いを増し、それを隠そうともしない。

もうこいつはこういう奴と諦めてどれくらい経つだろうか。

「それにしても、お前はあの方が誰かも知らなかったのに馬に乗せたのだろう。珍しいな」

視察から戻って騎士団本部に顔を出す前に馬場に直行するのはいつものことだが、居合わせた従騎士からその話を聞かされて意外に思った。

大事そうに『馬』の紙を机の引き出しにおさめたこいつは思い出すようなそぶりをして、ああと頷いた。

「無心に馬を眺めていたのが印象的でな。見れば髪の色は栗毛で隠していた目は黒だろう。黒目がちでまさに栗毛の色調だった。受け答えは落ち着いていて理知的だしますます賢い馬そっくりだったからな。それで乗ってみるかと誘ったんだ」

どこまでも馬基準。聞いた自分が馬鹿だった。

「後でお前から正体を聞かされた時には興奮したね。髪の毛も目も黒なんて青毛じゃないか。うっかり惚れそうになった」

「なんだそのうっかりって台詞は」

「さすがに懸想する相手じゃないってことだ」

最後の台詞はやけに重い。何重にも意味を持たせていることくらいは長い付き合いだ、すぐに分かる。

しばらくこっちを見つめたかと思うと、仕方がないとでも言いたげに笑われる。

「ま、自制してできるものでもないからな」

自分で言って自分だけが納得しているようだ。馬以外では悟り澄ましたようなところも腹が立つ。机に肘をつき頬杖をついた姿も、こいつがやると様になるのがまた癪だ。

こいつには自分のことなどお見通しなのもだ。

執務もひと段落しているところに控えめに扉を叩く音が聞こえた。顔をのぞかせたのは噂の主だ。

最近では横乗りではない乗馬を教わっているらしく、乗馬服に着替えている。

「お早うございます。今日もよろしくお願いします」
「ああ、もうそんな時間でしたか。下らない話をしていて気付きませんでした。申し訳ありません」
「いいえ」

女性一般へのそつのない物言いで、こいつは立ち上がる。二人で馬場に向かうのか。手綱の一件があってから、一人で馬場にやるようなことはせずに付き添うようになったこいつは、馬至上主義の変態でもさすがに騎士団副団長だ。
出て行こうとする二人を見送りながら、ふといつもと違う髪型に目が止まる。

「面白い髪型だ」

呟いたつもりが声が大きかったのか、二人にも届いたようだ。
彼女は髪の毛に手をやる。頭の上の方で一つにまとめ、毛先は体の動きにあわせて軽やかに動いている。

「これですか？　ポニーという小型の馬の尻尾に似ているから馬の尻尾の意味でポニーテールっていうんです。馬に乗るからやってみようかなって思って……変ですか？」

最後の台詞は扉を開けようとした姿勢のまま固まった奴に向けてだ。
奴の視線は頭のてっぺんから毛先へと上下している。そのうちにゆっくりと唇が笑みの形になる。
馬にしか見せない笑顔と蕩けるような口調を、馬以外に向けるのを目の当たりにしてしまった。

「いや、実によくお似合いだ。そうですか、ポニー……馬の尻尾で

すか。……実に可愛らしい名前だ」
「はぁ……」
奴の笑みに何かを感じたのか、いささか歯切れの悪い返事になった彼女を先に通して、扉を閉めようとした奴は最後に視線をよこした。
「悪い、前言撤回するかもしれない」
ぱたん、と閉じた室内に取り残されて奴の発言の意味を考える。
何に対しての前言撤回だ？
さっきまでの会話を思い返す。
『懸想する相手じゃない』
まさかなと思いつつ、さっきの彼女の格好を思う。栗毛の色彩、乗馬服、そして馬の尻尾な髪型。
理想の牝馬が人間の姿をとったのならきっとあんな感じ、なのかもしれない。だが。
目を覚ませ。それは馬への偏愛が行き過ぎた幻想のはずだ。
どこの世界に馬に似ている君が好き、と言われて喜ぶ女性がいるというんだ。
それとも、それこそまさかと思うのだが。
――馬よりも君が好き、なのだろうか。
恐ろしくて確認したくないのに、問いただされずにはいられない。
「お前、考えすぎ」
呆れたように言われるまで生きた心地がしなかった。

ではさっきの思わせぶりな発言は何なのだ。

「うん？　栗毛の方が本来の髪色でポニーテールをしてくれるまでは、保留だろう？」

どこまでも馬なのか、お前という奴は。

幕間　副団長の好きなもの（後書き）

感想欄から思いついた話です。
副団長＝馬ラブ＝一本筋の通ったヘンタイということで。
時期的には手綱が切れたあと、色んな襲撃の前といったところです。
そして漢字の馬は象形文字。
鬣をなびかせ疾走する様子をそのまま当てはめています。

29　検証と感傷と

娘の逃亡は各方面に騒ぎを起こした。
警備に当たっていた者は勿論、門の衛士もみすみす逃したことで秘密裏に注意を受けた。
団長は副団長と娘の行動を検証して、呻き声を挙げる羽目になった。

「いつから計画して準備していたんだ」

騎士団で働いたことも、城下に外出したことも全て計画の一環だったように思える。
王城を歩いて構造や外への門を確かめる。どうすれば門を通れるのか、門の外の城下への道や大まかな地理、王都から他の都市への移動の仕方など、数えればきりがない。
副団長も苦笑する。

「乗馬も護身術も逃亡生活には助けになるだろうな。それに下働きをしたことで、こちらでも暮らしていけるだろう」
「ああ、さすがに貴族の屋敷は無理だろうが、商家なら充分だろう」

身元の確かな者しか雇い入れない貴族達はともかく、人手が足りずにいる商家は多い。住み込みの仕事も事欠かないだろう。
自分のやったあれもこれも逃亡の手助けかと思うと、団長は落ち込むのを抑えられなかった。何食わぬ顔をして、内心どう思いながら自分に笑いかけていたんだろうか。
そんな卑屈な考えまで浮かんでしまう。

「あまり落ち込むな」

副団長はそう言って慰めようとしてくれるのだが、近衛の立場からは護衛対象に逃げられたというのは、まぎれもない失態だ。その逃亡計画を検証して、もし同様のことが起きたなら再発を防ぐ必要がある。

団長はざっと気付いた点を書き出していく。

働くことで客室での籠の鳥になるのを防ぎ、こちらの生活習慣をお客様でなく知る。厨房で仕事をしたので料理や食事の作法なども見聞きすることができる。外出した城下では庶民の服装や、物の価格、店の様子などを目の当たりにしたのだろう。

「俺は星のことを聞かれて方角まで教えてしまった」

「……まあ、気に病むな」

副団長の慰めに居たたまれなくなってしまい、早々に国王のもとに参上する。祭典は終わったが娘は発見されていない。国王は祭典の諸々の行事で後回しになった書類の山に向き合っていた。

「何か情報はあったか？」

「いいえ、申し訳ございません」

顔を合わせるたびにこのやり取りがなされ、重い空気が垂れ込める。

執務室の窓の向こう、秋の空を眺めて国王がため息をついた。

「結局、あれは余を厭うて逃げ出したのだな。再召喚の翌朝に逃げるとは、随分入念に計画もしていたようだな」

「は、祭典の混雑を狙ってのことでしょうし……」

使用人棟に娘を送った時のやり取りがよみがえった。

『陛下は本気だ。あなたも陛下のことを本気で考えてほしい』

『あなたは臣下の鑑のような方ですね。でも』

あれが娘の背中を押してしまったのではないだろうか。団長はその思いが拭えないが、これは陛下には言えないと口をつぐむ。本気で考えて逃げたのなら……。

国王は団長の提出した、今回の顛末の書類を取り上げ目を走らせる。

「しかし、あれは元の世界では間諜でもあったのか？　小憎らしいほど計画を練っていたようだな」

間諜という割には護身術を知らなかったり、暴力を嫌っていたりしたようで否定的ではないかと思う。国王も本気で言った訳ではないようで、自嘲気味だ。

ともかくここにいるのは、娘に逃げられた哀れな国王と間抜けな団長という図式か。

どちらも面目は潰され、それ以上に自尊心が傷つけられている。

「襲撃者は以後どうだ」

「王城内では音沙汰がありません」

「城下で若い娘が襲われた話は？」

「生死に関わるような話は、捜索の騎士や兵士からは上がってはおりません」

男性二人で食欲の湧かない夕食を取った後、団長は引きとめられて陰気な酒盛りに付きあわされていた。側で侍女がこれまた浮かない表情で酒や肴を手配している。

国王は忸怩たる思いだった。再召喚で結局誰も来ず娘がやはり相手なのだと認識したのも束の間、怯えられそっとしておこうとしたら翌朝逃亡された。以前城下に外出した際に持たせた指輪と直筆のカードは、丁寧に包んで部屋に残してあったのも自分の物など見るのも嫌だったのかと思い知らされて懊悩を深めた。

全ては自分の最初の対応のせいかと、後悔先にたたずを噛み締める。

団長は団長で、どろどろした思いに蓋をするように酒を飲むが酔えない。

その様子を眺めていた侍女がいきなり予備のグラスを手に取った。

「陛下、兄様、ご相伴に預かってもよろしいでしょうか？」

兄妹とはいえ、今は国王の前。国王とは幼馴染とはいっても今は主従の関係。

礼を失した発言だが、国王はそれをゆるし団長が酒を注いだ。侍女はそれを一息にあおる。

「おい、そんな飲みかたをして大丈夫か」

「大丈夫です。もう一杯お願いします」

それも飲んで、侍女はグラスをテーブルに置いた。そして二人を見る。

「私は、自分が赦せません。無事に帰れることを祈ったのは本当です。でもこちらに残ったらと思ったのも本当です。それが分かっていたからここを出て行ったんだわ。

私は……圧力をかけて追い詰めたんです」

その言葉に国王も団長も黙り込む。それは共通の思いでもあったからだ。

再召喚はした。だがこちらに残ればいいと、帰還がかなわなければいいと思ったのも事実だ。

「今頃一人でいるかと思うと。たまらなくなります。でもお二方は何をなさっていらっしゃるんです。ここで顔を合わせて自棄酒ですか？　お二人なら、お二人にしかできないことがあるのではないですか？」

自分も自棄酒ではと思いつつ、言うことは尤もだ。ここで腐っていても状況は好転しない。逃亡された事実は事実として受け入れ、その上でやれることをこなさなければあの娘は見つけられない。

「あれの逃亡計画から、その後の動きを予想できるか？　裏をかこうと思っているならそれを暴け。その裏であればこちらもその水準で考える。そなたがあれならどうする、どう動く、どう逃げる？」

団長は娘のこれまでの言動や興味を引いたものなどを思い浮かべる。

自分が逃げるなら。

「余はできるだけ執務をこなして時間を作り、視察の形で国内を回る。そなたも各地の騎士団および街中の警備の兵士からどんな情報でもよい、集めるようにしてくれ。そのための情報網の構築をせよ。そなた達兄妹がおそらくあれの一番側にいて、あれの思考回路を知る立場にあった。その目線で考えて行動してくれ。頼む」

国王は兄と妹に頭を下げた。

酔いも醒めはて、おおまかに方針をつめて団長は妹と御前を辞した。

廊下を歩きながら低い声で妹に問う。

「俺はあの方を追う。お前はどうする？」

「私は……身を隠すのが望みならそっとしておきます。残していかれた物の手入れはしますけど」

「そうか、分かった」

角を曲がり、別れようとした時に兄様、と呼びかけられた。

妹は真剣な顔をして、手を組み合わせている。

「追い詰めないようにしてあげて。無理にここに連れ戻すと……」

それは陛下の命令に反する。なによりそうしないと危険だと分かっていながらも、妹はあえて口にしたのだろう。

返事をせずに背を向ける。是とも否とも言えない。

暗闇の中立ち止まって見上げた夜空には星が瞬いている。あの時とは星の位置はずれてはいるが、北には変わらず動かない星がある。

夜の旅で方角を教えてくれる貴重な星だ。

隣で見上げていた姿を思い出す。元の所とは星の配置も違うのだろう、ただ同じように北に指標の星があると懐かしそうに言っていた。

「どこにいる？　危険な目にあっていないか？　どこかでこの星を見ているか？」

残された荷物の中に、騎士団の紋章の装飾品は見当たらなかった。あれは今も一緒にあるに違いない。自身の制服の紋章をそっと撫で

る。国と王城、王族を守るためにできた騎士団、その紋章。かなうなら、あの方も守ってほしい。

北の星を見上げながらささやくように願う。

明日以降は国王の視察の計画に合わせて、警備体制を整えなければならない。忙しくなる。

星から視線を落とし、団長は決然として騎士団本部へと戻っていった。

数ヵ月後王都から南の港町に赤い髪、ここいらではお目にかかることのない黒い瞳の娘が宿屋と食堂を兼ねた建物の前の道路を掃いていた。

赤い髪の毛はゆるく編んでたらし、異国風の布は生え際を覆うように結んで耳の横に結び目を持ってきている。耳には色とりどりの耳飾が揺らめいている。

通りかかった常連が声をかけた。

「よお、今日の料理はなんだい？」

「こんにちは。魚を揚げたのと甘酢の野菜の付け合せたものと、鳥の岩塩焼き。あと手作りの果実酒が飲み頃で封を開けるわ」

「そりゃ美味そうだ。後で寄らしてもらうよ」

「はあい、開店時間はいつも通りだから」

明るく答える娘に屈託はない。常連に手を振ってまた掃き掃除に戻った。

しばらくして道具を片付けていると、食堂の中から呼ぶ声が聞こえた。

「掃除が終わったなら市場に買い物に行ってくれるかい？　岩塩が

なくなりそうなんだ」
「はい。他にいる物があれば言って。一緒に買ってくるから」
町娘の格好で箒の代わりに買い物籠を手に取って、娘が尋ねる。
厨房からは明るい声が答えた。
「そうだねえ、じゃ、明日の朝のパンも頼もうか。気をつけて行くんだよ。最近港から東に向かう傭兵が増えて柄が悪いんだから」
「伯母さんは心配性ね、でも裏路地には入らないから安心して。行ってきます」
籠に財布を入れて娘が食堂を出た。
夏の日差しが眩しくて娘は目を細めた。通りでは蚤気楼のように空気が揺らめいている。逃げ水に目をやりながら歩く娘の周囲には喧騒がまといつく。
顔なじみになった人と挨拶を交わしながら、娘は市場へと向かっていった。

30　南へ

「ここがあたしの家だよ。ゆっくりしておくれ。あんた、今帰ったよ」

元気の良い女将の声とともに、背中をはたかれて娘は中へと入った。

潮の香りと波の音が、王都を遠く離れたことを実感させた。

再召喚の翌日に無事に王城は抜け出たものの、その後をどうしようと悩んでいた。

乗合馬車に乗って王都から離れる。そこまでは規定路線だが、さてどこに行こうか。

さすがに国境の守りは厳しく、それを越えるのは難しい。第一追っ手がかかればまずそこから固められてしまうだろう。あまり田舎に行っても悪目立ちするかもしれない。

身を隠すなら都市部、王都を中心にした東西南北の国境近くはそれなりに大きな街になっているらしいので目指すならどれかだろう。

あまりに早い時間ではまだ馬車は出ていない。それにまだ祭典のために王都に来た人が戻る時間としても早いので、どこかで朝食を食べて時間を潰して、馬車に乗ろうと朝の市場に足を向けた。

屋台で簡単に食べられるものを買って食べようかとした時に、通りの脇で店の壁に寄りかかるようにうずくまる女性を見つけた。近寄って声をかける。顔色が悪く、お腹を押さえている。

「どうしました？　お腹が痛むんですか？」

かろうじて頷くのを確認して、どうしようかとあたりを見回す。

近くで祭典のみやげ物を売っている人に近くに医者がいないかを尋ねる。医者を教えてもらい、親切なことに手伝いの男性がそこまで女性を抱えて連れて行ってくれた。

その家の扉をどんどんと叩く。中から寝癖のついた、初老の男性が顔を出した。

「すみません。病人を診てもらいたいんですが」

ちらりと後ろの女性に目をやって、医者は扉を開け顎をしゃくって中に入るように合図した。

入ってすぐが診察する場所になっているらしい。そこのベッドに女性を寝かせてから、運んでくれたみやげ物屋の男性は出て行った。

「いつ頃からどんな様子なんだ」

「あ、私も通りすがりで事情がよく分からないんです」

そう言うと医者は女性のお腹を押さえて、その手をあちこちに移動させた。その合間に女性に質問をして呻くような返事を聞いていた。

顔をしかめて反応した場所を確かめて、壁の棚から何か薬を取り出しそれを飲ませる。しばらくそのまま寝ているようにと女性に言ってから、娘を見た。

「体力が落ちていたところへの食あたりのようだ。薬を飲んでしばらく寝ていればいいだろう」

「そうですか。右下を痛がったからてっきり……」

「てっきり、何だ」

失言に気付いて娘は黙り込んだ。医者は何かを記録しながら鋭い視線を外さない。

「……盲腸かと」
「お前さん、医者か？　見たところは王城の関係者のようだが」
下働きの制服のことを言っているのだと気付き、警戒心が生じる。娘の様子に医者は苦笑いを浮かべた。
「そんなに警戒しなくてもいい。俺は昔王城で侍医をしていてな、もったいぶった王城に嫌気がさして、町医者になったんだ」
王城の侍医。それを聞いて安心できるはずもなく娘はじり、と入り口に移動しようとしていた。
「取って食いはしない。ただ聞きたいだけだ。盲腸とは右下の腸の先にある細いやつか？」
「……はい。確か虫垂という名前だったと思います。そこが炎症をおこしやすくて」
「ふうん、ここがそうか」
医者は棚から本を取り出してページを開いて見せた。ずいぶん簡単だが、人の体が描かれていた。娘は指で盲腸のあたりを指す。
「ここが盲腸で、その先にくっついているのが虫垂です」
「他に知っているものはないか」
あっさりと言われ、娘は拍子抜けした。詮索するでもなく医者はただ人体のことが知りたいようだ。聞かれるまま、知っていることを話す。
一通り聞いて満足したのか、医者がお茶を淹れてくれた。それを飲みながら妙なことになったと思う。医者に女性を運び込んだらそ

のまま行ってしまえば良かったのに。

「で、お前さんは何者だ？　まあ、その目から大体予想はつくがな」

前髪で隠していた目のことを言われて、医者を見つめる。王城の侍医だったのなら知っているのか。こんなに早くばれるとは、前途多難だと思いつつ前髪をかきわけて目を晒した。

「今の国王に呼ばれた者です」

「異世界からの伝説の娘、か。俺は先代の王妃様は知っている。お前さんがあの陛下のな……」

「陛下をご存知ですか？」

「ああ、首に傷を負うまではな」

先だっての国王の傷を思い出して娘は思わず、同じ場所に手を当てていた。

医者はその仕草に頷いた。間違いない、この人は本当に王城で、しかも王族を診ていた医者だったんだ。

「陛下はお元気か？」

「そうだと思います」

「で、お前さんが下働きの服を着て、しかも城下にいる理由は……」

女性は寝ているが、医者は声を潜めて聞き取りにくい音量でしゃべった。

娘はお茶のカップを両手で包む。

「私を王城に突き出しますか？」

「そんな面倒くさいことはしない、俺は関わりたくないな」

探るように医者を見つめるが、表情からはそれが本心かどうかは分からない。ただここまで正体がばれていれば、ごまかすのも無駄だ。

「事情があって、逃げ出しました」
「逃げて、どこに行こうって言うんだ」
「特に決めていません。ただ国外に出るのは難しそうだとは思っています」
「そうだな、国境の門の警備は厳しい。女一人で通過しようと思っても難しいだろう」

医者は、娘が喉から手が出そうなほどに欲しい知識の持ち主だった。

地図を取り出し、国内の地方都市について教えてくれた。かかる日数や、どんな貴族が治めていて都市の性格がどうか。

「その服は着替えたらどうだ。ここらへんで王城の制服を着ていれば、人目を引くぞ」

そう言って別室に案内までしてくれた。見ず知らずの人間への厚意にいぶかしく思いながらも、娘は鞄に入れていた服に着替えた。ポケットにはそっと武器屋で団長が見繕ってくれた短刀をしのばせる。

戻ると医者は女性の様子を診ていた。

「どうしてここまでしてくれるんですか?」
「先代の王妃様を知っていると言っただろう。あの方は……王城で泣き暮らしていたからな」

少し遠い目になった医者はその当時のことを思い出しているのだ

ろう。国王を身ごもって諦めたと書かれていた先代の王妃。その姿に何か感じるものがあったのだろうか。きっと彼女も身につけていたと思う耳飾に無意識に触れる。

時間もあれから過ぎている。そろそろ馬車に乗っても目立たない頃だろうか。上手くいけば昼までは逃げたのは発覚しないはずだ。その前に王都を離れなければと、娘は立ち上がった。

「そろそろ行こうかと思います。色々教えていただき、ありがとうございました」

「こっちも教えてもらったからおあいこだ。おっ」

最後のは目を開けた女性に対してだ。顔色も最初よりは良くなり、医者と娘に視線をさまよわせている。

「気付いたか。気分はどうだ」

「あたしは、ああ、お腹が痛くなったんだ。ここはどこだい？」

「俺は医者だ。あのお嬢さんがあんたをここまで連れてきてくれたんだ」

女性はベッドで上体をおこした。燃えるような赤毛に緑色の瞳が印象的だ。中年のようで、娘を見て笑った目尻には笑い皺があった。

「そいつは迷惑をかけたね、ありがとう。もうすっかりいいみたいだ。今何時だい？　今日中に馬車に乗らないと」

「まだ午前中だ。だが、あんたはどこまで行くんだ？」

「あたしは王都でしか売っていない香辛料を買いに南の海辺から来たんだ。用事も済んだことだし、帰らなきゃ」

そう言ってすぐにもベッドからおりて出て行こうをするのを医者が止めた。

「おい。あんた一人か？　薬は出すが道中大丈夫か？」
「心配ないだろうさ」
「だけど、随分疲れがたまっているようだ。今は薬が効いているようだが、ぶり返すかもしれん」
それでも大丈夫だと言い張る女性と医者の押し問答に、つい割って入ってしまった。
「あの、私が同行します。行くあてもなかったから、南なら行ってみようかと」
医者は娘の言葉に思案していたが、さっきの棚から同じ薬を取り出して包みだした。
それを娘に渡して食後に飲ませるようにと指示をする。
「今から寒くなるし南ならいいかもしれない。海辺だと、いざと言うときは船に乗れる」
追っ手のことも、対処もそれとなく示してくれた。医者は女性に向き直った。
「この娘さんがあんたと一緒に行ってくれるそうだ。この薬が効かなければすぐに医者に行くこと。一応手紙も渡しておくか」
どうやら面倒見の良い医者のようだ。娘はそう思いながら女性に、一緒に南に行くことへの承諾をとった。女性はそりゃありがたい話だ、と受け入れてくれた。
手紙も受け取り、二人は出て行こうとした。娘は一応フードをかぶり、顔を隠すようにした。

医者は女性から診察料を受け取って、扉まで見送ってくれる。

「じゃ、先生、ありがとうね」

女性に頷いてから医者は娘にそっと忠告した。

「あまり隠すとかえって怪しまれる。南なら、他の大陸からの人間も流れ込んでいる。そちらから来たといえば黒目でもごまかせるだろう」

娘はその忠告を検討する。目を見せる。眉までは茶色だが睫毛はさすがに黒だ。目を出すのならそれをどうにかしないといけない。

「海辺までは何日かかかる。その間に適当にやればいいだろう」

「分かりました。ありがとうございました」

今度こそ、医者の所を出て二人は乗合馬車の発着場所に向かった。南行きの臨時便に乗り込み、程なく馬車が動き出した。

「南までよろしくお願いします」

「いや、こっちこそ世話になって。どうせ五日は一緒になるんだ。よろしくね」

人好きのする顔で女性がにっと笑った。

馬車の窓から、遠ざかっていく王城が見て取れた。少しでも発覚が遅れてくれれば、それだけ安全に逃げられる。その思いで娘は王城を眺めていた。

途中宿屋での宿泊が必要になる。そこで、乗合馬車は馬と御者をかえて次の街を目指すのだ。女二人だからと娘はその女性と同室に

なった。

「あんた、なんで南に行こうとしているんだい？」

ベッドに腰掛けて女性が尋ねる。どう言おうかと少し悩んで、娘は思い切って目を見せた。

女性は黒い目に驚いている。

「この色が珍しいからと王都に連れてこられたんです、そして身の危険にさらされたので逃げ出したんです」

「そうかい、大方珍しいもの好きのどっかの貴族が無理強いしたんだろ？」

当たらずとも遠からずな言い訳を信じ、女性は娘に同情してくれた。

そしていいことを思いついた、と娘に提案する。

「じゃあ南に知り合いがいるわけじゃないんだね。あたしは港町で宿屋と食堂をやっているんだけど、あんたさえ良かったらそこで働かないかい？　住み込みでさ」

「いいんですか？」

「勿論さ。人手が足りなくて誰か雇おうと亭主と言ってたとこだし。ただ船乗りが多いとこだから人は悪くないが、男どもが鬱陶しくてね。

あたしには妹がいたんだけど、船乗りと駆け落ちして別の大陸に行っちゃったんだ。だからあたしと同じ色に髪の毛を染めて、姪ってことにすればちょっかい出す奴もいないだろう」

願ってもない申し出で、娘はそれに乗ることにした。

次の街で赤い毛染めを買って宿で染めた。前髪をそろえて眉は隠

れるようにして、生え際は布で覆うようにと髪型を整えた。他の乗客に髪の色が変わったのがばれないように、そこからは頭全体を布で覆い終点の海辺に到着した。

女性――女将に連れられ宿屋兼食堂についた。

「あんた、こっちに来ておくれ」

その声に奥からのっそりと大男が現れた。日に焼けた肌にぱさついた感じの濃い茶色の髪の毛には白髪が混じっている。目は海のように深い青だった。女将は亭主だと紹介してくれたあとに、簡単に娘のことを説明した。

「というわけであたしの姪ってことでここで働いてもらうから」

「お前がいいなら、俺は別に構わない」

「よろしくお願いします」

こうして、娘は女将の姪として港町で生活を始めた。

王都を離れてから襲撃もなく、数ヶ月は平穏に過ぎた。

冬を越し、春も過ぎて海の色も美しい夏が来ていた。

31　逃げ水

その男性が食堂に現れたのは春の祭典の終わった後だった。
王都から離れた港町でも、見物に行った人はいるので戻ってから食堂でその話が出ていた。
娘は亭主と女将の作った料理や酒をテーブルに運ぶ。ここの客は船乗りが多く、あとは地元の人間と最近増えてきた傭兵といったところか。傭兵は船でやって来て東に行くらしい。噂では国王の叔父にあたる人物が東を治めていて、そこが傭兵を雇い入れている。
――潮風に穏やかでない空気が混じる。きな臭い。
客の噂話から、娘は他の場所のことを知ることができる。危なくなったらすぐにここを離れようと娘は聞き耳を立てた。

「最近の王様はずいぶんあちこちを見て回っていらっしゃるようだな」
「ああ、何でも視察に力を入れているんだと」
「知り合いに王城の役人がいるんだが、王様の仕事ぶりがすごいらしいぜ」

国王の話が出て、娘は洗い場に持っていった皿を置く手が止まる。春の祭典で神殿に召喚されるのではないかと怯えていたのが、何事もなく過ぎて安心していた矢先に耳に入った『国王』の動向。
必要以上に興味を持っているのを悟られてはいけない、とすぐに出来上がって盛り付けられた新しい皿を客のところに運ぶ。

「何でも曲者の東の国王相手に、有利に国境の川の通行権を認めさせたんだと」
「おかげで荷物を川で運びやすくなって、小麦の値段が落ち着いたそうだ」

「俺の親戚でも王城勤めがいるが、休暇で顔を合わせた時、王様が王城のあちこちを自分の目で見て回って、いきあった奴らに身分関係なく話しかけたり不満を聞いたりなさったそうだ。で、すぐに対処してくれたって嬉しそうだったな」

「仕事には厳しいって話は前からだったが、人当たりが良くなったのか」

何だか変わった？　客が話している国王は本当にあの国王のことだろうか。

自分勝手で人の話を聞こうともせずに、感情を押し付けたあの国王と同一人物なんだろうか。あの国王が身分に関係なく話を聞く？　人の話を取り上げる？

ドッキリとかじゃないよね、と思いつつ娘はくるくると食堂を動き回った。

その後もちょくちょく国王の話は漏れ聞こえた。貴族にはどう思われているかは分からないが、庶民には受けはいいようだ。

多少は誇張されているかもしれないが頑張っているんだ。素直にそう思えた。

こうして離れたことで客観的に国王を見れば、国や民にとっては悪くない国王のようだ。

自分にとっては最初から最後まで残念としか言いようのない相手だったけど。

視察云々は逃げた自分を探しているのだろうかと思いつつ、国王がこちらの方に視察にやってくるなら、すぐに情報は入るはずと噂には注意しながら過ごしていた。

港町の食堂ではそんな真面目そうな話はごく少なくて、たいていは船乗り達のあけすけな誘いや口説き文句を笑っていなすか、食堂の亭主や女将がうちの姪に何か？　とばかりにすごんでやり込めるかの賑やかな日々だった。

なりゆきで働くようになった主人夫婦はいい人で、親類のような親近感を抱く。

元の世界で断ち切られた家族とのような、楽しい日々が娘に笑顔と繕わない表情を取り戻させてくれていた。

夏がくるまで娘は幸せだった。

「今日は一段と暑かったね。やっと顔出せた。今日のおすすめは何？」

夏の暑気を払うような元気な声がして、あっと思う間もなく手が握られる。ひょろりと背の高い男性が手を握ったまま、にこにこと顔を覗き込んだ。

「ちょっ、手！　顔も近い。おすすめは揚げ魚と甘酢の野菜の付け合せか、鳥の岩塩焼きですっ」

娘が手を振り払って後ずさると、周囲の常連から抗議の声が上がる。それに合わせて厨房から亭主が現れた。

「女房の姪っ子に手を出す奴は……」

「うわあ、してません、してません。手を握っただけです」

おあつらえ向きに亭主の持った肉切り包丁が、迫力を増す役目を果たしている。亭主からぎろりと睨まれ、男性は芝居がかった様子で両手を頭の横まで上げて降参のポーズを取る。亭主が厨房に戻るとその姿勢のまま、娘を見てへらりと笑った。

「じゃ、鳥の方ね。パンと野菜スープに、酒は蒸留酒で」
「今度手を握ったら、みんなの飲み代払ってもらいますからね」
「えええっ、それは勘弁してくれ」

心底情けなさそうな声に、今度は周囲が笑い出す。つられて娘も頬をゆるめて厨房に注文を伝えに行く。

この背の高いお調子者が食堂に現れたのは春のこと。腰に下げている剣がなければ、旅人か吟遊詩人とでも思えそうな優男だった。ふわふわとはねる薄い色目の金髪と、緑と茶色の混ざったような瞳で、いつもにこにこと笑っている。

食堂に顔を出すようになってから、時々こうして夕食を食べにやってくる。その度に娘を口説きにかかっては娘や亭主から返り討ちにあうのは、この宿屋兼食堂では半ば名物のようになっていた。

焼きあがった鳥肉とスープをテーブルに置くと、先に運んだ蒸留酒は既に半分ちかくが飲まれてる。

「おまちどうさま」
「ありがとう。美味しそうだねえ、君の顔を見ながら食べたらもっと美味しいだろうね」

だから、前に座ってくれない？　という誘いをあっさり無視して、娘は他のテーブルで空いた皿を下げにかかった。

「兄ちゃんよお、いい加減諦めたらどうだい？」
「そうさ、あのおっかない亭主と女将さんががっちり守っているんだからな」

周りの声にもいえいえと諦めの悪いさまを示しながら、意外なほどに行儀よく料理を食べていく。

目が合うと酒のグラスを指さして口の動きだけで、おかわりと注

文してきた。
　樽の栓を開けて琥珀色の酒を注ぎながら、こんな感じで傭兵だなんてやっていけているのだろうかとつい余計な心配をしてしまう。
　春、最初に来た時もいきなり手を握られ、その場で付き合ってくださいと言われたのはここの語り草だ。間髪入れず、常連から叩かれ亭主からもげんこつをくらったこの優男は、ひどいなあと涙目になりながらその後もちょいちょい食堂に顔を出し、いつの間にか荒くれの多い常連ともなじんでいた。
　腰の剣は飾りじゃなくて、傭兵なんだと聞かされた時は絶対に嘘だと思った。
　正直にそう言うと、そんなに頼りなさそうに見える？　とぼやきつつ結構強いんだよ、だからお嫁にこない？　と誘われてその軽い調子につい笑ってしまった。
　以来、傭兵は時々仕事だと姿を消しては、忘れそうになるとふいと顔を見せる。今は二杯目の蒸留酒を飲み干して、ぐいと胸を張る。
「僕はその黒い目に僕だけが映るように頑張るだけです」
「ま。望みは薄いだろうが頑張りな。そういや、代々の王妃様ってのも黒い目だったか」
「そうそう、黒い髪の毛に黒い目をしているって聞いたことがあるぞ。見たことはないけどな」
　お前なんかに見ることができるもんか、とやじを飛ばされた常連がそちらにこぶしを振り上げる。
　綱渡りのような会話だ、と笑いながらどこか醒めた頭で思う。
「はいはい、この髪の毛が黒かったら王城から迎えが来るってことだけど、あいにくそうじゃないからここで真面目に仕事するわ。そろそろ最後の注文だけど、何かほしい人は言ってちょうだい」

娘の冗談にあちこちから注文の声が上がる。返事をしてさばきながら忙しい時間を過ごした。

食堂では壁際の目立たない席で宿泊客の男性も一人食事をしていた。談笑に加わるでもなく静かに食事を終えて、階段を上がったところにある客室に戻る。その際、声をかけられた。

「連れが部屋で休んでいるのだが、食事を持ってきてはもらえないだろうか。魚と肉の両方と、パンは多め、酒は小さ目の樽を一応頼む」

買い物に出ている間に到着した客はずいぶんと食いしん坊のようだ。

客の丁寧な言葉遣いに少し引っかかりながらも、下級の役人などならこの宿屋に泊まることはあるのでその類かと考えた。客は剣は持っていない。役人か、取引にやってきた商人なのだろうか。

「はい、分かりました」

返事をしてから、次々と出来上がった皿を運ぶ仕事に戻る。

そのさなか、食べ終えた傭兵もテーブルにお金を置いて立ち上がる。

「ご馳走様。また顔を出すから、その時には色よい返事をよろしく」

「何か申し込まれましたっけ」

「ひどい、春から散々申し込んでいるじゃないか。もういっぺん最初から言おうか？　ええと、君が好き、愛している。僕のところにお嫁に……」

「あーはいはい、毎度ありがとうございます。お帰りはあちらです」

「ううー。僕は諦めが悪いからね、また来るよ」

そう言って手を振って夜の町に消えた。
最後の注文の品を食べて飲んで、常連も店を後にして仕事が終わる。
皿洗いとテーブルの上を拭いた後で椅子を乗せて終わりだ。
はあ、と一息ついたところで、さっきの宿泊客の食事を乗せた盆を渡される。

「これを頼むよ。渡したらそのまま部屋に戻っていいからね」
「はい、お疲れ様でした。伯父さん、伯母さん」

一応伯父、伯母と姪ということで普段からこの呼び方をしている。
娘は二人にあいさつをしてから、酒の樽とグラスを二つ持って階段を上った。
二階には客室が三つと主人の部屋、それを越した一番奥に狭いながらも娘の部屋がある。今日の宿泊客は一組だけだ。
樽とグラスを客室の扉の横に置く。引き返して料理の盆を手に取り、その部屋の扉を叩いて顔を出したさっきの客に食事を持ってきたのを告げる。

「ありがとう、中のテーブルに置いてもらえるだろうか」

足元に置いた酒の樽とグラスを腰をかがめて持ち上げて、扉を開けて客は娘を通してくれた。
盆から皿をテーブルに並べていき、空の盆を手に持つ。

「お盆は置いていきますから、食事を終えられたらこれに皿などをのせて廊下に出しておいてください」

窓から外を見ているもう一人の客に呼びかける。
茶色の髪の毛、大きな体。これで剣を持っていればまるで――。

そう思う娘に呼応するかのように、客がゆっくりと振り返った。

「久しぶりだ」

娘の前で、厳しい眼差しを向けているのは騎士団団長その人だった。

32　猟犬と狩の終わり

――見つかってしまった。

王城を逃げ出したのが秋の祭典の時。春の祭典をやりすごして夏。期間としては長かったのか、短かったのか。娘は港町で過ごした日々を思い返す。

元の世界ならもっと早くに見つかっただろう。どこにも監視カメラがついているし、誰かが呟けばそれに即座に呼応する人達がいる。それを思うと長くもった方なんだろうか。ただこの世界では人手しか頼りにならないから、その意味では早く見つかってしまったんだろうか。

団長は記憶よりも少しやせて見えた。真っ直ぐに見つめる視線は鋭い。王城にいた頃には向けられなかったもの、威圧感のようなものを感じる。

お盆を胸に抱えたまま一歩後ずさり、後ろを見やる。

さっきここまで食事を頼み、娘を通してくれた客が扉を塞ぐように立っていた。団長と一緒にいるのだからこの人も騎士なのだろうか。二人とも剣を手に取ることもせず、素手のままだ。もし自分が抵抗しても素手で充分と言うことだろう。

きゅっとお盆を持つ手に力が込められる。

団長が窓から離れて近寄ってきた。

こんなに大きい人だっただろうか。こんなに怖い顔をする人だったんだろうか。

取り留めないそんな考えが浮かんだ。

「ご無事でしたか」

跪かれて頭を下げられ、低い声で呼びかけられて納得する。

国王の命令でここまでやってきた。団長の職務の一環なのだと。

「はい」

「早速ですが、王城にお戻り願います」

いきなり本題に入られて、娘は苦笑とともにざらついた不快感が頬をなでた気がした。

戻る。あそこは自分の居場所ではない。『戻る』場所ではない。

何より戻ったりすれば今度こそ、国王の手の内だ。

「……それより顔を上げてください。料理が冷めてしまいます。この料理は美味しいんですよ」

思ったよりも冷静な声が出せた。顔をあげた団長をにこりと見やりながら結構図太い自分に安心する。まだ大丈夫、まだ時間が稼げる。

「では、こちらにお座りください」

団長はテーブルの向かいの席を示し、座るように促した。料理ののった小さなテーブルに向かい合わせに座る。

では失礼して、と小さく断った後で団長は食事を始めた。その様子を眺める。

「どうやって、ここを見つけたのですか？」

「国中から情報を集め、ふるいにかけてからあとは人海戦術ですね」

綺麗な仕草で鳥を切り分けながら団長が答える。人海戦術。国の中枢がそう言うのなら、この半年あまり随分働かされた人達がいるのだろう。上から目線なので適切ではないが、ご苦労様だ。

「ただ、こちらの情報は有力なものではありませんでした」

「そうなんですか」

「まさか、目を晒しているとは思いませんでしたから」

真っ直ぐな視線が娘を射抜く。茶色の目はいつもの穏やかなものではない。

冷たさと得体のしれないものを含んでいるようだ。

赤く染め、編んでたらしてある髪の毛を手に取る。もう、赤く染める必要もなくなってしまう。

楽しかった時間が終わってしまう。

知らず、ため息が漏れた。

団長はテーブルの向かいに座る娘を見つめる。

赤い髪の毛、頭には布を巻いている。耳には赤や緑、青といった飾りをつけているのは元の赤い耳飾を目立たせなくする工夫だろう。そして黒い目は切った前髪の下で堂々と晒されている。

それだけのことで印象が大きく違っている。

茶色の髪の毛で目を隠し、俯き気味で控えめな印象だったのに、この変わりようはどうだろう。

最初は茶色の髪の毛の一人旅の娘を探した。早馬を出して主だった都や町で乗り合い馬車の客についての聞き込みなども行った。

それらしい娘が見つからなかったので、王都に潜伏しているかと調査を行わせた。

祭典のために人の出入りが激しく、有用な情報はなかなか得られなかった。

団長は娘の計画に内心舌を巻いていた。何が娘にとって有利に働くかをよく知っている。

木の葉を隠すなら――人にまぎれるなら人の多い所、多い時期。

寄せられる情報は膨大で、細切れだ。

忙しい時期でもあり、知り合いでもない限りわざわざ人に目をとめ、しかも記憶するなどまずなかった。

田舎から出てきたもの同士の喧嘩、すりにあった娘、急病人、男と一緒に馬車に乗り込んだ娘……。一通り調べ、今度は誰かと一緒の可能性を潰しにかかる。特に男と一緒にいた娘などに関しては徹底的にだ。噂を確かめに田舎まで行って騒ぎになった事例は少なくない。

城下に手引きをする人間がいるとは思えなかった。娘が城下に出かけたのは一度きり、しかも騎士が影ながら護衛し自分が側についていた。不審な人物と接触した記憶などはごく少なかった。それでもあの日のことを思い出して、両替商や武器屋、食堂や雑貨屋、菓子屋などたどった店や道を調べさせた。

どこにも娘の立ち寄った形跡はなかった。

乗合馬車については、臨時便も多く御者も臨時雇いだったりしてこちらの調査も難航する。

一向に手繰れない情報に、騎士団本部で呻いたことも一度や二度ではない。

「本当に間諜だったのか？　手がかりがまるでないじゃないか」

「まあまあ、別の見方から調べなおすしかないだろう」

副団長になだめられ、また国内の膨大な報告書に目を通す毎日。

合間を縫って精力的に視察を行う国王陛下の護衛体制を整え、指示

を出し、時には同行する。近隣の都市に視察の合間に常駐している騎士団支部の者からの報告をうけ、これはと思うものを確認しては空振りに終わる。

一方で女性の死体の確認もさせていた。若い娘で身元が不明なものに関してはそれこそ徹底的に。

いつ、茶色ないし黒髪で黒い目の死体の報告がされるのか、その恐れにさいなまれていた。

港町の娘の噂は本当にごくささいなものだった。

食堂に黒い目の娘がいる。だが客や主人の話では駆け落ちした主人の妹の娘、姪だという。髪の毛は伯母と同じ赤い色で、何より珍しい黒い目を隠すでもなく接客に当たっている。

別人だろう。その判断でその報告は膨大な書類に埋もれていた。

ただ手がかりが得られずにそれらの雑多な、有力ではないと思われた報告書を再度検証する必要に迫られた際、脳裏に陛下の言葉がよみがえった。

『おそらくあれの一番側にいて、あれの思考回路を知る立場にあった。その目線で考えて行動してくれ』

あれ――娘の思考回路。

隠れ住むのは難しい。人は秘密の気配を感じるとそれを暴かずにはいられない。娘は自給自足の隠遁生活は送れまい。中途半端に隠れていては限界があるはずだ。

ならば、いっそ堂々としているのではないか。

そして改めて報告書を調べなおす。

見つかったのが食堂の娘。

詳細に調べなおし、女主人が秋の祭典で王都にいたことも判明した。そこで娘と知り合ったら？　偶然同じ馬車にでも乗り合わせたら？南行きの乗合馬車を調べ、途中の宿屋を調べた。そして得られ

たのが赤い髪の中年女性と茶色の髪の若い娘の二人連れ。主人夫婦の姪という娘が食堂で働くようになった時期も秋。

――見つけた。まだ最終確認もしていなかったが予感はした。

港町の騎士団支部に赴き、現地の騎士に確認を取る。件の食堂に行ってみるとちょうど娘が買い物に出るところだった。

明るい夏の日差しの中で、娘は笑っていた。

道をゆく知り合いと挨拶を交わし、腕に籠を通して歩いていく。髪の色も髪型も違うが、まさしく。

あの場でよく捕まえなかったものだと団長は自嘲する。人目もはばからずにそんなことをすれば、こちらが不審者だ。現地の騎士が側にいるとはいえ、騒ぎになるのは目に見えている。騎士に尾行させて、自分は宿屋の客になる。

じりじりしながら夜を待った。

気配を消して階段の途中からうかがうと、船乗りの常連が多いらしく上品とは言いがたい店で、娘は笑顔で働いていた。あんな顔は王城では見なかった。大声ではきはきと注文を確認して、皿やグラスを客のテーブルに運ぶ。声をかけられてまた笑顔で応えている。

それは決して陛下やそして自分にも向けられなかった無心の笑顔だった。

目を奪われ、ここでの生活が娘には幸せなのだと思わせるに充分な様だった。

無事でいてくれたことに安堵し、同時に暗い思いも抱く。

知らないところで、手の届かないところで笑っているなんて許せない。

見知らぬ男に手を握られているなんて許せない。

色々な思いのまま、客室に戻り計画通りに娘を室内に招き入れる。

――見つけた。つかまえた。もう放さない。

醜く暗い、どろどろした感情を自覚しながら、それでも自分は陛下の臣下だ。

連れ帰ることが最優先事項になる。ここまでは陛下とは共通認識だ。その後は……。

「王城に、戻る、ですか」

娘の声に我に返る。気付けば皿はほぼ空になっていた。

外見は異国情緒のある、だが口調は王城のそれに戻った娘は静かに区切るように戻る、と呟いた。

「ええ、お戻りいただきます。外は危険です」

「中だって危険だったでしょう？」

笑い含みで返される。

「それにしても、春の祭典では召喚の儀はやらなかったんですか？ひやひやしていたのに」

「ええ、陛下があなた以外を召すつもりがないとおっしゃって。ひやひや、ですか」

「だって私がまだ陛下と相性がいいのなら、召喚されればここから神殿に移動させられていたかもしれないでしょう？」

瞬間、この半年あまりの苦労が徒労に過ぎなかったのを自覚する。人手と時間を割いてここまでたどり着きはしたが、娘の言うとおり神官が召喚さえ行えば、どこにいようともあの召喚陣に戻ってきて

いたのかもしれない。
脱力し、これまで蓄積された疲労が一気に体をおそう。
あの努力が無駄足だったかもしれないとは。だが、のんきに待っている間に何かが起こったかもしれない。
第一、陛下も自分もただ何もせず待つなど到底できなかった。

「戻ればどうなります？」

どうなるか。娘はまた陛下の庇護下に入る。そして。

「それでもお戻りいただきます」

33　二度目の逃亡

王城の頃なら困ったような顔をするだけだと思っていたのに、娘は真正面から団長を見つめきっぱりと言い切った。

「嫌です」

思わずまじまじと見つめると、にっこりと笑われた。その笑顔が市場で見た時のような屈託のないもので、それだけで団長の心拍が上がる。

「は？　え、と」

「だから、いやです。戻って私になにかいいことがありますか？」

盆に空いた皿を重ねながら、ふふっと笑われてどう話を続けてよいものか迷ってしまう。ここは泣かれるのを引っつかんでも連れて行くような心境だったはずなのだが。傍目からは団長が毒気を抜かれてしまったように見えた。

「いや、あの」

「まさか結婚がいいことなんておっしゃいませんよね？　私、そこから逃げたんですよ」

「今は、お変わりになられて……」

つい、と娘が立ち上がり、手をテーブルに置いて上体を団長の方に寄せた。それだけで、騎士団の団長――泣く子も黙るおそらく国内最強のはずの大男が、反射的に上体を後ろにずらした。なおも微笑みながら団長の方に顔を寄せる娘は楽しげだ。

「さっき、『あなた以外は召すつもりがない』って春の召喚をしなかったとおっしゃいましたよね？　それって私を帰さないってことでしょう？」
「あ」
失言に顔をこわばらせた団長に比べ、娘は笑顔を崩さない。それがいくぶんか皮肉げになり目が笑っていないように見えた。
「戻ったら、結婚一直線？　まさかあなたがその片棒を担ぐとは思いませんでした。私、本気で考えての結果ここにいるんですよ」
「外は危険で……」
「城の外で危ない目にはあっていないんです。私にとっては王城の方が危険なんです。色々と」
娘はまた椅子に座り、酒をグラスに注いで団長に渡した。条件反射で受け取り、娘の言った意味を考える。娘はもう一つのグラスにも酒を注いで扉の前に控える騎士にも渡した。固辞しようとするのを許さずにグラスを持たせる。
色々と危険。それは単に襲撃者のことだけではないと匂わせている。戻れば、おそらく陛下は軟禁に近い状態に娘を置くだろう。結果として娘の未来は一つしかないことになる。
それが娘の幸せか？　先ほどまでの狂気じみた執着が揺らぐのを感じた。
王城に連れ戻せば間近にはいられる。ただ、もうここでのような笑顔は見られないだろう。
考え込んでいた団長は、娘の雰囲気が変わったのに気付かなかった。
「だから、ね」

そう言うと娘は息を吸い込み、大声を上げた。

「きゃあああ、お客さんにさらわれるうう！」

「なっ」

慌てて立ち上がろうとするが、娘はすばやく扉の前まで行っている。そこで騎士が娘を押さえにかかった。

下から慌しい足音が二人分聞こえてくる。どんどんと扉が叩かれた。

「大丈夫かい？　ここを開けな！」

かんぬきをかけていなかった部屋の扉はやすやすと開けられた。なだれ込んだ主人夫婦が見たのは、娘を羽交い絞めにしている男と椅子から腰を浮かしかけた大男の図だった。亭主の目が剣呑になり、護身用なのだろう太い棍棒を手に部屋に入り込む。

「伯母さん、追っ手」

娘の一言で理解したのだろう、女将はぎりっと宿泊客で今はただの暴漢と認識した団長達をにらみつけた。

「あんた達がそうかい、変態の所には連れ戻させやしないよ。あんた、やっちまいな」

のっそりとした体格とは裏腹の俊敏性で亭主が棍棒を振り上げ、娘を拘束している騎士に殴りかかった。そのままでは娘に当たってしまうと騎士はとっさに娘を放した。ぶんぶんと棍棒を振り回すので扉に団長達が近づけない。その下をかいくぐり娘が扉に到達する。

「伯母さん！」
「あとはあたしらがやるから、あんたは手はずどおりに逃げな。元気でね」
「伯母さん、伯父さん、ごめんなさい、ありがとう」

娘をかばって扉前に陣取った女将が一瞬くしゃりと顔をゆがめたが、すぐに元に戻して団長達をねめつける。その手にも勇ましく棒が握られている。

団長はぱたぱたと階下を走り下りていく足音を聞いた。

とっさに首をめぐらせて窓に飛びつくも、先ほど外を眺めた時に気付いてはいたが、格子がはめられてそこから抜け出すことができない。

「宿代を踏み倒す奴対応さ。さあて、あんないい娘を追い回すなんざ、ろくなもんじゃないね」

団長も騎士も共に剣を身につけてはおらず、しかも民相手では手も出せない。防戦一方になっていた。亭主が扉に近づけさせないように棍棒を振るいながら、女将に叫ぶ。

「ここは俺がやるからお前は騎士様か巡回の兵士を呼んで来い」
「待て、その必要はない」

どうにか隙を見つけ、団長が大声で呼びかける。懐を探って騎士団の紋章を興奮している主人夫婦に見せる。

「我々は騎士団員だ」
「へ？　騙そうって言うのかい、そんな話誰が信じるって言うんだ」
「私は王都から来たが、こいつはここの常駐だ、見覚えがあるだろう」

亭主が騎士の顔を見て棍棒を振り回すのを止めた。女将はなおも信じようとしなかったが、亭主が動きを止めたのを見て取ってしぶしぶ棒を引っ込めた。団長から騎士団の紋章を奪い取ってしげしげと眺める。

「こいつは本物かい？　本物の騎士様なのかい？」

「ああ、そしてあの方、あの人を王都に連れ戻す任務を担っている」

娘は近所の腕利きの漁師の家に逃げ込ませて、小船で近くの入江か海上の船に連れて行く手はずだと聞き出せた。団長は地元の地理に詳しい騎士に、行方を追わせた。亭主は後片付けをして、女将は椅子に座ったまま団長と向かいあう。

一度厨房に戻った亭主が冷たい飲み物を持ってきてくれた。それを団長は一息に飲み干す。

「あの人からどんな風に聞かされていたんだ？　教えてはくれないか」

「目の色が珍しいからって連れてこられた、身の危険を感じたからそこから逃げ出したって言ってた。もし誰かが追ってくるなら腕の立つ人間だろうともね。それは本当の話かい？」

「……大筋ではあっている」

嘘は言っていない。ただ随分と大雑把な説明なだけだ。この様子では娘の素性も、連れて行かれた場所についても聞かされていないようだ。

さっきの娘のさらわれる、追っ手だという台詞も嘘は言っていない。

絶妙な誘導に団長は力が抜けるような感覚におそわれながら、秋の脱走劇を思い出した。その知略に、勇気に心中かなわないと思っ

てしまいそうになる。
主人夫婦の様子からは、娘は追っ手がやってくるかもしれないと打ち明けていたようだ。それにこの夫婦が応えた。文字通り体を張って娘を逃がすために、立ちふさがったのだ。
腕の立つ人間が追っ手になると分かっていても、立ち向ってきた。剣で切り捨てられるかもしれないのにだ。赤の他人だろうに、何故ここまでするのだろう。その疑問を女将はあっさり解消した。

「亭主は天涯孤独、あたしにしたってたった一人の妹は行方不明、子供もいなかった。あの娘が来てくれてから一緒に店をやって、…まるで娘ができたみたいだったんだ。明るくてよく働いてくれたし、だから追われているならなんとかしてやりたかったのさ。あの娘は危ないと反対したんだが、あたしらがこうやって時間をかせぐって決めたんだ」
「あの人はここで楽しかったのだな」
「そう思うよ、本当にくるくるとよく働いてくれたんだ。ああ、でも雷雨の時は別だったけどね」

雷雨。女将の言葉に顔を上げれば懐かしむような顔に笑いが浮かんでいる。
視線に気付いて、笑いながら頷いた。

「苦手だって話は聞いてたが、本当に駄目なんだねえ。窓のない地下かベッドの中に引きこもって、耳を塞いでやり過ごしていたよ」
「お一人でか」

再度頷いた女将は、そう言えばと記憶を探る。

「前に抱きしめてなだめてくれた人がいたって言ってた。すごく安心できたって」

「そうか。そんな風におっしゃっていたのか」

あの日のことだろう。もう随分前の、ただ一度だけのことだ。

邪まな感情を自覚した日でもある。あれから王都で、視察先で雷雨の際にはどうしているだろうかといつも以上に心配だった。

安心――自分はその寄せられた安心を不安に変えてしまった。守りたいと思いながら、不本意な状況を強いている。

帰城を嫌ですと言い切った娘の眼差しが、職務に忠実たれという根幹を揺さぶっていた。

「どうしてもあの娘を連れ戻すのかい？　変態貴族なんだろう？」

「主は変態では……。ただ王都にというのは命令だ」

「それであの娘は幸せになるのかい？」

心底娘を心配する口調で女将が尋ねる。それは期間は短いながらも一緒に過ごした娘への思いやりに満ちていた。

団長は口をつぐんでしばらく考える。

王城に戻れば物質的には何不自由はない。陛下と婚儀を挙げれば身分すらこの上ないものになる。そして生きた伝説として、大事にされて過ごすことになる。

これらは全て表面的なものだ。実際には陛下の言動に傷つき、元の所に帰還する望みも一度は断たれ、逃亡生活を選んでいる。

「正直、俺には分からなくなった。主はあの人を想っているが、それがあの人には幸せかは」

「あんた、あの娘に惚れているのかい？」

つい俺と言い、陛下への不敬とも取られかねない心情を吐露した団長は、続いた女将の言葉に動揺した。狼狽し、みるみるうちに赤くなる団長に女将はやれやれという思いをもった。

大の男があんな若い娘に振り回されているのかい。しかもこの男は、自分も好きなくせに主とやらの命令でつかまえにくるなんざ、その性根がいけない。まあ騎士なんて剣を振り回してなんぼだから、人の気持ちなんて難しいのかね？

「なんで惚れた相手を別人に引き渡す真似をするんだ、あたしにはわかんないね」

「俺は……」

その時、行方を捜させた騎士が戻ってきた。近所を聞き込んだところ、漁師が床に縛られ転がされていたとのことだった。漁師曰く扉を叩かれ開けた途端に襲われたので、相手が誰かは分からないということだ。

その漁師の名前を聞いて女将が青ざめた。それが、娘を逃がす役割を頼んでいた人物だったからだ。

小船は一艘なくなっていた。娘は海の上に違いない。一人か。もしくは誰かが一緒か。その誰かが漁師を縛り上げたのなら、ろくな奴ではない。

至急、船を出してもらうように女将に頼み、荷物と剣を持ち宿屋を後にする。固辞する女将に宿代と、金貨の袋を押し付ける。娘が世話になった謝礼の意味合いだと告げるとしぶしぶ受け取った。

出て行こうとする際、団長は振り返った。

「他言無用に願う。あの人の――あの方の髪の毛は黒髪だ」

目を丸くした女将に一礼して、夜の港町に出て行った団長は、暗い海を眺める。

程なく乗せてもらえた船でまずは女将の言っていた入江に向かうが、そこには船も人もいなかった。

海上には船の明かりをうかがわせるものはない。夜が明けての本

格的な捜索でも、娘を海上で乗せたという船は見つけられなかった。

港町の宿屋兼食堂では、女将が腰を抜かしてその後数日寝込んだとの噂がたった。

数日して再開した食堂に看板娘の姿はなく、残念がる常連に女将も亭主も急に迎えがきて大陸に戻ったと言葉少なに説明した。

34　隠すもの残すもの

娘は夜の道を走り抜けた。この周りなら細い道でも大丈夫だ。時間を稼いでくれている主人夫婦に感謝しながら、どうかけがをしないようにと勝手な願いも持っていた。

ポケットには携帯と短刀、首には騎士団の紋章をあしらったピンが鎖に通されさげられている。大概身に着けているエプロンには貨幣が入っている。これで着の身着のままでもしばらくはどうにかなるはずだ。

主人夫婦が逃亡の案内人として頼んだ漁師の家の扉を叩く。今のところ団長も、一緒だった騎士にも追いつかれてはいない。

この家は海に面していて、そこから小舟に乗れるはずだった。静かに扉があいて男性が現れた。家の明かりで逆光になっていて顔が良く見えない。

「あの、女将さんとの打ち合わせ通りに急ですみませんが、舟に乗せてください」

頷いて引っ込んだ漁師は扉の横にかけてあった外套のようなものを頭からすっぽりとかぶって、娘を船着き場に促した。

先に乗った漁師に手を引かれ娘も小舟に乗り込む。

「布を上からかけるから、横になっているように」

低い声で言われ、黒い布がかけられる。用意がいいと感心して、娘はその指示に従った。小舟はすべるように船着き場を離れて、暗い夜の海に漕ぎ出された。できるだけ音を立てず、でも早くと静かに櫂のこがれる音がする。

身をひそめて波の音と櫂の音を聞きながら、娘はこれからをどう

しようかと考える。入り江につけてもらえれば馬車を雇ってでも他の都市なり町に向かおう。東か西か。北は王都を迂回しなければならないので時間がかかる。西は正直よくわからない。西の都に隣接する国は砂漠が多いとも聞いていたので、行くなら東だろうか。

東は先の王の弟が公爵をしていたはずで、今は傭兵の流入が目立っている場所だ。危険な香りはするが、人の出入りの面では目立ちにくい。

「そろそろ座っても大丈夫だ」

ずいぶんと沖に漕いだ後で漁師から声をかけられた。もそもそと布を外して、船底から起き上がる。星を見て方角を確認しようと娘は頭を上げた。

「どこに行きたい？」

「東にしようかと思っています。東の方向に船がつけられるような場所はありますか？」

「……東。いいねえ、手間が省けるよ」

突然、漁師の口調が変わった。口調だけではない、声もだ。飄々と軽い聞き覚えのある声に変わり、娘の目の前でばさりと頭の被り物を外したそこにいたのは、食堂に時々現れていた自称傭兵だった。

「どうして？　あの家の漁師さんは……」

「うん？　大丈夫、殺していないから」

あっさり言われるがその内容は聞き逃せない。殺していないから大丈夫。それはこの傭兵が殺したり、危害を加えたりすることに慣れていることを示唆している。そして海上に得体の知れない男性と二人きりの現状に娘は緊張の色を濃くした。

傭兵は完全にいつもの口調になっている。軽口をたたき娘を大げさに口説いて、店にも常連にもするりと馴染んだ雰囲気だった。

「僕としてはもっとあの場所で君を口説いていたかったんだけどね、あそこの料理は美味しかったし。でも王都から追っ手が来ちゃったから残念だけど時間切れだ。あの宿に騎士の客は目立つ。きっと君が逃げ込むだろうって、女将さんたちと一番懇意にしていて腕利きの漁師さんの家に先回りしてお邪魔してたってわけ」

軽やかに説明されてもはいそうですかとは頷けるわけがない。娘は逃げ場のない小舟の上で、傭兵の語りを聞いていた。傭兵は情報を隠すでもなく話している、これは娘には何もできないのが分かり切っているからという余裕の表れだ。

「でも、騎士団の団長さん自ら追ってくるなんて、さすがだね」

「あなたは何者？」

「傭兵だって言っているだろう。報酬次第でどちらにも転ぶお調子者さ。ただ僕は退屈が嫌いだから、面白そうなことになら首を突っ込むし雇われることにしているんだ。今回は最高に面白かったね。明るい港町で、伝説の娘さんと知り合いになった上に団長の鼻先で掠め取れたんだから」

団長の正体を知っていた時点でそうではないかとは思っていたけれど、はっきり伝説の娘と言われていよいよ逃げ場がなくなったのを感じる。ここをやりすごすのは無理だ。生殺与奪は文字通りこの傭兵に握られている。

できるのは、できるだけ情報を引き出すことだけだ。

傭兵で雇われなのなら、雇い主がいるはず。東に行きたいと言ったのが傭兵には好都合なら、雇い主は東に住んでいるか東に縁の深い人物に違いない。その上、この傭兵はある程度依頼を自由に受け

られる立場のようだ。ならそれを雇えるほどの権力なり経済力がある人物。

考えていくと、ある人物に集約されていくようだ。

「東の公爵？」

傭兵はぱちぱちと手を叩いた。

「すごい、やっぱり今回の件は面白いよ。首つっこんでて良かった。僕への依頼はそこに君を連れて行くこと。引き渡せば契約終了だ」

東の公爵、先の王弟が自分をほしがる理由はなんだろう。国王への牽制か、それとも市井に逃げている伝説の娘を保護して国王に恩を売りつけるのか。どちらにしても春からこの傭兵をよこすくらいだから、思いつきの計画でないのだけは確かだ。

娘はただね、と続けた傭兵に目を向ける。ふわふわとした髪が海風に揺れていた。くすくすと笑いながら傭兵は言葉を紡ぐ。

「公爵との契約が終了すれば僕は自由の身だから、次は君と契約しようか。依頼がもしあれば連絡してくれる？　たいがいのことはかなえてあげられると思うよ。看板に赤い蛇が描かれている店で、店の主人に風をつかまえたいって言ってくれれば連絡がつくからね」

娘は傭兵の意図がわからない。東に連れて行った後なら、娘の依頼も受けると言う。

それが東からの脱出であっても聞き入れるのだろうか。

「ん？　何でって顔だね。僕は気まぐれで気に入った依頼しか受けない。君のことは結構気に入っているから、依頼があれば受けようと思うくらいだ。報酬は僕が決める。そんなに高くないから安心し

て。僕は他で稼いでいるし堅実だから、なんならこのまま愛の逃避行でも構わないくらいなんだけど」

「東に引き渡すまで契約は終了じゃないんでしょう？」

「痛いところを突くね。まあ、この稼業は信用第一だから契約満了までは、雇い主の意向には逆らえないけど君とだったら依頼も追っ手も蹴散らせるよ。自惚れじゃなく、僕はそれだけ強いから」

船を漕ぎながら傭兵は何でもないことのように言う。息も乱れていない。口だけでなく、本当に鍛えているらしい。ひょろりとしているのに、ばねのようにしなやかな動きを見せている。

「公爵のところも、あなたと一緒も気が進まない」

「当然の答えだけど契約だから一旦は公爵に引き渡すね。それからゆっくり考えてよ」

ふと気づくと再び陸地が近くなっている。どこかに上陸するつもりだ。逃げるならその時しかない。油断なくタイミングを図る娘に、傭兵は櫂を持つ手を止めた。

猫のようにしなやかに娘に近づく。

「騒ぐだけ無駄だし体力消耗したら、この後大変だよ。だから寝てもらおうか。大丈夫、道中は大事に大事に運ぶから」

みぞおちに衝撃を受けて意識とともに体がずるりと沈んでいく、抱きとめられたと思ったら耳元で囁かれた。

「公爵にはできるだけ下手に出て、せいぜい持ち上げてやるのが得策だよ。きっと色々しゃべってくれるはずさ」

雇い主の情報を教えるなんて傭兵としてはどうなのか。守秘義務

とかないのかなど思いながら、最後に海に映ってゆがんだ月が目に入った。それが南の最後の記憶になった。

それからは最悪だった。口を布で覆われ手足を縛られて荷馬車のようなものの中に横たえられ、体に振動を感じながらどこかに運ばれていく。ああ、石畳を走っているようだとか、土のでこぼこ道を走っているなとか感じるが、外は見えないし分かるのは東に向かっていることだけ。

食事時には手の拘束は解けるが一日寝て運ばれているので食欲もない。第一傭兵の手からのものは食べたくない。

「いらない」

「食べなきゃ君が大変だよ」

無理にスープのようなものを飲まされる。きしみそうな体を動かして身奇麗にすると、また手足を縛られる。

「どこが大事に運ぶなの。荷物じゃないんだから」

「手も足も痕がつく縛り方じゃないよ。振動を和らげるために敷物もしているだろう？」

傭兵基準ではこれでも大事に運んでいるのだと言う。御者の男と交代で馬車の中で眠りながら東を目指す。止まるのは食事と買い物の時だけだ。監視は厳しくて逃げ出すことも、声を上げることもできない。

いつも傭兵は顔に笑みを貼り付けている。甲斐甲斐しく世話をやきながら、それでも娘を自由にはしない。

それでも、人家がないと口の布ははずしてくれて会話ができた。

「東で持ち物を取り上げられるかもしれないけど、捨てられて困るものはあるかな？」

「どうしてそんなことを聞くの？」
「預かっておこうかと思ってさ。絶対に壊したりなくしたりしないよ」
「……あなたを信用しろって？　笑える」

横になりすぎて痛む腰をかばいつつ体を起こそうとすれば、背中に何かを当てて荷馬車の壁にもたれることができるようにしてくれた。無駄な優しさだと娘は思う。

傭兵は娘の前に座り込んで、目を覗き込む。緑と茶色の混じったような目が、ひどく真面目に見据えてくる。

「どうせ、君が眠っている間に持ち物は好き勝手にされる。失いたくない物や反対に体からはずしたくない物を教えてくれないかい？　あの食堂のご飯が美味しかったし、君も楽しかったからこれは下心なしの行為だ」
「何に誓う？　口だけでしょう？」

また斜めに体がかしぎそうになるのを傭兵が支えた。

困ったなあと頬をぽり、と掻くと妙に人間くさく見えた。それまではどこか決められた役割を演じているような気がする。何に誓えばか、と一人ごちた後で耳元で名前を呟いた。

「僕の本名。調べたら素性はすぐに知れる。人相書きと合わせたら簡単に僕を捕まえられる情報だ。これに誓う」

娘は必死に考える。これも嘘な可能性は高い。

そうやって自分から大事な物を奪うのではないか。この傭兵は信用できないが、仕事に対しては真面目なのはここ数日で嫌と言うほど知らされた。なおも頷こうとしない娘に、本当に強情だねえと苦笑する気配がした。

「こんな状態の君に手を出さないんだ。少しは信用してくれてもいいんだよ」
「……公爵からの依頼だから……でしょう？」
でも目が覚めて一切が無くなっていたら。公爵の人となりを見極めてからでないと身につけている物、特に携帯はやっかいな代物になるかもしれない。神殿からもらった耳飾もだ。
「携帯と短刀は失いたくない。耳と首の飾りは肌身離さずにしておきたい」
「了解」
じゃ、と傭兵は娘の拘束を解いた。意味が分からずにいた娘に時間をあげるから隠しておいでと提案してきた傭兵は、口笛を吹きながら馬車を出て行った。首だけをめぐらして娘に釘を刺すのは忘れない。
「あ、逃げようとするのは無駄だから、じゃ頑張って隠してね」
一人荷馬車に取り残されて娘は呆然とした。預かろうとせずに隠せとは、一体何を考えているんだろう。でも、と思い直す。公爵の所に行けば短刀はまず間違いなく取り上げられるだろう。
ポケットの中の物を握り締めて娘は荷馬車の外に出た。ここがどこかは分からない。目印になるものの近くに隠せばいいだろうか。
迷いに迷って娘は品物を隠した。見計らったように傭兵が戻り、また手足を縛られた。
「もうすぐ公爵の屋敷というか城、そこに到着する。元気で」
「今更気遣われても」

「まあまあ、ここでお別れだからね」

傭兵は最後までにっこりと笑ってまた娘の意識を奪った。

次に意識が戻った時、手は縛られていたが足と口は自由になっていた。手の前で縛られているのは力を入れてもほどけない。

窓から外を見て、ここがどこか、逃げられないか確かめないと。

起き上がった時に娘は違和感に気付いた。さらりと顔の横をすべっていく髪の毛。

その色が黒に戻っていた。

幕間　ある夫婦の話

春の祭典。港町でも小さいながら王都の祭典にあわせた祭りが催された。娘にとってはいつも以上に食堂への客が多く、忙しかった三日間が終わった後でもあった。

祭りの三日目の朝、変わらずに小さな部屋で目をさますことができて、ほっとして顔を覆ったことは娘しか知らない。これはそんな春のある日のことだった。

忙しい昼食の時間帯も終わり、一息つける時間帯に主人夫婦と娘はお茶を飲んでいた。気持ちのよい風が店の中を通り抜ける。

大きく開けた窓からは、太陽にきらきら光る海が見えた。

「ああ、いい風だね」

女将の言葉に娘も頷く。最初は波の音で眠れなかったのに、今では慣れて子守唄のように気持ちよく感じられる。今日の海は凪いでいて、午後の気だるい雰囲気によく合っていた。

一足早くお茶を飲んだ亭主が厨房に戻って、夕食の仕込みを始めた。大きな手が包丁を握り、驚くほど繊細な味わいの料理を作る。昼食も夕食も開店前に試食をかねて亭主が作ってくれるものを美味しくいただいていた。

今日の夕食は肉のあぶり焼きと魚介の煮込みだ。日替わりのメインがだいたい二品、それに常連は勝手知ったる注文を加える。手際よく応じて亭主は料理を作り、女将が盛り付けて娘が注文を取ったり皿や酒を運ぶ。会計は女将か娘の手がすいている方がやる。

一度店を開けると閉店時間まで忙しく働くことになるこの店は、女将の人柄と亭主の料理の腕が評判だった。

「伯父さんは元は船乗りだったの？」
「北の出身だったのが故郷を飛び出して流れてきて、船乗りになったんだって」

ふと女将が海に目をやり、娘もつられてそちらを見る。船がゆっくりと航行していた。

「初めて会った頃は、あたしの親も健在で妹と四人で宿屋と食堂を切り盛りしていたんだ。……もう随分前の話だね」

緑の目がふっと優しく柔らかい光をたたえる。見事な赤毛で印象的な緑の目の女将はいささか貫禄のある体つきながら今でも綺麗だけれど、若い時はもっと綺麗だったのだろう。

夏の海にも負けないような鮮やかな美人だったに違いない。娘がそう言うと女将は照れるようなこともなく、若い時は自分か妹が春と秋の祭典の女神役をやったと自慢げに言われた。

「女神役？」
「王都ほど大規模じゃないが、この町でも祭りをやっただろう？その出し物の一つで大通りを綺麗に飾り立てた天井のない馬車にのって、手を振りながら進むんだ。女神役は専用の衣装を身につけて春は花の冠、秋はぶどうの蔓を冠にしたものを頭に乗せて手を振ったっけ」

元の世界のパレードのようなものだろうか。娘はそんなイメージをもった。とにかく、若い娘にとっては栄誉なことに違いない。それを妹と交代で選ばれたことでも美人ぶりがしのばれる。

「この人はたまたま船が港に着いたのが祭りの日で、馬車の上のあたしに一目ぼれしたんだと」

そのままふらふらと馬車の後を歩き、祭りが終わって宿屋に戻ったところまでついてきたと女将は笑う。

「まあ、そんな男はこの人だけじゃなかったけどね。妹と何人食堂まで引っ張れたかで競争していたよ」

女将と妹がその頃の文字通りの看板娘だったのか。つい若い頃の女将の後をぞろぞろついて来る、童話の笛吹きのような姿を想像して娘はおかしくなった。

亭主がどんな顔でついてきたのだろうか。

「それがねえ、ものすごく距離をとって振り返ると視線を外し、また振り返るとよそを見るのを繰り返してね」

のっそりした大男がわざとらしく視線を外しながら、それでもついて来る。少し危ない図のような気もしたが、娘は女将の話の続きを待った。

厨房からは魚の下ごしらえだろう、鱗を包丁でそぐ音がしている。時々出汁用なのか、どんとぶつ切りをしている音も響いてくる。

「食堂に入ってからも何を言うでもなく、黙っているんだ。妹が注文を取りにいくと沢山料理を注文して、それを黙々と食べてお金を置いて出て行った。それから乗ってた船がここの港に着くたびに食事をしに来たね。でもずっと黙ったまま」

「どれくらいそれが続いたの？」

「一年は過ぎていたと思うよ」

相当に純情な行為だ。

「そのうちにあたしの方がじれったくなって。ほら、なんでもはっきりさせないと気がすまないから。一年も通ってだんまり、それなのにちらちら見てきて目が合うと真っ赤になるんだ。妹や親からは目配せされたり肘でつつかれたりするのに、肝心のこの人はちっとも近づこうとしないから、ある日直接聞いたんだ。『何しにここに来ているんだ』ってね。これで食事なんて言った日にはたたき出してやろうと思ったのに、しばらく、ううん、かなり長い間黙った後でようやく『あんたの顔を見に来ている』って返事をくれたんだ」

この台詞を女将は亭主に聞こえないように声を潜めて娘に教えた。腰に手をあてでもして問い詰めている若き日の女将と、椅子に座ったまま相当に恥ずかしい思いをしながら告白した亭主を想像する。きっとその頃の常連も成り行きを注目していたはずだ。

「この人があたしに気があるのは分かっていたし、ここでの様子を見ていたら酒は飲まない、料理は好き嫌いなく平らげる。悪くないねって思っていたんだ」

そして春の祭りで事件が起こったのだと。女神役に選ばれた女将を見初めた下級貴族が、強引に連れて行こうとしたらしい。下級でも貴族は貴族。ただ女将の性格からは、黙って連れて行かれることなど論外だ。

「こき下ろしたら、その貴族が馬鹿にされたと手をあげた。ぶたれると思った時に、この人が助けに入ってくれたんだ」

貴族にひるむことなく背中にかばってくれたその時に、この人なら頼りになる、この人が好きだと自覚した。女将は懐かしむような表情のまま笑った。

主人夫婦のロマンスを娘は素敵だと思った。

無口なのにやるべき時にはきっちりやる亭主と、その心意気を感じた女将は本当にお似合いだと思う。

「それで船乗りから足を洗って陸に上がってくれたんだ。しばらく親のもとで修行してこの店を継いだって訳」

船乗りとしてあちこちに行ってその土地の美味しいものを食べていた亭主は料理の才能もあって、結局は料理は亭主が引き受ける形になった。そのいかつい体に似合わない料理の腕は、この店の評判をさらに高めた。

妹が駆け落ちをして、親も亡くなって、二人で宿屋と食堂をするようになってから随分経ったのだと女将は締めくくった。

「そこにあんたが来てくれたんだ。随分と恥ずかしい昔話になっちまった。さ、そろそろ開店準備にしようか」

茶器を洗って一旦テーブルの上にあげた椅子を戻し、テーブルを拭く。往来も簡単に掃除をして二階の客室にも風を通す。

厨房では夫婦が何か話して女将が笑い、亭主がその様子をみてほんの少し表情をゆるめていた。

見ているだけでこちらの気持ちまであたたかくなるようだ。

自分にもあんな風に笑い合えるような人ができるんだろうか。

この人なら頼りになる、この人が好きだと思える人が現れるんだろうか。

誰かの面影が浮かびそうになって娘は我に帰った。

この世界に来て知り合った人の中でそんな人は……

主人夫婦の話にあてられて、その日の娘はいつもより少し顔を赤くして開店の時間を迎えた。

35　対面

髪の毛の色が戻っている。ということはここの主は、自分を伝説の娘として扱うつもりだと解釈した。

服はそのまま。寝かされていたベッドから起き上がった姿勢で、首の鎖を指で探る。ずるずると引き出すと、先端には騎士団の紋章を頭部に装飾されたピンがでてきた。

取り上げられていなかったことにほっとして、その騎士団の紋章をじっと眺める。

宿屋での団長は勿論騎士団の制服ではなかったし、着ていたものにも紋章など騎士団をうかがわせるものはなかった。それでもこれを見ていると騎士団での日々や団長、副団長を思い出す。

手の中できゅっと握り、また服の中に戻した。

そこで少し落ち着いて周囲を見る余裕ができた。ベッドの横には小さなナイトテーブルが置いてあって、その上にエプロンのポケットに入れていた財布と、生え際を隠すのに使っていた布が置いてあった。服のポケットにいつも入れていた携帯と短刀はない。あの傭兵が酔狂にも見逃してくれた時に隠したから当たり前なのだが、無意識に探ってはその感触を確かめていたので何もないことが不思議に思える。

外はどうなっているんだろうか。

空暗くなっているが一部に薄明るいところがあり、夜に入るか朝になるかだろう。北の星はここからは確認できなかった。

窓も小さく外壁側は人も通れないほど、壁の厚みを利用して室内側にむかって広くなっている朝顔のような漏斗のような形になっている。石の壁は厚い。そこに窓ガラスがはめこんであって、窓の下には座れるようなベンチが置いてある。王城よりも壁が厚いかもしれない。防御のための場所なのだろう。やっぱり国境沿いの東に連

れてこられたのか。
窓から目をやれば扉は一つきりだった。木の扉だが鉄で補強してある。部屋を横切り、扉に触れてみると当然のように鍵がかかっていて開かなかった。手は縛られているのに厳重だなあとつい笑いそうになった途端に、お腹がくうっと鳴った。

「こんな時でもお腹がすくんだ。結構図太いなあ」
「お目覚めですか」

独り言に別人の声がかぶせられてぎょっと声の方向を見る。部屋の角、暗がりになっているようなところに女性が座っていた。
ずっと娘のことを見ていたのだ。
立ち上がって近づいてきたその女性は、娘の前で礼をした。そしてすっと背筋を伸ばして向き直る。細かいところは違うが王城のような侍女服を身につけた女性だった。ここの侍女か。王城の、団長の妹よりも年長で笑顔はない。いかにも有能そうで厳しそうな印象だ。

「ようこそ、東の都へ。私はここで侍女頭をしております。お休みの間に髪の毛に触れたことをお赦し下さい。支度の時間を逆算いたしますと、どうしても先に髪の色を戻して乾かすことが必要だったものですから」
「支度？」
「私達の主である東の大公様が、あなた様との食事を望んでおられます」

東の大公と聞いて娘は内心ため息をついた。意識が無い間に大公のところに運ばれてしまったか。あの傭兵はきっちりと依頼を果たしたわけだ。本当なら東の公爵なのだが国王の叔父ということで、大公と呼ばれているのだろう。

「朝食ですか、それとも夕食ですか」
「朝食です。あなた様はずっとお眠りになっていたのです」

馬車に転がされていたから体が疲れきっていたのかな、それにしても本当に図太いと忍び笑いがもれた。この侍女頭はずっと付き合って部屋の中にいたわけだ。ご苦労なことだ。

「道理でお腹がすいていると思いました」
「こちらにいらしてください。顔を洗われたらお召しかえをしていただきます」
「その前にこれを外してもらえませんか」

侍女頭の前にぐいと縛られたままの手首を出す。侍女頭はリズムをつけて扉を叩いた。それに応じて外から鍵があく音がして、女性の兵士が中に入ってきた。またすぐに扉が閉められて鍵のかかる音がする。

部屋の外には警備兵か。しかも複数いるらしい。厳重な警戒態勢だこと、と思いながら娘は兵士が手首を縛っている布に手をかけるのを見つめた。しばらくほどこうと苦戦していたが結び目が固くて無理なようだ。諦めた兵士は短刀を取り出してぶつり、と布を切った。

あの傭兵が痕が残らないように縛ったと豪語していたが、本当に痕が残っていない。縄でなくて幅広の布で縛っていたのも痕を残さないためだろうか。変なところまでプロ意識があるんだと、手首をさすりながら感心した。

侍女頭に連れられて洗面器の置いてある鏡台に案内される。顔を洗ったあと、側においてある服に着替えさせられた。当然のように裸にされそうになって必死に抵抗する。

「下着くらいは自分でやります」
「そんなわけには参りません。私が職務怠慢と言われてしまいます」
「いやっ本当に無理です、触られたくないんです」

腕を抱え込んでうずくまると、侍女頭は頭痛がしたかのようにこめかみを指で押さえた。そのまましばらく考え込んで、下着を手渡してきた。

「失礼ながら私は向こうを向いていますので、その間にお着替えください」
「ありがとうございます」
「私に礼など不要です」
「そうですか？　でも感謝していますから」
「……私には敬語も不要です」

女性兵士の方を見ると、これもさりげなく視線をそらしてくれる。急いで下着を着替える。すとんとしたワンピースのような下着は肌触りがいい。

「コルセットは勘弁してもらえますか。あれで気分が悪くなったことがあるんです」

王城にいた時コルセットは拷問器具かと思うほどに、ぎゅうぎゅうに締め上げられたことがある。当然内臓が圧迫されて何も食べられないどころか気分が悪くなって、それ以来断固拒否の姿勢を貫いた。

侍女頭の眉が動いた。非常識なことを言っているのだろうとは思うが、駄目なものは駄目なのだ。

「失礼いたします」

そう言われていきなりウエストをぎゅっと掴まれたのには驚いた。本人はいたって真面目な顔でお腹や背中も手で触ったり押したりしている。どこから取り出したのかメジャーのようなもので胸囲、ウエスト、腰のサイズを測られてしまった。

「しばらくお待ちを」

扉を叩いて侍女頭が姿を消した。監視の兵士と幾分気まずい思いをしながら待っていると、服を手にして戻ってきた。

「お待たせしました。こちらを着用してください」

コルセットなしでも着られるものをもってきてくれたのだ。こちらではどうも女性の方が有能で、自分の気持ちなども配慮してくれるような気がする。そう思いながら服を着る。背中にボタンがありそれをとめてもらう。

胸と背中は結構露出されている服だ。でも腰まわりは苦しくない。

「髪の毛は今日は結わないようにと申し付けられております。首飾りなどはいかがいたしましょう」

朝食を食べるだけでこんな思いをするのかと、娘はげんなりしつつ侍女頭の申し出を断った。耳飾は鏡を見ながら赤と、琥珀色のものを残した。首飾りは先端のキャップを指先で確認して、騎士団の紋章が見えないようにと服の下に押し込む。

簡単に化粧をされてできあがりのようだ。

「ここにあなた様をお迎えできて嬉しく存じます」

深々と礼をされて醒める。どう聞かされているかしらないが、ここに連れてこられたのは全くもって不本意だ。王城の関係者など絶対にお近づきになりたくなかったのに、どこまでも好き勝手をしてくれる。

「私は王城では下働きを、外では店の従業員をしていました。敬われるような立場ではありません」

「なにをおっしゃいます。その髪と目をもつ方のことはこの国の者なら子供でも知っています。そんなお方が働くなど……」

この侍女頭は身分制度に染まっているんだ。いや、王城が柔軟だったのかと改めて思う。

働きたいと言った娘をいぶかりながらも意見を尊重してくれた。逃走計画のためとはいえ、かしずかれての生活など柄じゃなかった。あそこで働けたからこそ、港町でも全く何もできずに困るということもなかった。

時間が迫っていることに気付いたのか、侍女頭は娘を案内しながら部屋の外に連れ出した。扉が一つきりの時点で、壁が異様に厚くて窓が小さいことからもなんとなくそうじゃないかとは思っていたが、部屋を出て目に入ったのは階段だった。石造りのものがらせんを描いている。

牢でないだけまだましかな？　ぐるぐると階段を下りながら娘は考える。

これから会う大公、国王の叔父で国王の弟をそそのかしたとされる人物。今は傭兵を東に集めている。聞けば聞くほど胡散臭く狡猾な狸親父のイメージが先行しているが、本人はどうなのだろう。

階段を下りたところにも頑丈そうな扉があって、そこも外から鍵をあけて通ると狭い廊下が続いていた。

「万一の時のために人が通りにくくなっているのです」

侍女頭の説明で一度に兵が押し寄せないようにする工夫かと気付く。寝かされていたのは篭城用の建物なのだろう。言い換えれば幽閉や監禁にももってこいだ。

狭い廊下をしばらく行くと、また扉が見えた。それはくぐった後で見ると反対側には装飾が施してある。廊下が広くなり、窓も大きくなって明るい。

「ここは国境の砦も兼ねているので、王城と比べると無骨ですが大公様が随分と手を入れられたんですよ」

石の壁は厚いが壁掛けや絵画も飾られていて、石造りの古城といった雰囲気になっている。外は日が昇り明るくなっている。随分と歩かされてようやく目的の場所についたらしかった。

扉の両脇には鎖帷子を着た兵士が槍を片手に、腰からは剣をさげている。侍女頭が兵士に用件を伝えると兵士が扉を叩き、中から応じる声がして大きな扉が開かれた。通る時に兵士をちらりと眺めると、目は伏せてはいるが好奇心はむき出しで様子をうかがわれている。

何か変かと思って、ああと納得する。黒い髪の毛、今は目も隠してはいない。今は召喚されてからの短い間でしか晒していなかった本来の自分なのだ。黒髪、黒い瞳は王妃の証だ。

注目するなという方がおかしいのだろう。

広い室内には長いテーブルに、眩しいくらい純白のクロスがかかっている。

正面には男性が一人、大きな絵画を背に座っていた。それが立ち上がって近づいてくる。

背は高い。太った狸親父を想像していたのにそれは外れた。

騎士団員と遜色ないほどに鍛えているように見える。髪の毛は国王と同じ金髪、目の色は国王よりは薄い海よりは空の色に近い青だ。

渋い美形と形容するほか無い男性がすぐ近くで立ち止まり、優雅に手を取った。

慣れた仕草で手の甲に唇を落とし、頭を戻す。

口から出たのは低めの魅惑的な声。

「ようこそ、東へ。あなたを歓迎する」

36　当面は

この人が国王の叔父。黒い噂の渦中にある人かと娘は考える。

東には誘拐で連れてこられた。召喚よりももっと直接的な犯罪だなと思うと、叔父と甥で底辺争いをしているようで皮肉だ。

ようこそと言われても好きで来たわけじゃない。ここで突っかかっても大公の考えが分からない今は、上手くない気がする。第一あの傭兵が『できるだけ下手に出て、せいぜい持ち上げてやるのが得策だよ。きっと色々しゃべってくれるはずさ』と理由は分からないけれど、アドバイスめいたことをしてくれたではないか。

それをあわせて娘は軽く礼をするだけにとどめた。

大公は気にするでもなく、娘に椅子をすすめて長いテーブルで向かい合わせに座る。

「本来ならあなたが上座だろうが、まだ婚儀はあげていないのでこちらでよいか？」

「お気になさらず」

給仕が運んできた皿が次々にテーブルに置かれていく。皿も凝っていれば料理の盛り付けも美しい。でも食堂で主人夫婦と囲んだ食事の方がずっとずっと楽しくておいしい。そうは思いながらも騎士団と港町の食堂で働いた身だ、料理を作る人の大変さと情熱はよく知っている。きっとここの料理人だってそうだろう。そう思いながら食事に専念した。

食事をする大公は国王に似ている。指先にまで染み付いて息をするくらいに自然に優雅な仕草だ。ただ身にまとう雰囲気は違う気がする。国王と比べて底知れないというか、容易に尻尾はつかませてくれそうに無い感じだ。食事の会話も当たり障りがないことからも、外見は違ったが内面は狸親父かもしれない。

食後に別の部屋でお茶をと誘われる。こちらで本命の話があるのか？　通されたのは壁紙の張られた王城の一部かと思われるくらいに洗練された部屋だった。

「ここは防衛目的から石造りだが全てそうだと気が滅入るのでね。小さな部屋くらいは今いる場所を忘れたいと思っている」

こちらの方が女性むきだと続けられると、納得してしまいそうになる。

出されたのはお茶だったが、大公の方は香り高く濃い茶色の……娘の視線に気付きカップの中身をよく分かるように見せてくれた。

「東の交易路を通って遠方から運ばれた飲み物だ。苦いが眠気を払い、集中力が高まるとされている」

「知っているものと同じ気がします。コーヒーと呼ばれているものです」

「名は違うが同じものかもな。試されるか？」

少しだけカップに入れてもらったものに口をつける。まさしくだ。すぐにおかわりを注いでもらって、香りを楽しんだ。

「砂糖もなく大丈夫か」

「何も入れないのが好きなので。どうしてもの時は牛乳を入れるとまろやかになりますね」

「そんな飲み方があるのか。今度試してみよう」

そこまで会話すると、大公は口の端を上げた。

「これであなたが伝説の娘本人と確認できたのか。高価で一握りの人間しか飲めないこれを知っていて、更に思いもつかない飲み方ま

で知っている」

上手く誘導されたことにようやく気付いてほぞをかむ。国王基準で考えては駄目だ。大公のしたたかさははるかに上だ。娘の雰囲気が固くなったのに気付き、大公は少しだけ目を細めた。

「勿論その髪と目、神殿の耳飾で間違いないとは思っていたが、念には念を入れないと気がすまない性質でな」

こんな大公を持ち上げて話を聞きだすのが可能なんだろうか。

「まずはご無事でなによりだ。わが国にとって大切な存在をいつまでも市井には置いておけなかったので、いささか乱暴ながら御身を保護させてもらった」

「いささか、ですか」

「傷一つなくと条件をつけていたので。見たところその通りのようだが」

「身体にはですね」

でも心の方は、と胸のうちで続ける。国王の召喚も、団長の捜索も、大公の誘拐もどれも自分の意思は綺麗さっぱり無視してくれちゃっている。

「いつから監視をつけていたのですか？」

人払いがされたのを期に本題に入る。下手に出て情報をさぐるよりもまずは直球だ。

「王都で一時見失ったのは事実だ。春先だろうか」

その後で傭兵が契約をして食堂に現れたというところか。では秋と冬だけは本当に自由だったのだ。

「何故今回無理に連れてきたのですか」

「王城の意向を探っていたのと、こちらの準備がある程度整ったので」

「たくさん傭兵を雇ったと聞いています。国王の叔父が何故そんなことをするのですか」

「あなたは甥を、あれをどう思う？　私には甘やかされて育った子供にしか見えない。優しい子だったが、それだけでは国を支えるのは無理だ」

だから、もう一人の甥を使って試した、と。娘は国王の首の傷を思い出す。文字通り国王の心身を傷つけた出来事の首謀者が目の前にいて、そのことを隠そうともしない。

「血が繋がっているのでしょう」

「だからこそ見える欠点もあるのだ。即位して、なるほど執務には成果を上げるようにはなった。だが肝心の中身はどうだ。あなたへの文言は聞き及んでいるよ」

第一、と大公はカップを持った手を広げ、反対の手で部屋を指し示す。

「私をこんな防衛の要においておくとは愚の骨頂ではないか。ここは王家の所領なのは間違いない。兄の代から私がここの主なのもな。だが、即位の騒動を経てもなお閑地にやらずここに私を留める。まるで……騒動を起こすことを期待されているのかと思うくらいだ」

「それでも、国王の血縁の方がこんなことをすれば、影響力ははかり知れないのではないですか」

「そうだ。私は国内で国王に不満を持つ者達の希望の星らしい」

おかしい。これではわざと騒動を起こそうとしているかのようだ。

「国王は中身は子供。その弟は外面を繕うのは上手いが、まだまだ未熟。それが兄の子供だからというだけの理由で王城の主に納まっている。私は彼らに最も近い血縁ながら、決して王冠を手にできない」

「指をくわえて見ているよりは、いっそ」

「いかにもな理由だろう。私は俗物だからな。思いっきり低俗になろうと決意したのだ」

娘は大公の意図がどこに向かっているのかわからなくなった。

血縁の甥である国王を追い落として自分が王位につくつもりなのは間違いない。それが積極的な欲求なのか、周囲をかんがみての消極的な選択なのかがはっきりしない。

大公の国王は子供だという発言には、うっかりというかしっかり同意してしまいそうになる。

「あなたも甥には悩まされている。甥とてあなたは手に余るらしい。だから当面はこちらに滞在していただこう」

「私をどうするつもりですか」

「当面は何も。その後は状況次第、最終的には……これはまだ明かすつもりはない」

侍女頭を正式に娘につけること、他にも専属の護衛をつけることを告げられた。

部屋も移るようにと勧められる。

「あそこでは逃げ出せないだろう?」

笑い含みに言われて遊ばれていると感じる。
狸も狸だ。国王などこの叔父にかかればひとたまりもないかも知れない。
神殿に祈りを捧げる時間だからと、話は切り上げられた。この大公は宗教に熱心なようだ。
部屋を出て騎士に先導されて歩きながら思う。自分がここに連れてこられたのは、大公の『準備』が整ったから。今までの影にかくれるやり方から前面に立つ方向に方針を転換したから。
準備は間違いなく内乱のことだ。戦力としては、ここを長く治めている経緯から私兵、傭兵にくわえてここの警備兵も手中なのか。まんまと戦争の中心に連れてこられてしまったわけだ。
大公は自分を利用しようとしている。どんな形の利用か。
当面は自由、その後は流動的、最終的な着地点だけは大公の胸のうちにあるようだがそれは分からない。
押し黙る娘に配慮してか、侍女頭が声をかける。
「ご気分でもお悪いのですか？」
「……いいえ、初めてお会いしたので緊張してしまったのかも」
「大公様は威厳がおありになるから仕方のないところではありますが」
案内されたのは建物の三階、広いバルコニーのついた部屋だった。王城の客室程は広くはないが趣味の良い部屋だ。港町の部屋に慣れた身にとっては、広くてかえって落ち着かなくなりそうだ。
長椅子に座り、淹れてもらったお茶を飲みながらさてどうしようと考える。当面はなにもされない。監視付だろうが自由に動いていいのだろうか。どのみち、ここを知らないことには動きようが無い。

「ここを見て回りたいんですがいいですか？」
「はい、大公様からもお心に沿うようにと申し付けられています」

バルコニーから下を見ると、中庭に面しているようで芝生が見えた。さすがに砦をかねているので花壇や庭園といったものはないように思える。芝生と、中庭の象徴のように生えている木の緑がささくれそうになる娘の心を落ち着かせてくれる。

港町ほどではないが、夏の日差しは眩しい。

侍女頭からベールでほどよく顔をかくす形の帽子を渡されて部屋を出る。廊下では帽子は手に持って、行儀が悪くならない程度に周囲に視線を走らせる。階下はまた堅牢な石造りで、主の階と思われる上とは様子が違う。

衣装も装備もばらばらな、鍛えた体つきの男性が目につく。傭兵だろう。

油断なく歩いていて、こちらにも鋭い視線をよこす。何の表情もなく行きすぎるのが他国の者、黒髪に目を見張るのがこの国の者だろうとそのうち見分けがつくようになった。

国境の川沿いに築かれたこの砦兼城は国境側には堀を作る必要はない。川から自国側には堀に水を引き入れている。

物見と移動を兼ねた屋上の通路を歩いて、対岸の景色に目をこらす。船は結構行きかっている。見たところ橋はかなり遠くに見えるだけだ。

護衛をしてくれている騎士に聞いてみる。

「傭兵さんもこの監視などにあたっているんですか？」
「これらは常駐の警備兵があたります。大公殿下は他に私兵もお持ちですがそちらは主に殿下の周囲に配置されています。傭兵はまず入り込めません。
よほどの、そうですね傭兵隊長として認められるような人物ですと、

発言が許されたり傭兵をまとめたりします。
傭兵は基本統制のとりにくい集団です。ですから傭兵には傭兵をあてて指導したり、統率をはかったりします」

また船が見えた。乗客は旅人が多いが中には明らかに傭兵と思われる人もいる。
まだ王城にいる時から、少しずつ東に傭兵が流れ込んでいるという話は聞いていた。あれから一年近く、もう隠すでもなく傭兵を堂々と引き入れ日に日に緊張を高めていっている。
国王はこの挑発にどう対応しているのだろう。傭兵や大公の私兵はともかく。

「東の騎士団は、この流れをどう思っているんでしょうね」
「私には分かりかねます。私は大公殿下に忠誠を誓っておりますので」

その言葉に東の騎士団の立場が厄介なのだと思う。すぐ近くには先の王弟で現国王の叔父たる大公、騎士団の本分は王家への忠誠。どちらの王族に忠誠を誓うのか。きっと思惑も混ざり合って一枚岩ではないのだろう。
ここから騎士団に逃げ込む案は考え直さないといけない。
国境側の川に飛び込むのも無謀だろう。自国側――自分にとっては自国ではないが――から逃げるには堀と砦の何層かの壁を越えなければならない。変装もしなければいけないし。この黒髪は悪目立ちしてしまう。
刑務所から脱走する人はすごい。そんな感想をもってしまう。
ただ諦めたらここで終わってしまう。
最大の目標はここから逃げること、次の目標はなんとか王城に忠誠を誓っている騎士団と連絡をつけること、大公に利用されないようにすること。

中庭に降り立ち、さっきまで上から見下ろしていた木を今度は見上げる。

太い幹に枝葉が生い茂っている。その生命力に溢れた木を見ながら、娘はまだ負けていないと自分を奮い立たせた。

37　切り札

「逃げ出す算段は見つけられそうか？」
「――大公様」
図書室で何か参考になるような本をと探していた背後からかけられた声に、娘は飛び上がりそうになりながら身をよじった。
見上げると薄青い瞳は何か面白そうな光を宿している。
娘の抱える本の背表紙に目を落とし、これも参考になるだろうと娘の手の届かない上の棚から本を取り出した。
「さすがにここの設計図は置いていない。それに代々の主が手を入れている」
「大公様も何か改修をされたんですか」
「私は祈祷所に手を入れた」
この大公は宗教熱心だという話は王城でも、港町の噂話でも聞いていた。それは本当らしい。朝と夜に祈りを捧げているという話も、ここに来てから目の当たりにした。
宗教に熱心で領民に慕われている大公と、国王の弟をたきつけて謀反を起こそうとし今は自身が火種になろうとしている野心家。どうもそぐわない。どちらも本当のようでどちらも作り物めいて見える。
大公は図書室のテーブルにコーヒーを運ばせて、即席のお茶会になった。
砂糖も何も入れずに飲むので、ポットとカップだけだ。添えられた甘さの控えめな焼き菓子が、コーヒーの味を引き立てている。
「ここの守りをどう思う？」

「とっても警備が厳重です。簡単には逃げ出せそうにありません」

正直に感想を言うと、大公のカップを持った手が止まる。

「簡単にはか」

正直逃げるのはほぼ不可能じゃないかとは言えなかった。部屋の前には護衛が控え、侍女ともどもどこにでもついて来る。ほとんど一人になれる時間がない上に、いる場所が防衛の要のようなのだ。

小娘一人で脱走できるほど甘い場所ではない。

王城の時には布石を敷いて護衛の目をあざむくようにして出てこれたが、ここにはそんなに安易に騙されてくれそうな人も協力者もいない。

「つい、歴史の城攻めを思い出すんですけどね、どれも大掛かりなんですよ」

城を水攻めにした例や反対に堀を埋めた例、抜け穴を掘った例など時間も人手も手間もかかる事例ばかりだ。自分には無理な話だろう。

「あなたの世界の戦にも興味はあるが、最近部屋か図書室にこもりがちとか。私は別にあなたを監禁してはいないのだが」

「噂になっているでしょう？　黒髪黒目がここにいると」

王妃が東の大公の下にいるという話が広がっているらしい。王妃と言っても正確には違うし、王妃になることから逃げていたのだが人がこれをどうとるか。

「私は王妃になるあなたを保護しているだけだ。王城から連絡があ

れば、あなたを王都にお連れする意思は充分にあるのだが」

余裕たっぷりで本心からの言葉のように聞こえるが、穿った見方だと自分を名目に武装して王都に向かうとも取れる。私兵の他に傭兵を雇い入れる大公に言われても信憑性に欠ける。自分を人質にしている、内乱の意思ありととられてもおかしくないのに一向に構う様子もない。

計算ずくなのか投げやりなのか。そこが読めない。

「下手に動き回って騒動の原因になるのも嫌なので、大人しくしています」

最初の何日かで内部を見て回って結局守りが堅牢なのを確認しただけだった。あとは気晴らしとの名目で馬での遠乗りに付き合わされたり、堀の外側に傭兵の宿舎と鍛錬所をつくったのでそこの見学に付き合わされたりと、大公に振り回された。

そして遅まきながら気付いた。自分と大公が一緒にいることが人からどう思われるか。

『国王は伝説の娘を王妃にする、では逆に考えると伝説の娘を手にした者が国王になるのではないか?』

黒髪黒目の自分と大公が一緒にいる、つまり傍目からは大公こそが国王になるべきなのだと解釈されるのではないか。大公はそう思わせたいからわざと自分を連れ歩いたのではないかと。そう思うと出歩く気にもならず、人目にも触れたくなくなっていた。

大公はカップを軽く揺らして残りを一息に煽った。

「あなたのそういうところは母とも、義姉上とも違うな。二人とも強くはなかった」

「私だって強くはないと思うんですが」
「二度も王城や追っ手から逃げたではないか」

からかいの気配はするが、大公の言ったのは先代と先々代の伝説の娘の話になるだろう。神殿の記録では知っているが、当事者からの見方はまた別だ。大公に話の続きを希望した。

先代の話は弟の目から見てもやや横暴な国王が無理やりという話で、先代の王妃は心を閉ざしがちで憂いがちであったとのことだ。

「母は家を賊に襲われ家族が殺されたところを召喚されたと言っていた。あのまま残っていても殺されるか慰み者の末に売られるかの運命だっただろうから、そこから救い出してくれたような父には感謝していた。

その母から生まれたのに兄は義姉上にひどく執着した。義姉上には元の世界に婚約者がいて、戦地で消息不明になったらしい。ずっとその婚約者に心を残していたからだろうか、しばらくは待っていたのだがある時……」

召喚を感謝した先々代と、元の世界に未練を残していた先代の話は生々しい。召喚がなければ命はなかったと宗教に熱心になった母親の影響を受けたと大公は笑った。

「宗教は平和を望むはずなのに、なぜ国王を挑発するんですか？」
「あれに国を委ねてよいものか疑問でな」

内乱になれば国内が荒れて人が死ぬ。それを承知で事を起こそうとする。実の叔父と甥が争おうとする。

「あなたも争点の一つなのだ、自覚しているか？」

娘の顔を眺めて大公は笑う。
代々の黒髪黒目の娘はいずれも美しいとされる。今回の娘はその中でも変り種だ。国王を嫌がって再召喚をさせたり、王城を逃げ出したりは今までにない。その行動自体が国を揺るがす。野心家の貴族や、周辺国の手に落ちれば駒として利用されるだけでなく、国自体も脅されてしまう。

「あなたが私の手のうちにある、それだけで私に神の加護があることになる」
「私はそんなご大層なものじゃない、ただの……」
「その姿でいる限り、ここではその理屈は通らない」

異世界からやってくる娘はそれだけに神秘的で、畏怖の対象になる。現に国内の傭兵の口から、ここに王妃がいることはものすごい勢いで広がっている。
まずは無事なまま保護できた。あとは人が勝手に解釈してくれる。母にも義姉にもなかった芯の強さと行動力は、計画の不確定要素としてはいささか大きなものだ。
これで逃げられれば士気は一気に落ちる。
反対に最後まで手のうちにおさめられれば、甥を排斥できるかもしれない。

「ある意味人生最後の賭けで、あなたはその切り札だ」

せいぜい利用させてもらう。大公の宣言に睨みつける黒い目は美しく映る。
いささか生に飽いていた身としては、刺激的に過ぎるほど。

「もう少しで準備が整う。王都まで同行願おうか」
「利用されるのは真っ平です」

「なれば、逃げ道を探ることだ。早くしないと名実ともに側に置くことになるぞ」

最後に脅しとも揶揄とも取れる台詞で締めくくり、大公は上機嫌に図書室を出て行った。娘はぐっとこぶしを握った。本を部屋に持っていってもらうように頼み、護衛と厩舎に向かった。

気分を変えるには馬を見ること、馬に乗ることに限る。

噂を恐れて引きこもっていたが、それが無駄なら遠慮はしない。厩舎には最近連れてこられた名馬が、専属の馬丁とともにいた。前脚で床をかいているので機嫌が悪いと判断し、遠くから眺める。

馬丁はそんな馬が可愛くて仕方がないようで、なにくれとなく世話を焼いていた。

「これは大公様の馬になるのでしょうか」

「そのつもりで調教していますが、もう少し時間がかかるでしょう」

馬丁は娘の質問に丁寧に答えてくれた。背が高く粗末なながら厩舎にしっくりと馴染んでいた。結局大人しい馬のブラッシングだけをして、厩舎を後にする。

続いては傭兵の鍛錬所に足を向けた。こちらに来る時には護衛の数が増える。荒くれの多い傭兵だけになにかあってからでは遅いとの判断のようだ。

ただ、最近はこの傭兵をしっかりまとめられるだけの器量を持つ、いわゆる傭兵隊長が指揮を執っているらしく傭兵の動きにも統一性が出てきているように思われた。

その傭兵隊長は大柄で赤い髪と茶色の目をした人物で、大声で指示を出してさぼりがちな傭兵をまとめていた。娘が顔を出すと場がざわめく。傭兵隊長が迷惑げに振り返り、娘を認めた。

「こんなとこに来たら危ないです」

すげなく出て行くようにと言う隊長に、もとより素人の娘は従って鍛錬所を出て行った。

厩舎は堀の内側にあるが、鍛錬所や傭兵の宿舎は内部ではなく堀の向こう側にあった。これは人数が多いせいと、内部に引き入れていて裏切りなどあったらとの用心のためのようだ。あくまで内部は護衛兵と大公の私兵が守っている。

歩いて移動するのが大変なので、堀を小船で下りながら娘はぼんやりと外壁を、その細い攻撃用の窓や見張り台を眺める。もうあまり間がない。それまでに逃走経路をどうしようか。

船着場で娘は船を下りる。堀は川から水を引き入れ下流で再び川へと合流している。幅は広く泳いでは渡れそうもない。

それでもやらなければ。

気が塞いだ娘を慰めるためか、大公は東の都を見物するように勧めてくれた。

髪の毛は結い上げて見えないように帽子に押し込み、顔の方にはレースを幾重にも覆って目も色を読取れないようにして目立たない馬車で出かける。侍女頭と護衛が同じ馬車、騎馬で数名が続く。

傭兵の出入りが激しいだけでなく、川を渡って国境から入ってきた品物の売買で都はにぎわっている。王都の城下よりは規模は小さいがそれでも繁栄はしていて、大公の治世ぶりがうかがわれる。

「どうして、これを守っていこうとは思わないのか」

娘の呟きは聞く人もなく、ざわめきに消えていく。

ずっと馬車から眺めるだけだったのが、目抜き通りに入ると馬車をおりて散策という運びになった。珍しい品に目を奪われたり、威勢のいい呼び込みに聞き耳を立てたりと楽しんで、記念にと一つの店に入った。

布や手芸の品を扱うその店の主人は、白髪交じりの人のよさそうな婦人だった。黒い布やリボンなど、細々とした品を頼み主人が注文を書き留める。ふと開いていた窓から風が一陣。

「いい風。風をつかまえたいですね」

「本当に。ご注文の品を後ほどそろえてお届けにあがります」

主人に見送られて馬車に乗り込み、砦兼大公の居城に戻る。夕方には注文した品物が部屋に届けられ、侍女頭とも女性らしく布や糸などについて話が弾む。

夜、床に入ると昼間の疲れのせいかすぐに目を閉じる。侍女頭はしばらく側についていて、その後で明かりを持って退出する。部屋の前では護衛が待機している。以前は寝室にも侍女を配していたが、娘が一睡もできないのでこの形に妥協した。

バルコニーにも巡回の護衛兵がついている。その巡回の隙をついて黒い影が横切った。

寝室の鍵を静かにあけて影が入り込む。

「今晩は。忘れないでいてくれて嬉しいね」

にこりと笑ったのは、相変わらず優男にしか見えない傭兵だった。

38　宣告

厳重なはずの守りをくぐってきた傭兵は、なるほど腕がいいのだろう。

人の意識を奪ってあっさり契約主に引き渡したのに、呼ばれればなんでもない顔で現れる。

そう思いながら娘は寝衣の上に上着を羽織る。

「こんなにすぐに来てもらえるとは思わなかったです」

「事態が動きそうだろう？　だから都を離れずにいたんだ」

戦乱のあるところに依頼あり、そう言って傭兵は人の良い笑みを浮かべる。

「それで僕に依頼？」

「ここの抜け道を探って欲しいんです。予想では祈祷所にあるんじゃないかと」

娘の言い方に傭兵は眉を片方器用に上げた。

「へえ？　大公と話したのかな？　色々彼はしゃべってくれた？」

「少しだけ。とんでもない人物ですね。下手に出て持ち上げられるとは思えません」

「そうかなあ。結構君に話している気がするけどね」

外の警備に気付かれないように低い声で会話しながら、見解の相違とやらに苦笑してしまう。あの狸も狸をどう手の上で転がせと言うのだろう、この傭兵は無茶を言う。

「動きやすい黒い服を持ってきてもらえると助かります。あと一つ、かぎをつけたロープを用意してもらえますか」
「壁でも伝って下りるつもりかな？　あまりお勧めできないな」
「いえ、そこの木から下りようかと思っています」
「木って中庭の？」

頷く娘に呆気にとられたような顔をして、傭兵は声を出さずに笑い出した。中庭の木は少し手繰れば何とか手が届く。そんなにおかしいだろうか。娘の方は面白くなくて、腕組みをして傭兵を睨む。

「いや、失礼。まさかそんな方法を想定しているとは思わなかったからおかしくて。だって伝説の娘が木にって……」
「私は庶民です」

ひとしきり笑い転げて涙までながしてから傭兵は立ち上がった。一息吸い込むともう真面目な顔になっている。

「ご依頼承りました。抜け道の件はどこに続いているか、祈祷所でない場合でもさぐって報告しましょう。その時にロープも持ってまいります。抜け道の外に馬は必要でしょうか」

ふざけたところのまるでない言い方に、これが傭兵の契約の流儀なのだろうと背筋がのびる思いがした。
娘も立ち上がり、傭兵に向き合う。

「ありがとうございます。それでお願いします。報酬は……」
「今の手持ちってどれくらい？」

さらわれた時につけていたエプロンに入れていた貨幣を全部見せると、傭兵は金貨一枚だけを手に取った。傭兵の相場はよく分から

ないが、腕利きを自称する、そして実際に有能らしい相手には少なすぎる気がする。
そう言うと、傭兵はにこりと笑った。
「報酬は僕が決めるって話したよね。こんな面白い依頼をしてくれたんだ。頑張っちゃおうかなって思うよ。君にいいところを見せたいしね」
……面白がられている。喜んでいいのか、悔しがるべきなのか。
また夜に来るから、と窓に足を向けようとした傭兵が途中で止まる。
「落ち着いたら会いに行くよ。絶対なくしたくない荷物の隠し場所は格別だったからね。あれ見た時にやられた、と思ったんだ」
「どこよりも安全でしょう？」
「だからってねえ……。お節介ついでに聞くけど、ここ抜け出してどうするの」
「何とか騎士団か王城の関係者と連絡をとって、大公陣営にいないことを公表するつもりです」
「素直に大公とくっついたら？」
退屈が嫌いと公言するだけあって余計なお世話もしてくれる、と思いながらも本気で怒る気にはなれない。
狸な大公と？　そして叔父と甥の内乱の賞品よろしく祭り上げられろと。確かに大公は暴言をはかない。紳士的に接してはくれている。
ただそれは自分が伝説の娘で、手にすることに意義があるからにすぎない。最初から利用すると宣言されていて、それにはいそうですかと頷けるものだろうか。政略結婚はお互いを利用することだから、大公はその感覚でいるのだろうか。

苦笑するような気配でも感じたか、傭兵は少しだけ声の質を真面目なものにした。

「暴言陛下よりはましだと思うけど」

「私は帰ってやることがあるんです。誰とも結婚とか考えられない」

ふと気付くと、傭兵の顔が間近に迫っている。明かりのない部屋では窓を背にしたら表情がよく分からない。

「……そうやって頑なに拒む。それは元の世界の未練だけ？　それともう誰か？」

「いません」

体が少し後ずさる。つめたとも思えないのに傭兵が更に近くなる。

「本当に？　誰の顔も思い浮かばない？」

「どうしてそんなことあなたに言わなくちゃいけないんですか」

ぴたりと傭兵の動きが止まり、ゆっくりと腕組みをするのが見て取れる。

少しの間その姿勢で考えた後で静かな声が吐き出された。

「政略結婚なんて相手の顔も知らないのなんてよくある話だ。君は国王も大公とも顔を合わせて話もして、言葉や考え方を聞いたはずだ。

あまりにも帰ることに固執されると、そんなにここが嫌いかとあまりいい気分じゃないからね」

「私は政略結婚をしたいわけじゃありません」

「そうか。前提が間違っていたか、それは失礼」

芝居がかった仕草で腰をかがめて片手で優雅に礼を取って、傭兵は今度こそ静かに窓を開けて外にすべり出た。姿がバルコニーから消えてしばらく経つまでそのままでいて、そっと鍵をかける。

ベッドにもぐりこんで横向きで枕を抱えた。

「ああ、もうあの傭兵は」

つい口に出てしまう。本当に風のようにどこにでも入り込んで、服や髪を巻き上げるように引っ掻き回してくれる。

ただでさえ脱出と逃亡ができるか難しい状態なのに、これ以上の面倒を思い出させないで欲しい。

自分は一度帰還に失敗した。

元の世界に帰りたいと願う気持ちは今も変わらずにある。でも帰れなかった。誰かのこちらに引きとめようとする心に、帰りたい心が負けてしまったのだと思っている。

こちらの世界は嫌いではない。親身になって心配して接してくれる人がいる。侍女や騎士団の人達、港町の主人夫婦の顔を思い浮かべると心臓をきゅっとつかまれるような気がした。

これ以上こちらを好きになると、一層こちらに引き止める力が強くなってしまう。自分の中ですら帰還に向けての、元の世界へと願う力が目減りしてしまう。

ここを出て行きたい、内乱の争点にはなりたくない。いつかは元の世界に帰りたい。

ベッドの中で方針を指折り数える。そしてぎゅっとその手を胸元で抱きこんだ。

誰か……なんて。

「今は脱出だけに集中しないと」

自分に言い聞かせるように呟いて、首飾りの装飾になってしまったピンの頭に触れる。もうお守りのようなものだ。騎士団の紋章も、ついている黒い石ももうすっかり指になじんでその形を覚えている。

なんとしてもここを出て、それからのことはその後だ。

あの傭兵が準備を整えてくるのがいつか分からない、ただ仕事は早そうだからあまり時間もないだろう。それまでにこちらも準備を整えなければ。その覚悟で眠りについた。

「お待たせしました。ご依頼の件全てそろえてきました」

明るい声で言われたのがその翌日の夜だったのは、あまりにも手際がよすぎて驚く前に力が抜けた。にこにこ顔で差し出された品物と教えてもらえた情報は、こちらの期待以上のもので。

「抜け道の出口に待機しておくね。一応脱出までは料金内ってことで面倒は見るよ」

傭兵の早すぎる仕事に慌ててこちらの用意をするはめになった。頼もしい今は味方を得た。焦点はいつ大公やこちらの人を欺いて脱出するかだ。

大公と顔を合わせる朝食時、その時間帯が緊張するのは仕方がない。

低いが通る声で情勢を教えてくれるのは何故だろう。こちらの反応を探っているのだろうが、楽しんでいる気配も見られるのがしゃくだ。

「三日後、出立する」

だから何でもないことのように言われて、理解するのに少しかかった。

口元に運ぼうとしていたカップを元に戻すと、かちゃんと耳障りな音をたてた。

青い瞳は空か氷山のようにやや薄い。それに射すくめられて、何も言えずにその顔を見つめる。

三日。この間に逃げられなければ大公に負ける。

「あなたの自由もあと三日ということだ」

「それで、ここの中がなんとなく慌しかったのですね」

傭兵隊長を砦の中で頻繁に見かけ、侍女頭も忙しいのか側を離れることが多かった。

「どうして私に日にちを教えてくれるのですか?」

「いきなり夜這いをかけられたいか?」

大公の口から思いもかけないことを言われてぎょっとする。

澄ました顔でコーヒーを飲む大公は、余裕たっぷりに見えた。

「王都から国王の兵が移動を開始したようだ。ここまでは人馬では七日はかかる。三日後に出立すればちょうどよい場所で対面できるだろう」

「私がこの情報を誰かに漏らすとは思わないんですか?」

「あなたに正確な情報と判断できるか?」

無意識のうちに、大公の言うことを疑っていないことに気付いて愕然とする。

今までの大公は嘘はついていないから信じきっていた。

「この話は嘘か真か、どう思う？」

しばらく朝食の席で見つめ合う形になった。互いの目から真偽を読取ろうとする静かな応酬だ。

「……真、だと思います」

「正解だ。あなたもその心積もりをしていてくれ。寝室で悲鳴を上げられてはかなわない」

「もしかして、人をからかうのがご趣味ですか？」

「さて、どうだろう」

このまま何もせずにいれば傭兵の言い方では『大公とくっついて』王都に進軍する羽目になる。

それはなんとしても避けたい。

期せずして大公に追い込まれた形になってしまった。出立はきっと朝のうちとすると後二日のうちになんとかしないといけない。

大公がいつやってくるか分からないとなれば、決行するのはもう。

「何を考えているんですか？　人が悪い」

「私にはほめ言葉だな。あなたと私でどちらに神の加護があるか、それを試す……試すとは神に失礼が過ぎるか。

見届けたいのだ。神が私と国王のどちらを生かそうをするのかもな」

大公と国王が激突すれば、どちらかは死ぬ運命になる。国王は生かしておくとは思えない。一度だけならまだしも今回で二度目、しかもれっきとした武力を伴う反乱だ。

大公が勝てば国王はどうなるだろうか。騒動の種を残さないとするならやはり国王の命はないだろう。いや国王だけではない。王弟もきっと道連れだ。

兵士も沢山負傷したり死亡したりするだろう。

戦争とは無縁だったのに、間近に迫る緊迫感にぶるりと震える。

39　脱出

朝の大公の宣告から、その日はあっという間に時間が過ぎた。

日中はうろうろと歩き回って傭兵隊長にぶつかるは、厩舎では馬丁に不審がられるは、護衛には笑われるはで散々だ。とうとう侍女頭からは強引に座らされて、気分を沈静化するお茶とやらを何杯も飲まされる羽目になった。

おまけに夜には早々に部屋に引きこもろうとしたのに、いつもは一人にしてくれる入浴も問答無用で全身を洗われ、薔薇の香りのする香油を塗り込められ精神的にどっと疲れてしまった。

「いつおいでになってもよいように万全の準備をさせていただきます」

そんな台詞とともに着せられたのは、見ているだけで恥ずかしくなるようなひらひらな寝衣で、この時点で既に気力がそがれている。

「あの、私は一応王妃候補ですが」

「存じております。でも私としましては、あなた様には大公妃になっていただきたいと願っております」

この侍女頭が大公に心酔しているのは知っているが、理を曲げてもためらわないとまでは思わなかった。

式前でのこんなことは許容されないのが貴族社会じゃないのかと問い詰めたい。ただそれを言ってしまうと、式をあげれば問題ないと祈祷所に連行されそうだ。今夜ばかりはあそこは無人でないと困る。

侍女頭は丁寧に髪をとかしながら鏡越しに娘に視線を合わせてくる。

「申し訳ないとは思っております。ただ、大公様の心情も汲んでくださいませ」
「私の気持ちは？」
「返す言葉もございません」

起きて待っている義理もないのでふてくされながらベッドにもぐりこむと、侍女頭もそれ以上の言及は避けて部屋を出て行った。
静かに上体を起こして隣の様子をうかがう。いつものように護衛の気配だけになたところで、音をたてないようにベッドをおりる。気はとがめるが、ひらひらの寝衣を脱いで薄手の寝具を中につめる。頭の方には黒い布をまとめたものを押し込んで、寝具の中には適当な重しを入れる。
傭兵が持ってきてくれた動きやすい黒い服を着て、髪の毛をまとめた。こちらも黒い布でおおって靴を履く。
部屋のドアノブは布でぎゅうぎゅうに縛った。少しの間なら時間稼ぎができるだろう。

川に面している窓を開けて窓枠に足をかけて立ち、即席の人形を前に抱える。
できるだけ大声で、注目を集めないといけない。勿体ないが部屋においてあった花瓶を扉に投げつける。花瓶の割れる派手な音で、外から護衛がどうしたのかと声をかけてドアノブを回す。

「私は、大公のものにはなりません、それくらいならいっそ！」

大声で叫んで、人形を放り投げる。それは放物線をえがいて水に落ちる音がした。

「今のは誰か落ちたのか？」

「あそこに白い何か……頭の所が黒じゃないか？」
「舟を出せっ、早急に確認しろ！」

寝室の扉も慌しくドアノブががちゃがちゃと音を立てている。
カーテンの隙間から護衛と兵士が窓の鍵を壊して中に入り込むのと入れ替わるように、カーテンの背後にすべりこんで外をうかがう。窓から川の方に大声で指示を出した二人がドアの縛りを断ち切って隣室へ移動したので、そっと外に出て中庭の木に一番近い胸壁に向かった。
鉤爪のついたロープを木に投げて枝に引っ掛ける。これで最悪足を滑らせても木にはぶら下がれる。
壊れそうなくらい心臓が脈打っている。呼吸を整えて胸壁の上に座る。ロープを腕に巻きつけて枝を引き寄せた。ここが一番気をつけないと、音に気付かれて見上げられたらばれてしまう。

タイミングを見計らって強い風がふいた瞬間に木に飛び移った。がさりと音がしたが、木にしがみついて息を殺す。そうっと下を見ると誰も木に近寄る様子がない。安心してそろそろと下りはじめた。
ロープをぐいっと引っ張っても枝が折れる気配がない。ロープを幹に伝わらせて手足を動かし下を目指す。一度でもこの木に登っていたらどこに手をかければ足を置けばいいか分かるけど、今回はぶっつけ本番だ。
慎重にすすめていたつもりだったのに、焦っていたのだろうか。足がすべり、とっさにつかもうとしたロープもすり抜けた。バランスを崩して落ちる。まだ距離があったのに間抜けだ。体を丸めたのに地面への衝撃は訪れず、代わりにがっしりと受け止められていた。
捕まってしまったかと身が総毛立つ。
でも。
その気配はよく知るもので。その手も知っているもので。

「なんて無茶を。心配させないで下さい」

とがめるような、安堵するようなその声もよく知っているもので。知らずつめていた息を吐き出した。

「ありがとうございます。脱出します。祈祷所に」

それだけで通じたのだろう。地面におろしてもらい、手を引かれたまま走り出す。見ると似たような闇にまぎれる色目の服だ。決行今夜とは伝えられたけれど、ずっと待機してくれていたのだろうか。走って祈祷所にたどり着く。堀に面した奥の壁には装飾にまぎれた扉がついていて、開けると階段があり下りた先には外から見えないように小舟が用意してあった。

「先に行ってください」

促されて足を踏み出そうとした時、低い声が聞こえた。

「やはりここだったか」

視線の先には大公がひどく静かな様子で佇んでいた。一歩近づいてきたのをさえぎるように、背中にかばわれる。刹那、背後で息をのむ。

「あなたと改修の話になった時に予感はしていた。ここを嗅ぎ付けるのではないかと」

言いながら無造作に剣を引き抜く。研ぎ澄まされた刃は見ているだけですくんでしまうような迫力を秘めている。娘を背にかばった

方も剣に手をかけている。

「お久しゅうございます。大公殿下」

「お前も息災と見える。こんな形では会いたくなかったが。その髪の色は似合っていないな」

二人とも油断なく慎重に位置を決めて相手の出方を図っているのに、会話はむしろ和やかな挨拶だ。

娘だけが喉をひりつかせ、緊張から汗をかいている気がした。

髪の色を揶揄されて、ふ、とため息とも苦笑ともつかない音がもれた。

「からかわないで下さい、お恥ずかしい。大公殿下、武器を捨てて投降される気はございませんか」

「あれの温情にすがれと？　それは願い下げだ。第一ここにどれだけの兵力が集まっていると思う？」

「……外の騒動が聞こえませんか？」

その言葉につられるように大公も、娘も祈祷所の外に注意を向ける。

大声で怒鳴りあう声や、慌てたような音の合間に火事だ、との声が聞こえた。

「貴様……」

「私が一定時間内に戻らなければ、潜んでいる配下の者が火をつける段取りになっていました」

火を消せと呼ばわる声がする。分散しろと叫んでいるのは、火の気が複数なのか？

余計な力を抜いているように見えながら、威圧感のようなものを

滲ませている背中にかばわれたまま娘は足が動かなかった。

「それにしても、あれの命令でここまでするか。臣下には恵まれたというべきか」

「殿下。陛下を愚弄なさらないでいただきたい。私は勿論、本来あなた様も陛下の臣下なのです」

「私は俗物なのを自認しているがあれに下げる頭はもたぬ。父親にそっくりで人の気持ちを知ろうともしない、人を踏みにじる者などに」

そこで大公は娘に目を向ける。

「あなたや義姉上を泣かせるような国王などに」

「陛下はお変わりになりました。いつまでも子供ではありません」

互いの剣を持つ右手に力が入った、ように見えた。

祈祷所の扉から祭壇までの細長いスペースは、まるでフェンシングの演台――ビストのように見える。そこに剣が交錯する。鋼のぶつかり合う音、衣擦れ、鎖帷子のこすれあう音がめまぐるしく聞こえた。

騎士団の演習場での訓練とは比べようもない緊迫感に、娘は息をするのも忘れたように見入ってしまう。頭ではこの間に奥の扉へと思う。それなのに目が離せなくて足が動かない。

「どうした、動きが鈍い。そんなに後ろが気になるのか」

「……っ」

大公は優雅に見えながら隙をついた鋭い剣さばきを見せている。一方はそれをかわしてねじ伏せながらも冷静で、力と速さを剣に乗せる。

「さすがだな。――団長」
「お褒めにあずかり、光栄、ですっ」

ひゅっという音とともに傭兵隊長に扮した団長の染めた赤毛が一房宙に舞う。対する大公も右腕の服を切り裂かれている。
互角のように見えた戦いもやはり、大公よりも若く日々騎士として訓練している団長に分があるのか、次第に大公がおされ気味になった。ぶつりともごつりとも言えない嫌な音がしたと思ったら、大公の肩口から血が滲んでいる。
大公が両手で剣を握り、じり、と腰を落とした。
堀側の扉が開いたと思ったら見知った顔が現れた。

「おい、お前何やって……」

団長に呼びかけ、途中で止めてやはり剣を抜く。

「おい、交代だ。お前は早くここから逃げろ」

大公がそちらに目をやりかすかに笑う。

「副団長までお出ましとは。私も随分買われたものだ」
「大公殿下。失礼ながら私がお相手つかまつります」

服装は馬丁のものながら雰囲気はすっかり騎士団副団長のそれに戻っている。はあっと短い掛け声をかけて、副団長が大公に切りかかった。

「行きましょう」

団長から奥へと押しやられながら、大公と副団長に視線を投げる。

「でもっ」

「いいから、行くんだ」

最後に見た大公は眉をひそめながらも、うっすら笑っていた。

「神のご加護を」

細い階段をおりて小舟に乗る。団長が勢いよくこいで堀を渡った。舟が堀の割れ目のようなところに入り込む。そこには地中に続く通路がしつらえてあってしばらく進むと階段になっていた。それを登りきると隠し扉が開いたままになっている。

ここを副団長が通ってきたのだろう。地上に出ればそこは墓地の片隅の石碑のようなところだった。

「こんな所に……」

「早く、馬をさがしてここから離れる」

団長が周囲を警戒しながら早口になっている、そこになんとものんきな声がかかった。

「馬ならここに用意しているよ」

気配を感じさせなかった相手に、団長が一瞬で戦闘態勢になる。手を振りながら現れた傭兵に脱力しながら、団長には敵ではないと告げた。

「馬の用意をしてもらった人です」

墓地の柵の向こうに鞍を置いた馬が二頭つながれていた。

近寄って見覚えのある、額や足の色や模様に娘は傭兵を見つめた。

「ばれた？　厩舎の馬だよ。勝手に連れてきたら怒り狂った馬丁さん、あ、副団長さんに追いかけられてね。面倒だから殺しちゃおうかと思ったけどまあいいやと思い直して、ここの抜け道を教えたんだ。向こうで会えた？」

「貴様、何者だ？」

「僕は今は彼女の依頼で動いている。敵ではないね」

団長が目線をよこしたので肯定の意味で頷く。

馬を検分して傭兵を振り返った団長は固い声で質問する。

「速度と持久性は？」

「あの厩舎で一、二を争う」

娘を馬に乗せようとした団長は、何を考えたか二頭のうちの大きいほうに娘を横向きに乗せた。続いて自分がその後ろに乗る。

団長は馬上から傭兵を見下ろした。

「頼みがある。もし、副団長がここから出てきたらこの一頭を引き渡して欲しい」

「んん？　そこまで契約した覚えはないけど、まあいいか。厩舎の他の馬は水を沢山飲ませているから使い物にならないし」

適当に納得して、傭兵はあっさりとその提案を受け入れた。娘に鞄を手渡すしてにっこり笑って手を握ると、またね、と挨拶をした。

団長は娘を抱き寄せて手綱を片手で握り、馬を走らせた。傭兵が

小さくなっていく、最後までずっとひらひらと手を振っているのが見えた。

「舌をかまない様に注意しろ」

ひたすら口をつぐんで団長は馬を走らせた。墓地から街道に出ても速度を落とさず、西の方へ向かう。随分と走ったあとで山間の小さな小屋にたどり着いた。

近くの川で馬に水を飲ませた後で小屋の裏手に馬をつなぎ、中にあった桶で川の水を汲んで粗末な室内へと入った。

傭兵から渡された鞄を調べると、携帯食や布、簡単な薬、短剣など役立ちそうなものが入っていた。まずは二人とも水を飲んで携帯食を口にする。人心地ついたところで、団長が恐ろしい顔つきになった。

「あなたは」

短く言われたのも低い声で、怒っている気配が濃厚だ。

座っていたところから腰が引ける。上体を後ろにと思ったところで、ぐいと前に引き寄せられた。目の前が暗くなる。抱きしめられたのだと思ったら、頭の上で呻くような声が聞こえた。

「あなたは俺を殺す気か？」

40　嘘吐きの告白

「あなたは俺を殺す気か？」

団長の言葉の意味が分からずに、娘は色々と考える。別に誰を殺すつもりも危害を加えるつもりもない。

自分が団長を殺すなどとんでもない。何故そんなことを言い出すのだろうかと首をかしげる。それよりも鎖帷子が当たって地味に痛い。そう訴えると慌てて体が離れた。

「私は誰も殺したりする気はありませんが」

殺すなどと過激な言葉に不快感を滲ませたのに、団長はいや、と短く否定した。

「あの穴だらけの計画でそう言うか。最初は本当に川に飛び込んだかと肝が冷えた。中庭も物見も巡回の兵士がいたというのに。物見の方は距離があって気付かないからいいとして、中庭の兵士は川の方に注意が向いている隙に気絶させたからよかったものの、そうでなければすぐに見咎められて剣か矢を受けたに違いない。

あまつさえ木から落ちるとは。俺が受け止めなかったら怪我をしていただろう」

鎖帷子を脱いで、肩と腕を回しながらも団長は厳しい指摘を続ける。

「堀を渡るのだってあなたの細腕では時間もかかる」

「だって、一人でできることをと思ったらあれしか方法がなかったんです。部屋の周りは護衛がいて人は近づけないし、それに急がな

いと大公――殿下が部屋に来てしまうと……」

娘はうつむいてきゅっと服を握り締めた。大公、の言葉に団長が反応する。

「大公殿下があなたの部屋に？」

「出立が三日後と言われてその前に逃げないと側におく、って」

うつむいているので団長の表情は分からないが、顔を上げられない冷気というか威圧感が迫ってくる。しばらく二人とも無言でいた。はあ、とため息が聞こえて呆れられたのだとますます顔が上げられなくなった。

「だから、俺にぶつかって『今夜脱出』の伝言を手渡したわけか」

「厩舎でもです」

今度は喉の奥でうめくような声がして、さすがに娘は顔を上げた。団長は額に手をやり眉をしかめている。団長の手が伸びて頭の布を取り去った。まとめていた髪の毛もほどかれ、癖がついていたが黒い髪の毛が肩から背中を覆う。

それを手櫛ですきながら団長はじっと見つめてくる。視線の強さに気恥ずかしくなって目が泳いだところで、頭をなでられる。

「擦り傷はあるが、無事でよかった。港町で見失ってから、大公殿下の所で姿を確認するまで生きた心地がしなかった」

しみじみと言われて団長を宿屋に残して逃げ出したことを思い出す。同時に王城に戻るようにと言われたことも。

団長は任務で東までやって来たのだ。逃げ出した伝説の娘をつかまえて王城に送り返すという国王の命令を実行するために、髪の毛

を染め傭兵としてもぐりこんだのだ。

「陛下から逃がすなと言われたから、今回守ってくれたんですか？」
「そうだが、それだけではない。俺自身があなたを守りたいと思ったからだ」
「任務だから？」
「違う！」

強く言い切られて再び抱き込まれた。自分のものよりも低く早い鼓動を直に感じる。
顔を上向かせると苦しげな顔で見つめられていた。

「もう、任務より私情の比重が大きい。俺はあなたを……」
「――？」

耳飾をはずして語尾を上げた単語に、団長が目を見張る。嘘吐きな人だ。
これがどうやったら『雷の音が違って聞こえませんか』になるんだろう。
そう思えば笑えてしまう。もう一度耳飾をつけると震える指先が耳に、耳飾に触れた。

「……言葉が分かる、のか？」
「王城では語学の教師もついていたし、意識して耳飾を外して言葉を覚えようとしましたから」
「じゃあ、あの時も分かっていたのか？」

こくりと頷くと、背中に回っていた腕が緩められた。立ち上がって一、二歩後ろに下がった団長は片手で顔を覆い、ははっと乾いた笑いが漏れる。

その後で獣のうなるような声になった。
目をあわさずに団長が自嘲気味に呟いた。
「滑稽だろう。これでも必死に踏みとどまろうとしたんだ。あなたは陛下が召喚した、陛下の伴侶になる人だと」
雷雨のさなかに落ち着かせようと抱きしめた時、その抑制がゆるんだ。耳飾を外してしまえば理解されないだろうと、身内でうねり膨れ上がった想いを囁いた。あれを正しく聞き取っていたのなら、自分はとんだ道化だ。そして見事に黙殺されたのだ。
団長はとっくの昔に告白をしていた自分を恥じるように、両手で顔を覆った。
だから背中に回ったものが何か分からなかった。胸にすり寄せられたものが分からなかった。触れてきたものに目をやると娘があの雷雨の時のように、背中に手を回して心臓の上に耳をつけていた。
この状況は何だ。あの日の再現か？
違うのは互いの髪の色か。茶色だった髪の毛は黒になり、自分の茶色の髪の毛は大公殿下には似合わないと評された赤だ。
心臓の音にだけ注意を向けるかのように閉じられていた目蓋がゆっくりと上がる。
そこにあるのは黒い瞳。二人といない、召喚された者の色が見上げてくる。
「もう一度言ってくれませんか」
「何を、言えと」
「『俺はあなたを』の続きです。あなたの口から聞きたいんです。――お願い」
最後の殺し文句に抗えるはずがない。すがるような眼差しをされ

ればなおさらだ。
道化を演じたのだ。最後まで演じきるのが求められた役割か？
そろりと腕を回して団長も娘を抱きしめ、目を合わせる。乾いた唇を舌で舐め、二度目の告白をした。
「俺はあなたを――愛している」
伝えてどうなる想いではない。口にするとあっけなくいっそ陳腐にも聞こえる。
聞いた娘は何も言わない。そっとうかがうとつむじが目に入る。沈黙が落ちて耐え難い。腕の中のぬくもりに未練を感じつつ手を離そうとすると、背中に回った手に力が込められた。
何がしたいのだろう。
「手を離してはもらえないだろうか」
胸にある頭が小さく、横にふられて団長の困惑を深める。普段なら体格差もあって娘に押されてもどうということはないはずなのに、胸元に一層強く頭をよせられて半歩ほど後退する。背中の手がきゅっと服を掴んでからひたり、と背中に当てられる。
随分長く娘を抱きしめていたようにも思えてきた頃、小さくかすれた呟きが耳をうつ。
「いつから？」
「もう、覚えていない」
「今も？」
「……ああ」

頭が胸から離れたが、相変わらず肩から下は密着している。うつむき気味の顔が上げられ目が合ったが、とてつもなく恥ずかしくて気まずくて視線がそれる。

こうして触れているのも告白するのも赦されない相手だ。

しかも羞恥と後悔しか残らない告白の後だ。こんなことがなければ、そしてねだられなければ口にするはずがなかった想いを伝えた後で、高揚感が急激に醒めていくのを感じた。

手を離して、距離をとって、以後は臣下として接すべきだ。

そう割り切ろうとわきまえようとしているのに何故娘の方がすがり付いている？

「あなたは嘘吐きです。あの時、愛しているって言ったくせに全然別のことだとはぐらかした」

「ああ、そうだな」

「でも私も嘘吐きです」

意外な言葉にそらしていた顔を正面に戻した。固い表情で、それでも見つめる瞳の中に必死な色を見て取った。

「言葉が分からないふりをしました。そのまま帰還しようとしました。雷雨の時こうしてなだめてもらってから、誰よりどこより安心できるのはここなんだということに気付かないふりをしたんです」

ひどく都合のいい夢を見ている気がした。これは自分の願望が見せる夢で、娘が甘い言葉を囁いてくれているのではないかと思った。

それほどにありえない。このまま続くと渇望してやまない、絶対に自分に向けては言われることのないはずの言葉が告げられるのではないか。

そんな錯覚に陥る。

「認めるのが怖かった。認めるともう元の所に戻れない気がしました。こっちに好きなものが好きな人ができたら、帰還への引力が弱まってしまう。だから見ないふりをして、いいえ再召喚の時には気付かなかったのかもしれない。でも」

黒い瞳に射抜かれる。見つめていたいと思って見つめて欲しいと願った。

その瞳に魅入られていたので気付くのが遅れた。

「あなたが、好きです」

よく聞こえなかった。うつむいてしまった娘の髪の間に見える耳が真っ赤になっているのだけは分かった。聞き間違いかと思った。声は小さくそれ以上に内容がありえない気がした。

「今、なんと……」

「あなたが好きです」

「それは嫌いではないということだろうか」

「違います」

震えてしまう手で華奢な背中をなでた。髪の毛を、頭をなでた。この感触は現実のものだ、ではこの言葉も現実なのか。

「俺と、同じ想い、なのか？」

「――はい」

「一時的な気の迷いでは？」

「違います。吊り橋効果なんかじゃありません」

よく分からない単語が挟まったが、しつこい程に問いただしても

返ってくる内容は変わらなかった。
うつむいた顔の両側から手を差し入れて頬を包んで促すと、ゆっくりと顔が上がる。頬が赤らんでいてさっきの自分同様に恥ずかしがっている。
でも今は消えないうちにこの現実を確かめたかった。

額をあわせて互いの吐息を肌の上に感じるほど近づいて、想いの全てをのせる。

「愛している」

潤んだ瞳が閉じられた。睫毛が震えている。そのまま誘われるように唇を重ねる。
己が唇への感触はひどく柔らかく、立ち上る薔薇の香りにめまいさえ感じそうだった。

幕間　茨の道

夜の山では遠くで獣が鳴いている。小屋の中はひっそりと静まり返っていた。

剣を腕に寝ずの番をする傍らでは、想いの通じあったばかりの彼女が静かに寝息をたてている。

長いこと緊張が続いていたのだろう、驚くほど早くに眠りに落ちてしまっていた。

黒い瞳は閉じられ、あどけない印象になっている。

その黒い髪を手ですくい取る。

彼女に告白し受け入れてもらえた事は僥倖だ。

想いが届くなど考えてもいなかったから現実感に乏しいが、腕にしたぬくもりも柔らかさも、はにかんだ笑顔も得がたく愛おしい。

彼女を誰にも、陛下にも渡したくないとの独占欲が当たり前のように生じている。

ただ今後のことを考えると、どうしても気分が重くなるのは止められない。

前途としては障害だらけだ。

陛下への後ろめたさ。陛下の想い人を掠め取った罪悪感。任務と私情を混同した無責任さ。どれをとっても騎士団団長の職には相応しくない。

何より陛下の信頼を裏切った。与えられた任務は彼女を保護して王城に、陛下のもとに送り届けることだったのに、王命にかこつけて自由に動いた挙句に彼女を手にいれた。

陛下に知られれば、どのような反応を示されるかは正直分からない。

不敬として罪人になり、死を賜るかもしれない。充分にありうる話だ。自分だけならともかく彼女まで罪に問われるかもしれない。

一緒に逃げることはどうだろう。追っ手をかわしながら漂泊の日々を過ごす。その先に明るさはあるだろうか。

駄目だ、と頭を振る。

階級をはみ出した者の末路は悲惨だ。元の階級からは蔑まれ決して戻ることはできずに、まともな職にも就けない。せいぜいどこかの用心棒か傭兵くらいしか拾ってはもらえまい。

そんな不安定な生活に彼女をおけるか？

なにより騎士が逃亡するのはそれだけで重罪だ。団長が逃亡など、騎士団の威信も地に落ちる。

実家にも迷惑をかけるだろう。

彼女の目立つ容姿では逃亡生活など続くはずもない。一生この黒髪を偽りの色に染めて目立たずに暮らす。……無理が生じて怪しまれるだろう。

子供ができたとしても、きちんとした教育を与えることすら難しい。

それに彼女をつれて逃げている最中に、召喚の儀が行われたら？

彼女だけ神殿に飛ばされたら？

どれだけ王都を離れようとも無駄なあがきにすぎなくなる。

彼女が帰還するとなれば大問題だ。

自分は果たしてそれを許容できるだろうか。

彼女の戻りたいという気持ちは痛いほど分かる。ただ引き止めたい気持ちを押し殺して迎えた再召喚とは、事情が変わってしまった。

もう戻したくない。目の前から消えてしまうのは国内であっても非常な苦痛と心配を伴ったのに、どことも知れぬ異世界であれば手が届かずに当然目も行き届かない。

伝説の娘の再召喚および帰還は一度は失敗して、陛下は彼女以外

の伝説の娘を再召喚をする意欲に欠けておられた。彼女がどうしても戻りたいと言ったら陛下と神殿に帰還の儀を頼まなければならなくなる。万が一、帰還の儀が実現したとして一度元の世界に戻ってしまえば同じ人物を召喚するのは格段に難しくなるのではないか。第一彼女が再び来てくれる保証などどこにもない。

失うことに耐えられるか？

港町で彼女の屈託のない笑顔を見てさえ嫉妬と独占欲を覚えるほどに浅ましい身が、手ずから遠くにやることができるだろうか。

ご両親をきちんと見送りたい、意に染まぬ結婚はしたくない。彼女の『意図』は明確でだからこそ揺るぎがない。気持ちは分かるが手放せない。なんて、自分勝手な。

こうして傍にいてくれることこそ奇跡のようなものなのに、すぐにそれ以上を望む。状況を既得権益のように思って失うまいとする。

「俺は本当に卑怯で自分勝手なのだな」

臆病でもあるか、と続けて少し落ち込む。副団長ならおおげさにそうだ、その通りと笑って背中を叩くだろう。陛下はどうだろう。彼女と自分のことは必ず陛下には伝えねばならない。その上で彼女を諦めてもらわねばならない。

可能だろうか。陛下に報告した後でも彼女に傍らにいてもらえるのだろうか。

無理に王妃にされてしまうかもしれない。陛下にはその権利と実行できるだけの権力がある。

わが国の頂点に立つお方。幼い頃から存じ上げて命をかけてお守りし、お仕えすべきお方。

自分にとって絶対的なお方。

今だってその認識が揺らぐことはない。

ただ彼女に関しては敵対関係になってしまった。自分が陛下と敵対する日が来ようなど想像もしていなかったのに。

彼女を雷雨の時になだめたのでさえ、焼けるような射るような眼差しと感情をぶつけられた。

今や殺されても仕方のない状況だ。

彼女が陛下や他の男のものになったら――すぐにその感情がわきあがる。自分という存在が陛下にその感情を抱かせる。

他のことでなら喜んで陛下の盾となり捨石となる。

ただ彼女に関しては一歩たりとて譲れない。

未来に関してさえ問題が山積みだが、当面の現実的な問題は片付けなければ。

彼女が目を覚ませばここを出て目的地に馬を走らせる。

自分は東に取って返さないといけない。王都を出て東に進軍してる軍勢に合流しなければならない。

陛下御自身がその中にいらっしゃる。決して失うわけにはいかないし、輝かしい御身に敗北の屈辱も与えてはならない。

そのためにも彼女の安全を確保して、東へ向かう。

彼女は政治的、軍事的な配慮から王都に、王城にやらねばならない。

大公殿下のところに伝説の娘がいるとの噂を払拭しなければ、士気が低下しこちらの正当性を保てなくなる。ただでさえ剣を交える相手が陛下の叔父で生粋の王族なのに、伝説の娘がその陣営にいるなどとなればますます兵は萎縮し戦えなくなる。

そのためにも彼女には華々しく王都に帰還してもらわなければならない。

正直、王都になどやりたくない。王城など重ねてごめんだ。
それでもそれ以外の選択肢はない。

「ん……」

明け方近くになり、急激に山の温度は下がる。かすかに身じろいだ彼女がもぞりと体勢をかえて自分にくっつく。
たったそれだけが途方もなく嬉しく、切ない。
彼女を手に入れた。手放す気は毛頭ない。
では守りきって戦わなければならない。陛下や他の男や、彼女を引き離そうとする未来とも。

できるならこの時間が少しでも長く続くように。
彼女から伝わる熱に、容易く体温を上げながら剣を抱く腕に力をこめる。
ようやく教えてもらえた彼女の名前を、最上のものとして胸に秘めながら。

41　東へ、王城へ

山の冷気で目が覚めた。小屋の中央の床で眠った体は痛む。
傍では片膝を立てて座った姿勢の団長が剣を抱いている。見上げると茶色い瞳と目が合った。

「お早う」
「お早うございます」

背中に手を当てられてゆっくり起き上がると、昨夜唇を合わせたことが思い出されて顔がまともに見られなくなってしまった。
そんな様子をよそに馬を見に行った団長が水を汲んで戻り、簡単な朝食を取った。

「馬にも燕麦とリンゴが積んであった。昨日の男は傭兵ということだがあれは？」
「ええと、本当に傭兵さんのようです。契約して、脱出を手伝ってもらって……」

ここまで言って団長の眉間の皺が深くなり、娘はそれ以上続けられなくなった。傭兵は報酬次第で主を変える。そんな得体の知れない人物を信用するのはどうか、と非難をされた。
団長の言うことは正しい。ただ腕は確かなのは腹立たしいが自分の身をもって知っている。それに、話をして本当に悪い人には思えなかったという漠然とした印象もあった。
団長はため息をつく。

「確かに腕は立ちそうだった。傭兵は一流になるほど口は固いし仕事は確かだが」

娘はあの傭兵の本名を教えてもらったことと、今は手元にない品物を届けに来るだろうことは黙っていた。あれは傭兵と自分の契約であり、勝手に名前を教えることはなんだかルール違反のような気がしたからだ。

食事が終わると人のいた気配を消して、再び馬で移動を始める。

「どこに行くんですか」

少し速度が落ちた時に尋ねると、横乗りの体を引き寄せられ耳元で囁かれた。

「俺の実家。そこに騎士団の一部を駐留させている。準備が出来次第、俺は東へ向かわれている陛下の軍に合流する。あなたは騎士に護衛をさせて王都に向かえ」

「王都」

「皮肉な話だが王城が今は一番あなたには安全だろう」

二人とも王城に行く意味の重さに沈黙し、馬の駆ける音と風の音だけを聞く。

娘は首をよじって団長の方を向いた。

「私はそこから逃げたのに」

「分かっている。だが、あなたには――伝説の娘には王都にいてもらわないと困る。

あなたは召喚された後陛下の叔父上である大公のところに招かれた。滞在中に騒乱がおきそうになったので王都に戻ったという筋書きになる。

東の滞在も王都への帰還もあくまで王族間のつきあいという体裁だ。

でなければ要らぬ憶測を呼ぶし、他国が介入する口実にもなってしまう。あなたは王城にいて、陛下側の陣営だと広く知らしめる必要があるのだ。

陛下には全てを話す。王城では不安なのは承知しているが、どうか待っていて欲しい」

王城に戻れば二度と逃げ出せないような警備と監視体制になるはずだ。黒髪黒目の現状では国王の伴侶と目される。そんな状態で団長が国王に話をしても、黙殺されてしまうのがおちなのではないだろうか。

前を見ていた団長が、視線を落とす。不安げな娘のそれを認めて口の端が歪んだ。

「俺はあなたを手放さない。守るつもりでもいる。だが公私混同での任務の逸脱と陛下への不敬、反逆の罪で俺は死を賜るかもしれない。今回の進軍で戦死するかもしれない。

これが終われば団長の職は辞するつもりだ。田舎に小さな所領があるから、命があればあなたとそこででも暮らそう。

もし、俺が死んだらあなたには好きなように生きて欲しい。陛下とならそれでもいい。逃げるのならさっきの所領の権利証を譲るので好きに使ってくれ」

命があり、動けるうちは守り抜いて誰にも譲るつもりはない。ただ罪人になり死罪や幽閉になれば手が出せない。娘を見習って脱獄脱出は試みるし、王弟の殿下や妹や副団長には後を頼むつもりではいるが、二人で生きていけない未来であれば娘の意思に任せるよりほかはない。

団長は服をぎゅっとつかまれたのを感じる。

「反逆って……」

「あなたを、王妃になる人を掠め取ったら姦通、ひいては陛下と国に弓引くと取られて当然だ」
「私は、王妃にはなりません」
「それでも、どう取るかは陛下次第だ」

少なくとも大公の件が片付くまでは命は取られないだろう。団長としての使い勝手の良い駒は失えまい。その後は。陛下の本質は分かっているがこと娘に関しては予想がつかない。

「私は、あなたじゃないと……」
「それがどれだけの殺し文句か分かっているか？」

娘を強く抱き寄せて照れ隠しに馬の速度を上げる。こんな風に二人だけでいられるのは、もしかすると今日限りかもしれない。
そんな不吉な予感を胸に団長は馬を急がせた。

短い休憩を挟み、団長はともかく娘も馬も疲労が隠せなくなった時に、ようやく団長の実家に到着した。実家とは広大な敷地を持つ、それに対してはやや小さいかと思われるが堅牢な印象の館だった。
馬を下りた団長が娘を抱え下ろすと、待ちわびていた騎士団員達が走りよる。

「団長、ご無事で」
「次の鐘で出立する。皆準備を整えろ。半数は別働隊として王都に戻る」
「王都にですか」
「この方の護衛をしてもらう」

団長は団員達の方に向き直った。腕に抱いている娘を見てはじめ

はその面影に、次に髪と目の色に驚愕した団員達はその場に膝をついた。

娘は団長に下ろしてくれるように頼むが、疲れているのだからと聞き入れられなかった。仕方なくその体勢のまま、団員に話しかけた。

「膝をつかないで下さい。面倒をかけますがよろしくお願いします」

「勿体ないお言葉。王妃様とは知らず、ご無礼の数々をお赦しください」

「王妃じゃありません」

え？　と顔を上げた団員達にもう一度王妃じゃない、と繰り返したところで男性が団長を呼んだ。そちらを見ると、厳しい顔付きの男性が玄関に立っている。白髪交じりの茶色の髪の毛と、こげ茶の瞳は団長に似ている。

小さな声で父だ、と教えられた。

団長の父親は息子とその腕に横抱きにされている娘をじっくりと眺め、ゆっくりと近寄ってくるとやはり膝を折った。

「ようこそおいでくださいました。我らが命に代えましても御身をお守りし、王都にお連れいたします。

護衛の団員の人数は減らしてよい。ここから私兵を割くので団員は連れて行ってやれ。陛下のお側で軍功をたてる栄誉を奪ってはならぬ」

前半は娘に、後半は息子である団長に話しかけた団長の父親は娘の許しを得た後で立ち上がり、館の中に一同を招きいれた。

団長は軽食を用意させて浴室で髪の毛の色を戻し濡れ髪のまま食事を詰め込んだ。慌しく書類を用意し、手紙を何通か書き上げた後で甲冑を着込む作業に移った。合間に王都と進軍している陛下の様

子、東の現状についての情報交換をする。
父親は着替えの最中に部屋に入ってきてその様子を椅子に座って眺めている。かつての騎士団団長でもあり息子を鍛え上げた父親は、騎士団を引退し爵位を守る身となった今でも畏怖と尊敬の対象でもある。あとは頭部だけとなった時に人払いをして二人きりになる。

「なぜお前が伝説の娘と一緒にいるのだ」

鋭い詰問に、団長は手短に事情を説明する。この父親には今でも頭の上がらない部分がある。
王城から抜け出た娘が東の大公に捕らえられたのを救い出した、まで説明をした。

「……そうか」
「道中さりげなくでいいから、あの方が王都に向かっていると広めてはもらえないでしょうか」

探るような視線の父親に対し、団長は大まかに筋書きを話す。ふむ、と顎に手をやり考えた父親が承知したと呟いた。
そこにやはり着替えをした娘が入ってきた。父親に会釈をして甲冑に身を包んだ団長を見上げる娘に頷いて、団長は父親に少しだけ席を外してくれるように頼んだ。礼儀にのっとり、わずかに扉は開かれたままだ。
団長は娘の手を取り、その服を眺めた。

「妹のものだ。懐かしいな、よく似合っている」

甲冑の金属の部分をそっとなでて娘は頭を上げた。

「お気をつけて。――王城で待っています」

「必ず、あなたのところに戻る」

身をかがめてそっと唇を重ね、手をはなした。用意した書類とともに印章つきの指輪を渡す。感傷的な意味合いと共に、公的な書類の簡易的な相続人の証明ともなるそれを娘に握らせた。

鐘の鳴るのにあわせて玄関に移動すると、愛馬とともに騎士団員が揃っていた。

父親と護衛に選別した団員に挨拶をする。

娘の前で膝を折り、手を取ってその甲に口付ける。騎士が行うのに不自然な行為ではない。ただ二人だけがその意味合いを知っていた。

立ち上がって頭部まで甲冑を装着し、馬に乗る。全員が馬に乗ったのを確認して出立の合図をした。

甲冑をつけてしまえば視線は見咎められない。

狂おしい想いで、父親の横に立つ娘を見つめる。

想いを伝えあったばかりの人を残し別れ行く。その辛さは言葉にできない。

一刻も早く陛下と合流して大公殿下と対峙して、騒動をおさめねば。

その後は状況がどうなろうとも、陛下に――。

団長は前を向いた。東へと。

娘は隊列が小さくなり視界から消えてしまうまでずっとずっと見つめていた。

甲冑に身を包み、剣や槍で武装した――馬まで戦のための装備になっている――彼らを目に、記憶にとどめようとした。

芝居ではない、叔父と甥の覇権をかけての戦いになる。誰かが傷つき、誰かが死ぬ。その人達は敵でも味方でも誰かの大切な人で、

今の自分のように無事を祈る人がいるかもしれない人で。
どうしてこんなことをするのか。大公にも国王にも、団長にすら届かない疑問を胸のうちで呟く。
いつまでも正面玄関前から動こうとしない娘に付き合って、父親も立っていた。
久しぶりに目の当たりにする希少な色合いの髪の毛と目の色。王城を抜け出たという、ありえない行動をとった挙句に東から脱出してきた娘はなるほど目力が強い。

「館に入りませんか。今夜はゆっくりしていただいて、明日王都に向けて出立いたします」

娘は最後にもう一度だけ、騎士団が去っていった方角に目をやった。

「――はい。お世話になります」

少しだけ目が潤んで声が掠れている。
娘の手を取り案内しながら、父親はこの動揺が何に起因するのかを考えていた。
戦への恐れか。顔見知りが危険に赴く感傷か。それとも。

「妻は亡くなり娘も王城ですので、女主人がいなくて行き届きませんが精一杯おもてなしをさせていただきます」
「お構いなく。私にできることがあればおっしゃってください。これでも食堂勤めをしていたんです」

聞けば元の世界ではなく、こちらで働いていたという。確かに型破りだ。
それは悪くないと父親は思う。着替え一つできないお嬢様ではな

いようだ。

「では王都に連れて行く侍女の数を減らせるでしょう。使用人にはここを守る責務がありますから助かります」

東で戦になればどう飛び火するか分からない。武においては国王派の筆頭ともいえる家なので、この機に乗じようとする輩がでないとも限らない。伝説の娘を、王妃になる娘を安全に連れて行くためには当主たる自分は勿論同行する。

留守を預ける使用人、私兵ともども鍛えてはいる。それでも人数は多いに越したことはない。

手入れは怠っていない愛用の剣を、また今夜磨き上げようと思いながら父親は娘を客室に誘った。

王妃が滞在するという栄誉に、いつもは静かなこの館がわきたっている。

それは先程までいた騎士団員達に対する興奮とは比べようがない。黒髪黒目の持つ威力はそれほどに大きい。

息子はさりげなくと言ったが、王妃の道中をさりげなくなど無理かもしれない。

王城への使いと街道上の上宿の確保の手配をしながら、算段をつける。王妃の道中なら途中の貴族の館に宿泊するのが常だが、敵味方の区別が難しい状況に加えて、今回は何よりも速やかに王城に入る必要がある。

あれこれと理由をつけられ引き止められたり、自分が護衛の筆頭になることを詮索されるのは不愉快だ。

「なら、探りを入れてきた貴族や寄って来る民にほのめかす程度でよかろう。御方にはベールでも付けていただこうか」

まあ、私に聞いてくる度胸のある奴はいるとは思えんが、と一人ごち父親は娘の世話を侍女に申し付けた。

息子によく似た、それよりも厳しい顔つきの元団長が馬車の隣を馬で付き従ったせいか。娘の王城入りは速やかに、つつがなく行われた。

王弟殿下と騎士団本部残留組に請われて、父親が王城に留まったのは自然なりゆきだった。

42　ゆるやかな虜囚

髪の毛が黒いだけで、目の色が黒いだけで特別扱いなのは娘にとっては異様なことなのに、なぜ人が膝を折り深く礼をするのだろう。

ここでは珍しい色でも、元のところではそれこそ何億、何十億といる色彩にすぎない。自分は伝説の娘でも王妃でもない。ただの、召喚されて迷惑をこうむった人間なだけなのに。

王城の正面玄関でずらりと国の重鎮らしき人々に出迎えられて、娘は一層その感を強くした。

久しぶりの王都と王城だった。馬車から見る王城は抜け出した時と変わりなく見える。そこにいたる城下では、遠巻きに馬車と横についている甲冑姿の騎士を見つめる視線を感じた。王城からも迎えが差し向けられて仰々しくなったからか、まるでパレードのようになっている。

「見世物みたい」

呟きは馬車に同乗している団長の実家である侯爵家の侍女が聞いた。

「本来なら、紋章もない馬車などにお乗りになるべきではないのですが。いっそ天井のないものを用意すればよかったんです」

「それだけは、勘弁してください」

何かの罰ゲームにすら感じられる。肩を落として馬車の背もたれに上体を預けて、東へと進軍した団長と一行を思い出す。

元の所だったら古城の彩りとして飾られているような重い甲冑を着込んで、騎士を乗せるための脚の太く大きな馬に乗り去っていっ

た。

直前に手を取られた時の団長の手と唇の熱さは逆に、離れた途端に底冷えのような冷気をもたらした。

命のやりとりをする場所に向かうのを、何もできずに見送るしかなかった。

自分の不甲斐なさに加えて、逃げ出した王城に伝説の娘として戻らなければならない複雑さは、王城が見えたことで余計に増したようだ。

物思いにふけっていると、こつんと外から窓を叩かれた。

小さく返事をすれば元団長、現侯爵が馬を寄せていた。

「侯爵様、どうされましたか」

「もうすぐ到着いたします」

侯爵でありながら騎士団団長まで極めたせいか仰々しいことを嫌って、無骨と自称しながら今も騎乗して護衛役に回っている。

配慮はしてもらいながらも強行軍だったのに、疲れも見せずこげ茶の目は鋭い光を放っている。

「……はい」

威容を誇る王城が、鳥籠のように、見えた。

馬車をおりるとずらりと人が並んでいる。膝をつく人達の中、礼をして顔を上げたのは王弟の殿下だ。

「よくお戻りになりました。東の都はいかがでしたか?」

にこやかに、それでもよく通る声でさも遊びに行って帰ってきたかのような穏やかな内容だ。実際は王城を逃亡し、東の大公に捕捉されて間抜けにも舞い戻る羽目になった、それだけのこと。

こう言い繕うからには大公と国王の叔父甥の間に確執などない、と周りには印象付けろということだろう。

「とても、良いところでした」

「それは良かった。さぞお疲れでしょう。部屋でお休みいただこう。侯爵殿、お久しい。ここでお顔を見ることができて本当に嬉しい」

「殿下にもお変わりなくご尊顔を拝し恐悦至極に存じます。ご覧の通りの無骨者、王都の華やかな空気より田舎が性にあっておりまして」

団長の父親はすっと見事な礼を返して殿下と言葉を交わしている。ここで領地に戻ろうとしたのを殿下が引き止めていた。殿下の後ろに控えている近衛の騎士も熱心だ。

その間、重臣から注がれる視線を気にしないようにしていた自分の目の前に、長衣をまとった神官長が進み出た。

「ご無事でなによりです。神のご加護があなた様にあるのでしょう」

再召喚の際のような慈愛に満ちた微笑は健在だった。神官長の言葉に重臣達から静かなどよめきが起こる。

神のご加護――東で最後に聞いた言葉。偽悪的だと思ったのに皮肉げに俗物だと自分を評した国王の叔父、東の大公の台詞だ。祈祷所で血を流しながら表情は穏やかだった。

神の加護があるのならそもそも召喚などしないで欲しかった、そう思いつつ礼を返すにとどめた。

元団長は王弟と騎士に押し切られて、しばらく王城に滞在することになったらしかった。それでも客室を嫌がって勝手知ったる騎士団本部に宿泊すると主張していた。本当に騎士としての意識が強い方のようだ。

「お世話になりました。ありがとうございます」

「いえ、この老体が栄えある責務を果たすことができたことは望外の喜びです。感謝すべきは私の方ですな」

そこで『出迎えの儀』は終了したらしく娘は王城の客室へと案内された。前後を複数の護衛で固められて、その数は大公のところよりも多い。

大げさだと思う。侯爵家の侍女は元団長とともに騎士団本部に行ってしまったので、王城の侍女が荷物を持ってくれている。

廊下を歩きながらつい左右を確認してしまうのは、召喚されてからの悪い癖だ。

ただ、今回は逃げられそうにもないし、逃げるつもりもない。

『王城でお待ちしています』

『必ず、あなたのところに戻る』

――そう約束したから。

案内された客室は以前と同じ。団長の妹もそこにいたが、侍女も人数が増えている。

本当に大げさなことだと笑おうとして、上手く笑えなかった。

東へと急いだ団長と騎士団は国王の本隊と合流した。砦を兼ねる東の城を包囲するように陣を展開して対峙する。

団長は慌しく陛下の待つ天幕へと参上し、久しぶりに主に対面した。

戦装束の陛下はりりしく、身にまとう威圧感もあたりを払っている。

息をするのと同じように自然に膝をつき頭を垂れて陛下の言葉を待つ。様々な感情を押し込めて、罪悪感の分だけ頭が下がる気がしていた。

ああ、と声がかかる。待っていたと、よく来たと。

本心から待ちわびていた旨を伝えられ、顔をあげればかすかな笑顔でいる。

謝罪の言葉が浮かぶが今はその時期ではない。浮かんだそれを再び沈める。

「立ってくれ。戦況の分析を」

傭兵として潜り込ませていた兵士や先遣隊の報告、団長自身の見聞きしたことと併せて東の戦力を検討する。

副団長は無事に脱出できたらしい。陛下の横で来るのが遅いと文句を付けられた。

「先だってに起こした火事で建物の損害も確認しています」

さすがに祈祷所の裏手からの抜け道は塞がれたとのことだ。当然ながら相手は篭城のかまえを取っている。元が鉄壁の守備を誇る建造物だ。

不用意に攻撃するとしっぺ返しを食らうのは当然だろう。

だからといって奇襲するにも、あまりにも隙がない。こちらの被害が甚大になる。

「陛下が隣国と交渉されたおかげで川の通行権に関して当方が優位です。隣国を介しての物資の補給は以前より困難なはずです」

それまで比較的発言の少なかった副団長が手をあげた。

「大公殿下は利き腕の肩に浅からぬ傷を負っていらっしゃい――いえ、負っています」

副団長に視線が集中するが、真面目に頷かれる。大公殿下の利き手は右――右肩に傷と、そこで祈祷所のことが団長の脳裏によみがえる。

鎧や下に装着する鎖帷子を嫌い、あるいはただ娘を連れ戻すためだったのか防具をつけずにいた大公殿下とあの場で対峙した。

切り結んだ最中に、右肩に剣先が入ったはずだ。

副団長を見やれば再度頷かれた。

あの時点で右手だけでは剣を持てずに両手に握りなおしていた。

さらに、あの後で副団長と交代したのであれば更に傷が増えていてもおかしくない。

「火の気が祈祷所に近くなった時点で、見失ってしまいましたがおそらく重傷のはずです」

大公殿下がその状態であれば衝突の先頭に立つことも、もしかしたら甲冑を身につけることすら困難かもしれない。

加えて先日の火事での被害も無視はできない。武器庫や食料庫などを狙うように指示してあった。

「叔父上は……」

陛下の言葉に周囲は水をうったように静かになる。

「使者を送れば降伏される意思があるだろうか」
「おそれながら、私が最後にお会いした際のご様子では、それはないかと」

あれに――陛下に下げる頭は持たぬ、と断言していた。
本人が一番よく分かっているはずだ。一度目は尻尾をつかませずに逃げおおせたが今回で二度目。
これだけ目に見える形であったのが意外だが、言い逃れができるはずもない。
王族の矜持はどちらも高い。決して屈しないと断言されたからには最後までその姿勢を貫くだろう。

「そうか」

判断の言葉は短かった。

43　叔父と甥の果て（前書き）

人の亡くなる描写があります

43　叔父と甥の果て

団長は国王に娘のことを尋ねられた。内心の思いから国王と目が合わせられずに、軽く礼をしたまま答える。

「ここを脱出してから私の実家に寄り、父と騎士達の護衛のもとで王城に向かわれました」

「そうか、そなたの父が一緒なら安心だ。ご苦労だった」

「勿体ないお言葉。――陛下」

「何だ」

「この件が終わりましたら、申し上げたきことがございます」

しつらえた天幕の中、ろうそくが揺れて団長の姿に陰影をつける。国王は娘の無事を聞かされて安心し、意識は大公へと向いていた。半分聞き流していたが、団長の口調の重々しさにそちらを見やる。

「今ではなく、後でと申すか」

「はい、今は全力で事に当たりませんと」

引っかかる点はあるが団長が優先順位をつけたのなら、今追及しても口に出すことはないのだろうと国王は結論付ける。

こうと決めた時の団長の口の堅さは長いつきあいで承知していた。

「では、この件が解決したあかつきに聞かせてくれ」

国王の言葉に団長は深々と礼をして天幕を後にした。国王は娘のことを想う。

いなくなってから季節は巡り、随分長いこと娘の顔を見ていない。無事に王城へ――逃亡された日に下した命令が実現された。

早く顔が見たい。娘にとっては迷惑なだけの感情だとしても、会いたくてたまらない。

叔父の所にいたなどとは。本当に予想外で振り回されてばかりだ。

「早く、そなたに」

天幕の外で厳重に護衛をしているだろう近衛達に聞こえないように、国王はそっと呟いた。

翌日作法にのっとり、正式に降伏を求める使者を送る。相手方からもこれをはねつける返答を受けて、叔父と甥の争乱は始まった。

攻める方法は二つ。兵糧攻めと力技の攻めだ。後者は成功率が低い。水をたたえた堀はトンネルを掘らせてはくれない。高い壁と胸壁、攻撃用の狭間は侵入者を足止めし頭上からの攻撃を許してしまう。

季節が夏なことが国王側には有利に働く。砦でも食料は備蓄しているがどうしても保存が難しくなる。加えて先日の火事騒ぎで損害も被っているはずだ。

団長は船団を指揮して、川からの補給を遮断した。陸側からは無論のこと砦に食料を運ばせることなどさせるはずもなかった。

大公側はそれでもよく抵抗した。さすがは大公と言うべきか、防衛の要の東の砦というべきか。物理的な攻撃は寄せ付けず、予想以上にもちこたえた。

それでも先細りは否めない。砦を包囲する間に国王側も簡易の砦を築いて、陣容を固める。

秋の収穫物は国王側には供給されるものの大公側には行き渡らない。

東の国との交渉で川の支配を強めていたことが、有利に働いた。

そしてある夜、胸壁の上からぐるりと輪を描く明かりが確認された。

――夜半、砦の中から大声での騒ぎが聞こえたと思ったら上げられて久しい跳ね橋が、轟音とともに堀を越えて下げられた。これを待ちわびた国王の軍勢がときの声を上げ砦の中になだれ込む。

必死に橋を上げようとしたが間に合わず、侵入を許した大公の軍勢は砦の中で国王の軍勢と切り結ぶことになった。砦の構造については、団長自ら潜入していたためにある程度は解明している。

川側からも油をしみこませた布を巻いた火矢を射かけて、混乱を誘う。

頃合と見て団長も砦に入った。挑んでくる兵士達を切り捨て、あるいは剣で骨を砕きながら大公の居室を目指す。

居住区の上階あるいは篭城用の塔のいずれかと踏んでいたが、敵ほどではないが味方にも損害を出しながら入り込んだ両方にその姿はなかった。

祈祷所は先日の火事で焼失している。ではどこに？

それは団長だったから思いついたのかもしれない。中庭の、焼失を免れた木を見上げそこに近い部屋へ急ぐ。大公の居室とは反対側の端に近い場所は、かつての娘の部屋だった。

扉を開ければすぐの部屋の長椅子に目指す人物は座っていた。

「来たか」

「……大公殿下。これ以上の抵抗は無意味です。降伏なさってください」

鎖帷子はまとっているが、大公の顔色はさえなかった。座ったまま剣を前に立ててその上に両手を乗せている。

「あれに下げる頭はないと、どうしてもと言うならあれを連れて来い」
「叔父上、余ならここに」
美麗な甲冑に身を包んだ国王が抜き身の剣を片手に現れた。団長はその場を譲る。
甲冑の頭部を外し叔父と甥は対峙した。
「久しぶりだな。少しは男の顔になったか」
「叔父上、何故このようなことを。破滅しか招かないことを誰よりよくご存知のはずなのに」
「王冠への執着、義憤、私怨、投げやり……。勝者はいくらでももっともらしい理由が付けられるだろう」
よく似た外見の、しかし海の青の瞳を持つ国王が空の青の大公を睨む。
「事を起こす理由もしかとせずに、いたずらに国内を混乱に導いたとおっしゃるのか」
「お前には話そうとは思わぬ。そうだな、神の選びし者をないがしろにしたからとでもしろ。私の信仰心がそれを赦さなかったから、と」
「叔父上、あなたは」
言葉を切った国王に、大公は静かな視線を向ける。
この目で確認したからには潮時だと思う。少なくとも甥の感情だけは本物だ。
「勘違いするな。私は旧弊なこの国の代表たる存在で、信仰を口に

しながら内実は俗物だ。これから国を治めていくのなら私の屍を越えろ。お前自身で決着をつけるがいい」

立ち上がり、剣を鞘から抜く。その際に顔を曇らせたのを団長は見咎めた。

剣を向けようとした団長を、国王は制した。一歩進み出て剣を構える。

「叔父上、いざ」

大公はゆっくりと構えを取った。国王が踏み込んで剣がぶつかり耳障りな音を立てた。

団長と騎士は、大公を守っていた騎士や兵士達と剣を交える。視界の端で叔父と甥が踏み込み、突き、剣をかわすのを確認しながらも手を出すことができずにいる。

大公は手負いだ。祈祷所の剣さばきから明らかに速度と威力が落ちている。

それでも真剣勝負で、王族の矜持は国王以外と剣は交えないだろう。

大公の手から剣が跳ね飛ばされ、首に朱が走った。

剣の落ちる音は空虚に響き、豪華で女性的な部屋に沈黙がおちた。

大公が床に膝をつき、ゆっくりと横倒しになった。床に血だまりができ、それが広がっていく。

見る見るうちに顔色が白くなり、大公はいくぶんかうつろな視線を傍らで膝をついた国王に向ける。

「叔父上……」

その声は少し掠れていた。そんな国王に大公はうっすら笑ったよ

うに見えた。
声にならぬ呟きを発し、夢見るように目蓋が閉じた。
沈黙を破ったのは主を失った騎士だった。呆然とし、そのうちに全身を震わせてから叫んだ。

「う、わあああっ」

振りかぶった剣の先には団長、大公と国王に気を取られて反応が遅れた。

王城では娘は気の休まらない日々を過ごしていた。王城と東の都は距離がある。伝令が慌しく往復し状況は伝わってくるとしてもじれったいほど時間がかかる。側に控えてくれる団長の妹である侍女も、じりじりしながら情報を待った。
砦を囲んでいること、膠着状態なことなど聞かされて見えるはずもないのに、日に何度も東の方向に目をやる。
王城に不本意な帰還をしてからは当然のように自由はなかった。厳重な監視は娘を何重にも囲む。特に護衛の騎士達は一度娘の逃亡を許した苦い経験から、蟻の這い出る隙間もないほどに監視網を構築する。
これには元団長の指揮がものをいっていた。

騎士団本部の団長の使っている部屋に転がり込んだ侯爵は、元団長の肩書きで本部内を自由に歩き残留している団員に訓練を施し、気の荒い馬を手なずけてすっかり王城と本部に馴染んでいる。
合間に王城内で王弟と戦況についての分析をし、東に兵力を割いている現状での北と西の守りについて指示を出す。
自身を老体と自称するがとてもそうは思えない精力的な人物だっ

た。

娘が侍女をしている関係からもちょくちょく娘の所に顔を出してくれた。軟禁状態の娘とそれに律儀に付き合っている侍女には何よりの気晴らしと慰めになってくれた。

さすがに話上手で沢山のことを知っていて、この侯爵とのお茶会が娘のともすれば沈みがちな気持ちを引き立ててくれる。

それでも夕暮れ時や、深夜たまらなく、胸をかきむしられるような思いになる。

焦り、苛立ち。恋慕。

名称をつければそんなところか。何もできずに遠い所から心配するだけ。

そのじりじりと身を焦がすような思いは睡眠不足と食欲低下に直結した。

侍女が思わしげな視線をよこしても、気持ちは似たようなものだけに二人同時にため息をつくこともあった。

娘は団長が侍女あてに書いた手紙を見せていた。侍女は文面を穴が開くほど眺め、何度も読み返して重いため息をついた。次にはわざわざ火をおこしてそれを燃やした。

そして娘の手を取り、これは妹としての感謝だと前置きして頬に唇を当てて囁いた。

「兄様を好きになってくれて、ありがとう。妹としてこれほど嬉しいことはありません」

身近に味方を得て、娘は少し泣いた。

王弟にも団長は手紙を書いていた。それは渋面で読まれた。細かく引き裂いてやはり火にくべながら王弟は娘に向き直った。

「趣旨は理解しました。ただこれは公表することも、現時点では容認することもできません。争乱が終わるまでは少なくともあなたは伝説の娘で、兄上の伴侶と目されている方のままです」
「殿下……」
「今後のことは兄上が、陛下がお戻りになられてからです」

当然すぎる王弟の反応に、娘はきゅっと口を結んだ。

神官長は娘を神殿に誘う。厳重な警備で神殿に赴くと神官長は娘とともに祈りに時間を費やす。
自分はここの神を信じていない、と言う娘に神官長は微笑む。

「それは当然でしょう。何でもいいのです、あなた様の願いをここで祈ってください」

願い。争乱の終わることと皆の無事を祈って、娘は目を閉じて手を組み合わせる。
どうか――と祈る。
国内の貴族から伝説の娘にと贈られた品物は全て送り返すか必要とする場所に回された。相応しい場所がなければ換金して国の予算に組み込んでもらう。
無事を祈る姿と傍目には無欲にうつる様子が、皮肉にも評判になっていることは知らなかった。

そしてついに待ちに待った知らせが王城にもたらされた。国王の軍勢が争乱を鎮圧して、王都に帰還していると。街道沿いでは祝賀になっているために、いくぶんか時間をかけて国王達は戻ってきた。

伝説の娘として、また内心では断固拒否の王妃候補として、娘は正面玄関で一行を出迎えた。

季節は夏から秋を過ぎて冬にかかろうとしていた。

それでも日差しは暖かく、それ以上の熱狂に王城は包まれている。

国王がひらりと馬から下りた。甲冑はつけているが頭部はむき出しで、金髪が陽光にきらめいている。

万歳の叫びと興奮のざわめきの中、娘は国王の後ろに続いた隊列に目をこらす。

騎士団員は本部の方に移動する。正面玄関まで来るのは国王の近衛だけ。

次々と馬からおり、頭部の兜をはずして小脇に抱える。

その中に団長の姿は――無かった。

44　再会

――いない。何度探してもその姿はなかった。

そのうちに団長だけでなく、副団長の姿もないことに気付く。二人はどうしたのだろう。

怪我か、まさか、と足元がふわふわする感覚に陥りながら立っていた娘に、国王が近づいてきた。

逃げ出してから一年以上会っていない。

今の国王は甲冑を身につけ雰囲気が違う。

神殿の時のような熱に浮かされた瞳ではないが、視線はずっと当てられている。

近づくにつれて口元が緩んできている。娘の前に立った国王は微笑を浮かべていた。

「今、戻った」

お帰りなさいと言うのも変な気がして、娘は頭をさげるにとどめた。すぐに万歳とかお帰りなさいませとかの言葉が周囲から降ってくる。王弟が進み出て国王に挨拶をしているのを横で聞きながら、娘は未練がましく懐かしい顔を見つけようとしていた。

「兄上、無事の鎮圧、おめでとうございます。団長と副団長の姿が見えませんがどうなさいました？」

王弟の質問に、はっとしながら聞き耳を立てる。王弟の近くに控えていた元団長の侯爵も、注意を引かれていた。

「副団長は東の残務処理に当たらせている。本来は団長にと思っていたのだが、東で傷を受けて今は療養中だ」

「その傷はいかほどのものでしょうか、陛下」

国王はこの質問にちらりと娘を見やってから、元団長をなだめるような口調で応じた。

「大したことはない。大事を取っているだけだ。落ち着いたら実家に寄ってから王都に帰還する予定だと本人が申していた」

「――そうですか。しかし受傷するなどまだ未熟。陛下、此度の遠征、まことにお疲れ様でございました」

「侯爵、そなたがこれを守って王城にまで足をのばしてくれたことを嬉しく思う。息災か？」

「おかげさまで。ただ愚息が領地に顔を出すと申しているのなら、失礼ながら私はこれにてお暇しようかと思っております」

息子の団長が命に別状がないと知らされ、表情が柔らかくなった元団長は国王と王弟と談笑している。

間接的に消息を知ることができて娘は安堵した。この場には来ることができずに部屋で控えている侍女に、このことを早く教えたいと引っ込むタイミングを見計らう。

それをさえぎったのは国王だった。

「まあ、そう急くな。ゆっくり話をしたい。そなたの領地は東の都に比較的近い。情報を共有していた方が何かと有用だろう」

「承知いたしました」

「報告などは後でまとめて聞く。早く身軽になりたいものだ。――行こうか」

最後の言葉を娘に向けて国王は手をさしのべた。

国王はためらう娘の手を取り、周囲の祝辞ににこやかに応じながら王弟や侯爵、宰相を伴い自室へと引き上げた。

皆を待たせ着替えをしてから戻ってきた国王は、飲み物を運ばせて今回のことに関しての議論や私的な会話をはじめた。

その中で娘は大公が亡くなったことを知らされた。大公の死によって今回の争乱は鎮圧されたのだと、その生々しさに身がすくむ思いになる。以前弟と王位を争った国王は、今回は叔父とのそれに勝利したのだ。

「東の砦には誰を据えるべきか、人選をしてくれないか」

「血縁でなおかつ腕が立つ必要がありますか。なかなか難しいことをおっしゃる」

「任せた。どうせ祝勝会も開くのであろう？　その時にでも候補者を検討しよう」

いったんそこで話が終了した。娘も立ち上がって国王の部屋を出て行こうとする。

しかし一人だけ引きとめられた。

「話がある、そなたは残ってくれ」

宰相や侯爵は何も知らないが、事情を知る王弟だけは心配するような顔になった。

それを笑っていなし、国王は娘だけを残した。

侍従が新たにお茶を注ぐ。その間は黙っていた国王は、侍従が扉の横に控えるとようやく娘を真正面から見据えた。

「久しいな。随分と長く会っていなかったな。病や怪我などしてはおらぬか？」

「おかげさまで元気です。……陛下は」

「余も怪我などしておらぬ」

国王はカップに口をつけた。金髪に青い瞳、豪華な部屋に負けない存在感で座っている国王からは血なまぐささなど感じられない。

「大公殿下は亡くなられたのですね」

「余が討ち取った」

だから、国王が言ったことが最初よく分からなかった。

討ち取る……討って、何を取ったのだろうと考え、唐突に悟る。まさかと思いながら国王を見れば重々しく頷かれた。

「余が剣で叔父上を斬って殺した」

あの大公を国王が、と口元に思わずやった手が震える。

大公は静かな印象で、あれこそ虜囚だったというのに色々話をした。逃げないのかとからかわれ、早く逃げないとと脅すと言うより背中を押した気さえする大公のことを思い出す。祈祷所で副団長と剣を交えていた最後の様子を、神のご加護をと笑った顔を思い出す。

血の繋がった者同士がと国王の口から聞かされてもすぐには信じられない。

「……本当に？」

「ああ。叔父上は、どういえばいいのだろうか。長引くのを望んでおられないようだった。幽閉でも毒による死でもなく、死ぬなら一思いにというようだった。余を待っていた気さえした」

大公が国王を待っていた。

「叔父上は『国を治めていくのなら私の屍を越えろ。お前自身で決

着をつけるがいい』と。皮肉なことに弟を殺した時よりも堪えた」

自分に殺させることで命を背負えと言われたような気さえしたと、両手を広げて目を落とす。

そこに血の痕はなく、だが手は感触を覚えている。

剣同士がぶつかって生じる衝撃や重み、肉を割いたひどく柔らかい感触など、薬を盛られた状態で剣をつかった弟の時の比ではなく生々しい。

「ああなってしまえばどちらかしか生き残れない。叔父上は辱めを受けるよりは戦って決着をつけるのを望まれた」

国王は自分に言い聞かせるかのように、ゆっくりとこぶしを握った。

伏せていた目を上げると自分を凝視する娘がいた。口元に手を当て、顔色が悪い。

「怖いか。そなたは人の死には慣れておらぬのだったな」

「いえ、理屈は分かります、ただ知った人がと思うとそれが」

かつて娘のいた世界をぬるま湯と評した国王は、動揺しながらも理解を示した娘を複雑な思いで眺める。召喚されなければ暴力や殺し合いとは縁遠い生活を送ったはずだ。

それが、望まぬ状況に巻き込まれてここにいる。

「叔父上は最後、笑ったように見えた。それだけが救いだったような気がする」

「笑って……」

小さく掠れた声で呟いた娘とこうして向かい合って叔父を思う。

叔父の死を悼み死を背負って生きていく。
すとん、と悟る。
首を刎ねよと簡単に言い捨てたかつての自分のあまりの底の浅さを。
それまでも人を傷つけ、命も奪った。それをあまりにも軽視していたことを。
反省はこれまでもしていたが、それすら反省したつもりだったのかもしれないと。

「余は叔父上の思いを、持っておられた願いを受けていかねばならぬ。それが生き残った責務だろうな」

しばらく二人とも何も言う気にならなかった。
それを破ったのは国王で、それまでとは表情が異なっていた。叔父を殺めた苦渋とは別の苦悩が満ちる。

「団長は」

その一言で娘が顔を上げる。手はもう口を覆っていない。
黒い瞳には自分以外を心配する光がある。それを感じて国王は深淵に引きずり込まれるような気がした。

「叔父上の護衛の騎士に剣を受けた。甲冑をつけていたから大事には至らなかったが、治療の後で余が強引に束に残した。――話は、聞いた」

こくり、と娘の喉がなった。
愛しくて会いたくてたまらなかった。その娘が別の男を想ってい

る。

よりにもよって。

きっと今自分は醜い顔をしているだろう。国王にはその自覚があった。

45　わるいゆめ

侍従を目で下がらせた国王と二人。豪華な国王の私室が、尋問室に変わる。

「まず確認をしたい」

眉をしかめながらもあえて落ち着いた声をと心がけた国王は、ゆっくりと目を見ながらの質問をする。

「団長とは寝たか？」

質問の内容に瞬間的に頬に血が上るのを感じる。言うに事欠いてなんてことをと内心は嵐が吹き荒れる。それでも出てのは低い声だった。

「そんなことはしていません」

「叔父上ともか？」

返事をするのも腹が立つ。精一杯の軽蔑をこめて睨むと、それで通じたようだ。

国王は何でもない顔でお茶を飲んで、カップを置いた。

「結構」

質問の答えに怯えていたのを隠し通して、国王は短い言葉に安堵を紛れ込ませる。

身も心も他の男のものであったのなら、ひどい打撃を被っただろう。その最悪は免れた。

ここにいるのは他の男に心だけを許した娘だ。
それなら対処はいくらでもできる。
だが、何故団長は手を出さなかったのかと疑問が掠める。律儀に結婚前の振る舞いを貫いたのか、単に機会に恵まれなかったのか。忠義心でも発揮したのかと皮肉な分析をしている自分に気付く。
目の前にいないのにこの有様だ。もし、眼前に娘と共になどいれば……。

東で団長が負傷し、翌日には国王達が王都に戻るその前夜。見舞いに赴いた国王は団長がベッドから降り、跪いているのに驚いた。
傷にさわるからと楽にするように声をかけたのに、団長はますます頭を垂れた。

「私はあの方をお慕いしています」

爆弾発言だが、それ自体は驚く内容ではない。団長は否定していたが国王とて言動からうすうす察していた。だが、それを口に出すのは別問題だ。嫌な予感がした。
団長の言葉を聞きたくない。だがそれは無情に続いた。

「想いを伝えて、応えて頂きました」

思わず腰の剣に手がかかりそうになって、必死にそれを止めた。
今の団長は首を差し出している。
斬り捨てても文句はないはずだ。言動の意味を充分に理解してなお伝えたからには、相応の覚悟もあるはずだ。
だが、今斬るわけにはいかない。個人的な感情で団長を失うほど愚かなことはない、と国王として分析する。斬るにはそれなりの理

由が必要だ。
今、それを公にするのは得策ではない。

「……で、余にどうしろと言うのだ」
「いかようにもご処分を。ただ、あの方に責任はないことを申し上げたく」
「そなたが懸想したと申すか」
「その通りにございます」

だが一人で恋愛などできぬ。娘に責があるとすれば、最も厄介な男を相手に選んだということだろう。敵にはできぬ、側において顔を見続けるのは苦痛な相手。

「潔く死ぬつもりか。あれを一人残してもいいのか」

鍛えた肩がほんの少し揺れるのを醒めた思いで見下ろす。責任を取るなどと綺麗ごとを抜かして娘を放り出すなら、なぜ手を出した。想いを伝えてそれで満足なのかもしれないが、自分の慈悲にすがらねば生きることもできぬ立場でよくも……。

「あの方の側で、守り抜きたい。恐れながら陛下にも渡すつもりはありません。ですが、私は罪を犯しました」
「罪は罪としてすすぐと申すか」

現状、今後、他国との関係など考え合わせてひとまずの結論を出す。

「その怪我では馬には乗れまい。東に残り療養せよ。副団長を残務処理に残す」
「陛下、それは……」

「命令だ。快癒して覚悟が決まれば王城に出頭せよ」

命令と言い切ればそれ以上は抗えない。身に染み付いた上下関係はこんな時にも発揮されている。

どこまでも臣下なのに、娘に関してのみ抗う姿勢を見せるか。

「承知いたしました。ただ王都への途中で家に寄ろうと思います」

「何故だ」

「父にも事情を話します」

元団長の侯爵に話してどうするつもりか。この問いには筋を通すと。

とりあえずはお互いに頭を冷やす時間が必要だ。ただでさえ問題が山積しているのに更なる厄介ごとを抱えて頭痛がしてくる。

明日は早い時間での出立を予定している。もう、休まなければ明日に響く。

部屋を出る際に団長を振り返る。元の姿勢のまま、その姿は錯覚かもしれないが小さく感じられた。

王都への途上、ひっきりなしに飛び込んでくる書類や近隣の貴族達の陳情やご機嫌伺い、街道に立ち並び歓声をあげる民に対応しながらともすれば暗く沈む思いに引きずられそうな表情を無理やりに緩ませる。

手を振りながら王城に戻ったらなんとしようと、そればかりが心を占める。

実の叔父を手にかけた後だというのに、争乱が終わったばかりだというのに、それらに対しては実に冷静に淡々と対応ができる。

関心がないわけではない。国内を揺るがしかねない事態との認識もある。

それとは別に娘への政治的な立場と私的な感情が、今後のことを考えあぐねて棘のようにちくちくと自分を苛む。
ようやく王城に到着して、ずっと会いたかったその顔を目の当たりにした。

そして、目の前には緊張を押し込めた娘がいる。
皮肉にもお互いを人質に取られたような状態なのに、気付いているのかいないのか。

「そなたは、どうしたいのだ？」

娘の意思を確認することも目的の一つだ。表情をかたくしていても。直に見つめられるのがどれほど自分の鼓動を乱れさせるのか、知らないと見える。

「できれば、ここを出て……」
「二人でどこかへか」

甘いとあざ笑えばそれまでの、ひどく幸せでささやかな願いだ。

「どのみち団長が来ないことには話にならぬ」
「待ちます」

それだけは短く澄んだ声で言い切られた。
自分を待ってくれていればどんなにか幸せだっただろう。願う資格は早くに失い、それは挽回できていない。
ただ政治的な意味合いからは、今回の騒動が落ち着く間くらいはここにいてもらわないと不都合だ。

「そうか」

侍従を呼んで娘を下がらせる。自分もひどく緊張していたらしい。扉が閉まった途端に大きく息をついて椅子に沈んだ。

夜には王弟と兄弟の晩餐を取る。報告しあう案件は数多く、早速の決済などが必要な書類が既に机には積み上げられている。

「時に兄上、あの方と団長の件はどうなさいますか」
「何もしない。黙殺するだけだ」

ほとんど条件反射のように、平坦に言った兄王を王弟は見つめる。ややあって、頷いた。

「それが最善ですね。幸いなことに団長のことはほとんど知る者がおりません。皆、叔父上との噂に花が咲いておりましたので」
「あれは否定したがな。恨まれるだろうが侍医にも確認をさせろ。それで噂とやらは沈静化するだろう」

今なら犠牲は二人ですむ。団長は伝説の娘を東から救い出した功労者で、娘は王妃候補で召喚された大事な娘のままだ。
何もなかったという娘の言葉が真実なら、侍医が視認してもかまわないはずだ。
せめて産婆や物慣れた侍女をその場につかせておこう。それでも殴られるか張り飛ばされる覚悟もいるだろうが。

「ただ団長はしばらく王都や王城には寄せない方がよいでしょう。名目は、そうですね、東の正式な主が到着するまでの復興の責任者としておきましょうか」

「あれと王城で会う約束をしているらしいぞ。それはかなえてやる義理があるか？」
「さあ……。侯爵家に寄るのでしょう？」

団長の父親の性格をある程度知っている国王と王弟は、そこで会話を途切れさす。
侯爵は昼間に顔を合わせた後で領地へと帰還している。この数日のうちに親子の対面もなされるだろう。
おそらく侯爵の取るだろう行動は自分達の利害とも一致する。
まずは静観、ついで必要書類の整備を行う。

「兄上、その後は兄上次第ですか。私は応援いたしますが、どうぞ頑張ってください」
「状況は振り出しよりも後退しているがな」

とはいえ、娘は王城に戻り包囲網もしかれた。
時間はこちらの味方になる。逃亡を防ぎながらゆっくりと囲い込んでいけばいい。

「あの方も母上のように泣くのでしょうか」

ぽつりと呟いた王弟の言葉はやけに重かった。はかなく憂う雰囲気の母親が記憶のかなりを占めている二人には、王妃が国と厭うというのは精神的な外傷に等しい。
今回はまさにその事例に当たってしまった。いや当ててしまった。

「待つつもりではいるがな」

望めば誰だろうとすぐに手に入れられるはずの国王が、待つという。

団長に心をよせた娘を義姉上と呼べる日が来るのだろうか、と兄には伝えられない危惧を王弟は胸にしまいこんだ。

当面、騎士団本部では団長と副団長が不在になる。副団長は戻ってくるにしても求心力や一時的な戦力の低下が否めない。

個人的には団長には複雑な印象を抱いてしまう。はっきり言えば不快だ。不敬にも兄の想い人で国にとっても重要な意味合いの娘と……とは。今は遠くにやるだけに留めるが、なんらかの罪状をつけるべきかと王弟は冷徹に思案する。

侯爵の息子で騎士団団長だ。騎士団に入った時に身分は関係なくなるとはいえ、侯爵家には他に息子がいない。いずれは領地と爵位を継ぐ立場にいる、それゆえに幼い頃から自分達兄弟に親しくすることを許された人物。

追い落とすとなればよほど巧妙にやるか。排斥するだけの罪状をとなれば大事になってしまう。

「見る目はあると褒めるべきなのだろうが、全く厄介な」

娘への敬意は感じながら、騎士団の穴をどう補完すべきか、新たな問題に王弟もため息を禁じえなかった。

団長の帰還を待っていた娘に面会の要請があったのは、しばらく経った後のことだった。人物は意外にも元団長の侯爵だった。

娘の侍女に軽く笑顔を見せ、娘と応接用の部屋で向かい合った。人払いをした後で見せた侯爵の眼差しは、娘の背筋にひやりとしたものを感じさせた。

「お久しぶりでございます。お変わりはないでしょうか」

「はい、王城にはまだ慣れませんが、だいぶ落ち着きました」

まずは型通りの挨拶を交わして侯爵はいきなり本題に入った。貴族らしからぬ、騎士の性質上だろう。

「単刀直入に伺います。息子と約束をしたとか」

「……はい」

「そのお気持ちは変わらないのですか」

「はい」

頷いた娘に、侯爵はこれまで見せたことのない厳しい表情を浮かべた。

「では、私は息子を斬らなくてはなりません」

きちんと座っていた娘の上体が、侯爵の方に勢い良くかしいだ。目だけでどういうことかと訴えてくる。

侯爵はいくぶん痛ましい思いで、黒髪黒目の娘と視線を合わせた。

「言葉の通りです。息子は不敬、反逆を働きました。今は館の貯蔵室に転がしてあります。急ぎ戻り息子を斬りましょう。

陛下には領地と爵位の返上を内々に奏上いたします。娘も連れ帰らねば」

「待って、待ってください。どうしてそんな話になるんですか」

「あなた様をいただくということは、息子が王位を簒奪すると同義になるということです。建国の折から我が家は王家をお守りする栄誉を担い、侯爵位を賜りました。

――息子はその誇りを汚しました」

陛下の信頼を裏切り、無事に連れ帰るはずの娘に懸想した、あま

つさえそれを陛下に申し上げた。
侯爵は淡々と事情を伝えた。

「貴族も息子とあなた様が一緒にいることをどう思うか。黒髪で黒い目の方は王妃であると刷り込まれているのです。それを臣下が手にしてそしられないとお思いか？
息子は田舎に引っ込むつもりだったようですが、この国に居場所などあろうはずもない。それすら分からぬとは、そんな愚かな息子ならここで斬って捨てたほうがよほど世の中のためです」

侯爵の一言ひとことに段々と娘の顔から血の気が引いていく。
かつて大公も同様のことをほのめかしていたではないか。伝説の娘を手にする者が――と。

「お家や娘さんは関係ない」
「陛下を裏切った息子の家をのうのうと存続させろと？　娘にしてもこれが公になれば醜聞になり、縁談どころではありません」

国王でなく、団長を想ったのが間違いなのか？
伝説の娘とやらで召喚されたのに国王を嫌がったのが間違いだったのか？

「あなた様のお気持ちが確認できた以上、急ぎ処分をいたします」
「待って、ください。侯爵様はどうされるんですか？」

侯爵はふっと表情を緩めた。そして当然のことのように続ける。

「老いぼれが生き永らえるとお思いか？」

では、と立ち上がり扉に向かおうとした侯爵に、必死に追いすが

った。
背中の服を掴んでその場にとどめようとする。
「待って、違います。約束なんてしていません。だから――」
「だから？」
侯爵は振り返らずに尋ねる。敵を追い詰め包囲して、じわじわと包囲網を縮めて戦意を戦力を削いでいく。
相手はあまりにも無防備で、戦術すらも持たない娘。
勝負は最初から見えている。
「どうすればいいんですか」
降伏の言葉。
それに応じる侯爵の声はひどく優しかった。
「陛下とのご婚約の発表を。それが聞こえた時点で息子を解放しましょう。ただし王都にはよこしません。私的には息子にはもう会うことはないと思っていただきたい」
背後では抑えた息遣いだけが聞こえてくる。服を握る力がふっと消失した。
絨毯は足音を吸収する。扉が小さく開閉する音だけが聞こえた。
しばらくして、背後に気配が戻ってくる。
「これを。お返しします」
掠れた声とともに差し出されたのは、印章つきの指輪と権利証。
頷いてそれを受け取り、侯爵は深く礼をした。

「数々のご無礼、申し訳ありませんでした。――夢を見たのだと思ってお忘れください」

娘は一人残された。かくんとその場に膝をつく。

かなり長い間、そのままだった娘の口からひび割れた一言が漏れた。

「ゆ、め。どれも、これも――わるい、ゆめ」

数日後、重臣を集めた席で婚儀の日程は未定としながら、国王と娘の婚約が発表された。

46　夢の後始末

「負傷したか、程度はどうだ」
「問題ありません」

騎乗に耐えられるようになり、すぐに目指した王都。その途中の実家に馬首をめぐらせ父侯爵と対面する。王都から戻ってまだ日の浅い父親は、上官然とした視線を向ける。そこに込められているのは未熟者という非難だ。

太い眉の下のこげ茶の目は、いつも自分など見透かしてしまう。

「……それで、一刻も早く王都に向かうべきなのを曲げてまで、ここに立ち寄った理由を聞かせてもらおうか」

団長は短く息を吸い込んだ。

陛下に続いての二度目の処断を覚悟した。

「そうか」

最中には口を挟まなかった侯爵は、団長が話し終えると短くそう言った。

足を組み、手は楽に体に沿わせているがどこにも隙を見せない。尊敬と共に畏怖の対象だったが、その思いは騎士団に入団してから更に強まった。

身分は関係ない、実力でのし上がる騎士団でも貴族は目の敵にされる。名誉を求めてだの暇つぶしだのと、周囲の目は侯爵の息子などという高位の貴族だった自分にはことさら厳しかった。

理不尽な嫌がらせや、熱心すぎる訓練に歯を食いしばり耐えていた当時の団長は父だった。公私混同などとんでもなく、むしろ誰よ

り厳しく接したのが父だった。ために関係を知らない人間からは、嫌われているのかと心配される程だった。

甘えを許さず、誰よりも短期間のうちに強くなれと鍛え上げられた。どうやら一人前と認めてくれた段階で、父は団長職を退き侯爵としての生活に専念した。

その父にじっと見つめられていると居心地が悪い。

静かに座っているだけだというのに、団長の背中に汗が伝う。

「それでお前はどうするつもりだ？」

「陛下の沙汰を待ちます。その前に団長職は返上いたします」

適用される罪状によって当然ながら処罰内容が異なる。反逆と取られれば死罪、不敬であれば幽閉や謹慎、爵位の剥奪や降格などだが正直どれが適用されるか分からない。

侯爵は肘掛に片肘をのせ、そちらに体を傾けて軽く握ったこぶしに口を当てる。

考え事をする時の癖だとぼんやりと思いながら、団長はその様子を眺める。侯爵家の将来に関わる問題。家の恥となるのは間違いないが、この問題を侯爵家そのものにまで及ぼす気はなかった。

処断されるのはあくまで個人のつもりで、役職を返上して……娘に渡した権利証を思い出す。

「父上。あの方に私の所領の権利証を預けています。私が死罪になった場合、あそこをあの方が相続できるように取り計らってはもらえないでしょうか。その旨の書類と印章は渡しております」

その言葉に侯爵の眉があがる。

「どういう意図だ？」

「あの方は陛下との婚姻を嫌っておいででした。もし婚姻なされずにこちらで過ごされることになれば、収入源が必要です。あそこを経営するも良し、売却や譲渡するのも良し、いずれにしても生きていくのに困らないでしょうから」

「甘いな。そのようなお立場で自由が得られると思うのか？」

「陛下はあの方を想っておいでです」

侯爵は立ち上がるとゆっくりと団長に歩み寄る。背丈は自分より少し低いが、鍛えていて存在感は並でない。

地味な服もかえって抑えた迫力を感じさせる。

目の前に立った侯爵は、教え諭す教師のような口調だった。

「それとて陛下のお心次第だろう。お前は陛下の寛容にどれだけの我儘を押し付けるつもりなのだ？」

「それは……」

「所領の件だとて、ほとぼりがさめて万が一あの方がお前に下げ渡されるようなことがあれば、そこで暮らすつもりだったか？」

侯爵の表情が厳しさを増す。この目は節穴ではない、息子が伝説の娘を伴ってここに戻った時から少なくとも息子の感情には気付いていた。

娘にしても息子に抱かれた状態で馬から下ろされた時に、息子に身を任せていた様子をいぶかしく思った。

強行軍で疲れているからかとも考えたが、それだけではないと感じたのは息子が甲冑を身につけ、戦の準備をしていた時だ。

そこに流れる抑えた空気は紛れもなく互いの身を案じるものだった。

危険を共に潜り抜けたから、と考えることは可能だった。ただそれだけのことだと。

見送りの様子でも半信半疑で、もしやの領域だったのに。

――馬鹿息子が。

己のなしたことが、なそうとしていることがどれほどのものか、この期に及んでも理解していない。

けして個人の問題ではなく、家と王家と国まで巻き込むことになるのに、己の首さえ差し出せば解決するかのように思っている。

「自分に酔うのもたいがいにしろ。陛下の宝に手を出すからには家も家族も道連れだ。頭を冷やせ」

みぞおちに入った渾身の一撃に、体が前かがみになる。見上げた父はひたすら苦々しくどうしようもないものを見る目だった。

顔面にもう一撃をくらい、そこで世界が暗転する。

どさり、と床にのびて意識を失ったのを確認して侯爵は使用人を呼んだ。

「これを縛り上げて貯蔵庫にでも転がしておけ。窓の鉄格子と足を鎖で繋いでおくのだ。私は今から王城に向かう。戻ってくるまでけして逃がすな」

慌しく周囲が動く中王城への支度を行いながら、侯爵は気が重かった。

息子がここに来たのは陛下も承知の上のこと。王弟殿下までは聞き及んでいるに違いない。であれば、次の行動も読まれているはずだ。

何が一番合理的な解決策か。

上着を羽織り、外套を手に持ちながら愚痴ともつかぬ独り言が零れ落ちる。

「女性を泣かせる趣味はないのだが。――馬鹿息子が」

そうして王城にあがり内々に王弟と面会した後で、娘との正式な面会をとりつけた。

今から追い詰め、諦めさせ、一切の関わりを絶たせなければならない――伝説の娘。内心どうであれ、息子とは何の関係もなかったのだと、これからもあるはずがないのだと本人の口から言わせなければならない。

おそらくは心の支えにしているだろう相手の父親の立場で引導を渡さねばならない。

たとえ、息子を想ってくれたことが父親としては誇らしく嬉しくても。

娘への好意と敬意を抱いていたからこそ、余計に辛い一時だった。

背後で服を握られ抑えた息遣いを聞きながら、ぎゅっと目を閉じていたことはきっと娘は知らないだろう。

面会の後で呼ばれた執務室で陛下と殿下と顔を合わせる。

「このたびはまことに申し訳ございません。幾重にわびても足りませぬ。私の監督不行き届きです。罰はいかようにもお受けいたします」

「侯爵、頭を上げよ。何をわびているか余には分からぬ。何かあったのか？」

顔を上げて目を合わせて、そのまましばらく。

「いえ、何も。――何もございませぬ。老いたせいか勘違いをしたようで」
「そなた、年よりくさいことは申すな。誰よりも若々しいくせにな。余の留守中に騎士団員が訓練でへばったと聞き及んでいる」
「なに、あれくらいで根を上げるようではまだまだ」
和やかな会話だが抜き身の剣を互いの視界に入れているような緊張感が漂っている。その中でなお、笑顔を絶やさない互いの精神力はさすがなのだろう。
侯爵は執務机で書類を処理している国王を、年長者の目で観察する。ここ一年ほどで格段に老成した印象がある。腹の探りあいは王族のたしなみであっても、ここまでの押し出しはなかった。
問題はなにもなかったのだと。だから謝罪も必要がなく、ましてや息子たる団長の処罰もないと。
当初の予定通り、東の復興責任者の名目で王都から名誉をもって遠ざける運びを暗黙の了解とともに受け入れた。
「しばらく騎士団も落ち着かないだろう。こちらに来ることがあれば、また鍛えてやってくれ」
「ありがたきお言葉。精一杯努めさせていただきます」
頃合をみて退出しようとした際に問いただされた。
「なにを伝えた？」
「――夢を見たと思ってお忘れくださいと」
「そうか。わざわざの来訪、ご苦労だった」
夢。ひどく甘かっただろうがすぐに消えた儚い夢だ。ただそれだけのこと。

少しも気が晴れずに侯爵は王城を後にした。

「夢、か。侯爵もあれでなかなかの詩人ですね、兄上」
「あれにとってはこれからは悪夢でしかないだろうがな」

二人して今後を考えると沈黙しかない。勝手としかいえないこちらの都合で今日、娘の希望を打ち砕いたのだ。鳥の羽をもいだに等しい。それを逃がさぬように厳重に鳥籠に閉じ込める。

国のため、娘の心を踏みにじる。そこまでしておいて王妃として側に置く。

「随分と矛盾したことだ。本当に召喚制度が正しいのか自信がなくなってきたぞ」
「兄上、それは……」

王弟も今回の件に平静だったわけではない。無理に召喚してこちらの都合だけ押し付ける、その相手はまだ若い娘とくれば痛ましさが胸を刺す。兄の暴言で今回は特にその感が強い。それでも芯の強い娘のことは好ましかったし、万が一でも兄と上手くいってくれればとも願った。

だが結果はこのざまだ。

今回の処置は国を動かす立場からは正しい。もう一度同じ状況になっても迷わずこの展開を選択するだろう。

ただ後悔や娘への憐憫がないわけではない。それを表に出すのが許されないだけだ。人に非情を強いたのであればそれを後悔する資格などないのだ。思い悩むことなど明かしてはならないのだ。

自分以上にその制約が厳しいはずの兄が、弱音を吐いた。娘に関わるようになってからの兄の変化には驚かされるばかりだ。

娘に振り回され弱くなった点もあるが、恐ろしく強くなった面もある。

疑問を口にするのもはばかられていた召喚制度。神殿という、王家とはまた別の国の支柱になっている存在にあって召喚制度はその優位性を表す最たるものだ。人間を異世界から呼び寄せる。その人間が王家を作っていく。

この点で王家は神殿に依存し、その配下に下ることになる。

今回の娘のせいで、神殿は召喚のみならず帰還の式も構築できるようになった。また神殿の影響力が増す。そこに兄の疑問だ。王弟は絶対と信じてきた召喚制度、ひいては神殿との関係が変化していく気がした。

だが娘への懺悔はこっそりさせてもらおうと考えている。神官がいなくても、部屋で祈れば神には通じるだろう。

娘には決して通じることはないだろうが。

侯爵は館に戻って真っ直ぐに貯蔵庫を目指す。そこには憔悴しきった団長がいた。

手の縛めだけはほどく。

「王城に行ってお前の言うあの方から、印章と権利書を返していただいた。お前達の間には何の関係もない」

「父上！」

「黙れ、陛下の温情とあの方の決意を軽く見るな。次はない」

頬がこけて目ばかりに狂おしい光をたたえた団長は、言い切った侯爵をしばらく見つめた後でうなだれた。

侯爵は追い討ちをかける。

「お前には落ち込む資格はない。その権利があるのはあの方だけだ。お前は覚悟が足りなかった、馬鹿馬鹿しいほど甘かった。
それを思い知れ。陛下のご婚約の報がなされたら、お前は東での復興に携わることになる。王都に戻ろうなどとゆめゆめ思うな」

うつむいて顔は見えないが、顎の辺りにくっと力が入ったのはおそらく歯を食いしばっているのだろう。
侯爵は待った。足に鎖を巻き文字通り手も足も出ずに、制度に負けた息子の反応を。

「俺にできるのは東に行くことだけなんですね」
「そうだ、死ぬことも逃げることに許されぬ。失った信頼を取り戻せるかは分からないが、下された温情を無駄にはするな。
あの方は身を挺してお前を守ったのだ、それに応えろ」

守りたいと思った娘に守られた。手の平に爪が食い込むほどにこぶしを握って、その残酷な現実を受け入れる。
侯爵はかすかな苦笑をもらす。

「お前の馬鹿のせいで、私まであてられた。一瞬とはいえ、馬鹿げた夢を見そうになった」

顔を上げた息子の視線には、もう応えはなかった。

国王陛下と伝説の娘の婚約が報じられ、国がわきたつ中団長はひっそりと東へと向かった。

「ひどい顔しているな、お前」
そう言いながら副団長は笑った。
悄然と、東への道をたどる。心にあるのはただ一人のことだけだ。
国中に祝福されている、彼女だけ。

東への道はやけに遠く感じられた。甲冑を身につけて東へと赴いた時と比べ、身は軽いのにひどく重苦しい。理由など分かりきっている。
それでも進まなければならない。

『あの方が身を挺して守られた』

父の言葉と、返却された権利証と印章つきの指輪が、歩みを一層遅らせている。
情けない、駄目すぎる。どれほど自分を呪っても後悔しても、現実は変わらない。

『お気をつけて。――王城で待っています』
『必ず、あなたのところに戻る』

自分でほざいて果たせなかった約束が身内を苛む。それでも自分に落ち込む資格はない。手段も講じず口だけだったのは自分なのだから。
陛下に渡すつもりはなくても、現実は顔を見るどころか近寄ることすらできなかった。
結果、自分の行動はただの世迷言として何もなかったことにされ

た。

自分に力が足りなかったから。自分に覚悟が足りなかったから。

どんなに足取りが重かろうと、東の都は遠ざかるわけではなく先だって旅立った場所に戻ってきた。

副団長は、奴はわざわざ門の所まで出迎えにきた。

きっと連れて帰った大公殿下の馬が気になってのことだろうと思ったのに、副団長は馬より先に自分を見つめてひどい顔だと笑った。

――そこに奴の気遣いを感じた。

臨時の指令所になっている場所で状況の説明を受ける。

内部に国王陛下の軍勢が入り込み、その前の火事騒ぎもあって内部の損傷はかなりある。その復興をして国境警備の本来の役割を果たさなければならない。

周辺では、大公殿下が集めていた傭兵が逃げ出して治安も悪化している。それへの対処も必要だ。

到着した途端に待ったなしの案件が寄せられる。

不承不承机に向かったはずなのに、いつの間にか雑念を払い案件処理に集中していた。

「おい、今日はもうそれくらいにしておけ」

書類を取り上げられて初めて辺りが暗くなっていることに気付いた。

夢から醒めた心地でペンを置く。

奴は二人分の食事を用意させて向かい合わせに座った。

「大体のことは察しているが、説明してくれるか？」

「ああ、食事が終わったらな」

それきり奴はこの話に触れることもなく、他愛ないあれこれを聞かせてくれた。

「お前の連れて行った馬、あれはいいな。世話をしながら惚れこんでいたんだ」

自分と同様に潜り込んでいた際に馬丁に扮していた奴はしみじみと呟く。

さっきも自分を気遣ってくれた直後には、もう視線は件の馬に向けられていた。

傭兵が太鼓判をおしたように、あの馬は持久性と速度に優れていた。あの馬で――。

思い出に引き込まれ手がお留守になった自分に、奴の低い声がよせられる。

「おい、話は後だっただろう？　勝手に暗くなるな」

「悪かった」

奴にうるさく言われながらもどうにか食事を詰め込んだ。考えればこんなに食べたのは久しぶりだ。

争乱の最中ではそんな配慮もなく、直後負傷して熱と痛みで食欲は落ちた。

実家の侯爵家では貯蔵庫に監禁されていたから、食欲などあるはずもなく。東への道中だって同様だ。

――彼女は食べられているだろうか。眠れているだろうか。

思考はすぐに帰結する。

今日だけだ、と酒が供される。次々に注がれて気付けばだいぶ飲まされていた。

奴はこちらの顔を見てふうっと息を吐いた。

「やっと見られる顔色になったな。死人が歩いているのかと思ったくらいだった」

「そんなにひどかったか？」

「鏡を見てみろ」

直視した自分の顔は、なるほど確かにひどかった。頬がこけ、目ばかりが普通でない光をたたえて自分を見返している。

あれだけ飲まされてやっと頬に血の気が感じられる程度だ。

「心配をかけてすまなかった」

「全くだ。で？」

「あの方に想いを伝えて王城に送ったが、それきりだ」

「お前、何もせずにあの方を手放したのか」

「俺だって放したくなどない。だが」

「黙殺された、か」

最後の言葉を苦々しげに吐いて奴は酒をあおった。大公殿下の酒蔵に貯蔵されていたうちでも高級品の酒は、既に樽が空いている。

自分も相当飲まされたが、奴の胃にもかなりの量が収められている。

「どうして連れて逃げなかった」

「あの方に苦労させたくなかった」

そう言うと奴はどん、酒の入ったカップを机に置いた。ふうとため息をついた後で、いきなり胸倉をつかみあげられた。口元は笑っているのに目が笑っていない。こんな顔は戦場か馬がらみでしか見られない。

お前は、と言う口調は楽しげなのに何故か背筋が冷える。

「寝言を言っているのか？　寝言は寝て言え」

「俺は寝言など」

「いいや、寝言じゃなかったらたわ言だな。お前が想いを伝えた時点で、少なくとも国内ではあの方は苦労される」

断言されて言葉を失う。

「陛下以外の手を取ったら居場所などなくなる。それを苦労させたくないから手を放しただと？　あの方は王城を出てから市井でも充分にやっていただろうが。

二人でいられるなら苦労なんて感じないはずだ」

迫力におされながらも反論を試みる。

「だが、俺の技量では傭兵とか用心棒程度しか……」

「お前なあ、騎士団の団長まで勤めておいてその程度しか自分に価値を置いていないのか？　お前だったら近隣諸国は競って欲しがるだろうさ。

軍事的に協力する気にならないとしても自警団とか町のまとめ役には充分になれる。侯爵家の伝手を頼れば地方の役職にも付けるだろうに」

「家に迷惑はかけられない」

「心配するな。お前があの方に懸想した時点で充分に迷惑をかけている」

父の行動を思い返すとその通りだった。

自分を拘束して急ぎ王城に行った父は疲れを滲ませて戻ってきた。

陛下や殿下、そして彼女とも話をしたのだろう。

父の身の処し方は見当がつく。自分のせいで侯爵家は王家に大きな借りを作った。

それを感じた父は今まで以上の忠誠を尽くすべく、行動するのだろう。

「ともかく何もなかったということは、あの方にも傷はなかったことになる」

はっと顔を上げれば、胸元の力は緩められて奴の目が細められている。

「ただでさえ大公殿下との噂があるのに、お前の名前まで挙がってみろ。女性にとっては、しかも王妃に目されている方にとっては致命的な醜聞だろうが」

「大公殿下との噂はそれほど広まっているのか？」

「お前も傭兵隊長やってた時に、お二人が見学にいらしたのを目撃しているだろう。大公殿下は隠さずにあの方を連れ歩いたから目撃者は多い、しかも口の軽い傭兵だ。あっという間だった。今もそれがくすぶっている」

大公殿下の計算に違いないが、確かに二人の姿はここで認められた。

「婚約が発表されてってことは、その疑惑も払拭されたってことだ」

「そうか」

「って良かったみたいなとぼけた感想持っているわけじゃないよな？」

再び胸元に込められた力はさっきより強い。

どうしてそこまで感情を読取るんだろうか。

「お前、現状を考えろよ。あの方に傷はついていない。お前にしたって別に罪人ではなくて東の復興にあたる身だ。逆に考えれば堂々と会いにいけるんじゃないのか？」
「無理だろう。第一陛下や殿下がそれを赦すとは思えない」
「正式に話を通せば断る口実がないのはむこうだ。何もないんだから断る理由もない」

詭弁だ。そう思うのに断言されるとそんな抜け道があるのかと感心してしまう。
奴は呆れた顔をする。

「腹の探りあいと言葉尻の捉えあいだろうが、こんなことは。お前は力を付けろ。無視できない、交代させようのない位置に自分を高めろ。
いつまでも辺境において置けないとなれば、あちらから迎えが来る。そうすれば何としてでも王城に入り込め」

一度は何もかも捨てようとしたんだ、それに比べれば簡単だろうと。
奴はにやりと笑って椅子に座った。

「俺はお前より先に騎士団本部に戻ることになっている。情報は流してやる、せいぜいあがけ」
「なんでそこまでする」
「ん？　お前は俺の友人じゃないのか？」
「お前は俺より馬だとばかり思っていた」
「馬は可愛いがお前は大事だ。馬は大事だがお前は可愛くはないがな」

いかにも奴らしい台詞だ。それなのにらしくない台詞も吐かれて、ぐっと喉が詰まる感覚に陥った。

「まずはここの復興だ。使用人達から祈祷所の再建をせっつかれていてな、よろしく頼む」

次の瞬間にはもう、いつもの奴だ。

だが、その心遣いがありがたい。

今度会う時には、手放さずに済むように――か。

王都よりも早くに上る朝日に目を細めた。

47　嵐の前

侯爵の去った後で座り込んだままだった娘の耳に、扉の開く音が聞こえた。

のろのろと顔を上げると、侍女が入ってきた。

娘を見てはっとしたように駆け寄り、手をとって椅子に座らせる。

娘はされるがままでいた。

「どう、なさいました？　父は何を？」

心配する侍女は団長と同じ茶色の目、茶色の髪で、その顔立ちも男女の別はあってもどこか似通っている。

そして団長と侯爵の方がよく似ている。こげ茶色の目が冷たい光をたたえて見据えたことを思い出すと、今更ながらに身内が凍るような気分になった。

侍女はお茶を淹れて娘の隣に座り、カップを持たせる。口元まで手を重ねてもっていき飲むように促した。

ほとんど機械的に娘はこくりと飲み込んだ。花の香りとほんのり甘いお茶は凍った体と心をほんの少しほぐしてくれる。

「いえ。ちょっと立ちくらみが」

「そうですか。なら……」

自分自身が混乱している娘は、団長の妹に団長の父親から引導を渡されたことは言えないでいた。

何もかもが悪い夢の中にいるようで、立ち直れていない。

そんな娘に侍女はひどく気まずそうに告げた。

「お医者様をお呼びしますので診てもらってください」

「もう大丈夫です。そんな必要はありません」
「いえ、来ていただきます。その前に簡単に入浴をしてくださいませ」

いつになく歯切れの悪い侍女に首をかしげる。娘の視線に目をそらすなど侍女らしくない。訳が分からないうちにお茶を飲んで、浴室へと連れて行かれた。

侍女が外で待っている間に一人で入浴をした。お湯の温かさも申し分ないが、娘にとってはどうでも良かった。

もう会えないのだということ、国王と婚約してそれを発表なくてはならないということ。

現実はどちらも娘を打ちのめす。浴槽の中で娘はぎゅっと肩を抱いた。

すぐに涙が溢れそうになるがそれを我慢する。医者がくるのなら泣いていては駄目だろう。体温とか心拍とかが狂ってしまう。

体を拭いて侍女の用意した寝衣を身につける。夕方になったくらいだというのに何故これをと思っていると、扉の外から呼びかけられた。

「支度はお済みでしょうか？」
「あ、はい」

扉を開けた侍女に案内されて寝室に入る。そこには医者らしき男性と、老婦人、自分付きの侍女が控えていた。

「立ちくらみがあったとか。診察させていただきます」

ベッドに腰掛けるように言われてその通りにすると、医者はその前にもってきた椅子に座って脈を取ったり、目蓋を引っ張ったり口の中を覗いたりした。あまり眠れずに食欲も落ちていたのは事実だ

ったから、診断は軽度の過労とのことだった。
薬もあとで届けられるとのことで、これで終わりだと思った。
と、それまで何も言わずに控えていた老婦人が口を開いた。

「恐れながらお子様を授かれるかどうかを確認させていただきます」

どういう意味なのだろうと、老婦人を見返す。以前神官が子供が産める女性が召喚される、と言っていたはずだ。子供を授かれるかどうかなど今更確認する必要もない。なのに、どうして。
そして国王とのやり取りを思い出す。団長や大公と関係したのかと尋ねられ、否定したときの『結構』の一言を。

「まさか、とは思いますけど男性と何もなかったことの確認を？」
「……その通りでございます」
「私がなかったと言っているのに？」
「申し訳ございませんが、事実確認を」

手足が先端から冷えて、重くなる。ぎゅっと握っていないと手が震えてしまいそうだ。
震えは怒りからだろうか、情けなさからだろうか。絶望からだろうか。
今や空気は重く、皆が自分の反応に固唾をのんでいるのが感じられる。
泣き喚いて、あるいは怒りに顔を真っ赤にして抵抗しようかとちらりと思った。ただすぐにどこかで冷静な計算も働く。
抵抗してもしなくてもすることは結局は同じなのだ。なら無駄なエネルギーを使うことも馬鹿らしい。

寝室にひどく冷たい声が響いた。自分からなのにどこか他人事のようにそれを聞きながら、医者や老婦人を見る。

「分かりました。確認にどうしても必要な人だけ残ってください。あとの人は出て行って」

そう言い放った娘に表情はなく、それゆえにある種の凄みを生じていた。

目を見交わして侍女達は出て行った。残ったのは医者と老婦人だけだ。

「私は産婆です。お体を拝見させていただきます」

服を脱ぐように言われ無言で寝衣の前をあける。産婆は容赦のなく娘の胸に目をやり手を伸ばした。

ひとしきり確認して、次にベッドに横たわるようにと指示された。

「膝をたててください」

事務的に扱われるほうがいっそ気が楽だ。――その方が、早く終わる。

産婆は必要なことを確認して、侍医に頷く。侍医も最後の確認をした。

「終わりました。ご気分を害して申し訳ございませんでした」

「いいえ。もう、出て行って。一人にして」

それだけ言うと娘は産婆と侍医に背を向けた。背後で扉が閉まる。人の気配がなくなり、かきあわせていた寝衣の前をとめる。

もう、涙も出ない。

ただベッドに横になるのがたまらなく嫌になり、部屋の隅でベッドを見ないようにそちらに背を向ける。

横たわって体を丸め目を閉じても眠りは訪れない。磨きぬかれた木の床は団長と過ごした山小屋とは比べ物にならないほどになめらかで、隙間風などもない。それでも寒々しく、それ以上に心が冷えていく。

ひどく夜は長かった。

夕食を終えて国王は侍医と産婆からの報告を受けていた。

「陛下、確認させていただきましたが、何の瑕疵もございませんでした」

「――そうか。ご苦労だった。あれの様子はどうだった？」

「冷静に受け止められて、実に協力的でした。ただ事後お一人になられたいと、食事をとらずにお休みになったようです」

侍医も産婆も経験豊富で嘘を言う人物ではないことは知られている。この二人が断言したのだから、娘についての噂は払拭されるだろう。

あとは侯爵が娘に条件として出したという婚約発表を行うことになるが、この件に関しては直接娘と話し合う必要がある。

ただ今日明日はさすがに気の毒だ。早くしないと団長が貯蔵庫に転がされる時間ばかりが長くなるので、適当な時期にとは思いながらも顔を合わせた際の娘の反応が怖かった。

冷静に診察をさせたというのが何より恐ろしい。間違いなく娘の自尊心を傷つける行為を、最悪の時期に行ったのに冷静とは。

どれだけの感情を押し殺したのだろうか。

「我ながらひどいことをしている。もう、赦しを請う資格すらないだろう」

それでも手放せない。側におきたい。存在を否定しておきながら身勝手な言い草だと分かっているのに止められない。

事態は娘を王妃へと動き出している。流れを止められるのは自分だけだ。

時間が経過するほど娘を自由にする空気は薄れていくだろう。囲い込む方向に転がっていく。

「再召喚をしたとしても……前と同じだろうか」

自分の執着は増している自覚がある。それが娘をこちらに引き止める要因なら、今や自分だけではない。他の人間も娘を手放そうとはしないだろう。

伝説の娘として認識された以上、消えることは赦されなくなっている。

不測の事態でもない限り。

このままでは母と同じように泣き暮らすかもしれない。原因を作りながら泣かせたくないとする矛盾は承知している。

せめて、少しでも気持ちがほぐれるのを待つしかないだろう。

「ほぐれる日など来ないだろうが」

呟きを落とすと、酒を注いだグラスの表面がさざなみを立てる。

娘の性格からは決して自分の方を向くことはないだろう。それが分かっていながら無理を強いる。それでも欲しい。焦がれている。

――愛など請えない。愛でなくていい。憎しみでも軽蔑でも無関心でもいい。側にいてくれさえすれば、もうそれでいい。

自己嫌悪を閉じ込めるように、国王はグラスをあおった。

侍女は寝室の光景に胸をつかれた。ここ数日ベッドに寝た形跡がないのは報告をうけ、自分の目でも確かめていたが改めて床に丸まる娘を発見すると痛ましい思いが湧きあがる。

侍医と産婆の診察、娘は寝室に閉じこもった。食事もせず、ただ一人にしてくれとそれだけを言って扉を開けさせなかった。

翌朝、ためらいながらも扉を叩くと中から応じる声がした。

部屋に入れば娘はもう起きていて椅子に腰掛けていた。

食事はいらないと、そして着ていた寝衣は二度と着る気になれないので処分してくれと淡々と言われた。

まるで彫像のように、ただ静かに座る娘にそれ以上無理強いはできずに、着替えを持ってきて寝衣を引き取った。

娘は居間になっている小さめの部屋の椅子に座ったまま動こうとはしない。誰も声をかけられなかった。

お茶を淹れても手をつける様子がない。

昼食は泣きそうな様子の給仕を見て、ようやく飲み物だけを口にした。

あまり続くと本当に医者に診せなければならなくなる。そう心配していた矢先に、床で横たわる娘の姿を目撃したのだった。

侍医と産婆の件は承知していたが、娘の様子を報告に行って陛下から婚約の件を聞かされて合点がいった。

陛下と婚約するということは、兄とは別れたことになる。それに父親が関与したと気付き罪悪感でいっぱいになった。

あの日、父が面会した後の娘は糸の切れた人形のようだった。なのに、その日のうちに更なる圧迫を与えてしまったことになる。

兄が戻ってくるのを待っていたのを知っている。

自分あての手紙を差し出し、反応をはらはらしながら見守っていた。困難な恋だとは分かっていても嬉しかった。そう言うと花がほころんだように笑ってくれたのに。

その娘に一家で辛い思いをさせてしまった。
どうすればいいんだろう。泣きそうになるのをこらえて床に膝をつく。そっと揺り動かせば眠りが浅かったのだろう、すぐに娘は目覚めた。

「お早うございます。こんなところでは風邪を引いてしまいますよ」
「ベッドは――思い出すと吐きそうになって、視界に入れるのも嫌」

その言葉に娘の傷の深さを思い知る。

「では、部屋を替わりましょう」
「どこでも同じだと思う。王城のベッドと思ったら――」

今まで丁寧だった娘の口調はこの数日で変わった。敬語でなくなり、短く小さい声になった。
心ここにあらず、侍女からはそう見える。
それでもこの部屋のままではまずい。

「では部屋を変えて寝椅子を用意します。それにお休みください」

娘はもう何も言わずに起き上がって身支度をする。
そんな娘に更に追い討ちをかけなければならない。

「本日、陛下がおいでになります。お話があるそうです」
「――そう」

まるで関心のない口調。侍女はふるりと身を震わせた。
嵐の前の静けさのように、娘の黒い瞳はどこまでも醒めて見えた。

48　婚約あるいは

本来なら娘が国王の部屋を訪れるはずだったが、娘の状態を心配した侍女の懇願によって国王が娘の部屋に姿を現した。

娘は立ち上がって礼はしたが、元気がなかった。

椅子に座り顔を横に向けて抱えて外を見ている。

午後の執務は可能な限り片付けて、弟に後を任せている。話があると訪ねた以上こちらから話しかけるべきだったが、何故か声をかけそびれじっと娘の姿をながめてしまうことになった。

しばらくそうしていて、傍らの侍女に声をかけた。

「何かすることがあるのなら席をはずして構わない」

それを聞いて侍女はもう一度お茶を淹れなおして退出した。相変わらず娘は窓の方を向いている。

無視されることには慣れていないので最初こそじりじりしたが、いつしかそんな気持ちもなくなりこちらを気にしない娘の様子を存分に堪能することになった。疲れは隠せていないが黒髪に縁取られた顔は静かな印象すら抱かせた。

結局その日はそれで終わった。翌日も似たようなものだった。

三日目ともなると弟からはしぶい顔をされながらも、同じ時間に娘を訪問した。変わらずに飽かず、外を眺めている。

どれくらいそうしていただろうか。国王は横を向いたままの娘から声をかけられた。

「何をしにいらっしゃったんですか？」

「そなたの顔を見に。それと――謝罪だ」

娘の前のお茶がすっかり冷めた頃、娘は椅子においてあったクッションをぎゅっと抱えてそれに視線を落とした。

「検査の報告は聞きました？」

「ああ」

「……あれは、やる必要があったんですか？」

「王家と婚姻関係を結ぶ者には必須だ」

国王に視線を合わそうとせずに、娘は続ける。クッションがまるで身を守る盾であるかのようだ。

その姿は頼りなく、子供っぽく見えた。

「好きな人のための検査だったら、恥ずかしくても我慢できました。でも――」

続くのは好きでもない人間のために、苦痛を覚えたというところだろう。

国王はそう分析した。

「そなたには辛く、恥ずかしかっただろう。済まなかった」

「私、夢を見ているんですって」

突然変わった話題に目を瞬かせると、娘はクッション越しにお茶を見つめている。

国王に語るというより、自分自身に言い聞かせているようにも思えて、何も言わずに娘が続けるのを待った。

「あれが夢なら、私はずっと悪い夢を見ている気がする。ここに召喚されたのも、帰還できなかったのも、また王城に戻ったのも。いつまで夢を見ればいいんでしょう」

国王はたまらず娘の前まで来て膝をついて目線を合わせようとした。
それを嫌がるように、娘はクッションに顔を埋めた。

「……大嫌い。召喚制度も、それをやる神官も」
「そうか」
「黒髪黒目だからって顔も見たことない相手と結婚しようとする陛下も。罵ったくせに、牢に入れたくせに態度変えて愛しているとか信じられない」
「済まなかった」
「一緒にいるって言ったのに、必ず戻ってくるって言ったのにこないあの人も嘘吐き」
「……そうか」
「でも一番嫌いなのはあの時に絶望してしまった自分。ここに来てこんなことに巻き込まれる隙を作った自分が嫌い」

途中までは至極当然の罵りというより言及だったのに、最後のにはっとする。
クッションに埋められて顔が見えないのが残念だ。自虐的な表情を見せたくなかったのだろうか。その代わりにさらり、と黒髪がすべり落ちて揺れる。
意思を通す娘のようにどこまでも真っ直ぐな黒髪だった。

「自分を責めるな。悪いのは余だ」
「そう？　伝統だったのでしょう？　その後の騒動の元凶は陛下だとしても」

そこだけきっぱり言い切られて複雑だが、今はそんな瑣末なことにはこだわってはいられない。

これだけ近づいても身を引くことなく、独白に近い言葉が続く。

「陛下が変わったって噂話を聞いてちょっと見直していたのに。あんな検査を強いるなんて女心が分かってない」

「済まない」

「団長や大公殿下と寝たのかとか、直接言う？　男の人ってみんなそうなの？」

「済まない」

「国王は謝罪しないんじゃなかったの？」

「そなたに関しては別だ。謝罪することだらけだ」

「本当にそうね。でも陛下だけが悪いんじゃない、か」

クッションを間にして奇妙な会話が続いている。いつの間にか敬語でなく話をされているのに気付くが、不快ではない。

「私が逃げて処罰された人はいる？」

「直接的にはいない。厳重注意というところだ」

「でも、迷惑はかけた。私にしてみれば誘拐国家がどうなろうと知ったことじゃないけど」

「そなたが余を厭うた結果だから、余が悪かったのだ」

「でも逃げずに戦えばよかったかもしれない。陛下も悪かったけど私も人の気持ちを分かろうとしなかったのは同じ」

散々悪いと言われているのに不思議に憤りを感じていない。当然だと思ってしまう。

言葉の端々に娘が自分を責めているのが気にかかる。

「侯爵様も息子縛って転がすなんて、そこまでするんだ」

「侯爵は目的のためには手段は選ばぬ。団長とて油断していたのであろう」

侯爵と団長の話になって、目の前のクッションは皺がよるほどに抱きしめられていた。
少し息遣いが荒くなっていて、泣いているのかと思われた。
ただ肩を震わせることもなく、また沈黙がおちる。

今度の沈黙は長かった。どうしたものかと思い悩む。触れると嫌がられるだろうしと考え結局そのままだ。
足先まで椅子の上に上げて膝を曲げている。大腿と体の間にクッションを置いてそれを抱いて膝の前で手を組んでいる。子供のような仕草で行儀が悪いと叱られてしまうものだが、今この部屋には二人しかいない。
咎める者もなく、そのまま見守る。

「再召喚で誰も来なかったとき、陛下が怖かった。あのままだと有無を言わさずに王妃にされてしまいそうで……逃げた」
「そうか」
「でも逃げても変わらなかった。どこにいっても伝説の娘だし、未来の王妃だし」
「……そうか」
「あの人と逃げたとしても、安住の地はなかったかもしれない」
「そうだな」

クッションから娘が顔を上げた。真っ直ぐに黒い瞳が見つめてくる。
さっきまで窓から外を見ていたどこか茫洋としたけぶるような眼差しではなく、挑戦的なそれに心臓が跳ねる。

「私と婚約してください」

まさか娘の方からこうも直接的に、挑むように言われるとは思っていなかったのでとっさに二の句がつげない。
膝立ちのまま、目線だけを合わせて硬直してしまう。

「婚約」
「ええ、婚約です」

逃げることを止めたのだとその眼差しは物語る。ここで踏みとどまって自分に戦いを挑んでくるのだと。
婚姻ではなく婚約。猶予があり、破棄もできるそれを選択してきたか。
そうでなくては。どこからか愉快な気持ちが湧いてくる。
ここに来た時には萎れた、心の折れた娘を想像していたのに。

「逃げても無駄なのならここで変えたい」
「何をだ」
「色々と」

そう言うと何かを考えるそぶりをした後で、目を伏せて笑った。
久しぶりに見たそれは思わせぶりで同時に魅力的な笑いだった。
色々と何をする気なのだろうか。
そそられ、見届けたいと思った。
散りあえず囲い込める。それ以上踏み込むのは酷だろう。

「ならば婚儀の日程は未定にしよう。猶予は最大で数年はあるはずだ。その間にやりたいことをやれ」
「無理強いはないでしょうか」
「そなたの意に染まぬことをして、寿命を短くするのは今回限りだ」

意図がなんであれ、婚約者としている気になったのなら言うこと

はない。
この婚約が団長を救うのが主目的としてもだ。
「一ついいか」
小首をかしげるのを好ましく思いながら念をおす。
「余はそなたを想っている。今回の婚約を好機としてそなたをなびかせるつもりであるから承知しておけ」
「私は今回の婚約を好機として、あなたに対抗できる力を得るつもりなので承知しておいて」
確かに自分達は似たもの同士かもしれないと思う。意地っ張りで素直ではなくて、鏡を見ているような気さえする。だが。
「そなたの強さは好ましい」
「上から目線は腹が立つけど、前よりはいい国王になっていると思う」
「ならそれはそなたのおかげだ。感謝する」
頭を下げると驚きで目が見開かれた。
以前に比べ感情の振幅が大きくなっているのを感じる。これを快く思う自分がいる。
団長に嫉妬し、娘に振り向いてもらえずにもどかしく思い、卑怯な手を使ってでもとみっともなくあがく。
今だって国王の威厳などないに等しい。娘の目の前で膝をついて感情を向けられるのを請い願っている。
「愛している。そなたにもいずれは愛してほしい」
「……無理」

「なに、そなたから婚約する気になったのだ。希望はある」
「それは侯爵様が」
「余は何も命令してはおらぬ。だから……そなたから求婚されて嬉しいぞ」

婚約してくれというのが求婚と同義と言われて、娘の顔がいかにも嫌そうに歪む。
どんな風に対抗手段を講じるのかと思うと、不謹慎ながらも興味をそそられる。

「陛下を嫌いって言っているのになぜ笑っているんですか？」
「ずっと無視されると思っていたから、反応があるのが嬉しい」

変態と呟かれた気はしたが、構わない。無関心よりはよほどましだ。
愛ではない。憎悪まじりの嫌悪というべきか。それでも自分に向けられる感情だ。
愛していると言い続ければ、受け入れはされないにしてもその想いだけは承知してくれるかもしれない。

「寝椅子の寝心地はどうだ」
「……床よりは柔らかいです」

いつか……とは口には出さずにクッションで防御している娘を見つめる。
隙を見せたならおそらく喉笛に食い付きかねない、危険な存在と思うのに楽しみですらあるのが不思議だ。
重臣との会議で婚約を発表する時まで、この高揚感は続いた。

49　冬の温室

婚約が正式に発表されたとの知らせがなされた後、娘は温室でお茶をいただいた。

侍女がそれまで元気のなかったのを気遣ってくれて、あれこれと負担にならない程度に和ませてくれようとしている。

「冬の庭ですが、温室は見事ですよ」

案内されたのはさすがに王城なのだなと感心するほどに広く、甘い花の香りの漂う温室だった。

春に植える予定の苗木があったり、時期をずらして咲かせている花があったり、献上されたらしいもっと南よりの地域の花があったりと自然の色や香りは確かにどん底のような気分を浮上させてくれた。

中にしつらえてある場所でお茶を飲んでいると、侍女が遠慮がちに話しかけてきた。

今は無理を言って同席してもらっている。

優雅な手つきでカップを操りながら、侍女は――団長の妹で侯爵の娘は切り出した。

「婚約の件、本当によろしかったんですか？　皆は陛下が押し切ったように思っておりますが、あれは兄のためなのでは……」

父親である侯爵が面会を求めた後からの様子でうすうす察してはいたが、どちらかといえばその後の検査の方が衝撃的でもともと落ち気味だった食が一気に細くなり、夜に至ってはベッドでは眠らずに床で丸くなっている姿を目撃していた。

冬の王城の床だ。機密性に優れていようとも広く寒いのは否めな

い。

部屋に、特に寝室や浴室など無防備になるところに人が入るのをことのほか嫌がる娘のために、どうすることもできずにただ上掛けを増やし、ベッドは見るのも嫌だと抑揚もなく呟いたので陛下との面会の間に寝台を運び出して寝椅子を代わりに置いた部屋を用意した。

――きっと検査をした部屋自体が厭わしいだろうから、と。

陛下が三日執務の都合をつけて通った後で、重臣達に婚約の報告がされた。

ただし、との条件つきだった。伝説の娘は自身を取り巻く状況の変化にとまどい混乱している。まずは世界や王城に慣れることを最優先として婚儀への期限は設けない。

侍女は直接は知らないが、先代の王妃が決して幸福とはいえない日常だったというのは公にはできないが、王城で密かに語られていた話だ。

ましてやその子供である陛下や、先代から仕えた重臣達が知らないはずもなく、この条件は特に異議もなく了承されたと聞いた。

東の大公の下に一時期いたことは公然の秘密ながら、陛下がそう言えば重臣も頭を垂れるしかない。

「うーん、いい選択じゃないなとは思っているけど、それしかなくって」

花の香りを邪魔しないようにとすっきり淹れたお茶を口にして、娘は困ったように笑った。

国王との婚約をいい選択ではないとは、貴族の令嬢に聞かれれば殺されかねない台詞だが侍女は内心同調している。

自分もれっきとした貴族令嬢にも関わらずだ。

温室の出入り口は限られていてそこには警備の者が立っている。

他の侍女達も今は温室内を散策しているからほぼ内緒話の呈だ。

「逃げても身動きが取れなくなったっていうのが正直なところで……」

妹である自分にも決して兄のためだとは言わない。父はいまだに懇意にしている重臣もいることから、早馬でこの知らせは受け取っているはずだ。

さすがに今回ばかりは手紙をしたためる気にはなれなかった。

この温室の中にあっても、娘の黒の色彩は際立っている。神秘的といっていいだろう。何にも染まらない色は、そのまま娘の芯の強さにも現れている気がする。

女の自分でも目を引くのだ。ましてやと考えると陛下や、王城での時間を共に過ごした兄が惹かれても仕方がないのだろう。

髪の毛を染めて目を隠していた時でさえ、誘いがあったのも知っているからなおさらだ。

騎士団本部では団長と副団長の不在で落ち着きを欠いているうえに、娘の正体も知らされて動揺が走っているそうだ。

伝説の娘が――王妃でもいいが、皿洗い、食事の配膳やお使いをしていたのだ。

むさくるしい集団にあっての清涼剤のような存在だっただけに、衝撃は大きかったようだ。

知らずに口説いて過酷な訓練を強いられた従騎士に至っては、絶句した後にみるみる顔色を失い、まず顔を合わせることはないと思われる裏門の衛士に立候補したと聞いている。

時々使いで兄を訪ねていた自分でさえ浮ついて迎えられたのに、相手が娘では……

当の娘は知ってか知らずか、一頃の生気を失った様子からは浮上

しつつある。

「そう言えば……陛下って苛められて喜ぶ性癖なんですか？」

感慨にふけっているところにいきなり落とされた発言に、飲みかけていたお茶がむせる。吐き出さなかったのが幸いだが、礼儀からは失態だ。

でもそんなことを考える余裕もなく、娘の言葉がぐるぐるとこだまする。

とても、いや絶対に聞き捨てならない。

「私、そんな性癖は存じ上げませんが」

「そう？　じゃああれは人を選んでのことかな？」

なにやら難しい顔でぶつぶつと言う娘と、陛下との間には何があったのか。

娘のところに通った三日間のうち、最初の二日は何もなくただ向かい合って座っていただけだ。

視線すら合わさず、娘は外を見て陛下はそんな娘を見ていた。ただそれだけなのに、見ている方が苦しくなりそうだった。

それが三日目、人払いをした後で娘は目に意思を宿し、陛下は……抑えてはいても機嫌が良かった。

きっと苛められて云々のやり取りはこの三日目になされたに違いない。

「陛下は苛めることはあっても、苛められるような方ではないと思います」

子供の頃のことを思い出しながら伝える。男の子の常で兄と外遊びをするのが大好きで、それについていこうとすると迷惑そうな顔

をされたのを覚えている。ただ最後は仕方ないとでもいいたげに手を出されて、嬉しくてぎゅっと握った。

時々はその手の中に虫がいて、最初の頃は悲鳴をあげて泣いたものだった。

そのうちに慣れてしまった。兄や陛下の弟君が気遣ってくれて随分助けられはしたが、今思い出すのは表情豊かな陛下の顔だ。

次第に勉学や鍛錬に時間を取られるようになり、男女の差もあって一緒に遊ぶこともなくなった。

兄とは騎士団で一緒の時期もあったが、自分は侯爵領か親類の館で過ごすことが多くなり久しぶりに顔を合わせたのが侍女に上がってからだ。

その時にはもう、陛下は優しくはあったが女の子に悪戯を仕掛けたり可愛らしい苛めをするような状態ではなかった。

前国王陛下の崩御と付随した騒動で、その優しささえ封印されてしまった。

以後はどこかに冷たいものを抱えた、絶えず何かにさいなまれているような有様だった。

「きっと、あなたに会われて変わられたのでしょう」

鎧がはずれ、はりつけた仮面も取れて一言でいえば人間らしくなった。

暴言だけは赦しがたいが、人を想って行動し頭を下げるまでになったのは喜ばしい変化だ。

それだけに兄のことは残念でならない。

「もし兄のことが分かればお伝えしましょうか？」

まだ動静は分からないが今までの兄だったら、手紙をよこしてく

れる。娘にとっては酷かもしれないが、知りたいかもしれない。
娘は何度かまばたきした。

「今は……いい」
「承知いたしました」

二人してお茶を飲んでやりすごす。急に強くなったような、むせ返るような花の香りはくらりとめまいを感じさせる。
体調の回復していない娘にはこれ以上は負担かもしれない。

「そろそろ戻りましょうか」
「はい」

温室を出ると、風の冷たさが身を切るようでふるりと震える。しっかりと服をかき寄せて温かい空気を逃がさないようにしても、それはすぐに去っていってしまう。

「王城の冬は寒いんですね」
「そういえば、昨年は南にいらっしゃったとか」
「ええ、海風は冷たかったけれどこんな感じではなかった」

さっきまでの温もりはとうになく、警備や侍女達と足早に王城に戻る。
娘の感じている冷気はきっと気候だけではない。
心が冷えると、手足は実にたやすく凍えてしまう。
温かくしておいた部屋で、もう一度熱いお茶を淹れる。ほうっと息を吐いたその姿すら絵になると思いながら、異世界から来た、本人は割に強いのだがいかにも庇護欲をそそる娘を眺める。
その娘が顔を上げてあのね、と囁いた。

「あの手紙、まだ持っていたら――処分してください」
「――そのようにいたします」

礼をしてあてがわれている部屋に引っ込む。広くはないが清潔で、持ち込んだ小物でほっとする空間になっている。

暖炉に火を入れて書き物用の机の引き出しから、鍵のかかった小箱を取り出した。

中には父や兄からもらったちょっとした装身具や大事な手紙などが入っている。

目当ての一通を取り出した。

几帳面な兄には珍しい走り書きのそれは、慌しい中で書かれたものと推察される。

中は簡単な経緯の説明と、娘の助けになってやって欲しいとの真摯な願いがつづられている。

陛下への謝罪も、だ。

黙ってそれを読み返す。もう何度も目を通しとっくにそらんじている。

これを処分したら娘と兄の繋がりまで消えてしまいそうで、火を前にしてもくべるのにはためらいがあった。

でも処分して欲しい、と。それが娘の願いなのだから。

火の上にかざすと端からゆっくりと燃え移る。さして大きくもない手紙だ。

炎をあげて黒い物体に変わるまでそれほど長くはなかった。火かき棒でそれを粉々にする。

あっけなく兄の想いは、それを形にしたものは消えた。

どうしようもない胸の痛みだけを残して。

自分が感傷に浸っても意味はない。それは分かっていながらもしばらく暖炉の前から立ち上がれなかった。

娘も手紙に目を通していた。ここにいなくて渡されることのなかった副団長への手紙だ。部下にではなく友人にあてて書かれたそれに、目をこらす。

命より大事だと書かれた部分にそっと指を這わす。本当に嘘吐き。

一時の温もりだけを残して消えてしまった。

「でも無事なら、それで」

一度だけ手紙を胸にあてて誰も聞く者のない呟きをおとす。

ぴり、と手紙を裂いて火に落とす。ゆらり、と炎が揺らめいてのみこんでいく。

ぽっかりとあいた穴にごうごうと風が吹く。外の風の音とあいまって冷気が背筋をはいのぼる。

「ここは……寒いの、すごく、寒いの」

寝衣の上のショールをぎゅっとにぎって寒いと繰り返しても、包み込んでくれたあの温かさは戻らない。

「会えないだろうけど、会いたい」

今は消息も分からない、大事な人を想って流した涙は誰にも知られずに布に吸い込まれた。

50　たくらみ

とりあえずの婚約を発表した国王と娘だが、当然温度差があった。できる限りそれはなかった事としたい娘と、名前だけでも独占する権利を有した国王との間では深い溝がある。

婚約披露を含めてできる限り表に出たくないとする娘を、重臣にも一応はまだこちらに慣れていないからと話を通してしまったので無理に行事に参加させるわけにもいかなかった。ただ王妃としての教育はする必要があった。先代の王妃はおらず、国王には姉や妹もいない。

誰か礼儀作法を含めて教育してくれる人間をさがさないといけない。

人選をしていた際に、侍女から提案があった。

「私の叔母はいかがでしょうか」

侍女の母親の妹は公爵家に嫁いでいた。身分も教養も申し分ない、しかも数少ない信頼できる貴族の一人だ。

領地を離れて王都の屋敷に滞在しているとのことだったので、侍女を通じて正式に娘の教育を依頼した。

「まずは私の屋敷においでくださいませ」

美しい筆跡でお茶会の招待をよこした公爵夫人の屋敷に娘と侍女は赴いた。

騎士団からの護衛で馬車の前後を守っての、お忍びとしてもいささか大仰な移動に娘はため息をついた。

馬車の向かいの席では侍女服でなく、ドレスを着た侍女がゆったりと座っている。

「そんなに緊張しなくても大丈夫です。叔母は気さくな人ですから」

亡くなった侯爵夫人の妹に当たり、侍女と団長の叔母になる公爵夫人と聞かされてもどうしても気が重くなる。教育係と思うからか家庭教師のような厳格な女性を想像してしまう。

王城からほど近い、貴族の集まる区画としても一等地に屋敷はあった。

所領にある侯爵の屋敷には行ったことはあるが、王城の貴族の屋敷には初めて足を踏み入れるのでついあちこちを見てしまう。

どこか質実さを感じさせた侯爵家と違って、華やかな印象の公爵家は扉や柱に繊細な彫刻を施していたり、大きな絵や像があちこちに飾られていて、明るく華麗な屋敷だった。

馬車をおりて出迎えられた人に、娘は目を奪われた。金褐色の髪の毛を結い上げて薄青い瞳を輝かせている女性は、優雅にドレスを着こなして周囲をあたためるような柔らかな雰囲気をかもし出していた。

「叔母様」

侍女が嬉しそうに声をかけると、にっこりと笑って侍女を抱きしめた。どことなく少女めいているのに円熟もしている。

全く似ていないのに母親を思い出させた。

「この子は、こんなに近くにいるのに顔を出さないなんて。よく来てくれたわね、また綺麗になったんじゃなくて？」

声も落ち着いていてそれでいて耳に心地よく響いてくる。

叔母と姪の挨拶が済んで、侍女が公爵夫人に娘を紹介する。

「叔母様、こちらが――」
「初めてお目にかかります。本日はお呼びだてして申し訳ございません。この子の叔母で公爵の妻になります」
そう言うとドレスをつまんでお辞儀をする。流れるように美しい仕草だった。
娘も角度などを見習って挨拶とお辞儀をしようとした。
「本日はお招きにあずかりまして、大変嬉しく思っております。色々と教えていただくことになります。どうぞよろしくお願いいたします」
「ああ、お辞儀はなさらないで。会釈で結構ですわ」
微笑みながらも教育は始まっているようだ。身分に差のある者の挨拶、立ち方や座り方、移動の順番などにも細かい決まりがあるようだ。
公爵夫人の案内で、日当たりのよい女性用の応接室に落ち着いた時には疲れを感じるほどだった。
使用人に用意させたお茶やお菓子が並べられる。
まずは見本を、と前置きして夫人がお菓子を取ってお茶を飲む。
「一番身分の高い方が始めないことには、誰も手を出せませんの。ただあなた様が主催される場合は別です。招待客の中での身分の順になります」
「では、私からいただくわけですね」
お茶は王城でも日課のように飲んでいるので問題はなかった。
女性らしくお菓子についての話題になり、今の流行の菓子やお茶の話に移った。

「お茶も産地や種類をわきまえていただくと、そこから話が広がるでしょう？」

いかにも女性らしい、と娘は思った。こんなお茶会やサロンと呼ばれる集まりが社交の場になるのだ。

「服装や髪型、装飾品、庭での会なら季節の花や庭園の様式、室内ならそれこそ建築様式や調度……目に映る全てが話題になりさりげなく褒めるのが大事なんです」

勿論、茶器も大事な鑑賞品ですわ、と駄目押しされる。

なるほど、これは一筋縄ではいかないと感心する。茶道や華道、香道などの伝統的な習い事に通じるような知識がないと恥をかくし話題がなくなるということか。

「加えてお相手の背景を承知しておかないとなりません」

同席者の名前、身分はもちろんのこと、所領のことや親類にいたるまで頭に叩き込めということか。

「お茶会ではまだ人数は少ないですが、夜会になると規模は桁違いですから」

そこで公爵夫人は柔和な顔をふと改める。

「そこで致命的なことをされると、そのまま国の恥につながりますの」

あるのは貴族の誇りとそれを伝えてきた矜持かと思う。会釈をしてお茶を飲む。銘柄は娘にも分かる代表的なものだった。

名前を挙げると嬉しそうに首肯された。

「ええ、筋はよろしいようですね。ふふ、私とても楽しみですの。うちには息子しかいなくて、娘代わりの姪も王城で侍女なんかしているでしょう？　だれか育てたくて仕方なかったんですわ。だから今回の申し出に感謝していますの」

育てる――その言葉に侍女を見つめると、苦笑された。

これはかなり厳しく仕込まれたようだ。

「姉が――この子の母親ですけれど、わりに早くに亡くなってしまったのでもう娘のようなものですの。甥の方は父親に連れられて王城に入り浸りで、そのうちにこの子まで。帰ってくるたびに泥だらけ、傷だらけで日に焼けて。淑女にできるのかと本当に気をもみましたの」

「叔母様、昔の話です」

「降るような縁談もあるのに、兄妹もそろって耳も貸さずに王城勤めなんですもの。楽しみがなくって退屈で」

「叔母様を退屈にさせると周囲が大変なんです」

小さな声で呟く侍女の口調には、過去の退屈の果ての騒動が思い出されているのだろう。

きっとこの人は自覚なく周囲を振り回して、そして周囲も困ったと言いながらも赦してしまうのだろう。そんな気がした。

その公爵夫人の目がきらりと光って、娘に向けられる。

「ですから、私の全身全霊をもってお教えいたします」

「よろしくお願いします」

生徒として先生にするように礼をしてしまっていた。夫人はあら、

と呟いた後で頷く。
扇子を上手く使って口元を隠すのも手管のひとつのようだ。

「あなた様は先代の王妃様とは違うようですわね。とても――ごめんなさい、面白そう」

興味をもたれたこと、少なくとも悪くとられてはいないことを感じて娘も微笑した。
侍女が席を外した間に、公爵夫人と話をする。

「先程のお話では、王妃の無知で座がしらけたことがあるのでしょう？」
「仕方のない話ではありますが。なにしろ全く別の所からいらっしゃるのだから」
「ええ、でもそれは合理的でないように思うんです。この国で生まれ育った女性ならそんなことはないはずでしょう？」

夫人の目が探るような色になる。

「何を――おっしゃりたいのかしら」
「私はよそからいきなり来た田舎娘よりも、この国の貴族の令嬢や周囲の国の王族の姫の方が王妃には相応しいのでは、と思っているんです」

考えてもみてください、と娘は両手を広げる。

「今から付け焼刃で知識を詰め込むのと、生まれた時から自然に身に付いているのとでは大違いでしょう？　私は、私がいなければ令嬢方は陛下の側妃どまりになるのではなくて、王妃になる道があるのではないかと思っているんです」

「まあ、随分と大胆なお考えだけれど」
「姪御さんを王妃にしたくはないですか？」

視線が合わさる。お互いに強い眼差しで真剣勝負だ。
この公爵夫人が侍女を可愛がっているのは一目瞭然だ。そして娘がいないのであれば、侍女の後見もするだろう。
おそらく娘を持つ有力な貴族達なら一度は考えるはずだ。伝説の娘などにみすみす王妃の座をくれてやるのは惜しいと。
しばらくにらみ合った後、夫人は目を伏せた。

「確かに姪の初恋は陛下のようでしたが」
「今もその気持ちに変わりがなければ、成就させてはいかがですか。姪御さんでなくても、陛下の側にいたい令嬢は沢山いるでしょう？」

夫人の信頼できるつながりでもって、陛下の側を狙えと当の伝説の娘がけしかける。
この奇妙な構図は少なからず夫人を困惑させた。

「でもどうしてそんなことをお思いになるのかが」
「簡単です。私は王妃になりたくないんです」

迷いなく言い切った娘に夫人が絶句した。およそ女性として考えられる最も高貴な身分をいらないと言うとは。
異世界から来たから身分の価値が分からないのだろうか。

「王妃になれば贅沢も思いのままですのに」
「――それに意味を見出せないので」

何かを言いかけてやめた。そんな風に夫人の目には映った。
混乱から立ち直りすばやく計算する。この国では貴族令嬢は王妃

にはなれない。側妃か、貴族同士の縁組か、他国に嫁ぐかだ。
喉から手が出るほどに王妃とその縁戚の地位を欲しがる者は多い。

「ただ、王家を弱体化させるような方は困ります」

娘に刺された釘はなかなかに鋭い。どうしても舞い上がり、王家の中枢に口を出したがる貴族はいる。
考えるに義兄たる侯爵に限ってそれはないだろう。忠義一途な人だ。それも見越しての提案なら空恐ろしい。

「――承知いたしました。私の信頼できるお友達の令嬢達を王城によこすようにいたします」
「ええ。立ち居振る舞いや会話を見習わせていただきます」
「私も王城に参りますがよろしいですか？」
「勿論です」

そこに侍女が戻ってきた。夫人と娘が微笑みあっているのに安堵しながら尋ねる。

「お話が弾んでいたようですね」
「ええ。王城に来ていただけることになったんです」
「私も久しぶりのことなので、とても喜んでいるのよ」

そのまま二人してうふふと笑いあう。
侍女は叔母と娘の仲がよくなったようだと、訳は分からないながらも安心した。
育ててもらったから分かるが、叔母は信頼に足る淑女だ。娘を教育すると決めたからには決して手は抜かないだろう。

「それで夫人に教えてもらっている間、同席してほしいんです」

侍女は娘から頼まれて私でよければ、と返事をする。
叔母も機嫌よさげに話をひきとった。

「そうね、見本があるほうが覚えやすいしダンスの練習にもいいわね」
「では、お仕事の邪魔にならない時間帯ということで」
「ええ、息子も連れてくるかもしれなくてよ」

男性との間の作法も教えてもらえるのなら言うことはない。
しばらくは図書室と、夫人による練習ということになるだろう。

「詳細が決まったらお知らせいたします。――今日は本当に有意義でしたわ」
「こちらこそ、ご面倒をかけますが」

最後は貴婦人に相応しい礼をとって公爵家を後にする。
馬車に揺られながら娘は近づく王城を窓から見つめた。
まずは一人。夫人の『お友達』もきっと味方についてくれるだろう。
あとは不用意に消されないように注意しさえすれば。

「楽しくなりそう」

娘は侍女に笑いかけた。勿論無理強いをするつもりはない。
もし、もしもだ。侍女が国王を想うそぶりがあって国王もそれを嫌がらないのなら。侍女でなくても他の令嬢でもいい。そうやって知己を得れば――身を隠す必要がでても前回よりは上手くいくかもしれない。
次は、神殿だろうか。それとも図書室。

「忙しくなりますよ」
「そうね、でも気もまぎれそう」

夕映えの王城は冬の空気に澄んで、綺麗だった。
娘は巨大な建物を眺める。どんなに大きくても、そこに人が住んで人が動かしているのなら付け入る隙はあるはずだ。
夕食は国王と共にだったはずだが、それすら苦にならない気がした。

51　傲慢

王城に戻ると侍女は服を着替えに退出した。椅子に深く腰掛けて外を眺めながら公爵夫人のことを考える。

姉妹で公爵や侯爵に嫁いでいるのだから、本人達の元の身分も低くはないのだろう。貴族の女性の考え方や振舞い方が染み付いているのだと思う。その貴族の女性から見て、国王や王妃になる娘はどう捉えられているのだろうか。

人となりを見極めないで考えを披露する愚、自分の行動は随分軽率だとは分かっている。

ただ状況を変えるきっかけになるかもしれない、と考えた。感傷かもしれないが、夫人を団長と侍女の叔母ということで親しみも感じた。

もっといえば味方になってほしかった。

親代わりと言っていた公爵夫人は侍女が可愛くて仕方がないと、隠すでもなく表している。言葉の端々や侍女を見る目で分かる。

その彼女だったら侍女が王妃になるのを願うだろうと話をもちかけた。

――感触は悪くない。ただ、肝心のことを怠っている。侍女の気持ちを確認することを。

見た限りは幼馴染の親愛の情はあるように見える。当然臣下としての忠誠心もだ。ただ時々、過去の話をする中で表情が甘くなったり、現在の陛下の欠点を言いながらも決して嫌いではないというスタンスを感じていた。

嫌いではない、はずだ。なら自分が国王と結婚しなければ、再度の召喚などがなければ最も相応しいように見える。

ただ男性として好きなのかははっきり確認していない。

それなのに、一足飛びに公爵夫人に話をもっていってしまった。

これについては夕食の後にでも侍女に直接聞くか、夕食の際の国王と侍女の様子をうかがうかで判断しようと決めた。

夕食は国王と王弟、娘と侍女の四人で取った。侍女に手本を見せてほしいと頼んでのことだ。

話は公爵家のことになったが、昔の話は意図的に避けられていた。昔のことが話題になると、必然的に団長を思い出すからだろう。それに気付くと切なくなる。

「公爵家はどうだったか？　あそこは代々趣味人が多くて屋敷の調度も見事だと思う」

「はい、華やかで、でも不思議に落ち着いた感じでした」

国王から話しかけられて答えると、苦笑しながら続けられた。

「本来ならそなたは余以外に呼びだてはできぬ。一応婚約者であるので王妃に順ずる身分になっている。公爵夫人が屋敷に招いたのは、夫人の失礼ではなく余が頼んだからだ」

意外な言葉に国王を見つめると、少しだけ国王の耳が赤くなった。

「そなたは王城で塞いでいたから、その、少しでも気分転換になればと」

「兄上、そうだったのですか。私はてっきり夫人が苦手だからかとばかり思っておりました」

横から王弟が笑い混じりの声で横槍を入れる。

国王はひとつ咳払いをして、王弟の冗談を否定した。

「余は決してあのお節介なところが苦手で、できれば顔を合わせた

くないなどとは思ってはいない、今回は本当に……」
「そういうことにしておきましょう。でも近日中に夫人は登城しますよ」

そうなのだと呟いてため息をついた国王に内心驚く。
まさかそんな気遣いをしてくれていたとは。侍女をちらりと見ると、微笑んだ後で国王に視線を移して目を伏せた。
一瞬だけ侍女の顔に浮かんだものが気になった。

「陛下、ありがとうございました。いい気晴らしになりました」
「夫人は貴婦人の鑑のような方だ。よく教えてもらうといい。そなたにはまた押し付ける形になるが」

その後の食事は胸につかえた。国王が笑いかけてくるたびに、どう返していいか分からなくなった。
部屋に戻り寝椅子に横たわって、娘は自己嫌悪に陥った。
国王が自分を気遣ってくれてお膳立てしてくれていた。そのことに気付くことなく、行った先の公爵家で王妃になりたくないと言い放ってきた。王妃になりたくないくせに、婚約者の立場には乗っかって王妃教育を受けようとしている。

「最低だ」

口に出すと余計に落ち込んでしまった。王妃教育と称して公爵夫人が貴族の令嬢を連れてくるのを期待している。
国王は嫌々ながらの婚約だと承知の上で、色々と考えてくれているのに。
自分がひどく薄汚れた気がする。そして侍女と、国王に対しての罪悪感を覚えた。

数日後に登城した公爵夫人は、豪華な王城にも負けぬほどに優雅な姿だった。姿勢がきれいで仕草が洗練されているので、ただ歩いているだけでも人目を惹く。

午後のお茶の時間に合わせて来たので、国王と侍女が同席していた。

「国王陛下におかれましては麗しいお姿を拝見でき、恐悦至極に存じます」

「堅苦しい挨拶はよい。ここでは繕う必要などない」

「まあ、それでは私が随分と澄ましやに聞こえますわ」

「いや、そういう訳ではない」

早くもいささか国王がおされ気味に見える。夫人の方は優雅に扇で口元を押さえているが目は、じっくりとこの場を見定めようとするかのような光をたたえている。

「急な願いを聞き入れてもらい感謝する。よろしく頼む」

「お任せくださいませ。王城の細かいしきたりは侍従長の方が詳しいでしょうから、私は女性側からのあれこれをと思っております」

「これは、今までとは全く異なる場所に呼び出してしまったので、特に作法や社交に関して心細いだろうからよろしく頼む」

少しだけ間をおいて、夫人が頭をさげた。

侍女が呼ばれて退席し、国王も執務に戻ったところで夫人と二人になる。

流れるようにカップを持ち上げお茶を飲んで、それを置いて夫人はふうっと息を吐いた。

そして正面から見つめられる。

「あれから色々と考えましたの。この国にあなたのような方がいら

っしゃったいきさつはご存知でしょうか」
「はい、神殿で記録を読みました」
「でしたらお分かりですね。私が、国内の貴族である私が再び混乱の元になりそうなことに手を貸せるかどうかは」
「姪御さんのためにはそれでも、と思っていましたが、ごめんなさい。私が浅はかだったんです。姪御さんの件は忘れてください」

夫人は器用に片方の眉毛だけをあげた。
それだけで詰問の意図を感じる。社交の場では元の世界以上に察する能力や、言葉に含みを持たせる必要がありそうだ。

「あら、そうですの」
「ええ、彼女の気持ちも聞かずに条件が合うからと話を進めようとしました。これじゃまるで……」

最初の頃の国王のようだと続けようとして、夫人にそこまで話す必要はないと語尾を濁す。
夫人は扇を口に押し当てて少し考えているようだ。
ややあって、扇を外したその表情に怒っている様子はなかった。

「私の見立てではあの子は陛下のことは決して嫌ってはいない、むしろ初恋の延長かもしれませんが好意はあるようです。あなたのおっしゃるように、確かめもせずに進める話ではないですわね。でも、あの子に問いただしても認めないでしょう。
生真面目なところは両親によく似ているし、なにより今はあなたがいらっしゃる」
「それは私の……」
「本意ではない、そうおっしゃりたいのですか。でもご婚約は現実の話ですし、それに陛下からではなくあなたからの話だと噂では聞き及んでおりますが」

夫人の言葉のひとつひとつが柔らかな棘のように、ちくちくと苛んでくる。
確かに自分から言い出した婚約話だ。

「間違いでしたかしら？」
「いえ、その通りです」
「でしたらそこに割って入るにもまいりませんでしょう？　ましてや可愛い姪を」

夫人は手首をかえして扇を片方の手に柔らかく当てる。
たったそれだけの行為なのに、妙な迫力が出た。

「みすみす争いに巻き込むつもりはございませんの。それに先程の陛下のご様子からもね。あなたに対する陛下のお気持ちを知りながら姪を差し出そうなんて、傲慢ではありませんか？」

傲慢――ずんと響くがその通りだと思う。その上浅はかではどうしようもない。

「私も自分勝手なのは分かっています。ですから姪御さんの件はお忘れくださいと申しました」
「既に結論が出ているようで安心しましたわ。同じ理由でお友達の令嬢達の紹介も諦めてくださいな」

自分の身代わりに貴族令嬢作戦はあっけなく潰えた。
召喚制度の始まりを考えれば、そしてその混乱を望まなければ公爵夫人が頷くはずがなかった。肉親の情が勝るかと思っていたけれど、考えていた以上に彼女は貴族でこの国を思っている。
屋敷での様子との違いは、この数日の間に熟考を重ねての結論な

のだろう。
当然だと納得はしたが、一方で失望もとめられない。また他の手段を考えなくてはならない。
夫人を見つめていた目線が、手元に落ちてしまう。

「あらあら、そんなにしょげないで下さいな。代わりといってはなんですが私のお友達を紹介いたしますわ。
息子しかいないとか、娘は嫁いでいるとかで陛下の縁戚になる可能性のない、でも権力や見識はある信頼できるお友達をね」

はっとしてうなだれてしまっていた顔を上げると、そこには母のような眼差しの夫人がいた。

「皆さん国内外にある程度の影響力はある方ばかりだから、知り合いになって損はないと思います」

令嬢達は紹介できないが、その親世代を紹介してくれるらしい。
公爵夫人の友人なら一筋縄ではいかないだろうが、味方にできたらさぞ頼もしいのだろう。

「ありがたい話ですが、王妃一直線の気がします」
「そこを上手くさばいてこそ、ですよ」

優雅に微笑む夫人は、なるほど国王が押されるはずだ。決して正面だって敵対することはせずに、己の有利になるようにもっていく。
今だって自分に諦めさせながらも、希望をもたせようとしている。
しなやかでしたたか。まるで境遇は違うのに、食堂の女将を思い出した。
それから後は、会話術と称してお茶を飲みながら相応しい話題や会話の運び方の教授になった。

あくまでも優雅に、品位を失わない程度に注目を集める要素を入れろなど、難しいことを平然と要求する。

果たして夫人を満足させられるのだろうか。とてもそこまでいけるとは思えない。

夫人が王城を辞去する際、扉近くまで見送りにでた。

と、夫人が目の前に立ってそっと頬に手をのばした。柔らかくしっとりとした手に包み込まれて、夫人と眼差しをあわせる。

「こんなこと無礼の極みですが、お許しください。――何を焦っていらっしゃるの？」

何を？　決まっている。そう思うのに口は別の言葉を紡ぐ。

「冬が、終わるから」

「春はお嫌い？」

「そういう、わけではありませんが」

夫人は一瞬だけ真面目な顔になってから、目を細めた。

「時間は新しい何かを連れてきてくれるかもしれません。待つこともよいものですわ」

「こちらでは、待ってあまり良い結果にならないことが多いのですが」

「でも焦れば大切なものを見誤り、見失います」

「……そうですね」

脳裏には一人の姿が浮かぶ。夫人はくすりと笑った。

「強気かと思えば弱気だったり、年頃の女性って本当に可愛いもの

ですね。うちは息子ばかりでその楽しみがなくて。今度はお友達を連れてきますわ」

優雅に礼をして、夫人は屋敷に戻っていった。

何を焦っているのか。一つだけではなく答えが浮かんでくる。

団長の行方が知れないこと、国王の気遣いや優しさに動揺していること、婚約者としてのありかた、でも一番大きいのは多分これだ。

春が来るから。春になって祭典の日を迎えると自分がここに来て丸二年になる。

時間の流れが同じかは分からない。でも、丸二年とすればあちらでは三回忌に当たる日だ。納骨も、一周忌も過ぎてしまった。三回忌まで、と思うとどうしようもなくじりじりと胸が焦がれる。

この短期間で国王が帰還へ頷いてはくれないだろうと、どこかで悟っている。

第一自分から婚約を言い出しておいて、と身勝手さが際立つ。

国王と同じ気持ちにはなれそうもない。それでも婚約者としての義務は、それに伴う恩恵にあずかる限り無視はできない。

無視しようとして持ちかけた、令嬢を王妃にという企みはあっけなく水泡に帰した。

義務を果たせば待つのは王妃への道だろうか。それともその途中で、別の道を見つけることができるのだろうか。

寝椅子で枕を抱えながら、答えの出ない問いにその夜はよく眠れなかった。

52　ざらつき

公爵夫人の『お友達』は強烈だった。貴族社会でネットワークを形成してそれぞれ個性を持つ、いい意味でも悪い意味でも好奇心旺盛な方々だ。

身分はさすがで、娘は現在いいおもちゃのような状態だ。

「こんなにお近づきになれるなんて嬉しいですわ。公爵夫人に感謝しなくては」

「皆様、お手柔らかに」

夫人が注意を入れて、皆が笑いさざめく。娘は中心でカップを持ちながら、このおばさま達にどう対処しようかと硬直していた。

国王は近寄らず、侍女も隅に控えている。

娘は一人で質問攻めを受けていた。

「それにしてもお幸せですこと。国王陛下の伴侶なんて望んでも得られませんのに」

中の一人の言葉に、内心それは違うと反論しつつあいまいに笑う。

「私にはとても務まりそうにないと、陛下に申しているんです。それに心残りが多すぎて……」

語尾を小さくしてうつむくと、案の定ピラニアが食いつくかのごとくに興味を誘う。

きらびやかなドレスや装飾品で飾られても、中身はおしゃべり好きで退屈嫌いなのはどこでも女性の特徴なのだろうか。

「どういうことか伺っても失礼ではないでしょうか？」
「ええ、勿論です。実は両親をきちんと見送りたくて」
「まあ、それは……」

簡単に事情を話すと、同情した貴族の夫人たちが目頭を拭う。この手の話には弱いようだ。

「こちらの神とはきっと違う宗教ですから、もどかしいんです」
「それはお辛いでしょうね。でも祈る心は同じでしょうから、神殿でお祈りなされてはいかがでしょうか」
「そうですわ、今の神官長はことのほか熱心でいらして」
「いつも微笑んでいらっしゃいますものね。精力的に各地を回られていますし」

夫人達の口から神殿の話が持ち上がる。神官長は信仰の更なる普及に力を入れていること、同時になかなかのやり手らしく各地に新しい神殿や祈祷所の建設をすすめていることなどが、合間に語られる。

神官長は確かに微笑をたたえている。再召喚に失敗した時ですらだったと、思い出すと少し苦々しい。

「先だって亡くなられた大公殿下が非常に熱心だったこともあって、随分親交があったようですね」
「そうですか」

大公と神官長、宗教での繋がりは密だったのかと娘は相槌を打ちながらぼんやりと大公の言動を思い出す。

確かに敬虔な信者で、祈祷所でも長い時間祈っていた。

そして感じた違和感もよみがえってくる。

それを確認すべく、公爵夫人に質問する。

「こちらの宗教では神は平和を願っているのですよね」
「勿論ですわ。争いは不幸の土壌になると、手を取り合って平和を目指すようにというのが根本の教えです」

ならどうして大公が傭兵を集めてまで、甥と争おうとしたのか。誰よりも神を信じているのならそれは教えに背くことではないのだろうか。

娘は黙り込んで、周囲の話を聞くことに徹した。

「大公殿下の後任は決まったのですか？」
「まだ難航しているようですわ。今の王家には血縁者が少ないせいもあり、騎士団が残務処理に当たられているとか」
「大公殿下は王家の廟には入れられないというのは本当ですの？」
「一時はそんな話もありましたが、結局陛下が廟へと許可されたそうです」
「義理の弟君の時とは随分な違いですこと」
「陛下が変わられているのは、皆様もご夫君からお聞き及びでしょう？」

そうですわね、と頷きあう夫人達は夫や子供も重臣だったりして王城の内情にも詳しい。

これで囲まれているのが年頃の令嬢のいる夫人達だったら、怖くてお茶など飲めなかったかもしれないと公爵夫人の配慮に感謝する。

「それにしても黒髪に黒い瞳の方を久しぶりに拝見することになりましたね」
「先の王妃様はほとんど人前にお出になりませんでしたから」
「そう、大きな式典や夜会の時くらいかしら。いつも憂いたご様子もまた人目を惹いていらっしゃいましたが」

「あれは先の陛下が人目に晒すのを嫌がったせいではなくて？」

そこで忍び笑いになり、なんとなく話が怪しくなってきたような気がした。

公爵夫人を見やると、困ったものだというように扇を口に当てている。ここは口をつぐんでおけということか。

「こちらにいらしてから婚儀まで随分間がおありだったから」

神官の記録と合わせると随分際どい話題だ。

亡き婚約者を想っていたのを、という話だったはず。国王の母親ということもあって一番時間をかけて記録を読んだ人だ。

今となっては重なる部分もありこのままではこの人のあとをたどりそうな、とまで考えてカップを握る手に力をこめた。

「側妃も、先の王妃様が勧められたとか」

「随分と王妃様に執着されていらっしゃったので、身が持たないと陛下に泣きついたらしいとは」

そんな王妃と側妃の子供には差がつけられ、結果今の国王の即位前後の騒動に繋がったらしい。

国王の首の傷はそんないきさつがあったのか、と不幸の原因と思われる先の国王を恨む気持ちになる。

先の王妃も、子供の国王や王弟も決して幸せでなかったように思える。

結果が召喚当初の暴言だったら、最悪だ。

夫人達が部屋を去ったあと、残った公爵夫人と侍女とで改めてお茶になる。

「皆さん、精力的な方ばかりでしょう？」
「だいぶというか相当ですね」
「裏の話にもお詳しいのでしょうか、叔母様」
「まあ、それが生きがいの方もいらっしゃるから」

否定もせずに夫人は澄ましている。おしゃべりの中にある真実を見極めるのは難しい。

ただいくつか気になる話題はあった。それをもとにもう少し調べてみたいと思うようなものが。

特に大公の話は気にかかる。誰に聞けば教えてくれるだろうか。国王とともに東から戻った騎士団の誰かに聞けばいいのか。国王か王弟が詳しい話を知っているだろうか。

あと、先代の王妃の記録をもう一度神殿で見せてもらおうと決める。

ついでに神官か神官長にも尋ねてみよう。

翌朝の割に早い時間に意外な人物から面会の申し入れがあった。侍女が案内してやってきたのは、神官長だった。

この部屋に長衣は目立つ。顔にはいつものような微笑が浮かんでいる。

「朝早くからぶしつけに面会を求めたこと、申し訳ございません。一つ確認したいことがございまして」
「なんでしょうか」

応接の椅子に向かいあって座ると、神官長はゆったりと長衣をさばいて腰掛けた。

「随分と公爵家をはじめとした方々と交流をお持ちのようですが、

公爵家があなた様の後見をなさるのでしょうか？」

初耳の話なので、首をかしげて侍女を見る。侍女もふるふると首を横に振って、同じように知らなかったのを表した。

神官長に向き直って答える。

「いいえ、そのような話は私も初めて聞きます。そもそも後見の意味がよく分からないのですが」

「これは失礼しました。後見とはあなた様が今後この国で生活される場合に、細々としたことを頼りにするようないうなれば実家のようなものとお考え下さい。相談に乗ったり、何かあればそこに滞在するような形になるでしょう」

実家がわり。神官長はなおも柔和な表情で続けた。

「ただ伝説の方は代々召喚した先の、神殿が後見をすることが半ば伝統のようになっております。このたびもこちらはそのつもりでおります。

ご婚約が整いましたので、婚儀の説明や今後のことを色々と話す上でも神殿が後見となるのが都合が良いかと思うのですが」

伝統とは、嫌な言葉だとすっかり伝統やしきたりには拒否反応が出てしまっているので、是とも否とも言わずに神官長の反応を見る。

元は召喚されたばかりで混乱している娘達を落ち着かせるために世話をしたのが始まりらしい。

神殿で落ち着いてから、王城に移り国王と婚儀を挙げるのだと言われても。

「もう、混乱の時期も過ぎましたし今更ではありませんか？　それに半ば伝統とおっしゃったのはそうでない方もいらっしゃった？」

初めて、神官長の笑みが少し消えた気がした。口の端は上がっているのだが、包み込むような感じではない。

どこか、触れられたくない場所を抉ったか？

「婚儀の前後は特に心配などで不安定になりがちです。その間の安定のためと思ってくださってもよろしいです。

後のご質問は、そうですね。先々代の王妃様は熱心に信仰してくださったので問題はありませんでした。先代の王妃様はずっとふさがれたご様子で、この方は召喚をした神官と神殿に良い感情はお持ちくださいませんでした」

また先代の王妃だ。貴族の夫人達の見た憂いた王妃と、神官長の言う神官と神殿に良い感情を持たない王妃。

奇妙な感じだ。

「先代の王妃様は神殿の後見を望まれなかったのですね」

「とてもとても残念なことに。結局早くにお亡くなりになったのも心労があったのではないかと、お心を安らかにできなかった不明を恥じました」

神官長の口調は重く、本心からそう思っているのは間違いない。

でも自分も国王と結婚する意思もないし、神殿と神官には良い感情どころか恨みや逆切れに近い思いを持っている。

それに後見なども胡散臭い。

「どなたの後見ということも考えてはいません。ご心配はありがたいのですが、私には必要とは思えないんです」

「――そうですか。ではお気持ちが変わるのをお待ちしています。いつでも神殿にいらしてください」

用件はそれだけだったようで、腰をうかしかけた神官長にそういえば、と尋ねる。

「神殿の研究では帰還の儀というのは不可能なのでしょうか？」

虚をつかれた神官長から笑みが消えた。そうして気付くのは思いのほか薄い唇と、神官らしくやせた顔が厳しく相手の目に映るということだ。

神官長の微笑は、元の世界のそれのように無意識に自分をよろうものか。

ただ一瞬だけ素を覗かせて、神官長はすばやく立ち直った。

「それは完成させたとは聞いておりませんが、何故そのようなことを？」

「あ、ええ、召喚と再召喚は陣があるのだから、帰還も陣があるのかと思っただけなんです」

「ございませんな。そして、元の世界に戻られた方もおりませぬ」

朝から失礼しましたと再度頭を下げて神官長は神殿に戻った。

婚約してからこちら、何だか嫌な風が吹く。

神官長の最後の言葉は柔らかいのに、時間が経つにつれてじんわりとしみこんでくる。

そして朝の件は国王に筒抜けだった。

53　結論

執務がたてこんだとかで顔を見せなかった国王と久しぶりに顔をあわせたのは、神官長の訪問からやや日数が経過していた。

午後のお茶の時間に立ち寄った国王は、あまり機嫌がよいようには見えなかった。

「神殿の後見を断ったそうだな」

「私の後見をする利点はなんですか？」

国王はカップを口元に持っていきかけて、中空を見る眼差しになり少し考える。

お茶は柔らかな湯気をあげている。暖炉の火を焚いているとはいえ、広い王城は寒い。娘はカップを両手で包み込んで、手にその熱を移す。

国王が口を開くのを待った。

「こちらに一人も身寄りがないのを考慮して、その分を補うように予算が組まれていたり、王妃との面会にかなり融通がきいたりする。最も大きいのは王家の縁戚に近い立場になることだ。神殿が後見なら貴族が後見となるよりも中立性が保ちやすい利点はある」

貴族が後見すると、身寄りも知識もない伝説の娘はその貴族の言いなりになりやすい。養女のようなものか。養育してくれる貴族へは遠慮もあるだろう。

「ただ神殿に、というか神官に取り込まれてしまいませんか？」

「信仰心という形で傾倒するなら、別に悪いことではないと考えられている。祖母に当たる方がそうだったな」

「先の国王陛下や大公殿下のお母様ですか？」
「ああ、優しい人だったが子供心にも熱心に信仰していると思ったものだ」
それに比べて――国王の母親に当たる人は神殿から距離を置いた。意味するところはなんだろう。神官長はとても残念だと言っていた。
「召喚されてから神殿で落ち着かせるのも習いのようなものだ」
「それを陛下は変えたんですね」
極力嫌味にならないように、召喚直後のことを持ち出すと国王も苦笑を浮かべた。
「そうだ。神官も耳飾を付けさせるだけで精一杯だったな」
おまけにあの後も召喚をさせて神官を拘束し、娘に至っては牢の中なのだから長い召喚の歴史の中でも一大事だったに違いない。
痛烈な後悔と、苦い思い出をそれぞれ噛み締めながら、少しの間だけお互いの茶器の音が響いた。
「話は変わりますが、大公殿下が自ら争いを起こしたのがよく分からないのですが。宗教では争いを禁じているはずですよね？」
「――王位が、王冠が魅力的だったのではないか？　一度ならず、今回の件は二度目のことだからな」
大公の話になると、国王の態度が変わった。吐き捨てるように言われたのも確かに大きな理由かもしれないが。
「あまり、王位に執着しているようにも見えなかったんですが」

「執着していない者が傭兵を集めるのか？」
「それはそうですが、でも……」
「やけに叔父上の肩を持つな」
しまったと思って視線を動かせば、整った顔が無表情になると怖さを感じるのだと思わせる、冷え冷えとした雰囲気の国王と目が合った。
その青い瞳に宿るものに、藪をつついてしまったのだと後悔したがもう遅かった。
「そなたの目には叔父上はどう映った？」
「……物静かで、信仰心に篤くて、口では辛辣なことも言いますが本当は優しい人ではないかと」
「無理に叔父上のいる東に連れて行かれたと思っていたが、そうでもなかったのか？」
確かに、と娘は思った。大公の雇った傭兵にまんまと連れて行かれたのだった。
それでも東での待遇は伝説の娘ということを前面に押し出したせいか、悪くはなかった。脱出した日の脅し以外は。
国王は団長だけでなく大公にも嫉妬しているのか。そう言えば王城に戻ってから、大公と寝たかとほかならぬ国王に聞かれたっけ。
考え込んでいた娘は、向かい側に座っていた国王が回りこんで手を取ってから我に返った。
「王城を出てからそなたが余の目の届かぬ場所にいたと思うだけで、胸がかきむしられる思いだ」
「陛下、手を……」
取られた手を引こうとしたが、反対に力を込められる。固い手の

平の感触と熱に包まれていると思うだけで、落ち着かなくなり娘は助けを求めるかのように辺りを見た。

侍女と一瞬目があったと思ったのに、そらされる。その上国王付きの侍従が、そっと合図をだして侍女を伴って部屋を出てしまった。

ためらうかのように首をめぐらせていた侍女の姿が扉の向こうに消えた。

「執務に忙しくて、なかなかそなたとの時間が取れぬ」

「その中でも時間は取ってくださっているように思えますが？」

お茶の時間か、食事か。可能な限り国王は顔を合わせる時間を持とうとしていた。

国王はそれを一蹴する。カップを持っていた時よりも手が熱く感じられる、それにおおいに戸惑う。

身をひねって椅子から立ち上がろうとするのに、国王が邪魔をする。

片手は国王に握られて、国王のもう片方の手は椅子の背をつかんでいて、ゆるく囲われる形になっていた。

大公の話題を持ち出したばかりの予想外の展開に、自分の軽率さを悔やんでも悔やみきれない。

「全く足りない。そなたは目を離すと、どこぞに飛んでいきかねない」

「鳥じゃないです」

「鳥なら簡単だ。鳥籠に入れてしまえばいい。そなたは違うからもどかしい」

頭の中で警戒警報が鳴り響く。そこでようやく護身術のことを思い出す。

自分が座っていて国王がかぶさるような形で前に立っている。こ

の状態で、前のように国王に攻撃をしてから逃げ出すのには不利な体勢だ。

「婚約をしたのに、そなたをなびかせる時間が足りぬ」

「陛下、私は国王としては尊敬しています。人間としても見直してきています」

「人間として、か」

「私に気遣いを見せてくれるように、他の人にも優しくなったと聞いています。変わったと思います」

「そなたから余を褒める言葉が聞けるのは嬉しいが、人間としてでは足りぬ。余の望むものは分かっているだろう」

瞬間握られた手に力がはいり、反対方向に体をひねって逃げ出そうとした。行く手を塞ぐように腕が突き出て抱きとめる。

「やっ」

自由になる手で腕を外そうとしても、絶妙の力加減で痛くはないのにしっかりと抱きとめられている。一人うろたえていたのを落ち着かせるように、肩に置かれた手が頭をなでて髪をすく。

「神殿の後見を断ったのも、婚儀をあげたくないせいか」

「……私は……」

「なのに婚約者としてここにいるのは奴のためか」

質問ではない、語尾は下がって断定だった。

婚約して以来禁句かのように口に上ることのなかった存在は、本人が不在でも特に今の二人の間に重く横たわっているかのようだ。

「動静を知らぬことには動けない、違うか？」

「どうして」
「分かるのか、か？　そなたを見ていれば分かる。だが、なぜ奴なのだ。叔父上ならまだしも」

抑えていた国王の本心が吐き出される。
どうして大公ならまだしもなのだろうと思わず顔を上げると、妙に座った目で眺められていた。
髪にかかっていた手がすべって頬をなで、顎下に当てられる。
それでも動けずにじっと見つめあう形になった。

「叔父上なら先程そなたが評したような人物だ。余からは何を考えているか分からぬ、決して本心を見せぬ冷徹な、という表現が加わるがな」

本心を見せない、食堂や図書室での大公は確かにそうだったかもしれない。
ただ祈祷所で団長と剣を交えた時は違ったように思う。生死をかけた攻防の中での表情が本来のもので、そして――最後に呼びかけた『神のご加護を』は、慈愛に満ちて温かく耳から入ってきた。

「叔父上ならそなたを不快にはさせないだろう。人物や見識から惹かれても無理からぬ。だが、団長は、余が信頼してそなたを任せたというのに」

二重に裏切られたと苦しげな声が告げる。主従からも友人としての立場からも。

「余が王城から動けない時期にそなたと……」
「へい、か」
「余が悪かったのは分かっている。だがそれでも諦めきれぬ。男と

して伴侶として受け入れて欲しくてたまらない。そなたの愛が欲しくてたまらない」

そのまま跪かれ、今度は青い瞳が見上げてくる。握ったままの手をそっと持ち上げ、唇が寄せられるのを呆然と眺める。

手を振りほどかないと、手を引かないとと頭ではやるべき行動が決まっているのに、体が動かない。目だけがこのなりゆきを見届けようとしていた。

「無理やりに召喚してそなたを傷つけた。だが召喚がなければそなたに出会えなかった。余が変わることもできなかった。

知ってのとおり余は卑小で高慢で度し難い男だが、そなたが側にいてくれれば更に良い方向に変われる確信がある。

改めて求婚させてくれ。そなたに余の伴侶になってほしいと切に願う」

自分の手に添えられた大きな手がかすかに震えているのに、気付いた。

国王が全てを投げ出しているのだと、その上で求めているのだと理解する。

息をするのも苦しい。心臓が早鐘を打っている。口の中もからからに乾いてしまっている。

それでも答えは一つだ。

そっと、自分の手を引く。びくり、と国王の体が強張った。

伏せた長い睫毛が震えたのが見える。

しばらくそのままでいて、国王は長く細く息を吐いた。

何かに耐えるように目蓋は閉じて、また開かれた。

「……やはり、駄目、か」

何も言えない。国王は大きく呼吸をして、胸が動いている。

それきり沈黙がおちた。

午後の遅い時間だった室内は今は薄暗く、外の日が落ちたことを示唆しているが明かりをつけに来る侍女達も、いつもなら煩いくらいに国王を急きたてる侍従や王弟も姿を見せない。

ふらりと国王が立ち上がる。一旦廊下に出る扉に足を向けかけたが、こちらに戻ってきた。力の入らない足を奮い立たせて立ち上がり、国王と向かい合う。

「そなたにも伝えておこう。団長は、東にいる」

目を見張ると抑揚のない声が紡がれた。

「叔父上の件の残務処理に当たらせている。まだしばらくかかるだろう」

「どうして、私に教えてくれるのですか」

「さて、な」

予想外の回答に面食らっている間に、国王はふわりと腕を広げて囲い込んだ。

ひたすらに優しく抱きしめる。触れ合ったところから静かな何かが染み入る様に感じられた。

国王の悲しみか。寂寥か。

掠れた声が娘の耳元に落とされる。

「婚約は続けよう。破棄すると政治的に面倒なことになる。確固た

る地位を失うそなたの身が危険になってしまう。
違うな、未練がましくそなたを縛るだけかもしれぬ。だが――」
「ごめんなさい」
「よい、謝られると余計に落ち込む」

当面の生活は変わらない、と請合って国王は抱擁を解いた。
名残惜しげに髪を一房すくって口付け、今度こそ扉へと歩を進めた。
何も言わず、扉を自分で開けた国王が廊下へと消える。その後姿は頼りない子供のようにも見えた。

更に時間をおいて、侍女が戻ってきた。もう暗くなった部屋の明かりをともし、茶器を片付けながら物問いたげな視線をよこす。
今はそれに応える気力すらない。

婚約をしてから季節が移り、もう春の気配もしようかという時期だった。

54　胎動

「――これでひと段落か。川向こうはきな臭いがな。まあそこはお前が上手くやってくれるんだろう？」
「ここから逃げた傭兵が多少なりあちらに雇われたらしい。その中に手の者を一定数紛れ込ませているからな」

川の見える部屋で酒を酌み交わしながら、語り合う二人は平然としている。
砦の修復にも手がつけられ、傭兵が盗賊と化したのを取り締まり、分裂気味だった東の騎士団を建て直しようやく今後のめどがたったところだ。
今夜の酒盛りは副団長の送別の意味合いもある。
明日には王都へと旅立ち、王都騎士団の団長代理として戻る予定だ。
気心は知れている仲だ。途中会話が途切れても全く気にする様子はなく、ただ自分のペースでカップをあけていく。

「王城に戻ったら例の件をよろしく頼む」
「分かっている。できるだけ早く結果を伝えるようにする。しかし参ったな」
「ああ、これだけ綺麗さっぱりなくなっているとは思わなかった」
「思い当たる場所は探したって言うのにな」

今は亡き大公殿下の私室や執務室、書類を置いて不思議ではない図書室。焼失したが祈祷所のあった場所や宗教関係の絵画や彫刻が置いてある周辺など、宝探しかのようにしらみつぶしに消していったのに、どうしても見つけ出せない物がある。
争乱で大公と初めとして側近はかなりが死亡していて、口を割ら

せることもできない。
　生き残った人間に問いただしても知らないとのことで、視点を変えて仕切りなおそうかとしていた矢先の副団長の帰還命令だった。

「王城に入って今回ばかりは厩舎が後回しなのは気に入らんが、陛下と殿下に概要を報告しよう」
「ああ、本部の連中にもよろしくな。びしびし鍛えなおしてやってくれ」
「お前ほど迫力は出ないが、まあやってみるさ」

　よく言う、その言葉を団長はしまいこむ。自分とは別の迫力を充分に有している。その手に乗馬鞭が握られた日には、悪夢が襲うとまで表現されて恐れられている。

「そしてあの方に面会を申し込む、だな。ただあの方に分かるだろうか」
「これは賭けのようなものだな。こちらでも引き続き捜索は続ける。些細なことでも情報があればそれだけでありがたい」
「何か、伝えることはあるか？」

　副団長の問いに、団長は黙ってカップを空にした。川から吹いてくる幾分か湿った風は、それでも凍てつく冬のものから早春といっていいぬるみを伴っている。副団長は黙ってカップに酒を注ぐ。それを手にとり団長は視線を固定する。

「――いや、別にない」
「そうか、妹君にはどうだ？」
「お前の口から話してくれるだけでいい」

　簡潔に答えた団長に副団長はかすかに眉をしかめることで応じた。

ここに来た時よりは顔には生気が戻り、山のような残務処理と並行して砦や都の修復や復興もこなしている。
自らが傭兵隊長として潜伏していただけに、傭兵をはじめ下の者からも慕われている。傭兵の中にはここに残って働く者まで出ているほどだ。

「お前、いいのか？」
「何がだ」
「手をこまねいて見ているつもりかってことだ」

団長はことり、とカップを置いた。目は暗い川に向けられている。

「まだ、全然足りない。実績も武功もだ。だからまだ迎えにいけない。少なくとも隣国との決着をつけるまではな」

川を挟んだ向こうの国王が先だってはこちらの国王にやりこめられ、不本意な条件で川の通行に関する条約を結ばされたのを逆恨みしている。
そこに降って湧いたような『内乱』に近い騒動に、乗じようとしても不思議はない。
砦を攻撃する間に川向こうからやられるのを警戒しつつ、どうにかことをおさめたのだ。

「あっちにも傭兵が流れたからな。砦も修復中となれば、ここで動かずにいつ動くといった心境か」
「まさか、酒を注がせている側女がこちらの手の者とは思っていないのだろう」
「ベッドでも口が軽いらしいぜ、あの国王」
「うかつだな」

側女として上がった女性も副団長の采配だ。東の国王好みだぜと連れてきて、密かに面会した女性は肉感的な美女だった。
それに夜な夜な秘密を漏らし、こちらに筒抜けなのに気付かないのも間抜けな話だ。

「おねだりがてら、焚き付けてもいるんだろう？　今なら東の砦を落とせると」
「そうだ。東の国王はすっかりその気らしい」
「いつだと思う？」

攻撃の時期はいつか。さほど考えるでもなく、答えは出る。
人の出入りが激しくなり、往来が活発になる。

「春の祭典だろう。食料の備蓄も進んでいるし、壁の修復も済んだ。王城からの騎士が要所もしめている。あちらの船への工作は？」
「鋭意進行中だ」
「なら、負けない。勝つ」

迷いのない短い言葉がどれほど戦場で味方を鼓舞するか。団長はその効果をよく知っていて、またそんな時の言葉はたがえられることは少なかった。
副団長も、団長がこう言いきったからと安心する程には信頼をよせている。
明日からしばらくは離れることになる。団長も副団長も手元の酒をあおった。

「王城に戻ったら、こっちにもう少し人員をよこす」
「弓の上手い奴を優先してくれ」
「分かった」

明日の出発を見越してあまり遅くまで飲むことはしない。自然、これでお開きの流れになった。

普段は体と頭を極限まで働かせ、糸が切れたかのようにベッドに倒れこんで眠ってしまうのに、今夜ばかりは団長はなかなか寝付けない。

何度か寝返りをうち、目を閉じて規則正しい呼吸を心がけるがとうとう眠ることを諦めた。

剣を手にバルコニーへと出て中庭とそこに生えている木を見下ろす。

「感傷にふける暇はないはずだが」

つい出てしまった呟きでも、眼下の静かな風景は変わらない。

この木をつたって逃げるなど無茶をする――つい思い出すのは未練の対象となっている一人だ。

この砦のそこかしこに残像のように気配がある。

振り払おうとしても無駄だと悟ってからは、無理に押し殺すことなく時間があれば思い出を追う。

そして再び仕事に戻る。

東での成果をより早くより確実にするために、やれることは何でもやる。

未練がましく、みっともなく、無力な自分から脱却すべくだ。

砦内部については掌握した。都の住人から大公の影響は拭えていないが、ひどい反感は買っていないと感じる。

「あれが見つかれば更に荒れるかもしれないが、禍根は絶つべきだ」

大公殿下が残したかもしれない物を思い、夜空を仰ぐ。娘に教えた北の星は光って見えている。

ほうっと吐き出した息ももう白くならなかった。

娘は国王がすくい取った自分の髪の毛を手にとり、眺めている。あの日以来国王とは顔を合わせていない。本当に婚約が二人の間では形だけのものになり、今後のことを考える余裕がでていた。

「準備はできまして？」

華やかな女性らしい声とともに、公爵夫人が現れた。娘も外出用の服に着替えている。同じく侍女服から着替えた侍女とともに、馬車に乗り込む。今日は夫人の提案で城下にいくことになっている。下働きをしていた時には歩いて行った道を、今日は馬車で通り抜ける。城下で前に見た店などが娘を感慨にふけらせる。

王城を逃亡する際に備えて、探りをいれるために城下に来たこと、悪質な両替商に困っていた時にふいに現れた――。

娘の身を案じて指輪やカードをよこし、小遣いと称した現金を渡してくれた――。

『思い出』ができるほどにここで過ごしここに関わりをもったのだと、『時間』を重く受け止める。

馬車が止まったのは一番の大通り、目抜き通りに店を構えるところだった。

突然現れたきらびやかな――通常の貴族の夫人や令嬢よりは抑えてはいるがそれでも素材や仕立てのよさから人目を惹く服を着た一行に対しても従業員は特に動じることはなかったが、娘の黒髪を認めた際にはさすがに慌てた空気を生じた。

奥から主人とおぼしき老人が出てきて、挨拶をする。

「これはこれは、いらっしゃいませ。何をお求めでしょうか」
「あら、ここはかつらと染め粉の店ではなくて？　それ以外の物も売っているの？」

公爵夫人がからかうように言うと、他に売っている者などございませんと礼をした。
色々な髪の色、髪型のかつらが壁に大きくとった棚に並び、かつらの手前では染め粉と思われる物が多数そろっていた。

「かつらをね、注文したいの。髪型は……そこのと同じでいいわ。ただし、色は、黒にしてちょうだい」
「黒、でございますか。しかしそれは」

王妃しかまとわない黒の髪の毛。それに遠慮してか、棚にも黒色のかつらはない。
公爵夫人は扇をぱちり、と鳴らした。それだけで主人は公爵夫人の迫力に押されている。

「黒よ。大丈夫、この方の許可は得ているから」

夫人はそう言うと、娘の背中に手を当てた。主人は今までになかった黒色のかつらという注文に困った様子を見せている。

「しかし、よろしんですか？」
「許可を得ていると言っているでしょう？　出来上がりまでどれくらいかかるかしら」
「ご主人、大口の注文ですよ。ご主人にはいい風が吹いているように思えますが。私でもこんなのなら風を捕まえたいですね」

娘がそう言うと、主人はちらりと公爵夫人と侍女をみやった。そ

の後で素材見本帳なる分厚い本を取り出して何か調べ始めた。

「黒でこのしなやかさと光沢をだせるか、どの素材なら可能なのか」

ぶつぶつと言いはじめて、見本帳の素材の上に指を走らせる。

ああでもない、こうでもないとぶつぶつ言いながら、娘に頭を下げた。

「不躾ですが、髪を触らせてもらってもよろしいでしょうか」

「ええ、どうぞ」

そう言うと主人は娘の髪の毛を一房取り寄せて、握ったり緩めたりを繰り返したかと思うと、指で触れた。

「素材は何がいいか。摩擦のすくなそうな素材を探さないと。絹か、光沢のある糸を使うか、人毛なら……」

職人らしい考えにふけった主人をよそに、女性三人であれこれと目を移し手にとりしばし時を忘れた。

ようやく顔を上げた主人は娘をじっと見る。

「素材の取り寄せに多少時間がかかります。質は確かなのでご安心を。そうですね、三、四日というところでしょうか。

それからかつらの製作に入ります。完成は一週間から十日後になります。これでよろしいでしょうか」

「よろしくてよ。ああ、私のお友達があとから複数いらっしゃると思うの」

鷹揚に夫人が頷き、娘も当然頷いた。前金としていくらか渡し、あとは完成後に支払うという形でまとまった。

この店での用事が済んだとドレスの裾さばきも優雅に、公爵夫人が店を出た。

娘と侍女も同じように店外にでようとした時、主人がお辞儀をした。

それに娘も軽い会釈で応じた。

馬車は遠巻きに見つめられている。確かに王家や公爵夫人からは質素に見えるだろうが、実は素材や加工は一流の職人の手がけた馬車なのでいかにも身分の高い人物が乗っていそうに見える。

しかも御者はいるのは当然だが、馬車の背後に一人、馬に乗った騎士が複数いるのだから、目立つなと言うほうが無理な話だ。

髪の毛をまとめて帽子に押し込む。それだけで黒髪黒目は帽子の影に隠れてしまう。

再度馬車に乗り込み街を散策する。夫人の計画とやらは上手くいくのか疑問で不安だが、本人は機嫌よさげにして成功を確信している。

侍女も叔母には苦笑気味だ。親類でさえそうなのだから出合って数ヶ月の自分など太刀打ちはできないだろう。

「叔母様、ご招待するのは何人でよろしいのですか？」

「小さな夜会に準じて。ただしこの間王城でお茶会をしたお友達は全員いれておいてね」

「分かりました」

次に連れて行かれたのが仕立て屋でここでは主に侍女が犠牲になった。娘は王城に戻れば夜会用のドレスをはじめ、困らないだけの服があるのでここで作る必要もなく気楽にしている。

その後は装飾品をおいてある店、次は靴屋など夫人曰く『黒髪を愛でる会』用の一式を侍女が見繕われた形になった。

帰りの馬車では侍女が一番疲れているようだった。お疲れさまとねぎらって王城に戻る。

馬車から手を取られて降りると、公爵夫人は王城までのりつけた馬車に乗り込んで去っていった。

侍女を下がらせ、散歩がてらに神殿に赴く。神官長が地方に滞在しているのを確認のうえだ。

しばらくそこで珍しいものを見て過ごし、夕食前に部屋に戻った。

公爵夫人のやろうとしていること。上手くいけば娘にも益になる。

椅子に身を預けてゆったりしていると、珍しいことに王弟殿下から伝言が届いた。

国王が体調を崩して寝込んでいると言うことだった。

可能なら見舞いに来てくれれば兄国王が喜ぶといった内容で、腰を浮かしかけたがもうすぐ夕食となってしまった。

できるだけ急いで夕食を取り、侍女と護衛を連れて王の部屋を目指した。

55　さざなみ

国王の部屋の前まで来ると、近衛が扉を叩いて中へと合図ししかる後に通された。

そこには侍医や王弟が待機していた。王弟は国王の分までの執務に追われているのか、少し精細を欠いている様に見えた。

それでも娘と侍女を迎えてくれた。

「お呼びだてして済みませんが、あなたが見舞えば兄も喜ぶと思いましたので」

「かえって顔を見たくないのではないですか」

小声で尋ねると、王弟もひそ、と返す。

「大丈夫です。とにかくこちらに」

控えの間、応接の間を経て私的な部屋を抜け小さく扉を叩いて、王弟は娘と侍女、侍医とともに薄暗い室内へと入った。

国王の寝室は初めて入るが、広くて落ち着いた色調で統一されている。中央に大きなベッドが置かれ、今はこんもりとした塊が見える。

近くまで寄って王弟が声をかけた。

「兄上、見舞いに来ていただきました」

「――余計なことを」

ひどく掠れた声が返ってきた。無理して起き上がろうとする国王の顔が赤みを帯びて、熱があるのが丸分かりだ。

侍医が寝ているように指示しても聞かずに、結局背中に沢山の枕

をあてて上体を起こした。背筋が伸びずに枕に寄りかかっている様子が、病状を物語る。

「体調を崩したと聞きました。いかがですか？」

「大事ない。季節の変わり目に時々熱が出る。今回は時期が悪かった」

「あの？」

何の時期が悪かったのだろうかと国王の言葉の続きを待とうかとした時、王弟がくすくす笑いながら引き取った。

侍医には合図をして薬を置かせて引き取らせている。

娘と侍女を見ながら、悪戯っぽい目つきも付け加えた。

「兄上は仮病と思われるのが嫌だったんです。それとも執務に没頭した結果、熱を出したのが不甲斐なかったのか」

「余の心情を勝手に作り上げるな。どちらでもない」

「あまり、しゃべらないで下さい。喉が痛いんじゃないですか？」

娘の指摘に黙った国王はふい、と視線を向こうにそらした。

やはり気まずかったのだろうか、と娘は侍女に視線を送り国王に話しかけた。

「長居してもいけませんからこれで失礼します。薬を飲んで温かく、安静にしてください。お大事に」

「行くな」

「いえ、でも」

「行くな」

苦しげな熱い息とともに吐き出される内容に、侍女と顔を見合わせているうちに背後から王弟が囁いた。

「もう少しだけこちらに、兄の近くに居ていただくわけにはまいりませんか？　薬を飲めば眠ると思いますので」

侍女も頷き、国王の側に椅子まで用意された。

「何か食べたんですか？」

半分諦めて椅子に座り、ベッド上で起きている国王と同じ目線で聞いてみる。

近くで見ると熱はかなり高いようで、瞳が少しとろんとしているようだ。

国王はだるそうに首を横に振った。

「何か冷たいもの――そうだ」

侍女の耳に口をよせてこれこれこんな、と相談すると侍女は目を見開いて料理長に聞いてみると寝室を出て行った。王弟は部屋の壁際まで距離を取っている。

「わざわざすまない」

国王の謝罪に今度は娘が首を横に振る。病人に気を使わせるとは情けない。

しばらく待っていると、侍女が戻ってきた。盆に載せてもって来たものを受け取って国王に差し出す。

「冷たいものなら入るのではないですか？」

「これは？」

「氷を削って果汁と蜜をかけたものです」

ちょっと眺めた後、国王はひとすくいしたものを口に運ぶが、手元がおろそかになって深皿が傾いていた。皿を国王から受け取って迷った後で、国王の手からスプーンも取って、中身をすくって口元にもっていく。

この行為に国王のみならず侍女も動きが止まり、壁際から王弟のものだろう小さな声も聞こえた。もう一度国王の口の高さまでスプーンを持っていくと、しぶしぶといった様子で国王が口を開けた。顔がさっきより赤い。

口の中に中身を入れるとややあって、ごくんと嚥下した。

飲み込むのも喉の痛みを伴うのだろう、瞬間顔をしかめた国王だが口の中での後味を確かめた後で感想が述べられた。

「口当たりがいいな。冷たくて喉ごしもいい」

「もう少し口に入れてください。その後でお薬を飲んでください」

一口、もう一口と傍から見ればまるで雛の餌付けのように口元にスプーンを運んで、国王にかき氷を食べさせた。

恥ずかしいのは最初のうちだけで、あとは何とか食べてもらえないかとそちらに使命感が生じる。ようやく中身も空になり侍医の用意した薬も飲んだ国王は、今度こそ横になった。

「醜態を見せた」

「病気の時は強がらないでください」

しばらくすると少し楽になったのか、さっきよりも声の掠れはおさまったようだ。

「夫人から、話は聞いたか？」

「はい、ただ上手くいくかどうか」

「夫人は実力者の一人だ。大人しく担がれていればいいだろう」

側でみているうちに国王はありがとうと呟いて目を閉じ、そのうちに寝入ってしまった。それを機に侍女と王弟と三人は寝室を出て、入れかわりに侍従と侍医が室内で待機する態勢になる。

「ありがとうございました。この数年来熱は出していなかったのですが」

王弟からすまなさそうに言われ、侍女とともに神妙な顔になるのを感じた。

「叔父上の件から色々あって疲れていたのでしょうね」

王弟はさらりと流して笑みを浮かべた。沈みがちな空気を払拭するかのように軽い話題を持ち出して、会話を繋ぐ。それに応じているうちに、ぎこちない雰囲気もどうにか和らいでいく。

わざわざ娘の部屋まで同行した王弟は、最後に人目をはばかりながら尋ねてきた。

「兄上とは、どうしても、無理なのでしょうか」

どこまで聞かされているかは分からないが、王弟の言い方だと駄目になったのだけははっきりしているらしい。

そう判断して、娘は軽く目を伏せた。

「――ごめんなさい」

「そうですか。いえ、残念だと思いまして」

王弟もそれ以上は深追いせずに引き取った。

翌日、侍女が国王の発熱は改善傾向にあるらしいとの噂を仕入れてきた。良かったと思いながらもそれを表には出せない。

出す資格はないことは分かっている。ただ弱った国王を思い出すと、漣のような思いは拭えなかった。

国王が回復し、執務を再開した王城に登城した公爵夫人は、事情を知った上でいつもと同じ態度で振舞う。

その強さが羨ましくもあり、私情を見せない貴族としての姿勢を寂しくも思ったりする。

この世界では立場は元の世界よりも強固に人を縛って、なかなか仮面を外せない。しかも一度道を踏み外すとその後が大変になる。こんな変な実感をするとはつくづく不思議に関わってしまった。

「あなたが表に出るのはこれっきりのつもりで、やってくださいな」

一度きりなら失敗は赦されない。この機会に印象付ける必要があるとなれば、準備にも力が入る。

夫人がかつらを頼んだ店から使いの者がよこされた。使いは夫人と、そのお友達のいる時にやってきたが、緊張のあまりか顔色は悪く声も震えて気の毒なほどだった。それを夫人達にからかわれて一層慌てて、かつらの見本や材料を取り落とすのは軽い笑いを誘っていた。

娘のところにもかつらが飛んだ。思わず受け止めてまじまじと見てみると、実によくできている。綺麗に巻き毛を作って結って飾りを挿してあるので、手元に置きたくなってそのまま残すことになった。

若いかつら屋の使用人は、夫人たちから厳しい注文を受けて肩を落とし、また王城から城下へと下がっていった。

夜半、鍵をあけていた窓のカーテンがかすかに揺れた。
むくりと起き上がると、影は静かにすべり入り人の気配が消えた。
じっと目をこらして闇に慣れた頃、黒尽くめの姿を認める。

「来てくれてありがとうございます」
「さすがに王城の警備は厳重だ。もっと早く来るつもりだったのに。
――お久しぶり」

そう言って影は近づいてくる。寝椅子の側に半球状の詰め物の上にかぶせた形のかつらをひょい、と手に取ってすっと飾りを外す。
娘は黙って受け取った。

「無断で加工したんですか？」
「棒状の装飾品に似せたんだよ。柄が邪魔だったから可能な限り削っただけだ」

元々の所有物が少し形を変えて戻ってきたのを抗議すると、悪びれない答えが返ってきた。

「まあ、いいです。もう一つの方は？」
「それはこちらに。はい、ちゃんと返したよ。……しかし、見逃すから荷物を隠せと言ったのに僕の荷物に入れるとはね。見つけた時はびっくりしたよ」
「どこよりも安全でしょう？　自称凄腕の傭兵が持ち歩くんだから」
「他称でも凄腕、にしといて。で、これだけのために呼び出したのかい？」
「これを返してもらうのも一つ。後、二つ三つお願いが」

依頼内容を告げると、のんきな顔だったのがあからさまに眉間に

皺が寄った。
しばらく黙り、確認を取ってくる。
「それ、本気？」
「勿論です。多分あなたにしか頼めない。できるでしょう？」
「いやできるけどしたくないというか、できれば回避したいというか」
「凄腕の傭兵さん？」
からかうように呼びかけると、はああっと大きな溜息をつかれた。
珍しく、本気で困っているようで腕組みして背中を少し丸めている。
半分やけになった口調で、ああ、もう、と聞こえた。
「久しぶりだよ。そんな依頼」
「受けてくれてありがとう。報酬は？」
「もう、受けたことになったんだ。――報酬は、後払いでもらう」
今度は娘の方が眉をひそめる形になる。後払い。それは――。何か言おうをしたのを察して、言葉が浴びせられる。
「駄目だよ。それ以外の支払い方法なら受けない。嫌なら依頼を取り消して」
「取り消しはできません。それで結構です」
「じゃあ」
傭兵はまた、窓から消えた。見咎められて騒ぎになるかと思ったのに、室外や屋外の近衛や警備はどうごまかしたのだろうか。
さすがにプロは違うと感心しながら、手元に戻った品をぎゅっと握り締める。
これをどこに隠そうか。色々な場所を思い浮かべてこっそりとし

まいこんでから寝椅子に横たわるが、目がさえて眠れない。
材料は手元に揃いつつある。目標も絞られつつある。
不安要素だらけだけど、目標を定めたのならそれに向かうしかない。
娘だけでなく、思惑を持つ者は少なからずいてそれが錯綜する。

春の祭典まであと一月。

契約の夜から程なくして、副団長が王都に帰還した。

56　緊張

神官の身にまとう雰囲気は不思議だ。長い髪の毛と長衣のせいでより強調されているのだろうか。清らかで静かな、深い森の中の澄んだ湖のような、ついそんなものを連想してしまう。

神殿のおごそかな空気も助長しているように思える。神官と向かい合いながら、娘はそんな感想を持つ。

「これが召喚陣を写したもの、こちらが再召喚の陣ですね」

「では……」

「ええ、そうです」

円陣を元に複雑な模様が組み合わされている。どれも似ているけれど、少し違う。その違いで作用が異なるのだ。見慣れない意匠なのに、なぜか懐かしい。

「円は基本、完璧な調和を表します。太陽、月、そのあたりからの連想かもしれませんが、神の全知全能を示していると言われています」

「そういうものですか」

描きこまれた陣の写しに見入りながら、祈りで日々鍛えられているのだろうすべらかで静かに人に染み入るような抑揚を持つ神官の言葉を聞いている。

「では、これらの呪もいいですか？」

「構いませんが」

神官はそう言うと静かに呪を唱え始めた。歌うような囁くような

不思議な旋律が、部屋を満たしていく。
娘は息をつめ、物音を立てないように神官の呪に聞き入った。
神官は順番に呪を唱えていき、余韻を残して終わった。

「……ありがとうございます。そんなに長いものではないのですね」
「ええ、大事なのはこれに込める祈りであり願いです」
「祈りと願い」

歴代の神官の中でも力があるとされ、次代の神官長はほぼ約束されているらしい。娘は神官の静かな表情を見つめる。
この人が焦ったのは、自分が召喚直後に殺されそうになった時と、再召喚で誰も来なかった時くらいかと思い出し笑いが生じる。

「ですがお話をいただいた時は正直驚きました。私にはその発想はありませんでしたから」
「そうですか？　でも考えれば不思議ではないでしょう。召喚と再召喚なのですから」
「ええ、ですが……」

神官はやや困惑した様子だ。無理もないかな、と娘は思う。
再召喚自体これまで誰もやらなかったとされている。よく春から秋の祭典の間の短い期間で再召喚の陣を構築したものだ、と感心するくらいだったのだから。
おそらく以前から密かに研究はされていたのではないかと考えている。研究班の面々と話していればなんとなく分かる。真理の追究、純粋な研究心というものはどこまでも果てがないから。
個人としては良く分かる心理だけに、それが組織になると厄介になる。
政治的な意図などというなじみのなかった要素が絡むと本当に複雑になって、何が本当で何が嘘か分からなくなってくる。

「そう言えば神官長様はどちらにいらっしゃるんですか？」
「あの方は今は王都を離れていらっしゃいます。本当に精力的に各地に神の教えを広めようとされる、あの姿勢にはいつも尊敬の念を持ちます。あの方ほど神を信じ敬う方はいらっしゃらないのでしょう」

慈愛に満ちた眼差しと、包容力を感じさせる雰囲気を確かに神官長は持っている。

「そんな方が神殿の運営にも当たられるので、発展したのでしょうか」
「確かにあの方が神官長になられてから各地の神殿の建設や拡充がすすみました」

しばらく神官長の話になって、娘は神殿から王城に戻る時間になった。
感謝を述べる際に神官に頼む。

「このことはどなたにも……」
「承知いたしました」

神官が頷くと、それにあわせて長い髪の毛がさらりと落ちる。

「神官様は召喚や再召喚をなさった時にはどんな準備をされるんですか？」
「儀式は、そうですね。さすがに二度やると気、集中力の高め方にも慣れますね。最初は一月近く、二度目の時は十日ほど前から召喚の間の隣に寝起きして、召喚の間で気を高めました」
「十日、ですか。召喚の間以外で儀式はできるのですか？」

「他の場所でやった例はありませんので、分かりかねます」
「その際には陛下はそこにいる必要があるのですか？」
「召喚の際には必須ですね。再召喚の時にも、ですから同様にお立ちいただきました」

娘と神官と国王で三角形になるように立って、再召喚の儀をやったことを思い出す。
正直、あの後の衝撃の方が大きくてよく覚えていないのが現実だが。

「ただ、物の再召喚の時には陛下はいらっしゃらなかったですよね？」
「そうです。物であればあまり大きな気を必要とはしませんので」

伝説の娘の部屋とされるこの部屋は、召喚後しばらく暮らすために整えられている。
壁には大きな本棚があり、色々な本とともに今回娘の召喚の後で、国王が召喚をやり直した際にこちらに届いた品物も飾ってある。
どれも黒くて、それだけが共通項だ。

「この品をお借りしてもいいですか？」
「構いませんが、内密にお願いいたします。研究班にとっては貴重な品ですから」

目立たないように袋に入れてもらい、陣の写しと一緒にして王城に戻る。
一人になったタイミングで、こっそり忍ばせていた携帯を手に取り、操作する。確認して、また電源を切って携帯をしまう。

「クリアする問題が多いなあ。めげそうだ」

椅子の背もたれに頭を乗せて天井を見ながらひとりごちる。時間との戦い、同時並行ですすめられている計画、横槍になりそうな要素。

考えるほど次々に問題がわいてくる。

「できる限り計画をたてて、あとは成り行きまかせと臨機応変さが大事と」

そして神殿から持ってきたものに目を通して、時間を過ごした。

その人がやって来たのは公爵夫人が指導に来て、侍女と三人でお茶を飲んでいる時だった。

立ち居振る舞いや必要と思われる作法、貴族の相関図を頭にどうやらたたきこんで、体にもどうやら無様にならない程度に教えこめたと夫人が満足そうな中、しごかれた生徒よろしく少しだけぐったりしながらお茶で喉を潤していた。

扉が叩かれ、珍しく興奮した様子の護衛――騎士団の騎士が来客を告げた。

本来なら来客は面会の申請を取り付け、それがかなってから指定した日時に面会にやってくる。

それを飛ばせるのは王族や、緊急の時くらいだ。

「お久しぶりです。お変わりありませんか？」

大股で入ってきてびしっと直立の姿勢から騎士の礼を取ったのは。

「お久しぶりです。ありがとうございます。変わりは、ありません。副団長様も」

「様はよしてください」
「まあ、お久しぶりですこと。あなたもお元気そう。東からですの？」
あいさつと簡単なやり取りが終わった後で、好奇心で目を輝かせている公爵夫人が話に加わる。
侍女ももの問いたげな視線で副団長を見つめている。
女性だけのところに臆することなく腰を下ろして、副団長はさわやかな笑みを浮かべた。
「ええ、またすぐに戻りますが。――団長もそこにいるんです」
娘から侍女に団長が東にいることだけは伝えてあったので、これは普通に受け止められた。
穏やかでないのは夫人だ。甥のことでもあり、色々思うところもあったようで質問を浴びせようとした瞬間、副団長が娘の方を向く。
「王城に戻られてからあまり外出もされていないのではないですか？　これから馬場に行くつもりなのですが、よければご一緒にいかがでしょう。
私が責任を持って護衛し、こちらに送り届けますので」
す、と夫人が身じまいを正す。侍女も真面目な顔になった。二人とも副団長の誘いの裏にあるものを感じて、一線を引いた。
「では私はおいとまいたしますわ。ごきげんよう。お顔を見られて嬉しいわ。あなたが王都にいないと若い娘達が寂しそうですもの」
「いえ、それは買いかぶりでしょう。私などまだまだ」
傍から見ると言葉遊びのようなばかしあいのような応酬で、副団

長が夫人を見送った。侍女も同時に席を立って仕事に戻る。
副団長は護衛の騎士に少し離れてついてくるようにと指示を出し、娘を外へといざなった。

春の日差しとようやく呼べそうな暖かな光の中を、歩いていく。
騎士団で働いていた頃は毎日、使用人棟から王族や貴族と顔を合わせない裏手の道を通って本部へと通っていた。今は表側を歩いていく。
途中は副団長もほとんど話はせずに、ただ娘の歩調に合わせて馬場へと向かった。
厩舎で懐かしい馬を見て、ようやく娘の顔がほころぶ。
馬の首筋に手を当て、喜ぶ場所をかいてやると馬も顔をすりつけてくる。
娘がかつて乗馬の訓練で乗った馬にかかりきりになっている間に、副団長は一頭一頭の馬の様子を見て回り、馬丁から話を聞いて馬具の点検をする。
馬具を愛馬と、娘の馬に装着した。

「お乗りになりませんか。気分も晴れますよ」

手綱を引いて馬場に馬を引き出す。今日はドレスなので、横乗りで馬を操る。
しばらく乗馬はやっていなかったのに、体が覚えているのか程なくこつを取り戻して娘はゆっくりと馬場を周回した。
副団長もそれに付き合う。

「横乗りよりも普通に乗りたかったです」
「でも横乗りもお上手ですよ」

副団長は柵をあけさせて並足で馬と娘を散歩に連れ出した。

天気は良く、景色は美しい。おまけに馬に乗ってなので副団長の気遣いどおりに、本当に気分が晴れていくのを感じる。
ずっと緊張した状態が続いていたのだと、束の間でも解放されて気付く。
小高い丘のようになっている場所で馬は歩みを止めた。ここはもう王城の端に近い部分だ。
風が吹き抜けて、本当に気持ちがよかった。

「ありがとうございます。本当に来てよかったです」
「それは私も嬉しいです。春の景色も美しいでしょう？　馬上からだとまた格別なんです」

思い切り同意して娘は目を細めて頬を緩める。
横では副団長がそんな娘を観察していた。

「あいつは東で元気ですよ。東に来た当初は幽霊みたいでしたけどね」
「――そうですか」

呟いて娘は副団長を見る、副団長も目をそらさない。探り合うような見つめあいの後、笑ったのは副団長の方だった。

「そんなに熱い眼差しで見つめられると、妙な気分になりそうです」

風が娘の髪の毛を揺らしている。日差しを浴びてつやつやと光る黒髪は、触ればさぞ気持ちがよいだろうと思わせる、馬の毛よりもずっと細くなめらかな質感をたたえている。
黒い瞳も吸い込まれそうだが、今そこにあるのは甘やかなものではない。

「怪我をしたと聞いていましたが、それも大丈夫なんですか？」
「ええ、丈夫さがとりえのような男ですから。今は残務処理と、それに付随する問題に当たっています」
「元気なら……」
そこまで言って、顔にかかった髪の毛を払う。視線は副団長から目の前の景色に移っている。
「何か、あいつに伝えることはありますか？」
しばらく考えた後で、娘は首を横に振った。
副団長はそれを見つめ、そして話題を変えた。
「ここまで来ていただいたのは、内密に話をしたかったからです。まず、私達は大公殿下の遺したと思われる物を探しています。あなたが何か知っているのではないかと思いまして」
「物とは何ですか？」
「大公殿下の印章と、日記、書類ですね。殿下は几帳面な方でしたので残っていると考えているんですが、一通り探しても見つからなかったんです」
印章、日記、書類。指に紋章のついた指輪をはめていたのは覚えている。静かに書き物をしていたのもだ。
ただそれをどこに保管したかまでは分からない。
「私にも分かりませんが。殿下のことですから祈祷所とか宗教関係の場所にあるのでは？」
「そう思って探しましたが。祈祷所は焼失しています」
「側近の方に託したのでは」
「あの争乱で側近はあらかた死亡。生き残りにも尋ねましたが見つ

かりません。侍従も亡くなっていますし」

大公の側にいた人、大公が信頼し大公に心酔する人で、死後も命令を守り抜きそうな人などいるだろうか。

東での日々を思い出しながら世話をしてくれた使用人や、私兵、大公直属の騎士達が脳裏に浮かぶ。傭兵も沢山集めていて、傭兵隊長は赤毛の――。そう言えばこの人も馬丁で潜入していたっけ。

そこまで思い、一人の顔が出てきた。

「まだいらっしゃるかは分かりませんが、侍女頭の女性はどうでしょう。大公殿下に長い間仕えていたようですし」

「侍女頭、ですか。その人はこんな感じの人ですか？」

風貌などの特徴は娘の記憶と一致する。頷くと確認させる、と副団長は短く言う。

宝探しの手がかりの一つがようやく手に入ったのだ。

「私は兵を指揮して東に戻りますが、この情報は早馬で伝達させます。他に思い当たることは？」

「いいえ、宗教熱心で、母親思いくらいしか」

「――そういえば、あなたは東でどの部屋に滞在されていましたか？」

「最初は塔のようなところで、そのあとは殿下の部屋とは反対側の部屋ですね」

「そこも捜索します」

馬がじっとしているのに飽きたのか少し動きたそうにしている。ゆっくりと馬を歩かせながら、副団長は娘に切り出す。

「あいつはどうしようもない奴ですが、大事な友人でいい男だと思

っています。あいつを、待ってやってくれませんか？」
「私といれば未来がないのに？」
あまりにも静かに返されて、副団長は二の句が告げない。
娘はやけになっているようでもない。考えなしの言葉ではない。
「私は、あなたはあいつのことを好きだと」
「好きですよ」
今度は間髪いれずに娘が返す。うっすらと微笑んで、副団長が見惚れるくらいに美しい表情だった。
「では……」
「あの人が築いたものを壊したくない。足を引っ張りたくない。理由としては充分でしょう？」
「あいつはあなたを得られるなら、何を捨てても惜しくないでしょう。それでもですか？」
「私が捨てさせたくないんです。あの人は騎士団の団長で、侯爵の跡継ぎで、国を担う人材でしょう。　それに捨てるものの中には友情とか、信頼とか忠誠心とか多分失ったら、あの人があの人でいられなくなるものがある。
多分命も捨てることになる。それを許容できると思いますか？」
淡々とあげられる内容は、娘がずっとこのことを考えていたと知らしめる。
それでも親友のために、食いさがりたかった。
「あいつは、あなたを得るために、実績を積もうとしています。おそらくそれは実現するでしょう。愛情を捨てたらそれこそあいつはあいつでいられなくなる。それでもですか？」

「私、公爵夫人と今度夜会を開くんです」

突然変わった話題だが関連があるのだろうと、口をつぐんで副団長は先を促した。

「どうにかね、黒髪を伝説の娘だけの特別じゃないものにしたいんです。国で一人きりの孤独と重圧感って分かりますか？　しかも異世界ですよ。

どこに行っても黒髪黒目は異分子の象徴です。でも、黒髪だけでもどうにかしたい。珍しいけど唯一じゃなくなったら少しは気が楽です」

娘は自分の黒髪を手に取る。

東の大公の下で、そして今は王城の国王の庇護の下で、黒髪は毎日丁寧に梳かれて上質な髪油を馴染ませてある。

つややかでさらりと娘を彩る色あい。

「それでも普及するかは分からないし、時間もかかる。時間は私の敵です。もうあまり待てないんです。だからあの人も巻き込めない」

「あなたは何をするつもりなんですか？」

副団長の質問にあいまいな笑みがかえる。口元だけをかすかに上げた娘は、それ以上は明かそうとしない。

これ以上は引き出せないと感じた副団長は、馬首を元来た道へとめぐらす。

「ただ、あいつを見くびらないで下さい。決めたことは必ずやり遂げます」

「親友のあなたがそう言うのなら、そうなのでしょうね。でも命あっての物種ですから、無茶はなさらないように」

もうすぐ厩舎と言うところで娘がぽつりと呟いた。

「私があの人の想いを無理に言わせたんです。だからあの人が縛られる必要はないんです」

謎かけのようだった。

そして娘を護衛しながら送り届けた副団長は、夜、緊急に本部から王城へと呼び出しを受けた。

娘の寝室の寝椅子が切り裂かれ、剣がつきたてられていたのだ。

57　警告あるいは脅迫の遊戯

寝椅子に突き立てられた剣はいやに生々しかった。鞘はなく、硬質な輝きを放っている。

呼び出された副団長はこの光景を眺めながら、同時に周囲に目を配る。侍女は動揺している。娘も顔色は悪いが、食い入るように剣を見つめている。寝椅子以外に傷つけられた物はないようだ。

護衛の騎士に状況をたずねる。

不審な人物の出入りはなかった。公爵夫人と副団長しか訪問していない。

寝室へは朝、娘が起きだしてからは清掃の者が入っただけで、誓っていつもと変わりはなかったと証言している。

「いつ、誰がやったか。清掃が午前中、それから気付くまでの間か。絞り込むのは困難だな」

娘の護衛や部屋の警備の目をかいくぐり、明確な意図をもって痕跡を残す。

これは脅しだ。

娘に対してなのは明白だが、娘の何に対しての脅しか。

「心当たりは？」

娘に尋ねると、きゅっと唇を引き結んで考え込む。

「複数あります」

ただ確証がない。副団長は頷いて物証である剣を調べる。どこにでもあるありきたりな剣で、新品ではない。

つまり珍しくも新品でもないので、剣の出所は調べるのが極めて難しいだろうとの結論になる。

「部屋の内外に不審人物は？」

「同時に複数個所を調べましたが、誰もいませんでした」

賊は、警備を目をかすめて入り込みわざわざ脅しをかけて、立ち去ったわけだ。

ただ剣の沈み具合からはおそらく男性だろうと予想はされる。女性であれば剣を振るうのに慣れている、そんな人物に限られるはず。

そうしているうちに、報告を受けたのだろう国王陛下と王弟殿下が揃って現れた。

二人とも室内の様子と、剣に目が釘付けになっている。

「――これは」

振り返った国王陛下が娘に手をさしのべた。その手を娘は取らずにいる。

「そなたは無事か」

「はい、誰も怪我はしていません」

固い声で娘が答える。空気に重ささえ感じられ、息が詰まるような緊張が支配する。

それを破ったのは王弟だった。

「賊の捜索は続行するとして、部屋を替えましょう。ここよりも警備がしやくすて私達がすぐに駆けつけられるとなると、限られてしまいますが」

「そうだな。客室階の他となると――」

考えながら国王が呟くと、王弟は剣と娘に目を走らせる。

「本来なら婚約発表の後ですぐにでも移動していただきたかったのですが、この際です。兄上の隣の部屋にしましょうか。あそこならすぐに入れる状態のはずです」

「あれは、あの部屋は」

「側妃の部屋という訳にもいかないでしょう？　ああ、ベッドを運び出さないといけませんか」

兄弟二人だけで話が進んでいるのをよそに、娘はもはや用をなさない寝椅子を眺める。

力をこめてそこに生やされた剣は圧倒的な存在感を持って、喉元に迫ってくるようだ。

「今度は寝椅子を見ると眠れそうにないですね。ベッドは運び出さなくてもいいですよ」

少しだけ苦笑交じりで言うと、王弟はほっとした様子を見せたが、国王は厳しい顔のままだ。

「余の隣という意味は、そこは王妃の部屋ということだ。――いいのか？」

「え？　あの……」

そこで初めて国王が乗り気でないのに気付き、王妃の部屋、の意味を考える。

名目上とはいえ婚約者。でも二人の間では進展はない方向になっている。

断ろうと口を開きかけたのを、王弟が制する。

「不快なのは分かりますが、ここまで入り込む賊です。警戒するにこしたことはありません。それに今のあなたには身分もある。側妃の部屋に入れたとあっては、いらぬ憶測を招きます」

逡巡を断ち切るように国王も少し伏せた目を上げて一同を見渡す。

「緊急を要するし、そうするか。移ってくれるか？」

「――はい」

考え込んだ後で娘はかすかに頷く。とりあえずの身の回り品だけもち、侍女が先に部屋の準備に走った。その間に寝室から場所を移して応接用の部屋で、皆、黙りこくって椅子に座る。

「顔色が悪い。少し酒でも飲むか？」

「私はいいです」

本当なら膝を抱えて体を縮こまらせたいくらいなのに、それを抑えて、娘は膝に置いて握りあわせた手に力を込める。寒くはないはずなのに、震えが這い登るようだ。

剣で寝椅子を切り裂く。その剣をこれ見よがしに残していく。どこに自分を追い立てようとするのだろう。

自分の行動のどこが、賊の琴線に触れたのだろう。思い当たる節はありすぎて、賊の正体をかえって分からなくしている。

「あれが警告なら、次は実際に身に危険が及ぶかもしれない」

国王の呟きに、娘も同意する。

副団長は部下が耳元に口を寄せた後で、部屋の最終点検をすると代わりの人員を置いて出て行っている。

「夜会は中止しますか？　時期が悪い」
「いや、中止するにしてももう断りの手紙を出す暇がない。招待客の身元はしっかりしているし普段以上の警備を敷く。元々の趣向からはそなたの顔を晒さずにもすむし、はじめだけそこにいれば体裁も整えられる」
ただ、と国王が苦いものを滲ませる。
「ずっと側にいてもらわねばなるまいが」
国王の心中を察して娘はうつむく。自分がこれだけ気まずいのだ。国王からはさぞかしだろう。
それでもこちらを思いやる姿勢を見せてくる国王への複雑な思いのいきつく先は――。

「部屋の用意が整いました」
侍女が入ってきたのを潮に、国王と王弟は立ち去る。娘は侍女と、副団長、その前後を護衛の騎士に守られて部屋を後にした。
特に大事なものを抱えて廊下を歩く。
王妃の部屋に入る。先代は憂いて、先々代は馴染み信仰を深めた。その部屋は自分にはどう映るのだろうと考えながら長い廊下を歩いていく。
国王と王弟は娘と別れた後で、二人で酒を飲んだ。

隣の部屋に娘が移動したとあっては、酒でも飲まないとやりすごせない。
王弟はそんな国王に付き合っている。
「自分に向けられるのであればどんな感情でも構わないと思っていたが、弱っている時の同情は複雑だな」
「兄上」
「済まない、聞き流してくれ」
飲みすぎてもいかんな、と笑う国王を見ながら王弟は内心で溜息をつく。
しかし次には、笑みを浮かべていた。
「もう寝てしまってはいかがですか？　執務は明日二人でやればはかどるでしょうから」
「そうだな。精神的に疲れたしな。お前も早く休むといい」
「そうします。お休みなさい、兄上」
――闇の中でほくそ笑む存在がある。
警告はした。大人しく身を委ねてくれればそれでいい。駄目なら、さて、どうしよう。
直接あいさつに出向くか。その場面を想像するだけで、たまらなく愉快になる。
これほど意識させられる伝説の娘はいなかった。目の当たりにして、その思いはよりいっそう強くなる。自分は悪くない。あの娘が悪いのだ。
「夜会か、春の祭典か。もうしばらくは――」

春の夜風は物騒な思いにふわりと触れて、消えていく。

58　思いの交錯

今までの客室が二つは入りそうな広さに、分不相応という単語をしみじみ感じながら娘は湯を使った。

警備の人数も増やされて、入室こそしないものの浴室や寝室も扉の前に複数立つようになっている。

寝室も無駄に広い、としか思えなかった。天井が高くて窓が大きい。逃亡しないようにとあてがわれた部屋と違って、とにかく眺めがいいようにとの配慮らしい。

ここに自分の前の黒髪黒目の娘さん達が暮らしていたのだと思うと、不思議な感じがする。

寝室に通されてやっと一人になれた。

探検気分で部屋の中をうろうろする。扉を開けて続いている部屋を確認したり、壁を少しずつ叩いてみたり。壁の一面で随分と時間をつかい、さすがに眠気を覚えて部屋の中央に目をやる。

大きな天蓋つきのベッドがいやに存在感を示している。その近くには侍女が気を使ってくれて寝椅子にもなる長椅子を運んでくれていた。寝椅子だと、さっきまでの光景を思い出させるだろうからとの配慮だろう。

しかも背もたれがベッドの方向においてあり、横になればベッドを視界に入れなくて済むようになっている。気をつかってもらってありがたいと思うと同時に、この天蓋つきの大きなベッドは運び出すだけで大変だろうとも労力を考える。

長と椅子ベッドの間に立って、両方を見比べる。

両方ともにろくな思い出がなくなってしまった。長椅子の方がとも思うが、今日の出来事を考えると長椅子では何かあった時に逃げられない。ベッドなら最悪反対側に転がったりもできる。

ややためらいがちに近寄って、ゆっくりとベッドの端に腰掛ける。ぎしりという音に、軽く沈む体に、反射的にこぶしを握ってしまった。医者と産婆との時間がよみがえる。

最悪と思っていた時にさらに追い討ちをかけてくれた出来事だ。あれからベッドを見ると吐き気すらして、部屋も代わり寝椅子で体を休めるようになった。

今も決していい気分ではない。ただあからさまに命や身体への危険をほのめかした長椅子を使った脅迫よりは、もう時間も経っているベッドの方がいくらかはまし、程度に思えた。

寝具の上掛けをめくって身を滑り込ませる。枕の下に団長からもらい、傭兵が細工した短剣を忍ばせて横たわる。寝返りをうって音がしないように注意しながら、とても眠れそうにはないけれどとにかく目を閉じる。

国王は酒を飲んでも結局はあまり酔えなかった。白々とした思考で醒めていく、そんな気分だった。

考えなければならないことが山ほどある。娘の部屋を襲撃した者の正体と意図、公爵夫人に提案をして始めた試み、召喚制度の見直しは神殿との対応の変化に繋がる。そして団長を含めた娘との今後だ。

叔父の大公の後始末に加えて、東の国の不穏な動き。東からと王弟からの報告をあわせると、事態は祭典前後が焦点になる。

これに国内貴族がどう反応するか。北と西の国は一応の盟約があり、静観の構えではあるが信頼しきるほどおめでたい間柄でもない。武力の分散は避けなければならないが、ここで一気にくすぶり続けた東の国との決着をつけたくもある。

また東に遠征する必要があるかもしれない。

その際の娘の処遇にも頭を悩ませている。連れて行きたいが、東には団長がいる。だが連れて行かねば王城ですら危険かもしれない。

――寝室に入り込んで挑発する輩がいる。
誰の命を受けたのか。実行犯は誰なのか。少なくとも城内の人間が関与しているはずだ。うかつな者は近寄れない。
言い換えればあそこに忍び込んだのは、かなりの手練れということになり、侵入を許したことは警備上でも失態だしこちらの威信にも関わる。

つらつら考えてはいるが、つまりは隣の部屋に娘がいることから意識をそらしたいだけなのかもしれない。壁を隔てた向こうに焦がれる存在がいる。眠る、という最も無防備な姿を晒している。
剣を突きたてられた長椅子の惨状を見つめる眼差しには、多少なりの動揺が見て取れた。どんなに抱きしめてなだめて守りたいと思ったか。

「未練がましいとは、余のことか」

自嘲しても娘への渇望が消えるわけでもなく、欲望は理性で抑えているに過ぎない。
隣には――直接行ける通路がある。その気になりさえすれば、寝ている娘の所に誰にも見咎められずに行くことができる。眠る姿を眺めて、その体を組み敷いて、かつて一度しか味わっていない唇を貪って、名実ともに自分の、自分だけのものにして――。
諦めようとしたのに物理的に接近されると、その決心が鈍る。
ただ病で寝込んだ時、熱で自制心が鈍っていてさえ娘が自分に寄せる感情の中に恋情はないのはよく分かった。病人への同情心だった。あれに憐憫が加わっていれば耐えられなかったかもしれないが。
だから、ここで自制するのが娘と自分にとっても最善であるのも分かっている。
自分にとっては辛い試練になっても、だ。加えて。

「祭典前の夜会、か。趣向を設けているのが幸いだろう。でなければ……」

その際、自分の視線は浅ましく娘に吸い寄せられるだろうことは目に見えている。

情勢が不穏な状況で開く夜会に不安がないではない。ただ、春の祭典前は社交の幕開けでもあり、この時期に茶会であるとか夜会であるとかは大小取り混ぜて行われるのも慣例なので、取りやめるわけにもいかない。

ことに叔父の件が済んだばかりだ。こちらの状況を探る貴族や各国の要人がいる。ここに有名無実であれど、婚約者となっている伝説の娘を出さないわけにもいかない。

娘の今後を考えて公爵夫人と計画した趣向だ。成功させなければ娘が不憫だろう。

娘を自分のところから放すために動くこっけいさも、やるせなさも自業自得と割り切っているつもりだ。それでも、と思うのが未練なのだろう。

「どこまで余をかき乱すのだ。今夜はとても眠れそうにないな」

溜息とともに吐き出して、国王は書斎へと向かった。

朝の光で見る王妃の部屋はさらに豪華に見えた。けばけばしくはないが、優美で手の込んだ装飾や調度で彩られている。侍女が起こしに来てくれたのに合わせて、身支度をする。

「ベッドで、お休みになられたのですね」
「色々、比較してそちらを」

寝心地としては抜群なはずなのに、よく眠れず少し気だるげな娘の様子に侍女は少し眉をひそめる。
何かを決心した様子の娘は、これまで以上に人を踏み込ませない領域を作っている。その境界線は、どうしてもこの国の人間である自分にも越えさせてくれない。同情はしても、いざという時は立場や制約に縛られる。
不甲斐ないとは分かっている。
そして自分よりも兄がその縛りから、娘を傷つけた。何事をも捨てる気概はありながら、娘のために捨てられなかったのは分かる。どうしても将来を考えると駆け落ちよりは、と筋を通そうとしたのも分かる。
だが、結果はいたずらに不幸を招いただけだ。
父のしたこともそうだ。今の父は志願して辺境の守りに赴いている。兄の不始末をすすぐ意図もあるようだ。
それでも、自分達一家が娘にしたことは赦されないだろうと思う。
簡素な服に着替えて朝食を取る娘に給仕しながら、今度こそ自分に何ができるか考えなければと侍女は思った。

東への編成に追われながら副団長は襲撃犯の調査を行うが、結果は芳しくなかった。警備担当はいたく恥じ入り、辞職騒ぎまで起こる始末だ。
優秀な人材を、この時期に失うわけにはいかない。最後はこぶしを交えての説得にあたって、副団長は大きな溜息をつく。
国王陛下からは副団長も東へと戻り、一戦に備えるようにと下命があった。無論そのつもりであり、予想していたより大人数の兵も

割り当てられた。

何事も早めの対処がものをいう。明日には東へと取って返すことになっていた。

襲撃犯をあげられていないのは心残りだが、信頼できる配下による厳重な警備をしくことしかできない。

団長と再会したら、大公の遺産の状況も確認しないと。

娘のところに出立のあいさつに出向いた副団長は、中でご夫人達につかまってしまった。

扉の内外で直立している護衛達の目が同情に満ちているようなのも気のせいではないだろう。

ただ、最大の犠牲者は自分ではなく、城下から来たというかつら屋の若い使用人だ。

遠慮のない夫人方の厳しい目に容赦なくさらされ、品物を吟味されている。目に映るのは黒髪のかつらだ。これに関しては護衛や王城内、ご夫人方の使用人に厳重な口止めがしてあるらしい。というより、護衛以外の使用人を立ち入らせない徹底ぶりだ。

襲撃直後で夫人方が登城するのもいささか問題だが、ここに来ている夫人達は皆身元ははっきりしているし、一応襲撃のことを考慮に入れたのか今いるのも娘の部屋——王妃の部屋ではなく数ある応接の間の一つだ。

かつら屋の使用人はおどおどしながら、夫人達の注文のかつらを手渡したり、最後の仕上げを施したりしている。

見るともなしにその様子を眺めていて、副団長は違和感を感じた。器用に、実に器用にかつらを整え、装飾の品を挿していくその手に既視感があるのだ。

それに気付いて副団長は表情を改めた。

娘にあいさつし、部屋をあとにする。しばらくしてかつら屋の使用人が出てきた。扉の側で侍従か侍女を待って出入り口まで案内し

てもらうようだ。副団長はその役を買って出た。

「ぼ、僕は裏口からの出入りです。騎士様に案内していただくなんて、恐れ多い……」

恐縮する使用人を強引に引っ張り、廊下を歩く。王城の表の華やかな廊下ではない、簡素で実用的な使用人向けの廊下で人目がなくなると、副団長は使用人に尋ねた。

「随分と鍛えた手だな」

「そう、ですか？　店の用心棒みたいなことも兼ねていて、自警団にも入っていますから」

「そういうことか」

「は、はい。あの、なにか？」

にこやかだがわざと殺気を漏らしている副団長に対し、困惑と怯えを隠せない使用人はどもりがちに尋ねる。薄い色目の金髪と青い瞳。ひょろりとした印象の、人のよさそうな顔。

「ふ、ん。お前、面倒は起こすなよ」

「え？　はい、それは勿論です」

裏門からそのおどおどとした姿が道の向こうに消えるまで副団長は厳しい目つきで見送った。

その視線を背後にびしばしと感じながら、かつら屋の荷物を持って使用人は城下への道を歩く。

視線を感じなくなってから、さらにしばらくそのままの様子で歩きながら、使用人は目を細めた。その瞬間、気弱な使用人の姿はなく背筋を凍らせるような気を持つ傭兵が現れる。

「さすがは騎士団副団長。見破ってくれちゃって。ただ、見逃してくれたのかな？」

誰が敵で誰が味方か。誰が敵にもならないが味方にもならないか。瞬時に見極めなければ命を失う。そんな中で研ぎ澄まされた感覚を、副団長も傭兵も発揮したのだ。

「それにしても、手、か。人目に触れるから厄介だなあ」

しみじみと手を見つめながらのんびりとした感想を漏らし、ついでに荷物を担ぎなおして、使用人の皮をかぶって傭兵は再び歩き出した。

機嫌よさげな顔には殺気はかけらも残っていなかった。

翌日、緊迫した空気の中を堂々と副団長の指揮する一団が王城をあとにした。

見送る様々な人の思惑の中国を挙げて春の祭典に、そして一部の人しか知らない東での攻防に突入する。

神殿でも祭典に向けて、東での勝利に向けての祈りが捧げられる。神官も、神官長も国を思い未来の安寧を願って祈る。その姿はひたむきで神々しく、なにかと賑やかな外界と比べて静かな水面のようだった。

神よ、どうか――。様々な祈りを捧げられ、心をこめて清められている神の像は、静かにそこに佇んでいる。その像は何も語らない。それでも神に祈る。天現の奇跡を知る故に、信仰は揺らぐことなく強固だ。

祈る姿は美しさすら感じさせる。そこに交錯する思いをのせて。

束では団長が、手にしたものを前に呻き声をあげていた。
目が字面を追うが信じたくないとばかりに、閉じられる。目蓋を手でおさえうなだれたが、再び目を開けて確認作業に入る。
読み終えた団長の顔は厳しく、同時にある種の絶望もたたえていた。
書類をまとめ一時、どこに保管しようかと思案する。
そこにも神の像はある。外界の騒動をよそに、孤高と慈愛を滲ませる微笑を刻んでそこにある。
人の愚かさを、知りながらも赦す。そんな笑みにも見えた。

59　嫌な予感

早馬で届けられた副団長の書簡は簡潔だった。騎士団で通じる書き方で、『侍女頭、塔の部屋、大公妃？　の部屋』の三つの単語。

部屋は封鎖して、侍女頭を呼び出す。現れたのはいかにも有能そうな女性で、濃い茶色の髪の毛をきっちりと結い、金茶の目は静かに団長を見る。

「何かご用でしょうか」

「大公殿下から、何か預かり物はないだろうか」

「――何をおっしゃっているのか、分かりかねますが」

見事な無表情でいなされるが、答えるまでに生じたわずかな間で確信する。

この女性がありかを知るか、手がかりを握っていると。

侍女頭を向かいの椅子に座らせ、団長も腰をかける。じっと見つめると、侍女頭は少し目を伏せている。

有能な女性。おそらく大公殿下も信頼していたに違いない。そして彼女が名指しした女性。

「我々は、大公殿下が遺したかもしれない物を探している。ありかや情報を知っているなら教えて欲しい」

「ですから、私は一介の侍女です。何をお探しかは知りませんが、大事な物を託される立場ではありません」

「あなたのことは、この間までここにいた方から伺った。あなたが知っているのではないか、と」

瞬間膝の上で握られていた侍女頭の手に力が入ったのを見て取った。

「あの方、が。ではあの方はご無事なんですね」
「ああ、今は――王城にいらっしゃる」
「陛下とご婚約されたというのは本当なのでしょうか」
「そうだ」

侍女頭は伏せていた目を上げた。何故だろうか、大公殿下がそこにいるような気がする。雰囲気が大公殿下とこの侍女頭は似ている。

いまだにここには大公殿下の息吹が残っているかのように感じられることがあるが、人の中にも残っているのだろうか。

「私が、あなた方に――大公様を傷つけ、死なしめた人に何かを教えるとお思いでしょうか」
「心情はよく分かる。だが、事態は急を要する。それが無ければ、大公殿下の死は無駄死にに等しい」
「大公様を侮辱する気ですか？」
「履き違えるな、このままだとそうなる。大公殿下は単なる王冠欲しさに内乱を起こした反逆者になってしまう」

激高した侍女頭に、しかしひるむわけにもいかず、女性に向けるにしてはいささか強すぎる視線と口調をぶつける。

副団長とも捜索の合間に話し合ってはいた。大公殿下の一連の動きが、腑に落ちないと。

「大公殿下は思慮深く、物静かで、信仰心の篤い方だろう？　その方が浅慮から事を起こしたとは考えにくい。我々は大公殿下のお気持ちを紐解きたいだけなのだ」

淡々と告げると侍女頭は力を抜いて、椅子に深く腰掛けた。

「大公殿下が誤解されたままで、反逆者とされたままでいいのか？」

この言葉に、侍女頭はうなだれた。

「できうる限り、大公殿下の名誉が保たれるように努力する。頼む、何か知っていれば――」

「分かりました」

侍女頭は立ち上がり、ついて来る様に促した。大公殿下の部屋と反対側の端の部屋、かつて彼女が過ごした部屋に入り、寝室へと移動する。

寝室の暖炉の前は寄木細工のように床が美しい文様を描いている。侍女頭はそこに膝をつくと、床材の端を薄い刃物をいれて持ち上げた。それを規則正しく移動させていく。まさしく寄木細工を解体するように、縦、横と床材を動かし、ついにぽっかりとした穴があいた。

そこに手を入れ、包みを取り出す。

侍女頭はそれを差し出しながら、低い声で言った。

「これがお望みの品です」

「あなたは中身は」

「確認しておりません。大公様だけがご存知です。手記は国王陛下か王弟殿下、あの方のみに閲覧を赦すと仰せでした。」

包みは油紙で包まれ丁寧に梱包されていた。侍女頭の心根がしのばれる。

大事に受け取って侍女頭を見つめる。

「ありがとう。感謝する」

「いえ、これで、私の最後の仕事が終わりました」

「――あなたは死んではいけない」

侍女頭は顔を上げる。そこにあるのは諦観だった。

大公殿下に心酔していたに違いないこの女性は、これを守るためだけに今までここにいたのだろうが。

「何故です。大公様はもういらっしゃらない。ここは、大公様を亡き者にした人の巣窟です。ここで私が生き残ってどうしますか」

「それでも生きてくれ。大公殿下を実際に知る者がその様子を伝えてくれないと、いずれ歪んだ話が一人歩きしてしまう」

侍女頭の金茶の瞳は呆けたような光を放っている。

ゆるやかに、言葉がしみこんでいったのか。ひどく静かに涙が流れた。

「大公様のお姿を、ですか」

「そうだ。あなたは誰より近くで大公殿下を支えた一人だ。語り継いでくれ。ここは、東の都は大公殿下の都だろう？」

「――ええ、その通りです」

涙は流れているが、侍女頭の顔に誇りが戻る。

大公殿下が発展に尽力した都とこの砦を兼ねた居住区は、今後もここにあり続ける必要がある。

先人を知る者が、後発の者に歴史を伝えてくれなければ、大公殿下の所業が卑属なものになってしまう。

この書類を確認しないことには何とも言えないが、おそらく勘は外れていないはずだ。

「どんなことをしても、生き延びる。これはあの方の受け売りのようなものだがな」

「本当に、不思議な方でした。王妃にも、大公妃にも魅力を感じない。流されているようで決してそうでない」

その生き方を自分のせいで曲げた。忸怩たる思いが駆け上がるが、今は自己嫌悪に陥っている暇はない。

「この資料を調べる。他言無用に願いたいのだが」

「承知いたしました。では、失礼いたします」

そして資料を書斎に持ち込んだ。印章と書類のつづり、帳簿類、手記、そして封蝋をした手紙が二通。

あて先は国王陛下と、彼女にだった。

手記と手紙は開けるわけにはいかないので、書類と帳簿類に目を通す。

半ば予想していたことだが、大公派と目される貴族の一覧、それに繋がる諸国の重要人物名が記されていた。

これはまだいい。この名簿を元に調べ上げれば必ず証拠もつかめるだろう。

彼らは大公殿下が討たれたことで、一時的にせよ国王陛下に恭順の姿勢をとっている。東との紛争に便乗しようとする外国勢力と呼応さえしなければ、今は放っておいていい。

それとは趣を異にするのが宗教関係の書類だった。神典と呼ばれる根幹となる教えをまとめた文書の解析、考察はさすがに宗教に傾倒した大公殿下と感心するが、これについては神殿関係者の方が注目するだろう。

今、注目すべきは大公殿下と神官長の親密さを示す書類だ。なぜここにあるのかと考えると、大公殿下はこれが人目に触れることを想定してここにまとめていたに違いなく、つまりはこの親密さに意

味があるということになる。

大公殿下がかなりの額を寄進して神殿建設や神殿関係の拡充に努めている。熱心だからと言えばそれまでだが、そのうちにおかしなことに気付く。

神殿の建設費や神殿に寄付する額が、多すぎるように感じられるのだ。

国王の叔父、広大な東の領地を有するので大公殿下は経済的には裕福な部類に入る。それでもいささか行き過ぎに感じられる額が投じられている。

特に建設費は、内装や調度まで含めてもこの金額には至るまいとの額になっている。

神殿への肩入れ。宗教熱心な大公殿下、母君も熱心な方だったと聞いている。

妙な符号だ。

それに神官長の国内遊説先が、先の貴族一覧と妙に一致している。まるで、神官長が大公派の貴族の間を飛び回り――橋渡しをしている？

では神官長は大公派ということになるのだろうか。

そこよりも王城に近く、王家の中枢に食い込んでいる神殿、その神官長が反国王派ともいうべき大公派。

今、大公殿下を失った神官長は、今度は誰を取り込むのだろうか。宗教と政治、経済は決して無関係ではなく権力という下地を基礎に、それらは密接に絡み合う。

反国王派が誰に目をつける？　誰なら王家に対する影響力が大きい？　国王に対立しているのは？

じわじわと嫌な予感がはいのぼる。ある一人の人物が形作られていく。

この上無く国王陛下に影響力を持ち、しかも抗う。
その身は王城内の中枢にあり、この世界のしがらみを負わない。

「まさか」

呻く言葉は半ば確信めいて紡がれる。

「確認と、保護を。ないしは……」

――隔離を。

60　決戦

朝の光で見ると、今までの客室よりもさらに豪華な部屋だったことが改めて分かる。けばけばしさは無く、女性らしい優美で精緻な装飾や調度で飾られた天井の高い部屋だ。ベッドですら何人も一度に寝ても大丈夫そうな、そんな広さだった。

枕の下の短剣をそっと握りなおす。侍女が起こしに来てくれたのに合わせて、着替えをして髪の毛をまとめる。

最近は上の方でまとめ、下を流している。まとめたところに短剣をかんざし代わりに使っている。こうしてみると、あの傭兵が細工をしてくれたのがありがたい。いざという時に使えるかどうかは別にして、なんとなく心強い気がする。

朝食の席で、祭典まで一ヶ月を切ってそろそろ春の社交が始まる頃だと侍女から教えられた。

「色々な集まりへの誘いがものすごいことになっているんですが、陛下のご配慮もあって全てお断りしています」

「どんな理由で？」

「こちらに慣れていないのと、とても恥ずかしがりやということで」

ちぎって口元に持っていったパンを落としそうになって、どうにか皿の上に置く。

どこをどうしたら、恥ずかしがりやなどという形容が付くのだろう。

「それは、とっても苦しい言い訳だと思うけど」

「では礼儀の身に付いてない田舎者とか、粗忽者の理由の方が良かったか？」

「陛下」

話に割って入ってきた国王のために席が設けられ、図らずも朝食を一緒にとる羽目になってしまった。

恥ずかしがりやと田舎者。どちらも微妙な設定の気がする、と娘は国王をじっとにらむ。その視線を受け流し、コーヒーを侍女に頼んで国王は澄ました顔をしている。

「人前に出ない理由付けなだけだ。適当に流せ」

「慣れていない、だけでもいいのに」

「まあ、恥ずかしがりであれば顔を伏せていたり、余の背後に隠れたりしても構わないからな」

「何ですか、その想像するだけで恥ずかしい表現は」

考えるだけで食事をする気が三割くらいは減退しそうな状況だ。国王の背後で顔を伏せて恥らう……。

どう考えてもない。ありえない。

「王城の中も貴族が増えてくる。部屋を出るときにはベールでもしていろ」

「はい」

国王はさっさと食事をして、席を立つ。娘の所にまわりこんで、その顔を見下ろした。

「元気そうではないか。昨日の今日で塞いでいるかと思ったが」

「気にかけていただいてありがとうございます。陛下、目が赤いですよ」

「昨夜、書類に目を通したからな」

じっと顔を見られて、安心したような表情になる。
国王の求婚を断ってから気まずい思いだったのに、国王の方はなかったかのように接してきた。
ほっとしてそれが国王の厚意だと気付き、度量の大きさを感じる。
国王を思いやりのあるいい人だと認識する日が来るとは、最悪の出会いからは考えられないほど変わったものだ。
でも国王はこんな風に自分に構って、思うところは無いのだろうか。
そう考える娘の耳元に顔を寄せて、国王は囁いた。

「どのみち、あと一月のことであろう？　最後くらいは構えずに接して欲しい」

国王に見透かされていたことに驚く。

「そなたの考えそうなことだ。だから、趣向を用意したではないか」

趣向が夜会をさすのは明らかで、その時に公爵夫人たちと行うことも国王は把握している、というより国王の発案でもあるらしい。
夫人から内容を聞かされて半信半疑ながら、黒髪が普及すればどちらにせよ損はないと計画に乗った。
つい、と国王に下ろした髪の毛を手に取られる。

「かつら屋は随分と頑張ったと聞くが、この手触りは表現できたのだろうか」
「王城に持ってきたものはだいぶ近づけてありました」
「そうか、ではそなたと間違えて他の者を最初にダンスに誘わないように気をつけなければ」

最後を軽口でしめて、国王は公務へと出向いた。そこで国王に相

談し忘れたことがあるのに気がつくがもう遅い。
またの機会にとその件は頭の隅に追いやった。
それにしても。王城の中を結構歩き回っているのに、恥ずかしがりやは無いだろうとしつこく蒸し返す。

「目は伏せてもよいけれど、頭は下げない。動きは優雅に」

公爵夫人の指導で娘のダンスもどうにか見られるものになっていた。これまでは侍女が相手役を務めていたが、今日は王弟が相手をしてくれていた。侍女とは背の高さが異なるので手や目線の修正もされる。
王弟と国王は、少しだけ王弟の方が背が低い。それでもほとんど同じような高さなので、練習にはちょうどいいと王弟も機嫌よく踊ってくれている。一曲だけは国王と踊らないといけないらしく、それ用にと練習になった。
姿勢や目線に気を取られると足さばきがおろそかになりがちだし、足に注意を向けると姿勢が悪くなる。
実際にやってみなければ身につかない。お手本の公爵夫人と王弟のダンスは非の打ち所がなかったのに、と申し訳なくなってきた。

「殿下、ごめんなさい。うまくなくて」
「いえ、足を踏まれないだけ上出来です」

慰めの言葉で王弟はにこりと笑う。国王よりもさわやかな印象の王弟は、嫌な顔もせずに付き合ってくれている。
夜会の計画も国王から聞かされて苦笑交じりで巻き込まれてくれた。

「当日の準備はできているのですか？」
「ええ、でも公爵夫人が私にも秘密だと」

ドレスやその他のものについて侍女と相談して作っているらしく、当事者の自分にも詳細は明かしてくれない。
当日のお楽しみなのだと。その前にさんざん顔に布を当てられている。だから、これについては夫人に任せた。

「兄上とのつりあいもありますから。公爵夫人なら兄上ともすりあわせは済んでいそうですね」
「二人でよく話はされているようです」

なら安心だ、と王弟は笑い大きく娘を回転させる。王子様なんだと不思議になる。夜会では王様と踊るのか。
王様、王子様、騎士なんて童話や小説の中のことだと思っていたのに。
関わってそろそろ二年になる。自分の中の区切りの一つに近づいている。

「何を考えていらっしゃるんですか。踊りながらだと危ないですよ」
「すみません。集中します」

注意をうけて慌てて王弟に集中する。時間を割いてもらっているのにぼんやりしていては駄目だ。
国王もそうだが、自分にもきっと最後の思い出になる。
公爵夫人からもこれっきりなのだからしっかりやれ、とも言われていた。
この世界に呼ばれて色々あった自分の、王城での最後の大仕事だ。
せめて国王に恥をかかせないように頑張ろう。

「そう、その調子。周囲にも目線をよこして、最後は相手に笑いかけて礼をすれば、ええ、結構よ」

ぱんぱんと手をたたかれて、練習が終わる。王弟も優雅な礼をして、ふうっと息をつく。

喉を潤すためにお茶が注がれる。

それを手に祭典や夜会についての打ち合わせがなされた。

「夜会は祭典の初日ですね。今年は規模を押さえ、招待客を厳選しています。叔父上のこともあり、信頼できる人物しか招いていません。

祭典の二日目は神殿関係の式典が数多く入っています。これには本来、兄上とともに祈りを捧げることになっているんですが」

国王からこれも免除するようにと通達された、と王弟が苦笑いする。

次の宰相を目指している王弟は、今回も進行の取りまとめなどもしているようで執務に加えて雑務が急増し、寝る間もないほどらしい。

本来ならここで時間を取らせるのも申し訳ないが、本人は悠然としている。

「たまには息抜きがないと、やってられません」

そう言いながらもさすがに時間だ、と立ち上がる。

では、と王弟が去ると公爵夫人が扇を思わせぶりに開いた。

「あと一月ないのね。今度の祭典は大公殿下もいらっしゃらないことだし、なにか……」

社交界を泳ぐ者の勘か、春のうららかな日差しの中の不穏なものを感じたのか。夫人の落ち着いた表情の下にあるものは表には出されなかった。

団長は副団長の到着を待ちかねていた。そろえられた軍勢も予想より多い。希望通り弓に長けた者の姿が目立つ。

一行には強行軍の疲れを取るようにと指示して、副団長を大公殿下の書斎に引っ張り込んだ。

出された書類に目を通し、副団長の顔が次第に引き締まってくる。

団長が自分の考えを書き加えた紙を示すと、それを手にもって考え込んでいる。

「どう思う？」

「おそらくお前の考えどおりだろう。大公殿下は何か事情があって神殿に協力していたか、協力体制を取らされていたかだろう。

正直あの方に神殿がどう関与するかは分からない。憶測にしかすぎないからな。

ただ、前例では神殿があの方のような伝説の娘の後見をつとめていたので、今回もそうやって取り込みたいのかもしれない」

だが、と続けられる。

「お前の考えた通りなら、あの方は内々にではなく陛下と対立するかもしれない。

そうなれば、敵だ。お前、あの方が敵になった時に――剣を向けられるか？」

言葉を飾らずに直接的に尋ねられる。
嫌な予感が当たれば、最悪その事態になる。その時、彼女を斬れるだろうか。
考えるまでもない。

「そんな事態にならないように収拾する。それでもそうなったら、俺は斬らない」
「迷うようなら殴ってやろうと思ったが。なら、先にこちらだ。さっさと東の国王を落とすぞ」

それを手土産に王都に行け、と副団長はあちらに忍ばせてある手勢につなぎを取る。
東の国王へは対岸の砦に側女の言うままに腰を落ち着け、毎夜の睦言の中でこちらへの侵攻を吹き込んである。
すっかり向こうの計画は出来上がっているが、それを更に早めようと取った作戦が、祭典前の前祝と称する馬鹿騒ぎだ。
東の都を挙げてかつてない規模で祭典前の催しや宴を繰り広げる。当然人は押し寄せてくる。
その中にまぎれて都に入る目つきのあまり良くない男達も、気付かぬふりで迎え入れ砦の兵士が祭典の景気づけとばかりに酒に酔いしれる様を見せ付ける。それを幾日も続けた。都のはずれに徐々にそんな男達が集結し、ある月のない夜、対岸から静かに船が出航した。
大騒ぎしている兵士の間を、水を持った兵士が走り回りしっかりしろと触れ回る。
寝ている者をそのままに、ふらふらとした足取りで兵士が散っていく。

「相手は酔いつぶれた輩だ。一気に攻め落とすぞ」

大声で叫びながら押し寄せる敵兵だが、それを胸壁の上から強弓を射掛ける兵が迎える。

その顔に酔いなどみじんもない。堀を渡らせることなく、兵を射抜いていく。

待ち構えていたこちらの様子に動揺する敵軍が、立ち直る前に跳ね橋を下げてこちらかも出撃する。別働隊が背後を襲うように回り込んでいる。

前方に気を取られたところで、大音量を立てて後方から攻め立てる。

地の利はこちらにある。加えて砦は補修済み、秘密の通路は見つけた分は全て塞いである。

予想外の抵抗と攻撃に陸上部隊がてこずっている間にも、船の一団は川を渡ってこようとする。だが、こちらにも細工済みだ。

川の中ほどで船底から水が入り込み動けなくなった船から、兵士や船を操縦する船乗りが川に飛び込んだり、小さなボートに乗り込んだりしている。

動けなくなった船には上流から船を出して火矢をかける。しばらくして対岸の砦から火が上がった。食料を詰めたと見せかけて底に油を含ませた樽が貯蔵庫に収められ、それに火がつけられたのだろう。これは川で動けない船に火矢を射掛けるのが合図となって実行された。

出撃した騎馬の中でひときわ目立つ働きをしているのは副団長のはずだ。人馬一体とは副団長の様子を表すと確信している。馬をよく操り、敵を槍で、剣で討ち取っていく。夜明けの薄明かりで上から見ると、副団長の周囲には敵がなかなか近づけないのがよく分かる。

ボートに乗って、こちらに取りすがろうとする敵を落としながら長い夜が明けた。

光の下では川向こうの砦から煙がたなびいているのが見える。川の中では動けなくなった船が沈没したり浅瀬で横倒しになっている。反対に目をやれば、人馬が倒れ付している。圧倒的に敵方が多い。それでも残りの手勢や向こうの援軍もあるはずで、戦いは続くかと思われた。

「団長、船が来ます」
「おちつけ、帆を確認しろ」

忍び込ませた手勢が船をいくらか確保しているはずだ。味方の帆の模様なら警戒はしつつ迎える。偽装なら落とすまで。

「帆は味方です。手を振っている者が見えます。こちらの者に間違いありません」

特別目のいい兵士に確認させて、砦の側に到着するのを見守る。甲板には見慣れないものがある。ぐるぐる巻きになった細長いもの。隣には申し訳程度に縛られた女の姿もある。
猿轡をかまされた顔には見覚えがある。
腹にぐっとせまるものをこらえて伝令に呼ばわらせる。

「東の国王を拘束した。速やかに投降せよ。以後の抵抗は無駄と知れ」

馬でも伝令を走らせ事態は収束に向かう。

「しかし、国王はいやにあっさり捕まったものだ」

感心しながらも腑に落ちず団長が呟くと、国王を連れてきた傭兵

に偽装した騎士が笑う。

「船遊びかたがた川へとおでましでしたから。揺れる船の中で楽しみたいとかで」

最後まで側女がいい仕事をしたということか。今も怯えた風を装うのを役者と感じる。

甲冑の頭部を外して、いまだぐるぐる巻きに拘束されている東の国王に騎士の正式な礼を取る。

「此度はこのような結果になり、残念でなりません。御身は王都にお連れします。わが国の国王が今後について判断されるでしょう」

猿轡の下の顔が赤黒くなる。

構わず馬車を用意してそのまま押し込める。

後処理は副団長に任せて軍馬に乗り、王都を目指す。街道沿い、騎士団支部や地方本部には替えの馬が用意してある。

早馬で概要だけを王都に知らせるように指示し、できうる限りの速度で馬車を、馬を走らせた。

次々に馬を交換し、休憩も最小限にしてひたすらに走る。気持ちはそれよりもはやり、一刻も早くとそれだけを考える。

祭典の前に。神殿と彼女の接触の前に。何か起こる前に。

懐には大公の遺したものを抱え、一行を叱咤しながらいつしかあの顔を見たいとだけの欲望で、手綱を握っていた。

61　方向性

祭典まで二十日を切り、王城全体もなんとなく浮き足立って感じられる。

国王の言うとおりに人の出入りもいつにも増して多くなっているようだ。それを警戒してか、警備も厳重になり行く先々に物々しい護衛では嫌気がさして、ついつい部屋にこもりがちになる。祭典の最中に逃亡した過去があるので、余計に監視が厳しいようだ。

国王も多忙なようでほとんど顔をあわせない。話をしないといけないのに時間だけが過ぎていって焦りを生じる。

ようやく顔を出した国王に、面会の約束を取り付けた。

「陛下、お話があるんですが。できれば内密で」

「長い話か？」

頷くと国王は困った顔をする。本当に時間が取れそうにないようだ。慌しくお茶を飲んで、あれこれと予定を確認し返事をする。

「夜……ならどうにかする」

「はい」

国王が現れたのは深夜といってもいい頃だった。どかり、と長椅子に座り込んだ国王はさすがに疲労を隠せない。

軽い酒を少し飲んで、背もたれに体を預け大きく息をついた。

「お疲れ様です」

「ああ、祭典の準備に加えてどうやら東で事が起こりそうだ。その関係でばたばたしている。こんな時間に女性の部屋を訪れるのは非礼だが、すまない」

東と聞いてとくんと心臓が跳ねる。事が起こるとは新たな戦があるのだろうか。

大公殿下の件はようやく落ち着いてきたと聞いている。川向こうの東の国が怪しい動きだとまでは知っているが、国と国の戦争になるのか？

「陛下も東に行かれるんですか？」

「あちらからの要請次第だ。それより、話があるのではなかったのか？」

ついに本題に入る時が来た。国王の計らいで人払いがされて、広い部屋には二人だけがいる。

頭の中で台詞を組み立て口に乗せようとするが、緊張からか最初がでない。

国王は何も言わずに待っていてくれた。

「陛下、祭典の中日に帰還させてください」

国王は姿勢を崩さず、ただ、帰還、と呟いた。はい、と頷く。

「再召喚ではなく、帰還か」

「陛下は別の人を召喚するつもりがありますか？」

向かい合わせに座った二人が真意を探りあうように視線を交錯させる。

国王は小さく首を横に振った。

「いや、もう誰も召喚するつもりはない。そなたのような思いをさせるのは、もう沢山だ」

「なら、私だけがここから元の世界へと帰る帰還になります」
「だが、それは無理なのではないか？　前に神官がそう申していたと思ったが」

神官長と、召喚を担当した神官から別々にそう聞いている。神官長は穏やかに諭すように、呼び寄せられた伝説の娘を帰す方法はないと断言したのだ。

「私も神官長様からはそう聞きました。でも、神殿の研究班の人達に帰還の陣の構築をしてもらえたんです。呪もです」
「まさか」

信じられない思いで目の前の娘を見ると、とてもその顔は嘘を言っているようではない。

帰還の陣の構築などと思うが、娘は経緯を伝える。

「召喚の陣があって、再召喚の陣も構築されました。実際の儀式では失敗に終わりましたが陣は発動していました。

ならその陣の構築式の差こそ、帰還の要素のはずです。研究班の人に基礎となる構築陣の上に、分離をしてもらった構築式を組み上げてもらいました。

同じように再召喚と召喚の呪の差を、韻律を取り出してもらえました。理論上はですが帰還の陣と呪ができた形なんです」

この娘が来てから、と国王は思う。召喚制度に強い影響がでた。歴代にない再召喚のこともそうだ。

伝統とされてきた召喚で現れたのに婚姻を結ぼうとしない。これは、自分の所業のせいだが。

元の世界に戻ることを望みその流れで再召喚の陣と呪を作り上げさせた。

そして、今また帰還の陣と呪か。

「神官様は儀式に際して気を高め、召喚の間に満たすことが不可欠とおっしゃっています。それに必要な期間が召喚の時には一月、再召喚の時にはコツがつかめたとかで十日だったそうです。

今度の祭典にあわせるとしたら十日かそれに近い日数で、祭典前から準備に入ってもらわないといけません。それに」

「――儀式には余の立会いも必要か」

今度こそ娘はしっかりと頷いた。それがどれだけ残酷なことを強いているのか分かっているのだろうか。

いや、分かった上での希望なのだろう。

「儀式の実行者と一連の儀式の依頼者が必要だ、と言われました。だから……」

手の内から今度こそ逃げ去るのを見届けるのみならず、その後押しをしろと。

求婚を断られてから手の内から去るのは半ば予想はしていた。仕方ないと自分に言い聞かせている。

疼くように、湧き上がるように残る思慕はいまだに減る気配はない。

それを自らの手で断ち切れとは。

「そなたはひどい女だ」

この世界ごと、目の前の存在に振り回され弄ばれた気すらする。身勝手な被害者意識。

自分達が与えた苦痛と理不尽な扱いのせいだとは身に染みてはいるが。

だが、政治的に判断しろと冷静な声も聞こえる。
このまま置いておけば、婚約を履行をしない伝説の娘に対しては困惑が生じ、いずれは反感に変わる。
ここにいるから混乱を招くのであれば、消えるという選択は決して悪いものではない。
理屈の上からではあるが。それでもつい、恨み言が出てしまう。

「そなたを愛しているという男にその役割を負わせるか」
「……どんなに考えても、それ以外の選択肢がありませんでした」

国王抜きでできないものかと神官と、そして研究班の人と議論を重ねた。結論は品物ならともかく、人間、しかも伝説の娘として国と王家と神殿に関わった人間の帰趨に、根幹をなす国王の存在が不可欠だろうとのことだった。
だから悩んで、心を決めて頼もうとしてからもタイミングが悪かったのも重なってなかなか言い出せず、今日になってしまった。

「失敗する可能性があるが、その時はどうするつもりだ」

再召喚は結局誰も来ずに娘が残ってしまった。あの時には神の配剤と思い、自分の相手はこの娘しかいないのだと確信した。
あの失敗はむしろ嬉しかった。今度の失敗は意味合いが異なる。帰還の失敗。単に帰れないことから、別の場所に飛ばされることまで考えられる。
娘はそれについても想定していたようだ。

「別の場所へは仕方がないでしょう。そこでまた考えることになると思います。ここに残ってしまったら、ただの娘として王城から離れて市井にまぎれたいと思っています」
「団長はどうする」

「どうもしません。あの人とは関わりません」
「それで、いいのか」
言い切った娘の表情は静かで、おそらく帰還を決心して派生する状況も考えあわせての結論なのだと知らしめる。
娘の未練を促すつもりだったのに思惑が外れた。
「いいも何も。帰還すると決めたのは言い換えればあの人を含めて、ここの全てを切り捨てるのと同じです」
「ならば何故、奴に想いとやらを告げたのだ。気まぐれで拾い上げて手放すのと同じくらいに残酷ではないか」
自分の想いが通じなかったのはもう仕方ないと諦めることもできる。だが、想いを伝え合ったはずの団長まで切り捨てると言い切るその心情は理解しがたい。
「それとも一時なびいただけの軽い気持ちか？　頼りがいがあってすがってしまっただけなのか？」
的外れなことを言っていると分かっている。団長を守るために自分と婚約した娘だ。
そこまで想っていた相手をあっさり突き放すような言い方が癪にさわっているだけだ。だが、切り捨てられる団長が自分と重なってしまって言葉を引っ込められない。
娘はじっと国王を見つめる。おかしなことに、恋敵の団長のために怒っている国王を。
軽い気持ち、すがっただけ。そうだったらこんなに胸は痛まない。
「再召喚が失敗したのは、帰りたい私の気持ちをこちらに留めようとする人の気持ちが上回った結果だと考えています。

もう決めたんです。これ以上かき回さないで下さい」
「そなたに寄せる想いを障害というのか」
「そう、取ってもらっても構いません」

言い切った娘に、国王の握り締めたこぶしが震える。
相手が男性であれば殴りつけているところだ。それほどに娘の言葉は神経を逆なでにする。

「そなたこそ、いいようにかき回してあとは知らんふりか」
「帰還が成功しても、失敗してもあとのことは私には関与できません」

ややあって国王は冷静さを取り戻した。

「そなたに免除していた神殿での祈りを行うがいい。場所を召喚の間に移してな。神官には余から話をする」
「ありがとうございます。この件ですが、神官長には言わないでほしいんですが」
「……神官長は神殿の責任者で召喚にも深く関与している。それは無理な話だろう」
「でも、あの人は……」

どう続けようかと悩むが、不審を感じるのが素に戻ったらしい時の目と漠然としたものだけだ。

「神殿というか神官長様には違和感を覚えるんです。信仰とは違うところで動いているような」
「余はあれほど信仰に熱心な者を知らない。それに、帰還するのであれば神殿に世話になるのだ。文句や注文はつけられぬ」

国王に正論で押し切られるとそれ以上は言えない。
これで話は大方済んだ。部屋を出るための見送りに立った娘へと振り返り、国王が大股に近づく。壁際に娘を追い詰めてその横に手をついた。

「余を怒らせたのはわざとか？　未練を断ち切らせるつもりだったか？　帰還するまではそなたは余の婚約者のままだ。夜会も控えている。まだ手は放さぬ」

顔を寄せて唇が触れそうなところでゆっくりと言葉を紡ぐ。
放さぬ、と言いながら実際は放せない。だがこの感情が帰還の足かせになるのなら、娘の望むように未練を断ち切ることが思いやりというものだろうか。
なのに相反するように自分を刻もうとするかのように、娘を囲い込むように腕の中に置いている。
重ねようとも思った唇を離し、包囲を解く。扉の外で待機していた近衛を従える。
娘からつきつけられた何度目かの拒絶、今度こそ決定的な拒絶に今夜も眠れそうにないと国王は重い溜息をつきながら、自室へと向かった。

残された娘は壁際で膝をかかえて座り込んでいた。
さいは投げられた。あとは成功しても失敗しても消えるだけ。

幕間　人でなしの独白

『俺はあなたを――愛している』
どんなに嬉しかったか、あなたは知らない。

いきなり現実になったこの世界で、私は必死に抵抗した。
私が国王と結婚？　首を刎ねよと言い捨てた人と？
冗談じゃない。
黒髪で黒い瞳というだけで、勝手に私の人生を取り上げないで。
召喚に応じたからって運命を押し付けないで。
怒りと敵愾心と嫌悪に、すぐに焦りが加わった。
私一人で何ができる？　個人が国家に抵抗できる？
蟻が象に歯向かっているようなものじゃないか。

あなたには単なる任務だった。それも迷惑だろう任務。
あなたは何とかしてここから逃げ出そうとする計画の一部で関わった人で。
逃げるのに必要な知識を得るために、働き出した先の責任者で。
護衛と監視を兼ねた人で、最初は気の毒だった。
だってここから逃げるために、利用するのだから。
それがいつから変わったんだろう。

城下におりた時、助けてもらったから？
はぐれるなと手を引かれたから？
思いがけずに可愛い姿を見せてくれたから？
多分、一定の距離をもちながら守ろうとしてくれたから。
国王との攻防でずっと緊張していた精神をふと緩めるような穏やかな雰囲気と優しい眼差しにほっとしたから。
これもストックホルムなのかな。違うと思いたいけれど。

任務の一環なのは分かっていても、穏やかな声が、寄り添ってくれる
大きいのに静かな存在感が少しずつ染みこんでくるようだった。
親がいなくなり、日常がなくなり縮こまって凍りついた私の中を少しずつ溶かすように入り込んできた。
そして雷雨の日。
あなたの体温と、鼓動と、抱きしめてくる力強さに泣きたくなった。
吊り橋効果？　ただ温もりにすがっただけ？
あなたの腕の中はひどく居心地がよく、そこにいるのが自然だと思えた。
でもその時には気付かなかった。
再召喚が失敗して、あなたから国王のことを真剣に考えてほしいと言われ
ひどくショックを受けたのを覚えている。
失敗の衝撃だけじゃない。他ならぬあなたから別の男性を勧められたのに
ショックを受けたんだと今なら分かる。
そして私は逃げ出した。
私を見つけ出したのがあなたなのは皮肉なことだと思った。
王城に戻ったら、国王のものになるかもしれないのに、よりによって
――あなたがそれをするのかと。
逃げ出して捕まって、東で。
背中にかばわれながら、どうしてここまでしてくれるのか分からなかった。
任務だから？　私を好きだから？　どっちが優先だったの？
だからあなたに告白をせがんだ。

ゆっくりと自分の中で育った想いに目がそらせなくなっていたから。

だから、あなたの想いが嬉しかった。死んでもいいと思うくらいに嬉しかった。

その後の現実は死んだほうがましかもと思うくらいだったけれど。

あなたが実のお父さんに殺される。

あなたが何もかもなくしてしまう。

嫌だ、駄目だ。絶対に駄目だ。

国王の想いと優しさをも利用して、私はあなたの安寧を確保した。

この選択がすぐに行き詰まるのは目に見えていた。

国王を拒否することをこの世界は許さない。

行き着く先は海に張り出したがけのようなものだ。

破滅しかない。

国王に身を委ねたら遠からず心が蝕まれていくかもしれない。

国王に身を委ねなかったら――。

だから、逃げる道を選んだ。帰還という逃避を選んだ。

どこまでも姑息な私は保険をかける。

知己を増やしたり、黒髪をはやらせようとしてみたり傭兵に依頼してみたり。

自分勝手で独善的なのは分かっている。

一人で完結してしまっているのだから。

でもあなたにはもう会うことができない。

お父さんに釘を刺されてしまったから、会えば本当に殺されかねない。

そんなリスクはおかせない。

私は弱くてずるいから、国王が私を見る目に揺らいで落ちる前に、逃げる。

驚くほど変わった国王の側に居続けるのが怖いから逃げる。

色々と諦めたけれど譲れないものを守るために逃げる。
両親にもう一度会いたいから逃げる。
私なりのけじめをつけるために逃げる。

権利にともなって生まれた義務と責任は果たさないといけない。
望まれる代価も分かっている。
あなたは酷薄な人でなしに関わってしまった。これは事故のようなもの。
国王も厄介な人間に関わってしまった。気苦労を増やして申し訳ないと思う。
引っ掻き回してさようならなんて、どこまで勝手なんだとしか思えないだろう。
けれど、これ以上に有効な解決策を思いつかなかった。
解決策は他に無いことはないけれど、選択肢に挙げるにとどめている。
一番穏やかな、と思えたのがここから消える選択だった。
私が消えたなら、遠からずあなたは日常に戻れるはず。
身分も地位も、あなたに相応しい未来も手にできるはず。
身を引く自分に酔っているだけかもしれないけれど、メリットとデメリットを
計算して得た答えがそうなのだから仕方ない。

私は私の中で渦巻いて出口を求める想いの名を知っている。
それを殺す必要があるのも知っている。
どんなに想っても、あなたに伝えることはできない。
あなたの顔を見ることもかなわない。
事態は転がり始め、終わりが見えてきている。
あとはこの身を利用して、いくつかの問題を解決する必要がある。
脅迫者の思惑と私の思惑は皮肉なことに、多分とても近しい。
だからせいぜい高く売りつけてやる。

あなたも、国王もどうか幸せに。
逃げる私に願う資格はないのだけれど。

大好きなあなたへ、人でなしからの祝福を受けてください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9036u/

簡単になびくと思わないで下さい

2011年10月20日08時24分発行